
コードギアス 永遠の祝祭

月城十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 永遠の祝祭

【Nコード】

N2252M

【作者名】

月城十夜

【あらすじ】

「それでも俺は、やっぱり『明日』が欲しいんだ。必ずおまえを幸せにしてやる。俺の生きる理由になつてくれ」 ゼロ・レクイエムの後コードを継承し、生き延びる道を選んだルルーシュは、C.C.を「笑わせる」ために努力を始める。ほのぼのラブな離島ライフ・長編。

第一話：オルガン（前書き）

ゼロ・レクイエム後の詳しい経緯は、下記のお話まで。

コードギアス 一瞬の祝祭：<http://ncode.syosetu.com/n2217m/>（全八話）

第一話：オルガン

家の裏手には小さいながらに庭がある。

とはいえ、家の周囲半径1、500メートルに一軒も民家がないような野中の一軒家だ。

家の規模を大小で云々するのは、この土地の人間にとってはナンセンス極まりない話だったが。

ともあれ、家庭菜園のために設けているスペースを別にしても、少人数のガーデン・パーティーが可能なくらいの余裕を備えており、庭の隅っこには樹齢300年は軽いと思しきブナの大木が二本、寄り添うように植えられているのが特長的だった。

その木の下に、先日ガレージセールで手に入れたばかりの寝椅子カウチを用意してからは特にルルーシュの気に入りの場所になっていた。

天気の良い日には、木漏れ日を浴びながら、読書のかたわら午睡を愉しむのが何より贅沢な過ごし方で。

できれば週に一度はそうした時間の余裕を持ちたいと個人的には希望していたが、この島に移り住むと同時に、一番初めに被ってしまった大きな猫が、予想外に島の住人にウケてしまったものだから、ほとんど毎日のようにこの家のドアを叩きに訪れる来客の数は引きも切らず。なるべく目立たぬように静かに過ごしたいと思っても、満足に余暇も愉しめないでいるのが現状だ。

まア、もちろん贅沢な悩みの類いだが。

この日も近所の若い親たちが、まるきり就学塾に通わすノリで、せっせと預けてくる幼い子供たちを数名教えていたルルーシュは、やがて全員を家の外に送り出したところで、主に気疲れの方面で溜まったストレスを晴らすために真っ直ぐ寝椅子カウチに向うことにした。

そもそもルルーシュは、相変わらず理屈の通じない相手が最大の苦手なのだ。

そんな連中に小一時間も囲まれながら理性的に過ごすのは、いたい何の罰ゲームかと思うこともしばしばだったが、その涙ぐましい努力の甲斐あって、島国特有の結束力の固い地元の住人たちに新参者の若者二人が気持ち良く迎え入れられている部分もあるわけだから、背に腹は変えられない心境で仕方なく頭上の飼い猫を大切に育てている昨今ではあった。

ともあれ、今は何より先に休息だ。

ルルーシュは当分のあいだ居留守を決め込むことにして、玄関の鍵を閉めると裏庭に向った。

家のぐるりを囲う形で、ここにも腰丈の石垣が張り巡らせてある。島の大地に露出した岩盤が目立つのは、二億五千年前の地殻変動の際に現われた石灰岩が今も変わらずそこにあるからだ。

周囲一面を海に囲まれている小さな離島は、昔から年中休まず潮風に晒され続けているために最初は地表に土が存在しなかった。潮風がすべてを吹き飛ばしてしまうからだ。

だから古の人々は、防風塀の目的で大地の岩盤をハンマーで砕いて、人の手でひとつずつ積み上げてゆく地道な努力を重ねた。

そうした歴史の果てに残されている石垣が、今もこうして島中に延々と蛇行している。

その石垣沿いにしばらく歩を進めれば、じきに裏庭へと辿りつく。

庭から一望を見渡せば、青々と茂っている牧草地が広がるばかりだ。

歩いている途中で家庭菜園のスペースを横切った際に、ほどよく色づき始めているストロベリー・ポットが目についたので、ルルーシュはこれ幸いとポットごと小脇に抱えると寝椅子カウチを目指して歩を進めた。

ルルーシュの両手にスッポリ収まるサイズのストロベリー・ポッ

トは陶器製の植木鉢で、上部と左右の三方からそれぞれ濃いグリーン
の苗が顔を出している。左右の苗口にも受け皿が用意されている
ので、やがて実った果実はその重量を持て余すことなく、自然と受
け皿の部分に盛り付けられる仕組みになっている。

既に一度早咲きの分を収穫済みで、糖度が高いのは確認済みだっ
たので、ちょうど良いデザートになるだろうと思ったのだ。

ところが、寝椅子に辿りつく数メートル手前で、思わずルルーシ
ユの足は止まった。

ざわわ、ざわわと絶え間なく、潮風に煽られてざわめく緑の牧草
地。

その風の音に溶け込むようにして、伸びのある透明な女の歌声が
聞こえてきた。

相手の正体は、言わずもがな　　C・C　だ。

週に五日ほど小さなカフェでアルバイトをしていたから、そろそ
ろ帰宅する時間だとは思っていたのだが、既に帰宅していたことに
今までちつとも気付かずになっていた。

そして、その歌声を聴いているうちに改めてまた一度驚く。

「　その歌、さつき俺が弾いていた曲じゃないのか？　歌詞がつ
いていたんだな」

ここにるのがシュナイゼルだったら、まず間違いなく拍手のひ
とつも送って、妙なる歌声に惜しみ無い賛辞を贈っていただろう。
それくらいに意外と声量のある歌声は美しく、正直な話ルルーシ
ユも思わず聴き惚れた。

だが、無粋が純情の皮を被っているきらいのあるルルーシユは、
とりあえず最後まで聴き終えたところで、いきなり感想もなくそう
呟いた。

そして、C・C　もまた油断していたのだろう。ルルーシユの姿
が視界に入ったところで、遠慮なく眉間に濃い皺を刻んだ。

「趣味が悪いな、盗み聞きか？」

軽く目元を染めているところから察するに、珍しく素直に恥ずかしがっているのかと思いきや、よく見ればその手元には缶ビールが一本。どうやら飲んでいたらしい。

「おまえはまた、こんな日の高いうちから」

ルルーシュと一緒に暮らし始めてから、何かと飲む機会の増えていたC・C。だったが、アルバイトを始めてからは余計にそうしたシーンが増えていた。

おそらくC・C。のほうでも少なからず、対人関係のストレスを溜め込んでいるのかもしれない。

だからといって、酔って暴れた経験があるでなし。たしなむ程度の飲酒くらい好きに任せておけばよいのだが。自分に隠れて飲んでいる雰囲気はなぜだかひどく気に障った。そうたびたび付き合っていることは出来ないが、誘えばアテのひとつくらい作ってやることも出来るのだ。そうしたモロモロを言外に含めるには少々無理のある文句を口に出すと、今は立っているルルーシュと同じ高さの目線をキープしているC・C。は、「いいだろ、別に」と拗ねた様子で唇の先を尖らせた。

身を横たえているのは寝椅子ではなく、二本のブナの木の間カウチに吊るしてあるハンモックだ。

手先はそれほど器用でないクセに、自分で縄を編んで作ったのだから大したものだ。

C・C。は意識的にユラユラと愉しげにハンモックを揺らしながら、くびりと一口ビールを嚥下した。

「今週も無事にお勤めご苦労さん、の祝杯だ。悪いか？」

冷たく言い切って、なぜだか急にニコニコと微笑を深めたのは、ルルーシュが小脇に抱えたストロベリー・ポットに気付いたからだ。たちまち期待に瞳を輝かせる子供のような表情に、ルルーシュは軽く嘆息しながらルビー色に色づいている一粒をもぎ取ると、C・C。の口に運んでやった。

C・Cは器用にヘタの部分を前歯で齧ってルルーシュの手元に残して、甘い果実を口の中いっぱい頬張った。

咀嚼しながら「ふふっ」と幸せそうに笑った顔に免じて、ルルーシュはもう一粒オマケしてやる。

「だったら、明日明後日は休みなんだな？」

大ぶりの二粒の苺で口が塞がっているC・Cは、答える前にこくりと頷いた。

シャクシャクと美味しそうに咀嚼して、ゆっくり味わってから飲み下した。

「何か予定でもあるのか？」

「ああ、楽譜を買いに行くから、おまえも付き合え」

「楽譜って、オルガンのか？ もう充分に揃っているだろう？」

仕事先でC・Cが引き受けてきた依頼が縁で、ルルーシュがオルガンを購入したのは先月のことだった。

もっとも、依頼の件に限定して言えば、気前よく教会のパイプオルガンを貸してもらえたので、わざわざ購入する必要はないはずだったが。結婚式当日に見せ付けられたC・Cの姿にほだされてしまったのだ。

たしかにC・Cは以前から涙もろいほうではあったが、考えてみれば喜びに感極まって泣いている姿など目にしたのは今回が初めての経験で。

ルルーシュの演奏と、新郎新婦の幸福そうな姿を眺めて感動しているC・Cの泣き姿に、逆にルルーシュのほうが感動してしまった。

あんまり素直に純真に泣いてみせるものだから、『こんなふうに泣けるようになっていたのか』と、思いがけなく気付かされた実感に、なんだかたまらなく胸に迫ってくるものを感じてしまった。

その実感が、しばらく頭に焼き付いて離れなかったものだから、わざわざ用もないのに奮発してしまったのだ。

もちろん建前は「子供たちの情操教育が目的で」という便利な口

実を利用して。

そして、あながちそれが嘘では収まらなくなっているのも実情だ。
「馬鹿か。初心者いきなりバツ八が弾けるか。せめてモーツァルトあたりの小曲を探してみるのが適当かと考えているんだが」

どう思う？ などとは間違っても訊ねずに、あくまでＣ・Ｃの自主性に任せてさりげなく意見を伺うと、Ｃ・Ｃはクスツと笑みを零しながら、「いいんじゃないか？」と答えた。

大方、内心では『この凝り性め』と、またいつものように呆れてもいるのだろう。

「わあっ！ ～～お、おい、こら！ ルルーシュッ！！」

ルルーシュは何も言わずに、軽くＣ・Ｃの肩を押してやった。
地上にいるなら小突いた程度の悪戯も、ハンモックの上ではそうも行かない。

たちまちブンブンと結構な勢いで左右に揺られてしまっている。

「ざまあみる」

ルルーシュは、そのすぐ下にある寝椅子カウチに悠然と寝そべりながら、慌てているＣ・Ｃの姿を眺めて笑った。

「それより、おまえ。帰ってたんなら顔くらい出せよ、どっちが盗み聞きだ」

その日の勉強を終えた子供たちのリクエストに応じる形で、帰りがわに二三曲聴かせるのが定番になっていた。

そのうちの一曲をＣ・Ｃが歌っていたわけだから、少なくとも半時間前には帰っていたはずだった。

しばらく無造作に空中で揺られていたＣ・Ｃは、持ち前の運動神経の良さを発揮して自力でハンモックの揺れを止めると、地上２メートル弱の不安定な場所も構わずにクルリと器用に寝返りを打った。すると、ハンモックのネット越しに、ほとんど真上から対面でルルーシュを覗き込むような格好になる。

「人聞きの悪い言い方をするな。演奏に合わせて歌っていた子供がいただろう？ アレの邪魔をしたくなかったただけだ」

その人形的な容姿と、話し言葉のギャップから妙に子供たちから好かれているＣ・Ｃだ。

たしかに顔を出せば、喜んだ子供たちが演奏などそっちのけで出迎えに駆けて行ってしまったことだろう。

しかし、だ。

「アレが歌と呼べるレベルか？ 歌詞があるのを知っているなら、変に遠慮しないで、おまえも一緒に歌って教えてやれば良かったんだ」

スキヤットと呼ぶにも抵抗を感じる。単にメロディラインに合わせて適当に声を発してただけだ。

そして、ルルーシュもまた歌詞の存在を知らなかったわけだから、自分と違って純粹に子供好きなＣ・Ｃが遠慮した理由がわからずに不思議に思っただけだと、Ｃ・Ｃはなぜだか含みを持たせてクスリと微笑む。

「さては、おまえ歌詞の内容を理解してないのだろう？」

「うん？ ああ、悪いがラテン語は苦手の部類だ」

本当は歌声のほうに意識を奪われていたので、歌詞にまで気を回している余裕がなかったわけだが。

とりあえず表面上は素直に認めると、Ｃ・Ｃはクックツと喉に絡めて笑った。

「お子様に教えるのはまだ早いさ、けっこう露骨な恋の歌だからな」

「…、そうなのか？」

そんなものを平然と歌うなど、思わずルルーシュが鼻白むと、Ｃ・Ｃは愉しげにクスクスと声を上げて笑った。

「ああ、昔なじみの詩人が作った即興詩だ。そういうのが得意な奴がいてな」

ルルーシュは、自分でもとつさに顔色が違ってしまったのを自覚する。

昔なじみ、という言葉にまず引っかかりを感じたからだ。

いまだにＣ・Ｃが自主的に昔話に触れるのは極めて稀なことだ

ったので。

「ふうん？　で、その男は、Cの世界に送られた経験のある奴か？」
単刀直入に、『過去に契約を交わした相手か？』と訊ねると、その美しい緑の髪をハンモックから空中にユラユラ垂らしているC・

C・は、しばらく何も言わずにルルーシュをじっと見つめて。

ルルーシュが痺れを切らす前に明るく言った。

「受け取れ、ルルーシュ」

「はあ？　お、おいっ！」
ルルーシュは敏捷な動きで、落ちてきた缶ビールを零さぬように受け止めた。

手の甲にわずかにチャプンとしずくが飛んだが、中身は既に六分の一ほどこに残っていなかった。

「ほら、もうひとつだ！」

言って、今度はC・C・本体が落ちてきた。

「ほあああああッ？！　くくくちよッ、C・C・ッッッ！」

奇跡的な判断で手にしていた缶ビールを投げ捨てていたルルーシュは、2メートルの高さから降ってきたC・C・を辛うじてとっさに受け止める。

同時に、身体の下で寝椅子がギシツと悲鳴に近いきしみを上げ、腕と言うよりほとんど全身で受け止めていたルルーシュは一瞬本気で息が詰まった。

それにも構わずC・C・は、「ふふふ」と笑み零しながら、「酔った」と呟いた。

「さっきおまえが揺らしたからだ。責任を取れ」

「くくく馬鹿かッ！　だからと言ってッ」

「叫ぶな、うるさい。………気分が悪い」

ボソリと言ってルルーシュの肩口に顔を埋めると、ルルーシュのわき腹辺りに両手でキュツとしがみ付く。

その口調には本気で覇気が欠けていて、ルルーシュもオロリと半自動的に心配モードが発動してしまう。

「吐きそうか？　なら、」

「ちがう。……すこし目が回っているだけだ」

実際に、ハンモックの上からクルリと一回転して落ちてきたわけだから、単純にそれが原因じゃないかと思ったが。

俯いているせいで前髪に隠れて表情を窺うことはできなかったが、緑の髪の間隙から覗いている耳朶が真っ赤に色づいているのに気付いて、どうやら心配する必要はないらしいと判断した。

軽く息を吐き出しながら脱力して、ルルーシュも寝椅子カウチの上に四肢を投げ出す。

あいかわらず頭の前では、絶え間なくざわわと鳴る風の音。

淡く強弱をつけながら吹き付けてくる潮風は、この時期にしては暖かく、正直くっ付いていると暑いと感じるほどだったが、だからといって、いまさら邪険に押し返すほどでもない。

どのみち夜には、毎晩当たり前のようにくっ付いて眠っているのだ。

いつしか当然のように受け止め始めている、平和に満たされた一日のワンシーン。

「……さっきの話だな」

「……うん？」

まさに体当たりで、いつになく素直に甘えている自分に照れているだけかと思いきや、結構本気で酔っていたらしい。応えたC・Cの声音はわずかな眠気を帯びていた。

ルルーシュは一瞬躊躇いを感じるが、言ってしまった後だから話を続ける。

「意味はともかく、だ。歌詞を知っている曲があるなら、教えてやれよ。そのほうが曲の覚えも早いだろうし、言葉や歌の勉強にもなる。何よりおまえがいると、単純に子供たちが喜ぶしな」

なんとなく目線の先にあるC・Cのつむじに向って淡々と呟く。いつ見ても新緑の輝きを放っている緑の髪は、木漏れ日を受けている部分が若干温もりを帯びていて、ほのかに良い香りを放ってい

た。

ルルーシュも使っているシャンプーの香りだけでは無いそれ。

思わずその発生源に顔を埋めて匂いの正体を探りたい衝動に駆られるが、簡単には身じろぐこともできない状況が、今はなんだか少しもどかしい。ルルーシュはどっちつかずの心境で沈黙のひとつきをやり過ごす。

C・Cは軽く眠気を押しやるように吐息して、ルルーシュの胸の上に顎の先を押し付けながら顔を起こした。

「喜ぶのは子供だけか？」

言外に、『おまえがそうして欲しいんだろう？』と匂わされ。

本音を言えば、カフェでのアルバイトを快く思っていないルルーシュは、思わずギュツと顔を顰めた。

他人と接するのは、たしかにストレスも溜まるだろうし、アルバイトとは言え仕事に変わりはないのだから、愉しいばかりでは済まされない場合も多いのだろう。

それでも、これまでずっと閉鎖的な環境で過ごしてきたC・Cには、好ましい変化のひとつだと頭では理解していた。

ただ問題は、用意されている制服の露出度がけっこう高いことだ。人形的な美貌を誇るこの少女が、あつらえたようにフリルが可憐なミニスカートにブラウス姿で給仕に勤んでいるおかげで、いつしか口コミで評判が広がり、店の売り上げも目下赤丸急上昇中だ。

実際にその姿を目にしたことはなかったが、洗濯をしているのはルルーシュなのである。

週に何度か持ち帰ってくる制服を目にするたびに、心底愉快でない気分を味わっているのも事実で。

わざわざそんな場所で働かなくても、家にいて子供の相手をしてくれたほうが、自分も助かるし何よりだと思ってしまうわけだった。

そうした事情を承知しているクセに、この話になるといつも決まって他人事の調子であしらってしまうC・Cは、やはりいつもと

同じに妙によそよしい態度で、聞き入れる様子もなくクスリと笑った。

「言っただろう？ 私はもう単なる経験の積み重ねは止めにしたんだ。今は普通に人と接しているのが面白い。邪魔をするな」

そんなことはわかってる。

だから、本音を言えば、けっこう本気で辞めさせたいのを我慢している。

「だから別に俺は、何も言っていないだろう？」

「そうだったか？」

「変に勘繰るな」

「なら、そういうことだ」

言つて、ふぁアと軽いあくびを洩らした。

ふたたびルルーシュの胸の上に顔を伏せると、まるきり機嫌の良い猫が飼い主の胸元にスリと顔をすり付けるような仕草で懷いた。

「おい、寝るなら中に」

「面倒くさい。……ここでもいい」

そう呟いて、また一度眠そうにあくびを洩らした。

夏場のシーズンの始まりはまだ少し先のはずだったが、それでも日増しに順調に客足は伸びている様子で、稀に帰ってくるなりリビングのソファにグッタリ座り込んだまま一眠りしてしまう場合も珍しくなかった。

物理的な接客だけでも忙しいのだろうが、そもそも不特定多数の人間に毎日止め処なく接するという経験が、どうやらC・Cの話では初めての様子で。

思っているうちにも、胸の上でクースーと静かな寝息が聞こえ始めてしまったものだから、迂闊に身動きの取れなくなってしまったルルーシュはしばし困った。

仕方がないので、そのまま眠りが深まるまでおとなしく時間を稼いで、やがてなるべく身体を揺らさぬように注意しながらC・Cの身体の下から抜け出した。

その際に、仰向きに寝返りを打たせたが、簡単には目覚める気配がないのを確認して。

ルルーシュは、軽く嘆息しながら勝手口をくぐって家の中に戻ると、タオルケットを手にもた戻ってくる。

その際、なにげなく遠景に視線を巡らせば、爽やかな初夏の日差しの下で、きらめく海は凪いでいた。

暑くもなく、寒くもなく、午睡を愉しむには最適の日和。

だが、五分丈の綿シャツにサブリナパンツ姿で潮風に晒され続けるのは、たとえ不死不死であっても単純に身体に悪かるう。

以前からほとんど条件反射でC・C・を気遣うことの多かったルルーシュだが、今は自身も同じ条件を手に入れているせいもあり、その判断が決して間違いではなかったことを知っている。

不老不死という条件が備わっているわりに、基本的な構造は生身の人間と変わらないのだ。

細胞が加齢の影響を受けないだけで、新陳代謝もごく普通に行われているし、生命の危機にでも直面しないかぎり、普段は不死の効果も成りをひそめている。考えるだに、けっこう不便だけの条件だ。

そうした条件付きで、既に何百年も過ごしてきている相棒の足元から胸元までをそつと柔らかなタオルケットで包み込む。

つつい習慣で、白磁の頬の上にまとい付いている絹糸のような緑の髪を、指先で邪魔にならないように軽く梳いて整える。

回復力は生身に比べれば断然早く、少し休めば肉体的な疲労は完全に癒されてしまうのだ。

それくらいルルーシュも実体験で承知しているのだが、間近でこんな姿を眺めてしまうと、子供相手に少々振り回されたくらいで疲労を感じている自分が逆に恥ずかしいくらいだった。

そのクセ、月平均の収入はルルーシュのほうが上回っているのだから皮肉なものだ。

だから余計に実利の伴わない仕事など辞めさせたいと考えてしま

うわけだが。

それを実際に口に出そうものなら、またぞろ「余計な世話を焼くな」と煩わしげに言われてしまうのが関の山で。

最初のうちは共犯者時代によく見せていた頑なさが原因で突き放しているのかと思いきや、ここまで再三つれない反応が続いてしまつと、単に自分の構い方が鬱陶しいだけなのかと自信がなくなつてくる。

その割りに、こうした甘え方はけつこう嫌いでない様子を垣間見せたりもするわけだから、正直ルルーシュにはC・Cの考えていることが理解不能で、途方に暮れてしまうこともたびたびだ。

大切な相手だと認識しているからこそ、できるだけ親身に接してやりたい。

それを実現してやるためには、なるべくなら手元に置いておきたい。

そう考えてしまうのも、責められるべき独占欲ではなく、当然の結果に思えてならないのだが。

しばらく黙然と考え込んでいたルルーシュは、結局それらしい答えの得られないままに軽く嘆息しながら腰を浮かせた。

こっそり盗んだ唇は、甘い莓果汁の味がした。

第二話：シャルロット・オ・フリーズ

ずいぶん久しぶりにスイーツを作った。

シャルロット・オ・フリーズ　簡単に言ってしまうば、苺のムースケーキだ。

通常、土台となるスポンジをクリームでデコレーションしてゆくケーキとは逆に、ムースケーキの周囲にビスキュイ・ア・ラ・キュイエルと呼ばれる別立てのスポンジで囲い込むようにして飾ってゆく。

ちなみに、この部分が『シャルロット貴婦人の帽子』を連想させるところからその語源となっているらしい。

食感は、表面はカリカリ、中はふつくらで、ほのかな粉砂糖の甘みがなかなか美味である。

フリーズは、そのまま苺のことだ。

苺を使ったヨーグルトムースと、苺を使ったレアチーズケーキのあいだに、フレッシュな苺を丸ごとたっぷり挟み込んでゆく。

最上部にもナパージュに潜らせた苺をたっぷりと円形に林立するように敷き詰めて、最後にミントの葉を散らせば完成だ。

うっかりこれ一つを作るのに小一時間も要してしまったが、フレッシュな苺の食感を同時にいくつも愉しむことのできる仕上がりは、我ながら会心の作といえよう。

最近ハ・C・C・が仕事先から日替わりパイを必ず持って帰って来るようになっていたので、なかなか自慢の腕を振るう機会に恵まれてなかったのだ。

ともあれ、夕食の準備もまだだったので、とりあえず時間まで冷やしておくことにして、さながらルビー色に輝く王冠のように美しいシャルロット・オ・フリーズを皿に移し変え、さてとばかりに振り向いたところで、どうやら午睡から目覚めていたらしいC・C・

が、キッチンの入り口で茫然と立ち尽くしているのに気付いた。

淡い水色とホワイトの細い縦ストライプの五分丈シャツ。下はふくらはぎの辺りでカッティングされたサブリナパンツ姿で、手にはさつきまで自分の着ていたピンクのタオルケットを手にしていた。

寝癖というほど大袈裟なものではなかったが、若干寝乱れた跡の残っている緑の髪はそのままに、視線はまっすぐシャルロット・オ・フレーズの上へ。

たちまち周囲に星々と小花を散らしながら、子供のよう瞳を輝かせていたならまだわかる。

疲れているのは承知していたから、おそらく身体が甘味を欲しているのだろうと納得できるので。

むしろ、それを察して作り始めたようなものだから、衝撃に愕然と言葉を失くして立ち尽くしている意味が理解できずに、ルルーシユもまた食い入るようにその動向を見守ってしまったが、

「お、おいつ、C・C・!」

突然、クルリときびすを返すや、ダツとばかりにどこかへ駆けて行ってしまったのだから驚きだ。

C・C・が喜ぶ以外の反応を予測していなかったルルーシユは、中途半端に足を踏み出したところで判断に困って、その場に棒立ちになってしまったが、そうしている間にも戻ってきたC・C・は、ハアハアと肩で息を喘がせながら、美しく飾りつけられたシャルロット・オ・フレーズの上に無数の口ウソクを突き刺し始めた。

「…………シ、…………C・C・?」

問いかける声音が思わず上ずる。突発事故に弱いところは相変わらずだ。

ルルーシユが茫然としているあいだに、素早く持っているすべての口ウソクを突き刺し終えていたC・C・は、勢いよく顔を上げると覇気よく言った。

「誕生日おめでとう、ルルーシュ！」

「はあッ？」

その間もずっとシャルロット・オ・フリーズはルルーシュが抱えたままだった。

だからうつかり落とさずに済んでいたのは、まさに神がかり的な偶然だった。

そんな裏事情にはまったく気付かずに、なぜだかほんのり目元を染めているC・C・が照れた様子で視線を外した。

「……………本当は、おまえから及第点を得られたら、そのパイでついでに祝ってやるつもりだったんだがな。あいにくそれを待っていたのでは、先に季節が巡ってしまいそうだからな、次善の策だ」

そんなことを言って、わずかに自嘲気味にフツと小さく笑って見せるのだ。

「……………しかし、おまえは……」

最初からその予定は考えてなかったはずでは？

整合性の取れない言動を露骨にいぶかしむと、C・C・はほろりと目を細めながら笑って、正面からルルーシュを見つめた。

「ああ。私自身、歳を重ねなくなつて久しいからな、すっかり無頓着でいたわけだが。考えてみれば今年はおまえ、十代最後の年だろう？ そういった節目の年は、ひょっとして特別に祝ってもらいたいものかもしれないと思い直してな。半年以上も遅くなつてしまつたが、改めて誕生日おめでとう、ルルーシュ」

言いながら、さりげなくケーキを載せた皿を受け取るとテーブルに運んだ。

そして、用意していたライターでロウソクに火を灯し始める。

19本すべてのロウソクに炎が行き渡ったところで、C・C・が温容に微笑みながら振り向いた。

まぶしいほどに午後の日差しが射し込んでいる窓を背にしているせいで、緑の髪のパネルが黄金色に近い輝きを見せており、逆に普段から黄金色にほど近い琥珀色の瞳は、微笑の形に細められているせ

いで熟成したハチミツのように落ち着いた色彩でルルーシュをじつと見つめ返していた。

ルルーシュは、その場に突っ立ったまま茫然とその光景を見つめ返すことしかできない。

いまさらこんな季節はずれに、誕生日を祝われてしまっても。

そもそも作ったのは自分で、もっと単純にこいつが喜ぶはずと思っただけから。

そんなふうにいるあぐねているうちにも、放っておくと確実に、ケーキにロウソクの匂いが移ってしまうのである。

ルルーシュは、足早にテーブルまで歩み寄ると、いささか乱暴に一息でロウソクの火を吹き消した。

「………… おまえ、考えなしもいい加減にしるよ？ せっかく夕食後のデザートにするつもりだったのに、俺の苦勞が台無しだ」

ブツブツと呟きながら、手早くまだ熱いロウソクを外してゆく。綺麗に飾り付けられていたシャルロット・オ・フレーズの表面には19箇所の無粋な穴が後には残った。

C・Cはクスリと微笑みながら外したロウソクを受け取って、処分するついでに小皿と包丁を手に戻ってくる。

「仕方がないだろう？ 私が自力で祝ってやりたくても、誰かさんの評価が辛すぎるのでな」

「人のせいにする前に、おまえがもっと真面目に精進しろ」

「おまえはそう言うが、今でも充分近所の住人には好評だぞ？」

「馬鹿か、単にお世辞だ。真に受けるな」

「そうか？ その割りに、おまえだっていつも完食するクセに」

あっさりルルーシュが言葉に詰まったところで、いつもの習慣でケーキを切り分けるところは任せて、C・Cはお茶の用意を始めながら妙に得意そうに言い返す。

「まア、そのうち嫌でも祝ってやるから覚悟しておけ。この調子で行けば、半年後にはけっこうレパートリーも増えていると思うしな」
その言い様に、ルルーシュは軽く眉を顰める。

「ひよつとして、おまえ……だからあの店でバイトを始めたのか？」
お湯が沸くのを待つ間に、窓際に並べてある鉢植えからフレッシ
ュハーブを摘んで戻ってきたＣ・Ｃは、軽く肩をすくめながら首
を振る。

「自信過剰な男だな。それとコレとは話が別だ」

「……だったら、あの店にこだわる必要はないだろう？」

そこだけボソリと口の中だけで呟くと、わざとらしく小首を傾げ
たＣ・Ｃが尊大な態度で訊ね返した。

「何か言ったか？」

「半年後が愉しみだと言ったんだよ」

ルルーシュも、どうして自分がその一件に拘ってしまっのかわか
らない。

単純に、自分をこんな風にあしらうことの出来る女が、わざわざ
あんな服を着て他人に給仕している姿が似つかわしいとは思いつ
からかもしれない。

だからと言って、決して自分にかしずいて欲しいわけではないの
だが。

かすかに漏れ聞こえてきた忍び笑いに気付いてムツと顔を上げる
と、Ｃ・Ｃが例のハチミツ色の瞳を細めて、何やらすこし面映そ
うに笑んでいた。

「ああ、せいぜい期待している」

ルルーシュは何も言わずに、フンツと鼻を鳴らした。

終始そんな調子で、いつものように殺伐と会話を重ねながら二人

でケーキを突いて、軽い夕食を挟んだ後、「デザートは別腹」を主張するＣ・Ｃ・に付き合わされる形で、もう一切れずつ味わった。

ヨーグルトムースと、レアチーズケーキのさっぱりした後味と、Ｃ・Ｃ・の調合したハーブティーに助けられた形だが、それでも結局二人でワンホール片付けてしまったのは、正直かなり胃にこたえた。

ルルーシュは、苦しい胃の辺りを片手でさすりながら、茫然と湯船の中に身体を預けていた。

１９歳。突然そんな現実を突きつけられても、実感など少しも湧いてくるはずもない。

１２月５日。実際のその日には、意識の戻らぬＣ・Ｃ・を連れながら当てのない旅が続いている最中だった。

後になってすべてが片付いてから、ようやく過ぎてしまったことに気付いたのだ。

そんなふうは何事もなく自分の誕生日を見過ごしてしまったのは、近年では考えられないことだった。

ナナリーと暮らし始めてからは必ずナナリーが。

アッシュフォードの世話になり始めてからは、ミレイが勝手に恒例行事に仕立て上げ、関係のない生徒まで巻き込んでパーティの口実に利用されてしまっていた。

そして、母が死ぬまでは毎年母が。

必ず手作りのケーキを焼いて祝ってくれたのだ。

言うなれば、ルルーシュにとつての１２月５日は祝われることが当然の日でもあったから、わざわざ自分のほうからＣ・Ｃ・に「祝え」と強要してしまったわけなのだ。

自分でもまったく気付かずにいた自分の心理に今頃になって気付かされ、ルルーシュは物思いに沈んでゆきながらひとり黙然と息を吐き出す。

母が死んでしまったあの日から、周り中に存在していた他者に敵意をむき出しにし続けてきた自分だが、『誰かに愛される』という

感覚は、父と母の存在が確実にルルーシュの心の基盤に築き上げてくれていた。

むしろ、あまりに確実にその実感が自分の胸の奥底に根付いてしまっていたものだから、七年間の離別の道を経た後にも、無心なまでにひたむきに父の背中を追い続けてしまった部分もあるのかもしれない。

「……………どっちにしろ、皮肉な結果に終わったわけだがな」

あんな形で裏切られてもなお、ルルーシュの根底に宿っている『愛された』実感だけは消しようがない。

けれども、下手に信じていただけに、裏切られた実感もまた当然ながら根が深く。いつしかそれが怖さに自分が他者から『愛される』ことを望まず、自分が他者を『愛する』ことで心の均衡を保ちたがつていた部分もあるのかもしれない。

ナナリーをひたむきに愛し続けることで、決して満たされることの無くなってしまった『愛される』という欲求を、せめて慰めたがつていたのかもしれない。

一度嵌り込んでしまえば、止め処なく陥ってしまうのがわかり切っているから、普段はなるべく考えないようにしている考え事に何となく捕まってしまったルルーシュは、湯船の縁に頭を凭せながら、全身に襲いくる虚脱感に身を任せていた。

「入るぞ、ルルーシュ」

その頭の前で、突然何の前触れもなく浴室のドアが開いたものだから驚いた。

バンッ！ と勢いよく開いたのは、おそらく足を使ったせいだろう。

そうして遠慮なく中までズカズカ進入してきたC・Cは、ニッ

コリ微笑みながら湯船の縁に腰を下ろした。

上から下まで完全に着衣の状態だが、なぜだか両手にはシャンパングラスを一つずつ捧げ持っていた。

できることならルルーシュは、そのまま湯船の底にブクブクと沈み込んでしまいたい心境で肩からげっそり息を吐き出した。

「なア、ひとつだけ質問しても構わないか？」

「何だ、殊勝だな。どうした？」

「いや、簡単な話だよ。おまえの羞恥心は、いったいどういう基準で機能するのか気になってな」

もちろんルルーシュのほうは、これ以上もなく完全な全裸だ。

しかし、湯船の中にはなみなみと湯が張られていて、最近C・Cの気に入りで集めている入浴剤の効果で、中の様子が透けない程度に白濁している。

それ以前に、ゼロ・レクイエム前には平然と着替えの姿を晒していたわけだから、今更C・Cがルルーシュの裸を見たくらいで含羞するわけがないことくらい嫌というほど承知しているつもりだがそれでも、わざわざ風呂に入っているところを狙って闖入してきた意味がわからずに、眉間に皺を刻み込みながら訊ねると、C・Cは片方のシャンパングラスを差し出しながら、「ふふっ」と妙に可愛らしく笑った。

「まア、いい機会だからな、この際おまえの心労をひとつ軽くしてやろうかと思つてな」

「はあ？」

いいから早く受け取れと仕草をつけ加えてうながされ、ルルーシュが渋々シャンパングラスを受け取ると、C・Cは自分の分のグラスに口をつけて美味しそうに一口嚙下した。

典型的な逆三角形のシャンパングラス。

薄いガラスの中で力強く気泡を立ち上らせているのはブラン・ド・ブランだ。

白葡萄100%で作られているはずのシャンパンが淡くピンクに

色づいているのは、グラスの底に一粒苺を沈めてあるからだ。

安物のヴァンムスーならともかく、酒通なら目尻を吊り上げそうな飲み方だが、たしかに一口含んでみるといささか辛口すぎる飲み口をやわらかく緩和してくれているのに気付いた。

もつともルルーシュは、わざわざ風呂の中でまで酒を愉しむほど酒客のタチではないのだが。

瞳の上に皮肉を乗せながら「さっさと用件を話せ」とうながすと、C・Cは先にも一度見せていたハチミツ色の瞳を細めてほのかに微笑む。

「あのとき、私が現場に足を運ばなかったのはどうしてだと思う？」

「は？」

唐突にその一件を切り出されて、ルルーシュはまた別な意味で眉を顰めた。

あのときとは言わずもがな、ゼロ・レクイエム以外に考えられなかったなので。

C・Cは目線をルルーシュの上に固定したまま、淡々と語った。「私には、その必要がなかったからさ。いざとなったら、おまえと一切の感覚を共有することがわかっていたからな」

「何だと？」

ルルーシュは、驚愕に思わずシャンパングラスを湯の中に落とし、てしまいそうになる。

不老不死のコードの力で肉体の傷は完全に治癒されてしまうが、初回到コードが発動するきっかけとなった傷跡だけは永遠に肉体に刻まれてしまうのだ。

もちろんC・Cの左胸にも刻まれているそれだから、おそらく何らかの形で想像していたのかもしれないが。

それでも現実に傷跡を目にすれば、どうしても生々しい最後の瞬間を想像せずにはいられなくなる。

だから公開処刑の現場に立ち会うのは避けていたC・Cを氣遣って、これまでルルーシュは着替えをする際にも注意を払い続けて

きたのだ。

その努力をあっさり無に返してくれたC・Cは、わずかに伏し目がちに続ける。

「おまえがそれを知らないのは、おまえには知る必要のない知識だからだ。だが実際、おまえが考えている以上に、コード保持者とギアス能力者の関係は密接だよ。だから、おまえに与えたギアスが暴走した際も、おまえが死を迎えた瞬間も、私はおまえと一切の感覚を共有していた。私にとっては、それも一種の通過儀礼のようなものだからな。覚悟はしていたから、いまさら悲哀も悔恨も感じはしなかったが」

そう言う割りに、指先が、感傷をごまかすようにしてチャプリと湯の表面を弾いた。

ルルーシュは、とっさにその指先を掴み取る。

「どうして俺には必要がないんだ？」

C・Cは、クスリと笑って、さりげなくルルーシュの手の中から逃れた。

「この先、誰かにギアスを与える予定があるのか？　そういう意味だ」

言って、手の中のシャンパングラスに視線を落とすと、残っていたシャンパンをゆっくり飲み干した。

底に沈んでいた苺をシャクシャクと咀嚼しながら、「この苺は外れだな」と軽く眉を顰めた。

ルルーシュは何となく、視線を外せないままに更に訊ねる。

「それで？　ひとりで泣いていたわけか？」

考えてみれば、あまりに愚直な質問だ。

一切の感覚を共有することで、これ以上もなく完璧にルルーシュの死を実感して。

しかも、その時点では、ルルーシュがコードを継承している事実をまったく知らされてなかったわけだから。

それでもC・Cは、予想に反してニツコリ力強く微笑んだ。

「おお、泣いた泣いた。後になっておまえと再会して、『記憶の更新か?』などと馬鹿げた質問を返された時が一番泣けたがな」

あてつけがましく言われて、思わずそのときの光景を思い出してしまったルルーシュは、グツと返す言葉に詰まった。

たしかにジェレミアの手前があつたにしろ、あのシーンであの質問はあんまりだ。

どちらかと言えば、情けないのを通り越して、怒りに任せて泣かせてしまったのだろう。

それが今のルルーシュにはわかってしまうものだから、気まずさを誤魔化すために残りのシャパンを一気に飲み干すと、C・C・Cがクスクス笑いながら、空いたグラスを受け取るために手を伸ばしてきた。

その際、実にさりげなく唇が頬をチュツと掠めていったものだから、ルルーシュは声もなく驚く。

「何だ、いきなり」

その頃既に腰を上げていたC・C・Cは、クスクス愉しげに笑い零しながらルルーシュを横目に見下ろす。

「さっきの仕返しだ」

「はあ?」

条件反射で訊ね返しながらも、心臓がドキリと激しく動悸するのは隠せない。

湯の温度とアルコールで火照っているのとはまた別な理由で、まなじりがむず痒く紅潮してゆくのを感じる。

C・C・Cは悪戯に琥珀色の瞳を細めて笑った。

「あんな、ルルーシュ? 眠っている最中でも人は、定期的にノン・レム睡眠とレム睡眠を繰り返している。要するに、私はあの一瞬だけ意識が浮上していたわけだ。言っておくが、狸じゃないぞ?」

そんなことくらい、ルルーシュにとっては一般常識のようなものだった。

けれども、現にすっかり忘失していたのだから仕方がない。

知られていた気まずさと、今までおくびにも出さずに平然と過ごしていたＣ・Ｃ・に対するム力つきに、ほとんど逆ギレ気味のルルーシユは、辛うじて視界に入るすみっこで悪戯に微笑む女の姿を睨んだ。

「だったら、抵抗すればいいだろう？」

Ｃ・Ｃ・は、最初から返事を期待してなかったのだろう。既に浴室のドアに向って歩みを進めていたところを、少々意外そうに振り向いてクスツと肩を揺らした。

「もちろん相手がおまえ以外ならそうしていたさ」

「……はア？」

我ながら、わざとらしい声音で訊ね返すと、Ｃ・Ｃ・もまたそそくさと歩むついでに口を開く。

「あのときは単純に眠気に身を任せているほうが楽だったしな。それに、おまえにされると何だか安心するんだ。だから私も別に嫌いじゃないぞ？」

「安心……？」

「するものなのか？」

ああいう類いのキスというのは。

言われて逆に、複雑な胸中に陥ってしまう男を眺めて、浴室のドアに寄りかかりながらＣ・Ｃ・が訊ねる。

「なア、ルルーシユ。どうせなら明日はデートにしないか？ たまにはちゃんと着飾ってな」

ルルーシユは、相変わらず辛うじて横目にその姿を捉えながら唸るように答える。

「却下だ。そもそも着ていく服がない」

「だったら、将来のデートに備えて、ついでに服でも買いに行くか？」

クスクスと心底愉しげに質問だけ投げかけて、今度は穩便にドアを閉めるとＣ・Ｃ・は去って行った。

ルルーシユは、その姿が消えたのを確認するなり、思わずザブリ

と湯で顔を洗った。

何なんだ、あいつの余裕は？

今更そんなことを確認するまでもなく、精神的に満たされている状態にいる時のC・Cが、妙な頼りがいと自信に満ち溢れているのは以前から承知していたはずだった。

今までは誰よりも自分が、そんなC・Cに助けられてきたわけだから。

それなのに、この期に及んで、そんな彼女の部分に振り回されている自分に気付かされ。

何が一番タチが悪いと言って、C・Cが意識的にそれを促しているわけではなく、自分が勝手に振り回されている事実だ。

そもそも、どうしてあのとき自分がキスを盗む気になったのか、ルルーシュのほうでは深く理由を考えないようにしていたわけだから。

なんだかグツタリ疲れのいや増したような気分で、湯船の縁に頭を預け直したルルーシュは、やわらかな唇の感触の残る頬を手のひらでグイッとこすった。

「……………どうせなら、口にしていけよ」

呟いて、自分でも気付かぬうちにそれを期待していたのに気付かされ。

ルルーシュは、何も考えずにゴプリと湯の中に沈んだ。

第三話：ソナチネ

姿を見つけるのに、しばしの時間を要した。

見渡すかぎり一面を埋め尽くしている緑の牧草地。

海上から大地を舐めるように吹き抜けてゆく潮風が、間断なくざわわと緑の大地を踊らせる。

「……C・C・？」

もちろん、呼んでも返事のないことは承知の上だった。

それでも何となくの不安から、万に一つの期待を寄せていたのかもしれない。

しばらく耳を澄ませて草原の上に立ち尽くし、風に乱された前髪をサラリとかき上げる。

そして。

ルルーシュは、軽く脱力しながら息を吐き出すと、潔く探索を続行させることにした。

特定の相手に対する認識を深めてゆくのは意識してみると案外愉しいものだし、折に触れ自分の認識力の正しさを実感できるのも決して悪くはない気分だが、こんな場合はちつともうれしくないものだなと皮肉に思いながら。

すっかり夜のほとりの落ちている空一面。

家のぐるりを囲んだ石垣を乗り越えてしまうと、庭先を照らしているカンテラの灯りだけでは届かない。

いつそ一度カンテラを取りに戻ろうかと迷ったが、遠景に凜いている海上に煌々と浮かんだ大きな満月、そこから滴るように落ちていく黄金色の輝きだけでも充分な視界を得られることにすぐに気付いた。

弾力のある柔らかな草の感触を靴の裏に感じながら、ルルーシュは特に焦った様子もなくゆっくり悠然と歩みを進める。

そうするうちにも何となく思い出してしまうのは、仮の皇宮で過ごした最後の二ヶ月間だ。

あの時にも、ルルーシュが政務に追われている日中に決まってC・は姿を消している場合が多かった。

夜毎の悪夢の影響でルルーシュには言えない疲労を溜め込んでいたわけだから、疲れた身体を休めるためには必要な休息だったのだ。だが当時のルルーシュは、何も事情を知らされていない呑気さで、時には自分が寛ぎたい一心で憤然と苛立ちながらC・C・の姿を探した。

C・C・の姿を目に収めるだけで、なんとなく心がホッと安堵してしまうのだ。

我ながら、当時の自分は、C・C・を相手にいつたい何を求めていたのかと頬が赤らむような羞恥を感じる。

あれではまるで眠い子が、母親の姿を求めて家中を探し回っていたようなものではないか。

しかし。

本音を言えば、実情はそれとあんまり大差がなかったような気もしている。

自分という存在を中心に、世界中から集めていた憎しみの渦中で世界で唯一、自分を本来の自分に戻してくれたC・C・の存在に癒されたい一心で。

そして今、ここにいる自分は

ルルーシュは、またしばらく行った先で思わず深く吐息する。

おそらく好き放題に風に吹かれているうちに勝手に広がってしまったのだらう。

緑の草原に惜しげもなくその美しい緑の髪を波打たせながら、大

の字で転がっているC・C・を発見した。

一概に同じ緑といっても、C・C・の髪の色の場合は芽吹いたばかりの若葉の新緑だ。

もしくは、アッシュフォードで暮らしていた時代に、たまに咲世子が淹れてくれたことのある緑茶の水色^{すいしよく}。

どんなに殺伐とした喧嘩をした直後でも、その髪的美しさを視界に収めた瞬間に、勝手に心の一部分が癒しを感じてしまうのだ。

冷静に考えてみれば、そこには本人の努力は一切関与してないわけだから不公平じゃないのかと不満に思いながら、ルルーシュは間違ってもそれを踏まないように注意しながら、C・C・の頭の先に腰を下ろした。

「そんなふうになっていると、おまえの場合すっかり保護色だな」

淡々とした口調で声を掛けながら、草原の上に散りばめられている彼女の髪を丁寧^{ていねい}に拾い集める。

サラリとクセのない長髪は、ともすると簡単に風に奪われてしまうので結構な苦勞を要した。

いつまで待っても返事がないものだから、ひよつとして眠っているのかと疑い始めた矢先、クスツと微かに笑う声が届いた。

それに釣られてチラリと視線を向けると、C・C・が長い睫毛の下からこちらを見上げていたのに気付いた。

「どうしてピアノを新調しなかったんだ？ 最後のアレは、やっぱりピアノで聴きたい選曲だったぞ」

「ああ、聴こえていたのか」

「よく言う、わざと家中の窓を開放しておいて。私に聴かせるのが目的だったのだろう？」

明らかに傷付いている表情でそう呟き、目の動きだけでルルーシュから視線を外した。

ルルーシュは一瞬その表情を見つめて、集めた髪を指の間で梳き整えながらそれに応じる。

「まア、どのみちピアノを置くには不向きな環境だろう。何しろこ

の潮風だからな」

今朝は早くから約束通り二人で買い物に出かけて、昼までに用事を済ませて戻ってきた。

あとは週末ごとの習慣どおり、二人で終日コードの研究に没頭した。

形骸的には非常に似通っている能力だが、細かい部分をつき合わせる意外に違いのあることをC・C・に指摘されたのだ。

だからまずお互いの知識を照合する目的でルルーシュのほうから求めて始めた習慣だったが、どうやら思わぬところでC・C・の古傷を抉っている部分があるらしく、いつも話し合いの後しばらくはC・C・は一人で過ごしたがる。

何も好き好んでC・C・にそんな思いをさせなくても、この世界に赴けば簡単に記憶は入手できるのである。

心情的な問題は別にしても、そうしたほうが冷静にルルーシュの主観で効率的に情報の取捨選択を行うことが可能なのだ。

だがC・C・に、「それはやってくれるな」とはつきり拒絶されていた。

記憶を覗かれるという行為を倦厭しているわけではなく、今までずっと必要な情報をルルーシュに話さず隠し通してきた前科があるものだから、『自分の口で話す』という形式にこだわりの感じてしまふのだろう。

可能なかぎり二人の関係を理想的な形でやり直そうと努力に励んでくれている。その気持ち自体は、ルルーシュも否定するつもりはないのだが、相変わらず不器用な女だとルルーシュは思った。

いまさら別にそんなことをしてくれなくても、C・C・にはC・

C・の事情があつたわけだから、もうとつくにルルーシユは彼女の嘘を含めたすべてを認めて、許している。

それでもまだこだわりを捨て切れずにいる理由は、ルルーシユの気持ち以前に、自分がまず自分を許せないでいるのだろう。

まるきり自分の姿を客観的に見せつけられている気分だとルルーシユは皮肉に思いながら、先月来、話し合いの後には気分転換の名目で、自分の気の済むまで黙ってオルガンを弾いてやっている。

選曲は、あくまでその時々ルルーシユの好みに合わせていたのだが、一度C・C・の好みもリサーチしてみたくて買い物に誘った。C・C・も今まで特に何も言ったりしなかったから、正直気持ちが届いているのかどうかも判然としなかったが。

今の反応を見るかぎり、そう悪くもない判断だったのだろう。今までは傷付いている表情一つ、ルルーシユの前では絶対に見せないように意地を張り続けていたわけだから。

「ところで、考えてみたんだがな」

拾い集めた髪を二つに束ねて、C・C・の胸元付近に垂らしてしまえば後は手持ち無沙汰になってしまったので、なんとなく触れていたい時の習慣で、C・C・のひたいに被さる前髪に意味もなく指を絡め始める。

「何だ、改まって？」

そしてC・C・もしばらくは我慢していた様子だったが、よっぽど気分がささくれ立っているのだろう。

そう訊ねると同時に、さりげなくルルーシユの手を振り払った。つれない態度には慣れているつもりルルーシユだが、さすがに一瞬ためらいを感じる。

しかし、今の機会を逃してしまうと、逆に切り出せなくなるのがわかっていたので、何も言わずにそのまま背中を屈めた。

実行してみると予想外に苦しい体勢だったが、前髪をかき分けた先にあるひたいにそつと唇を押し当てて、鼻の付け根、鼻の頭、そして唇へと順に辿った。

驚きに軽く目を瞠っていたC・C・は、じきに無難な距離まで顔を離して見つめるルルーシュにまっすぐ視線を返して、少しだけ泣きそうな感じにクシャリと顔を歪めた。

「おまえは……本当にいつも唐突だな」

ルルーシュは、瞳の中だけで苦く微笑する。

「ああ、好きだと告白するついでで悪いがな」

C・C・は、泣きそうな顔をしたままクスリと笑った。

「……いまさらだろう？ そんなのおまえが自覚するずっと以前から知っている」

「だが、まだ一度も言った覚えはないからな。それが理由で、何か不安に感じてたんじゃなかったのか？」

「え……？」

ルルーシュは、立てた膝の上に頬杖を付き、眼下に横たわるC・C・を静かな眼差しで見つめる。

見つめるうちになんとなく触れてみたくて、C・C・の耳朵の辺りに戯れの指を伸ばした。

今度はC・C・も振り払いこそしなかったものの、くすぐったそうに顔を顰めて、目元にうつすらと含羞の色を浮かべている。ルルーシュも当然それに気付いていたのだが、触ってみた耳朵が思いのほかに柔らかくて、あっさり無視して話を続けた。

「昨日おまえ、『安心する』と話していただろう？」

「……あ、ああ」

「あれからずっと考えていたんだがな、そういう言葉が今でも出てくるということは、何かしら俺に対して不安に感じている部分を残しているという意味じゃないのか？」

さりげなくルルーシュの手すさびから逃れようと努力していたC・は、結局さりげなくするのをあきらめて、ルルーシュの手に指を絡めて軽く握った。

「不安なんか消せるはずもないだろう？ おまえと私は、まったく別な個人なんだからな」

「しかし」

「だったら逆に訊ねるが、おまえは私に関する不安はまったく残していないのか？ 頷いたら、遠慮なく殴るがな」

迷わず頷きかけていたルルーシュは、思わずグツと息を詰めてしまったことで不器用な肯定をしてしまう。

たちまち半眼になったC・C・は、思わせぶりに吐息する。

「嘘つきめ。これだからおまえの相手は疲れるんだ」

「俺のどこが嘘つきだ？」

「嘘つきでないなら、大嘘つきだ。本当にそうではないと言い切れるなら、どうして私の仕事に文句をつける？」

ん？ とすべてを見透かしている目付きで問われて。

ルルーシュは、思わずチラリと視線を外した。

「……だから俺は、別に何も言っていないだろう？」

言った瞬間に、握られている手の甲に爪を立てられ顔を顰めた。

「あのな、ルルーシュ？ 言っておくが、おまえが心配しているような客は、あの店には迂闊に近寄れない。ためしに一度覗きに来れば、簡単にわかったはずなんだがな？」

もちろんルルーシュは返事をしなかった。認めるのが癪だったからだ。

C・C・は、ルルーシュの反応など気にせず続ける。

「言ってみれば、私は歴史の生き字引みたいなものだからな。そういうのが好きな年寄りや、若い女の旅行者たちに茶飲み話のついでに持て囃されているだけだ。たしかに初めのうちは不埒な目的で訪れてくる連中も皆無ではなかったが、今では私の見た目ではなく、中身が必要としてくれている連中が自然派生的に防波堤の役目を担

つてくれているからな。断言しておくが、相手がおまえでも胡乱な態度一つで追い出されてしまうのがオチだぞ？」

ルルーシュは、何も言わずに嫌そうに顔を顰めた。

「だったら、なおさらだ。どうして制服がアレである必要があるんだ？」

たしかに独占欲は感じている。それは認めよう。

だが、仮にも仕事だ。それで対価を得ている以上、そして何より当の本人がその仕事にやりがいを感じている以上、ルルーシュに口を出す権利はない。それは嫌というほどわかつている。

つもりだったが、どうしてもああした衣装で給仕に勤しむ、その必要性がルルーシュには納得できないのだった。

だからこの際、腹立ちまぎれに開き直って訊ねると、Ｃ・Ｃは意外そうな表情で目をしばたいた。

「気に入らなかったのか？」

「はア？」

何をいまさら？ と低く唸るようにして問い返すと、Ｃ・Ｃは少し困っているような表情で視線を外した。

「元々あの店は同族経営だからな。折り良く娘さんが嫁ぐことに決まっていたから、私を雇ってくれたんだ。だから一応アレでも、おまえの好みを優先したつもりなんだがな」

初めて明かされる衝撃の事実、ルルーシュは怒りを抑えるのにかなりの辛抱を強いられた。

「……アレのどこが俺の好みだと？」

思わず訊ねる語尾が震えるが、Ｃ・Ｃは心底意外そうに眉根をギョツと寄せ合わせた。

「そのまんまストライクにおまえの好みじゃないか。ああいうヒラヒラした服をいつも私に選んでいただろう？」

たしかに黒の騎士団時代にルルーシュのデザインした衣装は別にして、Ｃ・Ｃの私服としてルルーシュが選んでいた服はああいうヒラヒラした服が多かった。それは素直に認めよう。

だが、しかし。

「参考までに訊ねたいんだが、ほかにはどんなデザインが用意してあったんだ？」

ルルーシュは、口角を引き攣らせながらさらに訊ねる。

「うん？ ああ、それなら」

C・C がスラスラ答えたのは、ひとつはギャルソンのもの、そしてもうひとつは清楚なメイドタイプのものではあった。

ルルーシュは、綺麗過ぎて怖い笑顔で断言した。

「だったら、来週からギャルソンのタイプに変更しろ。必要なら、明日にでも俺が交渉しておいてやる」

たちまちC・C が不快げに口を挟んだ。

「だから、どうしておまえはいちいち余計な世話を焼くんだ？ いいじゃないか別に、アレでも。可愛くて」

ルルーシュは恨めしげに、眼前で唇を尖らせる女の表情を眺めやる。

「おまえは……。アレが俺の好みだと思うなら、ついでに俺が嫉妬する可能性もすこしは頭に入れておけよ」

「……はあア？」

ワンテンポ遅れて、目を真ん丸にして問われて。

さすがに羞恥を感じたルルーシュが視線を外すと、たちまちC・

C は身体をよじって笑い始めた。

「………笑ってる」

ルルーシュが無然と言うまでもなく、遠慮なくしばらく笑い転げていたC・C は、クックツツと笑い続けながら思わせぶりに含み笑った。

「おまえのほうこそ。それを言うなら、カワイイ奥さんたちに囲まれて機嫌よく笑ってる場合じゃないだろう？」

「何だそれは？」

驚愕に、思わず羞恥も忘れて問い返すと、C・C は鼻の先でフンツツと蔑むように笑い飛ばした。

「基本的におまえは誰にでも愛想が良いからなア。そのクセ根本的な部分で女を女扱いしていない。それが連中のプライドを刺激するのだろうさ。躍起になっておまえを落とそうと手練手管を弄している。もつとも、おまえが小指の爪の先ほども誘惑に気付いてない時点で、ただの笑い話なんだがな」

そんな事實は小指の爪どころか、毛筋ほども気付いてなかったルルーシュは呆氣にとられた。

ひょんなことからルルーシュが教える立場に回ってしまった料理教室。

もちろん相手は既婚者とはいえ仮にも女性だ。面倒な噂を立てられても困るので、初回から必ずC・C.を同席させていたのだ。

その策がどうして通用していないのかと疑問に思いながら訊ねると、C・C.はなおさら辛辣に鼻を鳴らした。

「私か？ 私なら完全におまえの妹扱いだぞ？ こつちにも機嫌よく接してくれる分には、どう思われようと別に構いはしないがな」いつもの平静を装い皮肉に嘯いてみせながらも、内心では面白からうはずはない。

どころか、話しているうちに内心で怒りを発してゆく様子が目に見えてわかってしまうものだから、ルルーシュは呆れたように吐息した。

「おまえな…、そういう問題で俺に遠慮してどうする？ 言わなきゃ対処のしようもないだろう？」

「馬鹿馬鹿しい。まさか私に、『私が嫉妬する可能性もすこしは頭に入れておけ』とでも言わせたいのか？」

苛立たしげに、ルルーシュが言っただけのセリフを皮肉に返して、C・C.は敏捷な動きで身体を起こした。

そのまま腰を上げようとしたところを、ルルーシュは逃さず背後から抱きすくめる。

「嫉妬して何が悪いんだ？」

「ルルーシュッ」

「おまえ、俺のことが好きなんだろう」

「……ッッ」

強気に問い掛けながらルルーシュは顎の先をC・Cの肩の上に押し付けて、腰周りと肩口を同時に抱き寄せると、C・Cは全身を硬直させたままピクリとも動かなくなってしまった。

横目に窺う白磁の頬が、みるみるうちに熱を発する勢いでこれ以上もなく紅潮してゆくのがわかる。

自分に余裕がある場合には、ずいぶん勝手気ままに振り回したりもするクセに、実戦で追いつめられた途端にコレか。

ルルーシュは少し意地の悪い気分でそう思い、俯いているC・Cの横顔にフウと息を吹きかけた。

「困っているのか？」

敏感にビクリッと身体を震わせたC・Cは、ほとんど真下を向いている状態で力なく呟く。

「……わかってるなら、離せ」

「断る」

「……ルルーシュッ」

「あいな」

呟いて、ルルーシュは肩の上に顎の先を押し付けたまま、思わずハアと大きく嘆息した。

C・Cはそれにも敏感にピクリと反応を示したが、今の場合は意図してやったわけではなかったので、ルルーシュは気付いてないフリを装う。

「それとも何か？ 俺を振り回すのはそんなに愉しいか？」

C・Cは、なぜだか悔しげにギョツと唇を噛み締めて。

ひどく恨めしげに、肩口に回されているルルーシュの腕に両手で軽く爪を立てた。

「……私のどこにそんな余裕があるんだ？」

ルルーシュは見栄もなく淡々と呟く。

「さアな。人のことをとやかく言う以前に、こっちに余裕がないか

らな」

幸せにしてやると豪語してやったものの、実際は経験値の低さから日常的に振り回されてばかりいる。

その事実を認めたも同然のセリフだったが、なぜだかC・Cの雰囲気はひときわ鮮やかに恥じらいを帯びてゆくのに気付いた。

ルルーシュは、早まったかと思いながら苦笑する。

「そんなふうには見えてなかったなら、喜ばしいかぎりだが？」

C・Cはそれには構わずにきつく目を瞑ると、ルルーシュの腕をギュツと抱きしめたまま俯いた。

何かを押し殺している様子で繰り返される呼吸。ほんのり湿り気を帯びている温かいそれが、吐いて吸うたびに腕に直接触れるのでくすぐったい。

しばらくそうして言葉を探っていたC・Cは、淡々とひとりこちるようにして呟いた。

「……ルルーシュ……、こんなことは言いたくないんだがな、最近おまえ、私のことばかり考えすぎだぞ？」

「ああ、幸せにしてやると約束したからな」

「私は別に、そこまで大切に思ってもらわなくても大丈夫だ」

「俺はまだ満足だとは思わない」

「個人の主観の違いだろう？ 私は今でも充分満足だ。……満足、すぎるくらいだ」

「欲の浅い女だな」

「おまえがちよつと強欲すぎるんだ」

言つて、C・Cは少し笑った。

「まア、世界を相手にするのと比べたら実に些細なものだな」

そこでどうして自嘲する必要があるのかと疑問に思いながらルルーシュは嘆息すると、すぐ目の前にあるC・Cの首筋に唇を押し当てた。

位置的に耳朵のすぐ下に鼻先を埋める格好になり、唇では首筋の皮膚の薄さと柔らかさを確かめながら静かに呼吸を繰り返す。

ルルーシュも使っているシャンプーの匂い。

それに入り混じる気持ちの安らぐ芳香に、ああ、こいつの肌の匂いだったのかと納得しながら顔を離した。

「些細というわりに、ある意味世界を相手にするよりも、難易度は上のような気がしているが？」

垣間見える肌が真っ赤に色づきすぎていて、体温すら些か上昇しているのではないかと思える。

それでいて、口調だけはいつもの平静を装いながらC・C・Cが答える。

「抱くか？ おまえがそうしたいなら私は」

「誰もそんな話はしていない」

ルルーシュは軽くムツとしながらC・C・Cの言葉を遮る。

「というよりも、どうしておまえは簡単にそんな話で片付けたがるんだ？」

「しかし、おまえが……」

言いさして、語尾が頼りなく揺らめいたと思ったら、なんだか少し切羽詰っている様子でルルーシュの腕をギュツと抱きしめた。

「……そうでないのなら、私には……おまえが何を求めているのか、さっぱりわからん」

本当に途方に暮れている様子だった。

精神的にはルルーシュよりも遥かに成熟していて、思慮深い女の一面を併せ持ちながら、平然とこんな世迷言を呟いてみせたりもする。

余計な概念など一切切り捨てて、正面から俺を見つめ返せば答えなどおのずとわかってしまっただろうに。

ルルーシュは何も言わずにC・C・Cの頬に自分の頬をぴったり押し付けると、華奢な身体の柔らかさを確かめるようにしてゆったり腕の中に抱きしめ直した。

幸福に対する経験値が低すぎて、いったい何を求めたらいいのかわからない。

だから、最初から何も求めない。

昔からC・C・はそんなふうな女だった。

その女が唯一自分に求めたのが、『愛されたい』。

そして、自分の力で積極的に幸せを掴み取ろうと歩み出しているのに、それでも。

本当に欲しいと願っているそれだけは、本人がまず具体的に何を求めたらいいのかわかってないものだから、その願いを叶えようとしているルルーシュが途方に暮れてしまうのも当然だった。

なぜならルルーシュのほうだって、実情は似たようなものなのだから。

「別に悩む必要はないだろう？ 単純に俺も、幸せになりたいと望んでいるだけだ」

「……ルルーシュ……」

たとえその感情を得るほどに、それと同量の別の感情を引き受ける覚悟を必要としていても。

それでも、もう自分は、生きることを選択したわけだから。

「そもそも、おまえが自分で選んだ男だろう？ だったら、少しはそれらしく協力できないものなのか？」

「……えらそうに」

固く俯いたまま沈黙を守り続けていたC・C・は、クスリと笑んで泣きそうな感じにそう呟き。

ふいに顔を上げると振り向いて、ルルーシュの唇にキスをした。

どうして今それをする気になったのか、ルルーシュには察することとはできなかったが。

「本当だな」

嬉しげに笑いながらそう呟く。

「……何がだ？」

C・C・は耳朶までしっかり薔薇色に染めながら、軽く唸るようにしてそう訊ねる。

頑なに意地を張るその水面下で、自信なさげに揺れている濡れた

瞳の輝きがとても綺麗だとルルーシュは思った。

「おまえにされると安心するものだな。俺もけっこう嫌いじゃないということだ」

「バカか、おまえは？」

「おまえが先に言っただろう？」

性懲りもなく息巻く女の身体を遠慮なく裏返して引き寄せると、正面からゆったり抱きしめ直した。

もうとっくにあきらめていたはずだった。

母の死に直面した瞬間に。

求めて得られないことは苦しい。

こんな欲望と願っているのに、どうしてそれが手に入らないのか理解できないから苦しむ。

さんざん苦しんで、もうそんなふうな苦しみ方は金輪際ご免だと思いつてしまったから、その瞬間から自分が愛されることはあきらめた。そんなものは別に手に入らなくても、自分が必要とする相手を愛すれば願いは叶えられるはずだから。

しかし、それを信じて生きてきたつもりが、人生は思っていたよりも甘くはなくて。

自分が愛した代償に、憎しみを一身に背負った果てにルルーシュは今ここにいる。

そのクセ、とっくにあきらめていたはずの願望に、性懲りもなく期待を寄せ始めている自分もいて。

世界で唯一、自分を本来の自分のままにずっと支え続けてくれた女が、ここに一緒にいてくれるものだから。

調子に乗ってこんな期待を寄せてしまうのは、今の彼女にはまだちょっと荷が勝ち過ぎてしまうだろうか？

結局はまた欲が深すぎると言われてしまうのだろうか？

それとも。

「おまえが好きだ。……必要だ。だから、」

C・Cも苦笑しながら、同じようにルルーシュの背中を抱きしめる。

そして、溜息混じりに小さく呟いた。

「……………おまえは本当に……………いつだって私を簡単に幸せにしてしまっただけだ……」

それはおまえのほうだとルルーシュは思ったが、今の自分ではまだそれを口にするのはふさわしくないような気がして。

そのまま何も言わずに、満足するまでやさしい体温を抱きしめた。

番外？：モン・シエリ

真夜中に目が覚めてしまった。

C・Cは目の動きだけで時計を探して、辛うじてその盤面を読み取った。

午前零時過ぎ。

ベッドに入ってから、まだそれほど時間は経過していない。

以前はとかく寝つきの悪い性分だったが、ここ最近は見目にも勤労しているおかげで、ベッドに入ればほどなく意識を失くしてしまうことが多かった。

そして、いったん眠りに落ちてしまえば、耳元で誰かが叫んだくらいでは簡単に起きないはずの彼女が夜中に目を覚ましてしまったのである。

C・Cは異常なまでの暑苦しさに辟易しながらハアと細く息を吐き出した。

その息でサラリと髪が揺れてしまうようなごく至近に、自分を抱きしめて眠る男の顔がある。

コーネリアが主犯の誘拐騒動のドサクサ以来、二人のあいだですっかり定着してしまった習慣だ。

家事の分担の関係でほとんど毎晩先に眠っているC・Cの肩口を、ルルーシュは自分が寝るときに当然のように軽く胸元に抱き込むようにして眠る。

しかも、最近ではずいぶん慣れも手伝って、眠っているうちに力加減を忘れてしまうのだろう。息苦しさに気付いて目覚めてみれば、四肢を絡めてガッチリと抱きすくめられているような場合も少なくなかった。

もつといい加減、時期も時期なのだし、暑苦しいから遠慮してくれと断ってやりたい気分は山々だが、逆に冬場はC・Cのほうが積

極的に必要としていたのだ。

むしろ野宿を続けていた最中に、あんまりせつせと注文を出しすぎたものだから、本来こうした接触には不慣れだったはずのルルーシュに妙な免疫をつけてしまった感がある。

普段は眠りの最中でさえどこか持て余しぎみの彼の長い手足は、C・C・を抱えているくらいでちょうど良さそうな感じで。C・C・の肩口とウエストラインをしっかりと腕の中に抱え込みながら、なんとも気持ち良さそうな表情で熟睡している。

これがもし意識的にやっているのだとしたらC・C・も俄然余裕を示して、「おまえも案外、可愛いところがあるじゃないか」くらいは目覚めの一番に言ってやれるのだが、完全に無意識の行動なのだからタチが悪い。

C・C・は辛うじて自由になる片手をそっと伸ばすと、形の良いルルーシュの鼻をキュツと摘まんだ。

「……………ンが……………ッ、……………ガッ、……………ッ、……………」

完全に寝入っている状態では、さすがのルルーシュも、鼻から口への呼吸場所の切り替えがスムーズに行えなかったのだろう。不明瞭な息音を発しながらしばらく苦しんでいたのだが、頃合を見てC・C・が掴んでいた鼻を離してやると、またじきに安らかな表情で寝息を立て始めた。

そのあまりの危機感のなさっぷりに、なんだかC・C・のほうがいんわり恥ずかしくなってしまうて。

鼻からフンツと息を吐き出すと、わずかに緩んでいた腕の隙間からすばやくスリリと抜け出した。

そのまま横臥に眠るルルーシュの肩口をそっと押しやって、仰向きに寝返りを打たせたところで、今度は自分のほうからその胸元に抱きついた。

自由を奪われているのが不満だけで、こうした接触は決して嫌

いではなかったから。

言ってみれば、人型のチーズくんみたいなものである。

最近ハルル・シュが代理を務めてくれているおかげで、本家チーズくんはクローゼットの上の特等席ですっかり楽隠居の御身分だ。

ようやく取り戻した自由を満喫しながら、C・C・はひとりで幸福そうに「ふふふつ」と笑って、それなりに厚みのあるハルル・シュの胸板にピッタリ頬を押し付けた。

心臓の音。

トクリ、トクリと力強く打ち続けている胸の鼓動。

一度はこの胸の鼓動が次第に弱まって、完全に止まってしまう様子を自らの身体で体感したのだ。

そのときの記憶が、今も頭の片隅にこびり付いて離れないでいるものだから、なおさらこの音を聞いていると安心してしまう。

人生の終焉に向って走り始めてしまったハルル・シュを、一度は完全に引き止めることすらあきらめて、この男の意思を最後まで貫かせてやりたい一心で、この男を大切に思っている自分の気持ちすらもあきらめた。

それなのに、今もこうしてハルル・シュは、私のそばにいてくれる。自分のほうからは、ただの一度も素直に掴み取ることはできなかった指先を、今の自分たちは親密に絡め合うことすら容易に出来ていて。そこから得られる数多の幸福を迂闊に見過ごしてしまいそうな自分の慣れ方に、時折ひどく驚く。

今までずっとそばに必要としてくれたから、いつしか自分のほうまでそれが当たり前になっていて。

けれども、当たり前前に見過ごしてしまえることなど本当はただのひとつも存在しないのだと、あのとき、あの瞬間に思い知らされたはずだった。

無尽蔵に存在していたはずの分岐点。けれども互いにそれを見な

いように過ごしてきた、やがて辿り着いた結末は、考え得るかぎり最悪のものはずだった。愛する男の死出の旅路を、引き止めることもできずにただ見守るしか方法がないなんて。

愛する、なんて言葉を思い浮かべることすらもおこがましい。

本当に愛していたならば、失わずに済ませる最善の方法を迷いなくいくらかでも実行できていたはずだから。

取り返しのつかない状態になって初めて、絶望のどん底で茫然と過去を振り返りながら、ああ、これが私に対する罰なんだなアと、指一本動かす気力の湧かない状態であまりに惨めな自分の姿を見せつけられる。

ルルーシュが生きてさえいてくれるなら、世界なんて滅んでしまっても別に構いはしなかった。

記憶に残っているかぎり、人生至上初めて出会った大切な相手。

そんな男一人引き止める資格を持たなかった自分は、本当に救いようがないまでに愚かで脆弱で駄目な人間だったのだろう。

自力では直視する勇氣すら持たずにいたそうした一面を全部逃さず正面から見せつけて、あまつさえ、その人生をイチからやり直す機会を与えてくれたのがルルーシュ。

それが、この男の私に対する最大の愛し方だった。

「……こんな夜中に、何ひとりで遊んでる？」

ほんのり大きめに息を吸って、吐き出して。

やがて胸板から直接響いてきたのは溜息まじりの呟きだった。

もちろんC・Cは驚いたが、それはルルーシュが目覚めたせい

ではなく、それを期待していた自分の本心に気付かされたせいだった。

声が、聴きたくて。

今でも充分この男の毎日を独占しているクセに、何を甘えているんだといまさら羞恥を覚えてしまったが、だからと言ってすぐに離れてしまうのも忍びがたくて。

C・Cは必要最低限の距離だけ身じろぐと、辛うじてルルーシユの表情を視界に収めた。

「おまえがあんまりしつこくしがみ付いてくるから、目が覚めてしまっただけだ」

嘘は言っていない。

単純明快な事実だったから軽く拗ねるようにしてそう言っと、まだずいぶん眠そうな顔をしたルルーシユは、いつものルルーシユらしく鼻の先でフンツと笑った。

「そっくり同じセリフを返してやりたい気分だが？」

「フン、おまえが寂しがるといけないと思ってな。感謝しろ」

ルルーシユは、眠気に掠れた声音でクツクツと息を絡めて笑ってそして、おもむろにC・Cを乗せたまま寝返りを打ったと思ったら、眠気の残る気だるい動きでC・Cを身体の下に組み敷いた。驚きに、軽く目を瞠ったC・Cのひたいに片方の手のひらをぺたりと乗せると、唇にはついばむようなキスをひとつ。

「夢見が悪かったわけではないんだな？」

気遣わしげに双眸を覗き込みながら訊ねられれば、思わずC・Cもクスリと笑んでしまうしかなかった。

「だいじょうぶだ。もう二度とあんな夢は見ない」

「本当だな？」

「しつこい。余計な心配は無用だ」

「なら、いい」

あっさりそう返して、ルルーシユは元いた場所にバツタリ身を横たえ直した。

目を閉じて、そのまま寝直してしまいそうなルルーシュを横目に眺めながら、あまりに彼らしい反応にＣ・Ｃは胸の内でこっそり苦笑を噛み殺す。

ルルーシュのほうから唐突にキスをしてきたのが一ヶ月と少し前だからと言って目立って態度の変わるはずもなく、ほとんどＣ・Ｃも、その事実を忘れかけていたのだが。先日こっそり眠っているＣ・Ｃの唇を盗んでいたのがバレて以来、なんだか開き直った様子のルルーシュはごく自然に衝動の赴くままにキスを仕掛けてくる。

だが、決して肉欲に絡んだものではなく、どちらかといえば寂しがる子供の頭を撫でてやるのと同じような意味合いで、だ。

幸せにしてやると約束したのを実行に移すために、今の自分に出来る精一杯をアレコレ思案してくれているのだろう。

その一環で、新しい愛し方を思いついたから、せつせと今はその方法で慈しんでくれているような。

そんなに大切に扱ってくれなくても、本当に生きて、ここに居てくれるだけでも充分なのに。

か弱い女は守れないとか言う割りに、放っておくとルルーシュの構い方は尋常ではないから、Ｃ・Ｃのほうでも気を引き締めておくのがけっこう大変だ。

うつかりすると与えられる心地好さだけに流されて、一度はこの男を死なせてしまった事実すら都合よく忘却の彼方に追いやってしまいたいような誘惑に駆られてしまう。

それきり眠ってしまったようにも思われたルルーシュは、目線も向けずに突然Ｃ・Ｃの首の後ろをむんずと掴んで、強引に自分の胸元に引き倒すと、これみよがしに大きく嘆息した。

「だいじょうぶと言った端から、どうして泣いているんだ？」

少し呆れているような口調でそう言って、Ｃ・Ｃの後頭部に大

きな手のひらを乗せさせた。

言われて初めてそれに気付いたC・Cは、クスクスと笑い出してしまいながらそれに答える。

「ただのうれし涙だ。泣かせておけ」

透明な涙があとからあとからあふれ出て、すぐさまルルーシユの着ているパジャマに吸い込まれては消えてゆく。

きつと、夜だからいけない。

こんなふうにくっついて眠る習慣だけは、以前から変わらず続いていたことで。

最後まで離れずそばに居続けると望んだ結果とはいえ、それだけ近い距離にありながら引き止めることの許されなかった二ヶ月間。

戯れに人と話す機会に恵まれても、言葉にしてそれを認めてしまえばルルーシユの前でも自制を続けていられる自信がまったく残っていなかったから、本当の本心は胸の奥底でじつと抱えているしかなかった。

しかし、そうした日々を重ねてゆくほどに、どうして自分はこんなに静かな心持ちで、残り少ない毎日を過ごしていただけるのだろうかと不思議に感じた。

ひょっとして失いたくないと思っているのは、罪悪感が作り出したただのポーズで。

このまま失ってしまえば、あとで死ぬほど後悔するのがわかっていいるから、今のうちに多少なりとも罪悪感を減らしておきたい一心で意識的に苦しんでいるだけではないのかと、何度も自分の本心に疑問を抱いた。

けれども、こうして安堵の場所を取り戻してみればわかる。

あまりに日常的に苦しい状態が続いていたものだから、痛みを感じる心の部分が限界まですり減って、単純に麻痺していただけなのだ。

「そんなに泣くほど、キスのひとつがうれしいか？」

「……ッ、うるさい…だまれ」

「黙れというなら、黙っているがな」

意識的に馬鹿な問いかけで一度口を挟んできたルルーシュは、本当にC・Cが泣き止むまで口を開きはしなかった。

最後にはC・Cも、どうして自分が泣いているのかわからなくなるまで静かにただ涙だけを流して。

いまさら泣いたからといって過去が変えられるはずもなく、ルルーシュを一度死なせてしまった事実が覆るわけでは決してなかったが。

それでも、今まで誰にも言えずに抑圧し続けてきた気持ちの解放と、思い切り泣いたことによる相乗効果で、たしかに胸の奥に刻み付けられている疼痛が、一時的に若干和らいでいるのを実感しながら、C・Cは愚かな感傷にケリをつけるための息をハアと大きく吐き出した。

「気が済んだのか？」

そしたらルルーシュが、すかさず声を掛けてきて。

その待っていたようなタイミングに、泣いている姿を一部始終観察されていたことに気付いた。

それと同時に、泣いている間中ずっとしがみ付いていたルルーシュのパジャマの胸元が、その下の肌を透かすほどにグッシヨリ濡れていることにも気付いてしまっただけ。

こんなものを着せられている本人はさぞかし不快だろうと、申し訳なさになおさら顔が赤くなってゆくのを感じながら、泣き濡れて腫れぼったくなってしまっている目蓋を隠すために俯きながら訊ねる。

「……………服、すまない。着替えを取りに行つてこようか？」

ルルーシュはしみじみ嘆息するなり、乾いた大きな手のひらで濡れたC・Cの頬を拭い始めた。

「こんな時間に着替えても、俺の仕事が増えるだけだ。別にどうと

「いうほどのことでもない」

子供にするようにグイグイと遠慮なく両頬を拭われて、頬に張り付いている髪を丁寧の手櫛で整えられてしまえば、どうしたっていつもの反発心など消えてなくなる。

「……うん。……すまない」

だからと言って、気恥ずかしさまで一緒に消えてくれるはずもなく。

こんな場合、手馴れた男なら、「飲み物でも作ってくるね」などと洒脱に言い置いて、さりげなく気分を落ち着かせるためにしばらく一人にさせてくれるのだ。C・Cが直接そうした扱いを受けたわけではなかったが、過去には何度となくそうしたシーンを客観的に垣間見ている。

もちろん今のルルーシュに、そうした大人の気遣いを期待するのは無理な相談なのだろうが。

だとしても、あまりに無粋にC・Cをじっと眺め続けていたルルーシュは、おもむろにクスリと喉の奥で吹き出すようにして笑った。

「おまえは…、本当に見ていて飽きない女だな」

言って、満足そうにクスクス笑われてしまえば、嫌でも羞恥が高じてくる。

「……どういう意味だ？」

不満げに唇を尖らせながら訊ねると、ルルーシュは妙に大人びた目つきをして笑った。

「言葉通りの意味だが？」

まるきり一人前の男が、自分の女を所有した後に余韻を愉しむようにして視線で愛撫するような眼差し。

こんなふうに接してられる男のどこに余裕がないのかと不満に思ってしまう。

たしかに突発事故に弱いところは相変わらずで。しかし、それを利用しないことには簡単に自分を保ってられない程度には、最近

のルルーシュはますます包容力が増してしまっているのだ。

そのクセ本人ばかりが自分のやっていることにはまるきり無自覚に、平然と眺め続けてくれるものだから、次第にC・C・Cが機嫌を損ね始めると、それを察したルルーシュが、より一層満足そうに含み笑った。

「だが、まアたしかにな、貸しは早めに回収しておくのも悪くはない」

「……な、何の話だ？」

妙な迫力に押される形でC・C・Cが胡乱な訊ね方をしてしまうと、ルルーシュはたちまち取り澄ました表情でツンと顎の先を反らした。
「うれし涙でも突然泣かれれば、俺だって当然心配するんだ」

そうピシヤリと言い切ったかと思いきや、ほらと口には出さずに顎をしゃくって。

あまりに横柄な誘い方に、『おまえはいつたいナニサマか』とC・C・Cは呆氣に取られてしまったが、よくよく眺めてみれば言った男の目元は、明らかな朱に染まっていた。

どうやら単に口実に利用しているだけで、今度はルルーシュもそれを自覚しているらしい。

C・C・Cはしばらく何も言わずに、上目遣いにルルーシュを見つめた。

ルルーシュも意地でも視線を逸らそうとしなかったので、しばらくのあいだ睨み合いが続いたが、じきにC・C・Cのほうで肩を揺らして笑い始めた。

「まったく、おまえは仕方のない男だなア」

「おまえにだけは言われる筋合いはない」

いいから早くしろと促され、C・C・Cはクスクス笑いながら、リクエストどおり自分のほうから感謝のキスを贈った。

第四話：アクア・ディ・ジオ

男にしておくには勿体無いほどに繊細な指先が、小麦色のパイ生地を薄く丁寧に伸ばしてゆく。

「ああ、この際お好みでアーモンドパウダーを加えてください。焼いた後に風味が増しますからね」

優しいに語られる声音は、まるきり蕩けるように甘い詩歌をさらにひときわ甘く口ずさんでいるかのよう。

朴訥な黒縁眼鏡の向こう側でわずかに伏せられている長い睫毛がゆっくりまばたいて、しっとり艶やかな髪の色と同じ烏羽色からすばの濡れた双眸が、愛しげに愛撫するように手元のパイ生地を見つめている。その場を集っている女たちは皆一様に、その甘い声音に囁かれ、自分の肌を熱く見つめられるさまを想像しては、人知れずゾクリと背筋を震わせた。

逢瀬の時間は、月に一度、数時間だけ。

料理教室の名目で、この類いまれに美しい青年の住まいに押しかけている女の数は総勢8名だ。

いずれも既婚者かつ子持ちだが、美しいものを愛でる権利は万人に等しく与えられるべきなのだ。

たまたま彼と出会うタイミングと前後して、今の亭主と結婚してしまいました。それが何か？

目の前に転がっている極上のアヴァンチュールの機会をうかうか見過ごす手はない。

フルネームさえ明かされず、出身地も、経歴も、年齢さえ何も知らない。

そのミステリアスさが、彼女たちには尚更たまらなかった。

ずいぶん年の離れた少女と同居しているのは知っていたが、この数ヶ月の観察によると単なる親類か友人止まりであろう。

間違つても甘い関係でないことは、論より証拠、彼女たちの鋭い直感が教えてくれていた。

とにかく小生意気で、目触り極まりない存在なのである。

ライバルたちの目を盗んでこっそり抜け駆けをしようにも、四六時中その少女が監視役よろしく彼のそばから離れないでいるものだから、個人的に話をするこすら儘ならない。

しかし、通い始めて数ヶ月。

本日初めて、その少女が姿を消していた。

ああつ神様つつつ！！

女たちは「ほほほ」と上品に微笑みを交し合いながら、俄然鼻息を荒くしていた。

なんとしてでも、このチャンスを活かして、個人レッスンの約束をッ！！

「じゃア、行ってくる」

思っているうちにも、隣室から少女がそう声を掛けてきて、女たちは見えない場所でグツと拳を握った。

「まあ、よろしいこと。絶好のお出かけ日和ですものねエ」

ひとりの夫人が全員の気持ちを代弁すれば、それに反応した青年はニツコリと春の陽気を思わせる麗らかな微笑みを、その美しいかなばせに乗せさせた。

「ええ、本当に。では、ちよつと失礼して」

経歴など何ひとつ知らされなくても、そこに立っているだけで育ちの良さを窺わせる流麗な仕草で会釈を残して颯爽と少女の後を追う青年を、女たちはそれぞれ最高の笑顔で見送って、やがて申し合わせたようにキッチンのドアに殺到した。

固唾を吞んで耳を澄ますと、じきに二人の会話が漏れ聞こえてくる。

「帰りは遅くなりそうなのか？」

「いや、日が暮れるまでには帰ってくる。店が閉まるのが早いから」

「チツ」

「しいッ！」

全員の気持ちを代弁したある夫人の舌打ちに、残りの全員が一斉に無声音で叱責した。

たしなめられた妙齡の夫人が、思わず口元を押さえながら顔を赤くしている。

その間にも二人の会話は続いていた。

「なら、ついでに俺のシャツも見繕っておいてくれないか？」

「シャツ？　なんだ、おまえ困っていたのか？」

「おまえが言うな。俺の気に入りのシャツから率先して奪っていくのはどのどいつだ？」

「フンッ、甘いな。気に入りだからこそ洗濯の回数を重ねる。肌なじみの良くなったところで、私が重宝してやっているんだ。これ以上もなく道理にかなっているじゃないか」

「道理を口にするくらいなら、素直にパジャマを着ろ！」

「断る」

「おまえ…ッ」

「いいじゃないか、別に。いまさら。そもそも、おまえが始めた習慣だぞ？」

「だったら、あのまま裸で放っておけば良かったのか？」

「変に意識したのはおまえだ。私は気にしない」

「少しは気にしろ」

「……………」

固く沈黙を守る女たちは、手近な相手と横目で視線を交わしあう。これはちよつと…（いや、かなり）…少女の立場が微妙になってきた。

しばらくのあいだ自転車を用意している音が続いて会話が途切れたが、やがて嘆息混じりに青年が言う。

「まアいい、とにかく頼んだぞ?」

「ああ、覚えていたらな。　　って、おい、ちょっと待てっ
「なんだ?」

唐突に慌て始めた少女の声音に、全員が一斉にドアの隙間に耳をくっ付けた。

なぜだかひと目を気にしているらしく、聞き取りづらい少女の声が批難する口調で続ける。

「……こ、こんなときくらい少しは遠慮しろっ」

「なぜだ?」

「なッ、あ……だ、だから……人が……」

「人?」

言って、青年の振り返る気配に、女たちは一斉に呼吸を止めた。相手に見えないことはわかっていいるのだが、なんとなくそうしてしまったのだ。

青年が続ける。

「いいから、ほら。待ち合わせの時間に遅れるだろう? さっさと目を瞑れ」

「だからどうして私が毎日毎日っ」

「おまえ以外の誰にするんだ?」

「誰でもいいだろっ好きにしろっ!」

「ほう? その話をまた蒸し返すつもりなんだな?」

「……う、……わ……わかったから」

さっきの夫人が今度は無声音で悲鳴を発したが、誰もそれに構っている余裕はなかった。

耳といわず全身で最寄りの壁にへばりつく。

だが、2秒も経たずに青年が息巻いた。

「おい、こら。なんだそれは?」

「も、文句言っなッ。ちゃんとしたじゃないか!」

「ちゃんとと言うのは、こうするんだ」

「わっ、バカッ! ……うんッ」

気がついてみれば七月も中旬。

庭に向って大きくドアを開放してあるリビングで、ルルーシュはしばらく無心にキーボードを叩いていた。

ゼロ・レクイエム前にジェレミアが用意しておいてくれたのは、何も金銭的な援助だけではない。

偽造したパスポートに、身分証。

それを利用して、今の住まいの賃貸契約を結んで、銀行口座も開設した。

テレビやラジオは必要だと思わなかったが、パソコンだけは無いと不便で、通信の設備も整えた。

もっとも、特殊な設備は一切なく、一般家庭に普及しているごく当たり前の品物だ。

ひとりで過ごす日中に、ルルーシュは手の空いた時間を利用してもっぱらその画面を覗いている。

週末ごとの話し合いで仕入れたギアスやコードの知識をドキュメントに纏めて考察して、ニュースサイトは毎日こまめにチェックする。

困ったときには、料理のレシピや生活の知恵もパソコン頼みだ。

つくづくおまえは現代っ子だなとC・C・には笑われた。

だが実際、便利なのだから仕方がない。

「で、俺に関する評判がなんだって？」

ほとんどわの空で問いかけると、しばらく沈黙の続いた後でクスリとわずかに笑う声が聞こえた。

庭に向って大きくドアを開放しているリビングの床の上。そこに直接腰を下ろしているC・C・は、見るからに疲労困憊している様子だった。

帰ってくるのはいつも夕方。一日のうちでも一番暑い盛りだったから、自転車で30分の通勤距離が結構つらくてバテているらしい。片手でパタパタと団扇を仰ぎながら、グッタリ背中を丸めている。

「あー…、聞いて驚け、ここでも立派におまえは口リコン趣味が定

着したそうだな。自業自得だなア？」

ルルーシュは、フィードの設定をしてあるニュースサイトをいくつか覗いて、必要な情報を収集し終わるとパソコンの電源を落として席を立つ。

その足でキッチンに向って、用意しておいたミントティーを手に戻ってきた。

「自業自得はともかく、ここでも、というのはいったい何なんだ？」
たつぷり汗をかいている冷えたグラスを、むき出しの肩の上にぺたりと乗せてやると、C・Cは驚く元気も無い様子で、「ありがとう」と力なく呟いた。

「黒の騎士団でも一時期そういう噂が流れていたんだ。なにしろ、この私と愛人設定だったからな」

「フツ、おまえが相手でロリコン呼ばわりか？ 年齢詐称サギもいところだな」

「女に歳の話振るな、バカモノめ」

言うなりC・Cは、ストローでズズズッと一気にミントティーを飲み干した。

喉越しのスッキリした爽快感。

たつぷり甘めの味付けが疲労した身体には心地良かったが、すこしだけ物足りなくてグラスを傾けると、残っていた氷片をガリガリ齧り始めた。

その背後に立ったまま、なんとなく庭の景色を眺めていたルルーシュは、黙って自分のグラスと交換してやる。

もちろん例の料理教室は、あれ以来パツタリ沙汰止みになっていた。

別にルルーシュのほうから頼んで始めたわけではなかったのに、一向に構いはしなかったが。

騙された女の執念はすさまじく、せめてもの憂さ晴らしでせつせと噂話に励んでいるのだろう。

もつとも、その噂を仕入れてきたC・Cは、仲の良い夫人から

好意的なからかいを受けてきたらしいが。

ともあれ、年頃の男女が一つ屋根の下に暮らしているわけだから、公然と関係を認めてしまったほうが、住みやすさの向上するのは事実だった。

わざわざ外見年齢に大きく開きを持たせたのは、男性は24、5ぐらいから外見的な変化が緩やかになる傾向にあり、女性は化粧次第でどうしても見た目の年齢を変化させることが可能だからだ。

不老不死の彼らが一般社会で生きてゆくためには最大の障害となる、『ひとつの場所に最長でも3年』というタイムリミットを改善するために、ルルーシュが考え出した方策だった。

とりあえず試験的に、この先10年を目安に様子を窺うつもりでいるのだが、果たしてどうなることやら。

「なあ、ルルーシュうー」

今度はゆっくり味わいながらミントティーを飲み干したC・Cは、ハアと大きな溜息を吐き出した。

冷えたグラスを首筋にぺたりと押し当てながら気だるげに呟く。

ルルーシュが「なんだ？」と訊ねると、眠くて駄々をこねている子供のようなセリフが返ってきた。

「……暑くてうんざりだ……髪をバツサリ切ってくれ……」

ルルーシュは嘆息しながらC・Cの背後に腰を下ろすと、自分の髪を結っている髪ゴムを外した。

V・Vがああした成りをしていたのも当然で、不老不死の身体でも毎日普通に代謝は行われている。

だから放っておくと好き放題に髪の毛が伸びてしまうのだ。

以前からナナリーの世話を焼くための実験台として自分で髪を切っているうちに、いつしかそれが習慣化してしまったルルーシュだったから、別段それでも困りはしないのだが。今は気に入りの散髪バサミを探している最中だったので、ゼロ・レクイエム以降伸びてしまった髪を、普段は襟足付近でひとつに束ねて急場を凌いでいる一方、コードを継承した当時から長髪で、手入れの簡便性から同

じ長さをキープしているだけのＣ・Ｃは、帰宅するなり、少しでも涼める場所を求めてしばらく家中を彷徨っていたのだが、結局リビングの床の上で力尽きてしまった様子で。庭に向ってぺったり両足を揃えて投げ出して、背中を丸めてうな垂れている。

そんなふうになっていると床まで届いてしまう長髪が、まるきり一枚の薄いベールのように全身を覆ってしまうのだ。

そんなふうにしても色味が薄いせいでちっとも暑そうに見えないのだが、たしかにこれが黒髪だった場合を考えると、さぞかし鬱陶しいことだろう。

ルルーシュは、うなじの付近で集めた髪をクルクルねじりながら一本に纏めると、後頭部の中心でシニヨンを作った。

髪の広がりによる膨張感が無くなってみると、思いのほかに頭が小さいので驚いた。

ほんのり桜色に上気している耳朵の辺りや、うつすら汗ばんでいるうなじがすっかり空気の下に晒されてみると、見た目にもずいぶん涼しげだと満足に思った。

「ほら、これならずいぶんマシだろう？」

意識するまでもなく得意げに訊ねたが、Ｃ・Ｃはさらにグツタリした様子で呟きを吐き出した。

「……なおさら暑い……地肌が蒸れる……」

「我慢しろよ、せっかく綺麗な髪なんだから」

本人にとっては何の慰めにもならない言葉を呟いて、Ｃ・Ｃの脇の下から腕を伸ばしてグラスを受け取ると、ポケットから取り出したハンカチの上に残っていた氷片を受け止めた。

四隅を折って手のひらサイズに包み込むと、そのままＣ・Ｃの首の後ろに押し当てた。

一瞬ピクリと肩を揺らしたＣ・Ｃは、気持ち良さそうにハアと息を細く洩らして、くたりと身体の芯から力を抜いてゆく。

あんまりその姿が無防備なものだから、なんかコイツ本当に猫みたいだなと感心しながら、ルルーシュはこっそり笑いを噛み殺した。

「……なア、ルルーシュ？」

「なんだ？」

本当は、そろそろ夕飯の準備を始めるつもりでいたのだが、あんまり疲れているのが段々可哀想になってきて、とりあえずしばらくの間は付き合ってやることにした。

自分は一日中屋根のある場所で過ごしていた罪悪感もほんの少しだけ含んでいたのかもしれない。

なにしろその日は、家の中でもかなり暑かったのだ。

ついでに団扇も受け取って二人を同時に仰ぎ始めると、C・C・はくすぐったそうに笑った。

「ルルーシュは、私の髪が好きなのか？」

風に煽られたうなじの後れ毛が、それこそ猫の被毛のようにふわふわ心地好さげに揺れている。

帰宅してから着替えた生成りのワンピース。

肩紐の部分以外はすっかり両腕が露わに晒されている。

ルルーシュとは比較にならないくらいに紫外線を浴びている時間は長いはずなのに、日焼けの跡ひとつ見当たらないのは、それもコードの力によるものか、それとも元々の体質か。

C・C・の体温で解けた氷がぬるい温度の水になり、添えているハンカチの下部に水滴を集め始める。

見ているうちにもホロリと滴った。

ほっすり長い首筋から背中にかけて肌理の細かい白磁の肌の表面をじわじわ流れ落ちていった水滴は、やがてワンピースの生地に吸い込まれ、ポツリと小さな染みになる。

「綺麗だからな。そう言っただろう？」

我ながらそっけない返事だと思ったが、C・C・はまんざらでもない様子で「ふふっ」と微笑んだ。

「ほかに？」

「はア？」

「ルルーシュは、私のどこが好きなんだ？」

こいつめ…と、なんとなく嵌められた気分ですう思う。

だが、いい加減ルルーシュも、自分が口下手なのは知っていた。必要に迫られればいくらでも本心が口から先について出るのだが、要するに、必要に迫られなければ普段は何も言わないのだ。

そしてC・Cも、必要なことにかぎっては自分のほうからは何も訊ねない。

だからと言って、何も感じてないと思っていたら大間違いで、意外なところで神経が細くて、放っておくとどんなに溜め込んでしまうタイプだ。

その女が、珍しいことにこうして訊ねているわけだから、さて何と答えたものかなとルルーシュは思案しながら、パタパタと団扇を仰いでゆるく風を送り続ける。

庭先では、吹きつける潮風に揺らされて、時折ブナの木の子葉が陽光を反射させていた。

無人で揺れているハンモック。

一度こっそり拝借しようと試みて、火のついたような勢いでけたたましく怒られたことを思い出す。

けっこうケチだ。

もつとも、それほど頑丈でないのを知っていて、ワザとやった自分も結構アレだが。

そんなことを考えている間にも、すっかり氷は解けてしまったよう、後にはグッシヨリ濡れたハンカチだけが残された。

C・Cの体温だけではなく、ルルーシュの手の温度でも温められたハンカチ。

これでは逆に気持ちが悪いだけだと思いつながらハンカチを外すと、傾けたハンカチの末端から水滴がパタパタと首筋に滴った。

ルルーシュは何も考えずに、とつさに唇を押し当てると舌の先で水滴を舐め取った。

「んッ？」

それまで完全に脱力していた背中が、たちまちビクリと弾んで逃

げ出した。

ルルーシュはすかさず二の腕の辺りを掴んで引き戻し、流れ落ちてゆく水滴をネロリと下から舐め上げた。

「ば、ばかつ…こらっ」

くすぐったくてたまらないのだろう、ついには笑い出してしまったC・Cが、身悶えながら名前を叫んだ。

「ル、ルルーシュッ、やつ、やめろっ、ばかつくすぐったいっ」

最後の水滴を舐め取っていたルルーシュは、突然夢から醒めた時のようにハッと我に返った。

舌の先には、なめらかな肌の感触。

うぶげの方向に逆らって、背中を舐め上げた感触があまりにリアルに残っていて。

生まれて初めて、他人の汗の味覚を知らされた。

掴んでいた二の腕はとっさに離れていたのだが、自分でもまったく状況を把握できていなくて。

なんだ、いまのは？

茫然と固まってしまっている胸元に、C・Cがクスクス笑いながら遠慮なく体重を預けてきた。

「おまえは本当に、面白い男だな」

「……どういう意味だ？」

下からまじまじと顔を覗かれて、赤くなっている顔がさらにひときわ紅潮してゆくのを感じる。

C・Cは、やはりクスクスと笑いながら寛いでいる猫の姿で甘えた。

「私のことが好きだと言って、猫可愛がり大切に、ところ構わずキスするくせに、それ以上には興味を示さない。私が見た目どおりの年の女なら、よっぽど自分に魅力がないのかと悩み始める時期だな？」

ルルーシュはチラリと横目で盗み見るようにして、淡々と言う女の表情を窺った。

「……悩んでいるのか？」

C・Cは、見られているのに一向に動じない。

どころか、身体の両脇に立てたルルーシュの膝の上に悠然と腕を預けて、女王然とした態度でさらに寛ぐ。

「年の功だな。理由には関係なく、おまえはそういう奴だと納得することはできるんだ。そんなもの無くとも、おまえに愛されている実感が薄れるわけではないからな」

「……よく言う」

「事実だろう？ これで違うというなら、そっちのほうが驚きだ」

しゃあしゃあと返されて、ルルーシュは崩れ落ちるようにしてC・Cの肩の上にひたいを押し付けた。

なんでおまえはそんなに平然としていられるんだと、ガツクリ脱力しながら思う。

最近でこそ当然のようにキスを交わす関係が定着しているが、それだって単純に唇同士を重ね合わせているだけだ。

子供でも挨拶代わりにしているような接触だ。

C・Cが冷静にやり過ぎてくれたおかげで救われている部分もたしかにあるのだが、逆にそれも男としてちよつとどうなんだろうなと自問しながら、ルルーシュは疲れたような溜息をハアと吐き出した。

「……わかるかったな」

C・Cは指の先でルルーシュの膝頭を弄びながら微笑む。

「別に謝るようなことでは」

「そうじゃない」

ルルーシュはC・Cの脇の下から両腕を差し込んで、その柔らかな腹部を腕の中にしっかりと抱きしめた。

密着している肌の間でたがいに汗が滲んでくるのを感じるが、今は不思議にその体温が心地好かった。

その感覚だけに浸っていたくて、目を閉じる。

遠くのほうで、ざわわと鳴る風の音。

潮騒。

「……親父と…、母さんが、あれでも仲の良い夫婦だったのは知
っているんだろう？」

突然の話の転換に、おそらく返事に迷ってしまったのだろう。

肩の上に伏せているルルーシュのつむじ付近の髪の毛に、少しばかりうわの空の様子で指先を絡めて、弄んだ。

「そうだな」

家の中まで吹き付けてくる潮風。

いつそ雨が降ればいいのにと、ルルーシュは思う。

できればこんな話など、永遠に触れずに済ませてしまいたかった
のに。

「……いつたい、いつ頃の記憶なんだか自分でも定かではないんだ
が。その記憶の中で母さんはあいつの髪をとかしてやっていた」

場所はおそらくアリエスの離宮だろう。

人払いをしてあったところから察するに二人の寝室。

部屋の中一杯に暖かな陽射しが注ぎ込んでいて。

「俺とナナリーは、ドアの隙間からこっそりそれを眺めていた。あ
いつは昔から非情な男で滅多に顔を見せなかったから、ナナリーは
親父の姿を見ると一目散に駆け寄って行ったものだが。そのときは
幼心ながらに邪魔をするのが悪いと感じたのだろうな。それほど二
人は幸福そうだった」

ルルーシュの髪をかき回していたC・Cの手が去ってゆき、今
度はそれぞれ両手でルルーシュの膝頭を抱きしめる。

無言のうちの肯定だ。

おそらくC・Cも、似たような二人の姿を何度となく見かけて
いるのだろう。

そして。

本来ならば、同意を得られれば、少なからず人は心強く思うはず

であつた。

しかし、ルルーシュは。

嗤った。

思い出の中の光景を。

「あの当時の俺は、現実を何も知らされていなかった。親父は俺にとつての憧れで、自慢の存在で、俺たち家族にとつての幸福だった。自分たちが幸福だったから、世界中が同じように幸福なんだと俺は信じて疑いもしなかった」

「……………」

「だが、違つた。実際世界はブリタニアという傲慢の圧制に苦しめられ、あいつら親は平然とそんな世界に俺とナナリーを捨てたんだ」

「……………」

「たしかに当人たちは愛し合っていたのかもしれない。だが、あいつらには親になる資格が存在しなかった。一時的な快樂と、自分たちの幸福のためだけに、俺とナナリーを孕んで産み捨てた。子供は親を選べない。親になる資格も自覚も芽生えないうちから、どうして行為だけ愉しめるんだ？ あげくの果てに生まれてくる子供のほう是最悪だ。少なくとも俺は、そんな奴らは許せない。許すことはできないんだ」

「……………」

C・C・はずいぶん長く黙り込んでいた。

できるだけ感情を抑えて話しているつもりだったが、それでも若干体温が高じていたのだろう。

俯いたルルーシュの頭皮からじわりと滴り落ちてきた生温い汗が、ひたいを伝つてC・C・の肩の上に流れ落ちて行くのを感じる。

それに気付いたC・C・が目線を動かした。

わずかな動きでルルーシュにもそれが伝わったが、C・C・は流れ落ちてゆく汗を拭おうとしなかった。

ただ鬱屈を溜め込んでいる様子で小さく吐息した。

「おまえは、自分が不幸な生まれだと思ふのか？」

ルルーシュは激しく奥歯を噛み締めた。

「そうでなければ、誰がッ」

「なら、ナナリーは？」

「……ッ」

「自分の生まれをそんなふう認識して、だから結果的におまえは死にゆく運命を選択したなら、シャルルたちのやった仕打ちとどう違うんだ？ ナナリーはおまえの養い子も同然だったはずだろう？」

ルルーシュは、それには何も答えなかった。

答え、られなかった。

辛うじて腕の中の柔い身体を激情に任せて引き裂いてしまわないように我慢していたが、内心では逆上していた。

いつたい俺に、あれ以上の何が出来たのかと。

俺に出来る精一杯の方法で、理想の世界を創造した。

C・Cは、そんな男の胸元に深く背中を預けたまま、淡々とした様子で言葉を重ねる。

「親が子供の世話を焼くのが当然の義務と考えているのかもしれないが、端的に言って、生れ落ちた瞬間から親子であれ所詮は他人だよ。人間は誰も我が身が一番可愛いんだ。親が幸福な人生を与えてくれないからと言って、そのまま不幸に甘んじて生きるのは、親だけが悪いんじゃない。子供が自分でそうした人生を選んでいるからだ」

「ならおまえは、俺が自分で不幸を招き寄せたとでも言いたいのかな？」

「それに抗うために、世界に反逆したんだらう？」

「……だったら……ッ」

それがわかつているなら、どうしてッ？

堪えがたい激憤に、言葉が言葉になりきらずに行き詰る。

C・Cは、溜息を我慢している様子で沈黙して、すこしだけ無造作にルルーシュの髪に触れてきた。

何かを思案している証拠に気のない様子の指先が、緩慢な動きで

後ろ髪の表面を撫でては行き過ぎる。

「私の場合、どうして自分が奴隷だったかすら記憶に残っていないかな。それでも、いざ死に直面した瞬間には『生きたい』と望みを繋げたほどだ、奴隷なりに案外悪い人生でもなかったのだろうさ」

「……………」

「もつとも、その後の人生は最悪だ。私の場合は完全に自分で自分の不幸を招き寄せたんだ。『死ねない』身体を、『死なない』身体と開き直って生きる努力に励んでみれば、けっこう愉しく生きられたのかもしれないにな」

語りながらのうわの空でルルーシュのうなじの後れ毛を弄んでいたC・Cは、ふいにそれを自覚した様子で唐突に手を離れた。

決まり悪げな沈黙を挟んで、ふたたびルルーシュの膝上の定位置に手のひらを置き戻す。

ルルーシュの首筋には、中途半端にC・Cの指の感触が残された。

まるきり逆立てられたうぶげが、じわじわと本来の流れに向って自発的に戻っていくようなざわめき。

「たしかにシャルルたちの愛し方は間違っていたのだろう。だが、あれでもあいつらなりにおまえたち兄妹を愛していたのは事実だ。

少なくとも本人たちはそのつもりでいたのだし、傍で見ていた私も」

「結果が伴わなければ、そんなものにいったい何の価値があるんだ？」

苛立たしげに言葉を遮るルルーシュに、その膝頭を掴んでいるC

・の指先が、ほんのわずかだけぴくりと動揺した。

そして、溜息のような声音でごくごく小さく「頑固だな」と呟く。「世間には、おまえのように厳しく自分を律することの出来る人間のほうが珍しい。自分がまずどうかして与えられた生を生き抜くために弱い者同士で傷を舐めあって、あるいは女を力で支配することとでしか精神のバランスを保てない男もいる。いずれにしろ、まずは自分が生きて行くためには必要になる方便なのさ。たしかに、そ

こから産まれてくる子供は幸福ではないのかもしれない。だが、皆が皆おまえの言うようにまず覚悟ありきでしか生きられないのなら、人類などとうの昔に滅亡している。人の心はそこまで堅牢ではないからな」

「……………」

「その点、シャルルの犯した最大の過ちは、大切と思うがゆえにおまえたち兄妹を遠ざけてしまったことだ。害される可能性がわかっていたのだとしても、最後まで自分の手で守る努力をして、離さず傍に置いておくべきだった。おまえが私にそうしてくれたようにな決しておまえたち兄妹を設けたことが悪ではない」

婉曲に、幸福だと記憶している幼少時代まで否定するかと促され。しかし、ルルーシュの理性と感情が同時にそれを否定した。言うなつ、と自制するより先に、勝手に口が動いていた。

「今まで死に拘泥していたはずの魔女が、ずいぶん知ったような口を聞くんだな？」

一瞬C・C・が呼吸を止めたのが、触れている肌伝いに伝わった。ルルーシュはとっさにC・C・の口を両手で塞いでしまいたい衝動に駆られる。

だが、実際には指一本動かせないでいるうちに、少し笑っているような声でC・C・が呟く。

「おまえが傷付かないと約束できるなら、私は別に話してやってもいい」

「……………何も話す必要はないッ」

どうせおまえが傷付くような話など。

ルルーシュは自製の追いつかない指先で、腕の中の柔い身体を優しく抱きしめる。

必要としているだけだった。

大切に思っている相手のはずだった。

それなのに、精神と感情のバランスが今でも時折ひどく不安定で、守ってやりたい相手を傷つける。

少しのあいだルルーシュの好きに身を任せていたＣ・Ｃは軽く嘆息すると、今度は意識的にルルーシュの首筋をゆるゆる撫で始めた。

まるきり何かに脅えて荒くれる馬の背中を撫でて落ち着かせるようにして。

「ひよつとして、ナナリーに何かあったのか？」

今度はルルーシュの呼吸が止まった。

それを確認して、Ｃ・Ｃはふたたび深く息を吐き出す。

「別に、ナーバスにイラついているおまえの相手も負担ではないが、ちよつと女のヒステリーみたいだぞ？　話すつもりがあるなら、さつさと話せ」

ルルーシュは、グツタリ脱力しながらＣ・Ｃを押し離す。

「…………別に話すことなど何もない」

Ｃ・Ｃは、妙な余裕を見せて「ふふっ」と含み笑った。

「なら、勝手にパソコンを覗かせてもらうが構わない？」

ルルーシュは、口の中で小さく舌打ちした。

こんな場合には几帳面な性格が災いして、誰でも簡単に閲覧できる状態に資料が纏めてあるからだ。

もちろんセキュリティを考慮して何重にもパスワードを設定してあるが、Ｃ・Ｃは唯一それを知っていた。

しばらく不器用な睨み合いが続いたが、結局ルルーシュのほうが時間の無駄を嫌って渋々腰を上げると、パソコンを起動して、必要な操作を済ませた画面を黙ってＣ・Ｃに示した。

３０分ほど記事を読むのに時間を費やしていたＣ・Ｃは、顔を上げると最初から期待しない様子で訊ねる。

「私が行って、こっそり様子を覗いてくるぐらい構わないだろう？」

「論外だ」

「しかし、私は唯一公然と生きている」

「おまえの生死に関係なく、そこに俺の意思が絡んでいる時点でアウトだ」

「だからと言って」

「この件に関して、金輪際おまえの意見を聞くつもりはない。理由は前に話したとおりだ。こんな不毛な会話になるのがわかり切っていたから、おまえに話すのは嫌だったんだ。むやみに俺を追いつめるなっ」

ルルーシュが苛立たしげに顔を歪めながら視線を外すと、案の定、少し傷付いている様子のC・C。が寂しそうにポツリと呟く。

「たまに落ち込んだ時くらい素直に甘えるのも駄目なのか？ それじゃア、いったい何のために一緒に暮らしているんだ？ 前に私にそう言つて聞かせたのは、おまえのほうじゃなかったのか？」

C・C。の視線の先で、ルルーシュがグツと奥歯を食いしばる。だがそれ以上は、視線を返しもしなければ、口を開きもしない。そんなルルーシュをしばらく見つめていたC・C。は、黙ってパソコンを終了させると席を立つ。

「C・C。」

その背中を見送つて、もどかしげにルルーシュの言葉だけがC・C。の背中を追いかける。

だが今度はC・C。がそれを無視して、床の上に放置していたグラスを取り上げるとキッチンへ向つた。

リビングに一人取り残されたルルーシュは、苛立たしげに前髪をかき上げながら憤然と成り行きを持って余していたのだが、やがて低く唸るように息を吐き出すとC・C。の後を追いかけた。

「……」

C・C。はシンクの前に立ち、二人が使ったグラスを洗っていた。ルルーシュよりも、よっぽど冷静に落ち着いて見えるその後ろ姿。だが、ルルーシュの結わえてやった髪を既にほどいていた。

いつもはクセひとつないストレートの髪が、ゆるやかに名残りを残して波打っている。

たったそれだけで、ルルーシュはたしかに名前を呼ぶきっかけすら失って、不器用に黙り込んだままＣ・Ｃの隣りに肩を並べた。その姿が視界に入っても、Ｃ・Ｃは目線ひとつ動かそうとはしなかった。

いつもに比べてずいぶん神経質に洗って、すすいだグラスを、当然のように隣りに差し出す。

毎日繰り返している習慣だったから、ほとんど条件反射でルルーシュの身体も動いた。

受け取ったグラスを丁寧に布巾で拭いてゆく。

先に仕事を終えたＣ・Ｃは、蛇口をキュツと鳴らして水を止めると、やはり目線も向けずに残りのグラスを差し出した。

受け取る前にひとこと謝れば簡単に会話の糸口が掴めることくらいルルーシュにもわかっていたのだが、自分では間違っていると思っただけに、どうしても口を開く気になれなかった。

結局、一瞬見つめただけで黙ってグラスを受け取ると、Ｃ・Ｃがおもむろにフツと肩を揺らして笑った。

「あんまり腹が立ったから、グラスとカップと皿を一枚ずつ全部割ってやるうかと思ったが、さすがに大人げないから止めた。感謝しろ？」

要するに、ペアで集めている食器を、全部ペアでは無くしたかったと言うことらしい。

何も答えられないままにルルーシュが顔を顰めると、Ｃ・Ｃが真顔で問い掛けた。

「おまえは何かの義務に駆られて、私を愛しているのか？ だったら、そんな愛され方は私のほうから願い下げだ」

ルルーシュは、とっさに手の中のグラスを叩き割ってしまいたいのを懸命に堪える。

「どうしておまえはそう…、今まで俺が一度でもおまえを騙したことがあったのか？」

威圧的に訊ねるつもりはないのに、身長差でどうしても上から睨

み下ろすような姿になってしまう。

だが、それを正面から見返すC・Cの瞳には、物理的な事情を取っ払った迫力が存在していた。

「騙したじゃないか。私にはコードを継承している事実を隠していた。ジェレミアには話していたのにな」

「……ッだ……からっ……あれは……ッ！」

逆に、簡単に追いつめられてしまったのはルルーシュだ。

本気で死ぬつもりだったんだから仕方がないだろうとか何とか、憤りに言葉が口から先に出て行かない。

C・Cはしばらく冷静にそれを見つめ返していたのだが、やがてグラスを握り締めているルルーシュの手を強引に外させると、手の中からグラスを引き取った。

「私だつてアレを本気で騙された回数にカウントするつもりはないだが、どうしていまさら私に隠し事をする必要があるんだ？ そんなに私は頼りないのか？」

ルルーシュが握り締めていたせいで付着していた指紋を綺麗に拭いきり、二つのグラスを壁際のキャビネットに収納して、そのままC・Cはそこに背を凭せた。

「今でもまだナナリーを愛しているんだろう？」

その姿を茫然と目で追いかけていたルルーシュは、突然激しく息を吸い込んだ。

「愛してる？ それは何の冗談だッ？！ どうしたら俺がナナリーを忘れることができるんだッ？！」

一度火のついてしまった激情は、留まることなく勝手に口から先に飛び出してゆく。

「愛しているに決まっているだろうッ！！ だが、それでも、俺にしていることはあれで全部だッ！ あとは黙って見守ってやるしか方法がないだろうッ！ 余計な気を回さないでも万が一の場合には、おまえがうんざりするまでいくらでも醜態を晒してやるさッ！ それ以前に愛想を尽かされてはたまったものではないからな。今

のうちから出来る努力に励んで何が悪いんだッ？ おまえにそばにいて欲しいんだよッ！！ だからッ！！」

「……おまえ……っ」

茫然と絶句しているＣ・Ｃに気付いてハッとして、ルルーシュは憤然ときびすを返した。

羞恥と屈辱と後悔に顔を歪めながら唇を噛み締める。

こんなことを彼女に聞かせれば、結果は既に見えていた。

ルルーシュの視線の先に回り込むようにして、Ｃ・Ｃが迷わず歩を進めてくる。

「私はおまえが悲しむときの保険か？ そんなことに時間を費やすよりも、後悔するのがわかっていいるなら、今のうちにいくらでも私を利用すればいいだろう？」

ルルーシュは、自らに冷静になるよう言い聞かす。

彼女の世界は、俺を中心に回っているだけなのだから。

「いかにも俺が心配するようくならない問題が発生するたびに、おまえに伝言を頼んでナナリーを助けてもらうのか？ フツ、あり得ないな」

「しかし、おまえの気持ちはそれで慰められるのだろうか？」

「逆だよ。むしろ、おまえに嫉妬するのがオチだ。俺は決して逢ってはならないわけだからな」

「だからって、おまえ……後悔するのがわかっていいるのに」

俺のことが心配で、だから、どうにかして悲しみの原因を取り除きたいだけなのだ。

そうすることで結果的に、逆に俺を追いつめていることにも気付かず。

ルルーシュは、意識的に息を細く長く吐き出した。

逸らしていた視線をＣ・Ｃの目の上に据えると、その瞳に挑戦するような力を宿して鋭く微笑む。

「そんなことは百も承知で、俺はおまえと生きる道を選択したんだ。ナナリーだけじゃない、ほかの誰に何が起ころうとも、俺は断じて

見守る以外は何もしない。おまえも当然そのつもりで、俺に連れ添ってらんじゃなかったのか？」

婉曲に、『おまえのほうこそ俺を受け止める覚悟が出来てないだけじゃないのか？』と揶揄すると、半分は凶星のＣ・Ｃは、ルルーシュを見つめたまま悔しそうに顔を歪める。

ルルーシュがそれを思うのと同じような温度で、Ｃ・Ｃもルルーシュの幸福を望んでいるわけだから、いつまで経ってもそんな覚悟など固まらなくて当然なのだ。

そんな覚悟を固める以前に、すこしでも悲しみの原因を排除したいと願ってしまうから。

「出来るうちに必要な努力をしないのを愚か者と言うんだ」

「無茶を言うな、もうとつくに決めたことだ」

「人の意思など、生きていくうちにいくらでも変化するのが当然だろう！」

「だから、臨機応変に対応しているじゃないか？」

「どこがだッ？ そうは見えないから言っているッ！ 後悔するのは、おまえなんだぞッ？」

ルルーシュは、クスリと息を洩らして微笑むと、慈愛さえ浮かべた表情でやさしげにＣ・Ｃを見つめる。

「そのときは、煮るなり焼くなりおまえの好きに俺を慰めろ。せいぜい俺は悲嘆に暮れてやるから」

「この救いようのない頑固者がっ」

もどかしげに怒っている表情でそう言っ、ルルーシュの胸元にひたいをぶつけるように押し付けた。

妙な既視感に駆られたルルーシュは、これと同じ格好でゼロ・レクイエムの直前にＣ・Ｃが泣いていた姿を思い出す。

あのとときだつてルルーシュは、最後まで自分の意思を曲げずに走り切ったのだ。

そして、自分がいざ見守る側に立たされてみて初めて、Ｃ・Ｃが抱えていた苦しみ的一端を垣間見るような気持ちに駆られている。

今も昔も変わりなく、そんなルルーシュを見守る立場にあるC・
C・が、やがて我慢するのには慣れている落ち着いた声音で訊ねた。
「ルルーシュ……私のことが好きか？」

ルルーシュはいつになく支えの腕も伸ばさずに、淡々とその頭上
に答える。

「好きでもない女に、こんなことは頼まない」

「だったら、もっと気楽に過ごしていればいいだろう？ 私とはっ
くにおまえのものなんだから」

「さア、それはどうだかな、先のことなど誰にもわからない。単に
これは俺の気持ちの問題だ」

ルルーシュの胸元にひたいを押し付けたままC・C・は、「頑固
者め……」と繰り返した。

もう既にあきらめているような囁きで。

そして、迷いを断ち切るように短く吐息したと思ったら、両手で
グイッと引き剥がすようにしてルルーシュの身体を押し離れた。

「だからと言って、あんまり思い詰めすぎて、ある日突然迫って来
られても、当分は私のほうが困るんだ」

「はア？」

ルルーシュは、先に自分が言った言葉も忘れて、批難がましく眉
間に皺を刻み込む。

どちらかと言えばその件に関しては、今までC・C・のほうが肯
定的だったからだ。

C・C・は露骨に嫌そうな顔をして視線を外すと、赤くなるのを
我慢している顔で言う。

「妙な誤解をするな。おまえが相手なら、きっと幸せだろうと思っ
ている。だが、今でも充分おまえの相手は大変なんだ。私はつくづ
くナナリーを尊敬しているぞ」

ルルーシュは、盛大に苦虫を噛み潰している表情で低く唸るよう
にして問いかける。

「要するに、俺の愛し方が鬱陶しいと言いたいのか、おまえは？」

驚いている表情で振り向いたＣ・Ｃは、一瞬声もなくルルーシュを見つめて。

角砂糖が溶けてゆく時のように、ひどくじんわりと相好を崩した。「バカだな、その逆だ。おまえに愛される免疫がまだ私のほうに備わっていないから、つい持て余してしまっただけだ。おまえにどれくらい真剣に愛されているのか理解できないでいるうちに、むやみに突っ走って過ぎてしまうよりも、私はもっと大切におまえの気持ちを確かめながら愛されたい。だから、待って欲しいとお願いしているだけだ」

やわらかくて温かな両手が大切そうにルルーシュの頬を両側から抱きしめて。

ほんのり潤んでいるようなハチミツ色の瞳が、ルルーシュを慕わしげに見つめている。

ルルーシュは自分の顔が紅潮してゆくを感じたが、視線を外すことなど出来はしなかった。

その様子を面映そうに見つめていたＣ・Ｃが、「ふふっ」と可愛らしく小首を傾げて微笑んだ。

「どうした？ 顔が赤いぞ？」

「……うるさい」

今の今まで口論していたのも忘れた顔をして。

俺がどんな顔に弱いとか、すっかり把握してやがる。

完全に手玉に取られていることに気付いたルルーシュが拗ねた口調でそっけなく呟くと、Ｃ・Ｃは温和な微笑を浮かべながら、「海に泳ぎに行かないか？」と誘った。

気持ちの切り替えがまだまったく追いついていないルルーシュは、軽く嘆息しながら横目で窓の外の様子を確認した。

明るい陽射し。けれども、どこか勢いを失くしているそれ。

夏の間は日没が遅くてうっかりすると忘れがちだが、もうずいぶん遅い時間であるのは確実なのだ。

だから夕飯の準備を理由に断ると、たちまちＣ・Ｃが不服そう

に唇の先を尖らせた。

「おまえな、私にはそれらしく協力しろとかえらそうに言うくせに、自分はまだ一度も私をデートに誘ったこともないじゃないか」

「デートって……」

毎日コレだけ長い時間一緒に過ごして、たまの休日にもわざわざ一緒に買い物に出かけたりもしているのに。とルルーシュが考えていると、見透かした様子のＣ・Ｃがさらに食い下がる。

「いいから、たまには私に付き合え。今から日暮れまで一緒に泳いで、シャワーを浴びて着替えたら、夕食がてらに町のパブまで私をエスコート。……別に難しいことではないだろう？」

どこことなく気遣いを覗かせる言い様に、要するに、俺に憂さ晴らしをさせたいのだなとルルーシュは察して、しみじみ腕を組みながら嘆息した。

「わかった。だが、おまえ水着はどうするんだ？ 持っていないだろう？」

「……う、べ、別に服のまま泳げばいい。どうせプライベート・ビーチみたいなものなんだ」

「いや、ちよつと待て」

ルルーシュはこれ以上もなく真剣に、Ｃ・Ｃの胸の辺りを凝視した。

「かつて私は、これほどまでの屈辱を味わった覚えはないッ！」

まるで尻尾を踏まれていきり立つ猫の様子で憤慨するＣ・Ｃに、ルルーシュは呆れ口調でボソリと呟いた。

「別にそこまで怒る必要はないだろう？」

目で測ってみた感じで、おそらく代用が利くはずだと考えたルルーシュは、持っている中でも一番大きなハンカチを二枚用意した。それを三角形に折りたたみ、底辺の一边を横に並べて結んで、もう一边を背中側で結んだ。

残っている上の一边にリボンを結んで、背中側に回して縫い付ければ簡単なビキニの完成だ。

下はさすがにハンカチで代用するにはきわど過ぎるので、いたって普通にショートパンツだ。

C・Cがこんなに怒っているのは、「たかがハンカチで、私の胸が収まると思うのか？」と高く息巻いて、実際に試してみたら無事に収まってしまったからである。

ギリギリと歯ぎしりを続けているC・Cの背面に回って、チクチクと針仕事を続けているルルーシュは、淡々とした様子で訊ねる。「ひょっとしてコンプレックスか？」

C・Cは、視線で射殺しかねない勢いで背後のルルーシュを睨め付ける。

「違うッ！ 成長途上で止まってしまったこの身体がもどかしいだけだッ！」

コードさえ継承していなければ、私の身体ももつとッ！ と悔しげに呟いてみせるのに、成長を続けていたからと言って、今以上に大きくなった保証はないだろうと、ルルーシュはこっそり胸の内だけで呟きながら針仕事を終わらせると、C・Cが怒ってほどいてしまった髪をふたたびシニヨンに結び直す。

「別に大きければ良いというものでもないと思うが？」

「おまえに微妙な女心がわかってたまるかッ！」

「そうか？ 俺はけっこう今でも好きだがな」

「……………え？」

満面に驚愕を張り付かせながら振り向いたC・Cは、真面目な表情でそれを迎えたルルーシュと目が合うと一瞬で目元をほんのり

桜色に上気させた。

「髪が結えないから、もうしばらくあつちを向いてろ」

「う、…うん」

言えば驚くほど従順に従って、軽く俯き加減に全身を桜色に上気させている。

なんでコイツは時々こんなに可愛くなるんだと、釣られて赤くなってしまうのを感じながら、ルルーシュはそそくさと言いつつ割り込ませる。

「別にいやらしい意味ではなくってだな、単純に綺麗だと思うから…」

言いさして、そういえばさっきの質問に対する答えがまだだったことを思い出す。

ほとんど裸のような格好でいるせいで、感情の波に支配されている色の移り変わりを全部余さず晒しているC・Cの背中、ルルーシュの言葉に敏感に反応して、今はほのかな薔薇色へと進化を果たしている。

元の色が白いから、赤くなると余計に目立ってしまうんだなと感心したように思いながら、いつもこんなふうならわかりやすくていいのにと、こっそり溜息を噛み殺す。

子供のように小さな足の裏の形とか、しなやかに反った背骨のしなり具合とか。庭から射し込む天然光で透かして見ると、普段の印象よりも一段と女性的なしとやかさが際立っているような感じがして。

その輪郭を金色に光らせているうぶげが、なんだかやっぱり猫の被毛を思わせて、いかにも触れてみた感じが柔らかそう。そういえば、舐めてみた感じも結構悪くなかったなと考えているうちに、手元の留守になっていたのに気づいたルルーシュは、忙しく数度まばたくと、何事もなかった様子で仕事を再開させた。

円形に巻き付け終えたシニョンの隠し部分に毛先を折り込んで、最後は髪ゴムで仕上げた。

本当はヘアピンを使ってやればもつと綺麗に仕上げられるのだが、今から海水に浸かるわけだから遠慮したわけだ。

仕上げの済んだ髪の手を緩慢な動きで撫でながら、ルルーシュは話を続ける。

「ずいぶん前に、おまえが男でも契約を交わしたかと俺に訊ねただろう？　覚えてるか？」

「え、……あ、いや……どうだったかな？」

しかしC・Cは、なぜだかまったく頭の回ってない様子で。

何をそんなに緊張してるんだと呆れたルルーシュは、C・Cの肩に手を回すと自分の胸元に強引に抱き寄せた。そして、自分はさつさとC・Cの肩の上に顎の先を乗せてしまう。

白磁の頬を鮮やかな薔薇色に染めながらC・Cは憤然と息巻いた。

「おまえはもつと女の扱い方を勉強しろッ。どうしてそういちいち乱暴なんだ？」

「充分優しくしてるじゃないか」

言いながら、C・Cの脇の下から腕を差し込んで、組み合わせた両手を臍の上辺りで落ち着かせる。

さつき服越しに抱いたときにも感じたことだが、本当に細いなと感心した。

その付近は肋骨で守られていないから余計だ。

なんだかうっかり簡単に壊してしまいそうな気がして、意識的に手指の力を緩める。

「前のときは自分でも何と答えたか忘れてしまったが、今の俺なら確実に、おまえが男でも契約を交わしていたんじゃないかと思う」

まだ若干緊張を残しているC・Cは、クツと喉の奥で小さく吹き出した。

「前のときも同じ答えだったぞ？」

「そうだったか？」

「ああ、『今でも充分男みたいだから、別にどっちでも』とかぬか

すから、遠慮なく殴ってやったんだ」

ルルーシュは、思わず目を瞑って回想する。

俺の記憶が正しければ、俺は当時皇帝だったはずだが。

「おまえは……。だから俺の記憶が飛んでるんじゃないのか？」

「うるさい。殴られるようなことを言うおまえが悪い」

クスクスと愉しげに笑う横隔膜の動き具合を、組んだ手のひら越しに感じる。

その感じが、なんだかたまらなくすぐつたいように感じて、ルルーシュは意味もなく手指を組み直した。

それでいて、口調だけは淡々と続ける。

「別には大きく外してないだろう？ 見た目はどっちでも、おまえが俺のそばに存在している事実だけが重要なんだからな。多少はまア付き合い方は変わっただろうが、どのみち中身がおまえなら同じだ」

C・Cは肩の上にルルーシュを乗せたまま、クツクツと小刻みに身体を揺らして笑った。

「性別を自在に操れないのが残念だなア。今なら喜んで男になってやるんだが」

「どうして？」

単純に疑問に感じて訊ねると、C・Cは答える前に盛大に吹き出した。

「どつ、どつちでも構わないなら、おまえは男の私にもキスして、こつ、こんなふうにくっ付くんだろうっ？」

気色の悪いことを言うなど、ルルーシュは赤くなりながら顔を顰めた。

そんなものは今の性別だからこそ味わえている限定オプシオンだ。そもそも、俺が言いたいことの本質はそこじゃないだろう。

「中身が重要だと言ってるんだ。わかってるクセに、はぐらかすな」
憚然と言って聞かせるが、どうやら笑いのツボに嵌ってしまった様子で。

しばらく笑い続けていたC・Cは、やがてゆるりと流れるような仕草で視線を外した。

溜息を噛み殺したのが、触れている手のひら越しに伝わる。

「……あんまり惚れた欲目が強すぎると、そのうち熱が冷めた以降が怖いような気もするが」

ルルーシュはムツとしながら、屈めていた身体を起こした。

「俺の気持ちを疑うのか？」

「そうではないが……。さっきおまえも似たようなことを言っていただろう？」

「俺の場合は、思い当たる節があるからだ」

「私の場合だって同じさ。おまえがあんまり嬉しがらせを言うてるから、ために一度自惚れてみようにも、おまえにここまで大切に扱われるほど自分が出来た人間だとは思えない。だから、どこか好きな部分があるなら、せいぜいその部分を大切に磨いてやるうかと考えていたんだがな」

ルルーシュは、しみじみ溜息を吐き出した。

「おまえ、本当にそういうところは相変わらずだな。俺が一度言うたくらいでは口クに耳を貸しもしない。俺が好きだと言ってるんだから、いいじゃないかそれで。自惚れたいなら好きなだけやってみればいいだろう」

C・Cは、声音だけで微笑む。

「さて、それはどうか？ 今のおまえは私以外に相手をする女がないからな。100年も経ったら嫌でも考えは変わるぞ？」

「それは、おまえの経験か？」

「単に一般知識として、男は飽きる動物であることを知っているだけだ」

「なら、女は何でも型に嵌めたがる動物か？ 馬鹿馬鹿しい、おまえが100年そこそこで底を明かすような簡単な女か？ 100年後には、むしろ俺の弱みを洗いざらい握られている予想なら簡単に出来るがな」

その言い様が面白かったのだろう。

ルルーシュの期待したとおりクスクスと笑い出してくれたのだが、相手はやっぱりＣ・Ｃだった。

「まあな、たしかに私はヴィンテージものだ。そこらの女より奥は深いぞ？」

「おまえは……」

自惚れてみせるどころか、基本的にＣ・Ｃの本質は悲観論者だ。ベシムストその長い人生を死に焦がれ、愛されることに焦がれながら彷徨い続けてきたその結果。

けれども、俺と共に生きると誓って、そうした生き方には終わりを告げたはずではなかったのか？

ルルーシュは、性懲りもなく自分を卑下する女の唇に唇を重ねながら、いったいどうすれば気持ち伝えられるのかと不満に思う。

あれだけの醜態を晒して再三必要だと説いて聞かせているのに、どうしていまさら俺が他所の女などに目移りすると考えられるのか？

今まで俺たちが重ねてきた時間を上回るような存在に出会う確率など、俺たち以外のコード保持者に遭遇する程度にはきわめて稀だ。もちろん、先のことなど誰にもわからない。

だからルルーシュも、絶対ないとは断言しない。

だが、それと同じ危険性はもちろんルルーシュの側にも言えることで、油断していると横からあっさり別の男にＣ・Ｃを奪われる可能性も皆無ではないのだ。

それでなくても最近富に、男としての底の浅さを実感させられているだけに、むしろ確率的にはそっちのほうがずっと高いような気がして。普段はこれでもセーブしているつもりの独占欲が、メラメラッと激しく火を吹きながら身の内で燃え広がるのをルルーシュは感じる。

と同時に、何やら切羽詰った様子のＣ・Ｃの拳に、背中をドンドンと叩かれているのに気付いてハッと我を取り戻した。

「……バツ、バカかおまえはッ！……言った端から、前言を撤回

してどうするッ？」

ちようど良い場所が見当たらなかったから、ふたたび戻っていたリビングの床の上。

そんな場所で、ルルーシュの身体の下に組み敷かれている状態で、明らかに息を乱して真っ赤になっているＣ・Ｃの姿を見つけた。

「すッ、すまないッ！」

慌てて助けの腕を伸ばして引き起こす。

その際、Ｃ・Ｃは自分で胸元を隠していたのだが、しっかり結んでいたはずの結び目が既に解かれていたのに気付いて、ドクンツと大きく心臓が高鳴った。

おれか？

それ以外は考えられない気まずさに、思わず逃げるようにして背中を向けていた。

ルルーシュの息も、気がつけば少し上がっていた。

自覚のない行動に慌てさせられるのは、今日だけでもう二度目だ。

しかも、たった数時間のうちに。

我ながら、自分が信じられないショックの激しさに、背中を向けたまま茫然と言葉を失っていたのだが、着衣の乱れを直したＣ・Ｃがふいにルルーシュの肩に手を乗せると、顎の裏側に音を立てないキスをした。

「ほら、泳ぎに行くぞ？ 日が暮れてしまう」

仕方のない奴だなと温容に受け流されているのを感じて。

こんなことくらいでまた胸に痛みを感じている自分に苛立ちを募らせながら、ルルーシュは無然とＣ・Ｃの促しに従った。

出かける前にのんびりし過ぎていたおかげで、日没までたった30分程度しか遊ぶことは出来なかったが、その時間を精一杯有効に活用してC・C・は活動的に泳ぎ、ルルーシュはもっぱら遠浅の場所です潜って海の幸を採取するのに勤しんだ。

やがて水平線が赤く染まり始めた頃、家に戻って交代でシャワーを浴びて、出かける用意を整えた。

その際、ルルーシュがC・C・のために用意したのは、外見的な少女性が惹き立つ可憐なワンピース。

そして、自分がかつちりネクタイまで締めて、ジャケット着用で完璧に外見年齢25の男を演出した。

見た目だけでもC・C・の優位に立ちたいと意識しているのは自覚していた。

どうやらC・C・もそれに気付いている様子だったが、口に出しては何も触れずに、むしろ意識的に外見年齢15の少女を満喫して、実にそれらしく無邪気によく食べ、よく飲んだ。

「おい、おまえっ、少しは遠慮しろっ」

3杯目のオーダーから、むしろルルーシュのほう慌てて止めに入ると、C・C・はニコニコと春の女神のような微笑を浮かべて可愛く甘えた。

「だったら、おまえが注文しろ。私は横からちよっただけ分けてもらうから」

傍目には慣れないお酒に酔っ払って、可愛いワガママを言っているようにしか見えなかったが、「ルルーシュ」と呼びかけなかった時点で完全にシラフだとルルーシュにはわかっていた。

「おまえは……一杯だけだからな？」

「ケチケチするな」

そんなやり取りが4、5回ほど続いたか。

曖昧なのは、途中で馬鹿馬鹿しくなってしまったルルーシュが数えるのを止めにしてしまったからだ。

最後はデザートまでしつかり味わって、演技でなく上機嫌のC・C.を自転車で連れ帰るのにルルーシュはかなり苦心させられた。

「おいっ、あんまり……暴れるなっ、……重い……ッ」

「ふふふっ、が・ん・ば・れっ、ルルーシユうっ！」

「大声で歌うなッ！！ 踊るなッッ！！」

這う這うの体で家に帰り着き、騒いだせいで本気で酔っ払ってしまったC・C.をベッドの上まで運び終えたときには、ルルーシユのほうは見ても無残な有様だった。

舗装も口々にされていない深夜の野道を、酔っ払いを乗せて30分も自転車を走らせたのだ。

慣れない運動に、途中でネクタイも外して、ジャケットも脱いでしまったが、それでもワイシャツは汗でべったり濡れていて、自分だけシャワーを浴び直してから寝室に戻った。

その頃とくにC・C.は眠り込んでいたのだが、ふと気付いてみれば、パブで過ごした小一時間のうちにすっかり酒と煙草の臭いの染み付いてしまっているワンピースを着たままだったので、ルルーシユは頭痛を感じながらそれを脱がせて、いつもは着ないパジャマを無理やり着させた。

起きてから「暑苦しい」だのと絶対文句を言ってみせるのだろうが、知ったことか。

ルルーシユだって今夜は少なからず飲んでいるのである。

「……都合の良いところだけ、俺を信用しやがって」

思わずそんな恨み言を呟きつつ、いつもの習慣でC・C.を胸元に抱き込みながら眠りの体勢を整えた。

酔っている人間独特の、すこし火照っているような甘い体温。

それを認識した瞬間に、触れている手のひらが得も言われぬ歓喜に痺れる。

普段は忘れていられるナナリーの喪失感。

それは、存在自体の喪失よりも、より深いところでルルーシュの癒えない孤独を刺激し続けている。

その実感に臆して、C・C・を失う可能性に脅えを感じているだけなのだ。

自分では何の力になってやることも出来ずに、ただ見守るだけ。その苦しさくらい、既に幾通りもシミュレーションを重ねていたはずだった。

しかし、実際そうした場合に直面してみても初めて、覚悟は単に机上の空論であったことを思い知らされる。

たった一年足らずで、早くも平和に慣れ始めた市民団体が、実兄に対する徹底した批難姿勢を継続させているナナリーのバッシングを始めていた。

言ってみれば、世間の風当たりがきつくなっている程度のことだったから、放っておいてもそのうちシュナイゼルが機転を利かして穏便に手を打ってみせることだろう。

けれども、他人が手を打つまで指をくわえて待っているしかない状況が齒がゆくて我慢ならないのだ。

そんな自分の覚悟の甘さ加減に、ルルーシュは眩暈するような憤りを感じる。

こんなことでは、ナナリーの身に取り返しのでかない災厄が迫った場合には、いったいどうやって現実を受け止めるつもりでいるのだろうか？

七転八倒の苦しみに責め苛まれるに決まっている。

だからと言って、そんな自分を慰めてもらいたい一心でC・C・を必要としているわけではない。

そんな時限的な問題ではなく彼女には、この先自分がどんなに呆れた醜態を晒しても、決して気持ちの醒めないくらいに、本気で愛して欲しいと願っているだけだ。

何があっても変わらない愛情を、手に入れたいと渴望しているだ

けだった。

そのためには、自分のほうから愛することしか、ルルーシュは願いを叶える手段を知らない。

だから毎日せつせと惜しみなく愛情を注ぎ続けているというにも関わらず。

くだらない自嘲に費やしている時間があつたら、もっと本気で俺を見つめて、愛してみるよとルルーシュは憤りに酷似した不満を抱える。

「それとも、おまえ……やっぱり腹の底では、俺の青二オツぷりを眺めて愉しんでいるんだろう？」

深酒の影響で、正体を失くしてグッスリ眠り込んでいるわけだから、簡単に目覚めるはずもない。

C・Cは、すっかり安心しきった顔をして、ルルーシュの左胸に頬を埋めるようにして眠っていた。

先日も、その場所に顔を埋めながら泣いていた記憶はまだ新しく、今までももさんざん泣かせてしまったわけだから、これ以上を求めるのは欲張りすぎだと自覚している。

そもそも、最初から見返りを期待した状態で『愛している』なんて。

そんなもの、本当の愛し方ではあり得ないのを知っている。

どうしてナナリーに向けていたように、自分のほうから与えるばかりの愛し方では満足してられないのだろう？

「……………」

魅せられたように安らかな寝顔を眺めているうちに、ふいにキスの欲求に従いかけたルルーシュは、唇が触れる寸前でその唇のやわらかさを思い出し。

思わずゾクリと頭の芯が痺れた。

触れたが最後、なんだか自力では止められないような感じがして、

とつさに抱き寄せたＣ・Ｃの頭頂部に唇を強く押し付けた。

「…………おまえ…………本当に、…覚えてるよ…」

自分でも、もう何を言っているのかわからない。

だが本当に、そんなふうな心境だったのだ。

一夜明けてルルーシュは、予想通り「暑苦しいものを勝手に着せるなッ！」と文句を言うＣ・Ｃの尻を蹴り飛ばす勢いで仕事先に送り出し、必要な家事と雑用を済ませた後で、隣りの島まで買い物に出かけた。

フェリーで往復３時間の道のりは、今のルルーシュにはちよつとした小旅行だったが、時間を要しただけの収穫は手に入れられた。夕方、帰宅するなり、例の如くにリビングの床の上にへばって「暑いィ」を連呼するＣ・Ｃの面前に、ルルーシュはリボンで丁寧にラッピングされた紙包みをポイと差し出した。

「…………なに？」

うつろな目で問うＣ・Ｃには目線も向けずに、ルルーシュはそっけなく呟く。

「それを着て、涼しくなるまで向かいの海に浮かんで来い。準備運動を忘れるなよ？」

Ｃ・Ｃは言われた意味が理解できずに盛大に疑問符を浮かべた顔つきをしていたが、気だるそうに身体を起こすとバリバリ音を立てながら包装紙を破き始める。

ルルーシュは、なんだか見ていられない気分で、そそくさとキッチンに逃げ出した。

「おおっ！！ ルルーシュッツ！！」

しばらくして歓声が聞こえたから、思わず赤くなって頭を抱えた。時々コイツのテンションにはついていけないと、しみじみ嘆息しながら冷静に声を掛ける。

「騒いでないで、さっさと着て」

「うん、着てみた」

声にギョツとして振り向けば、キッチンのドアのところに既に水着を着用しているＣ・Ｃ．が立っていて。

前日にルルーシュが作ったビキニも悪くは無かったが、やはり既製品の完成度には遠く及ばない。

胸元と腰骨付近にフリルの装飾をあしらった純白のビキニは、ルルーシュの予想を遥かに超越して、恐ろしくＣ・Ｃ．に似合っていた。

ルルーシュは、止めようもなく顔が紅潮してゆくのを感じながら、さりげなく視線を外した。

「……その、胸の傷は気にならないか？」

Ｃ・Ｃ．は、屈託などどこか別の世界に置き忘れてしまったような表情で微笑む。

「そんなのいまさらだ。じゃア、行つて来る！」

パタパタとさっそく元気よく駆けて行ってしまった背中を見送りながら、『さっきまでへばっていたのはどのどいつだ』など感想を洩らしてしまうが、もちろん照れ隠しだ。

ルルーシュは、勢い余って魂までうつかり吐き出してしまいそうなほどの溜息を大きく吐き出して、気分を切り替えると夕食の準備を始めた。

小一時間ほどで戻ってきて、風呂に入って装いを改めたＣ・Ｃ．は、見ているほうが恥ずかしくなってしまうほどに笑顔の大盤振る舞いだった。

そんなＣ・Ｃ．を正面に眺めながら実に落ち着かない気分夕食を済ませて、ルルーシュもやがて風呂を済ませると、一足先に寝室

で寛いでいたC・C・の面前に、また別な小箱をポイと差し出した。水着の前例があったからか、C・C・は瞬間的に喜びの色を弾けさせたが、今度は包装紙を開封すると少々微妙な表情でルルーシュを見つめた。

「うれしいが……どうしたんだ、突然？」

ルルーシュは、濡れた髪をタオルでガシガシ拭いながらぶっきらぼうに答える。

「別に大した意味は無い」

新たに贈ったプレゼントは、オーデトワレ。

簡単な話が香水だ。

地中海をイメージして作られたというその香りは、マリン系フレグランスの代表作で。

トップからミドルにかけては、スイートピーやジャスミン、フリジアなどの清廉な花の香りに、マスカットの甘酸っぱい香りがブレンドされ、地中海の青い海のように時に奔放で、穏やかなひとときを演出してくれる。物らしい。

香り物なのだから、もちろん香りの好みを優先的に選んだつもりだったが、ルルーシュが最終的にそれを選んだ決定打はまた別な部分に存在していた。

少しのあいだ不思議そうな表情で香りを確かめていたC・C・は、ふいに何かを得心した様子で顔を上げるとニッコリうれしそうに微笑んだ。

「ふふっ、要するに、これはマーキングだな？」

ルルーシュは、ぴたりと動きを止めると、タオルの影から嫌そうにC・C・を見つめた。

「……何をどう考えたら、その品の無い結論にたどり着くんだったって、これメンズ用だろう？ 直訳したら『ジオの水』。ジオは作った人間の愛称で、しかも男だ」

相変わらず妙なところで世俗に通じている女だと恨み言を呟きながら、ルルーシュは皮肉たつぷりに鼻を鳴らした。

「フンツ、売り場の人間の話では、女性客の使用率も高いという話だったがな。気に入らなかったのか？」

C・C・は、それこそ百花繚乱の表情で微笑んだ。

「いいや？ 飯にも接客業に従事する身分で汗臭いのもアレだからな。ありがたく貰っておくさ」

言つて、ニコニコ顔でルルーシュの至近に歩み寄り、何も言わずにルルーシュの胸元にシュツと香水を吹きかけたと思ったら、自分はその胸元にギュウウーッと抱きついた。

ルルーシュのシャツ一枚の格好で。

「な……にをしているんだおまえは？」

思わず棒読みで問うルルーシュの胸元に、ニコニコ顔で頬を埋めたままC・C・が答える。

「ん？ どうせなら一緒に使ったほうがうれしいじゃないか」

言つて、なんとも幸福そうに笑つて、なおさら胸元に頬をスリスリとすり寄せて見せるのだ。

くどいようだが、ルルーシュのシャツ一枚の格好で。

たしかに笑顔の約束を叶えてやると言つたのも自分だし、幸福にしてやると誓つたのも自分だ。

何かにつけて甘えろと言つてきたのも自分だし、すこしはそれらしく協力しろとまで言つたのは自分だが。

だがしかし、よりにもよつてこの現状に。

ひよつとして俺はまた果てしなく間違つた方向に墓穴を掘り進めてしまったのか？ とルルーシュは、ほんのり先行きに不安を感じながら、乾いた笑みを洩らした。

番外? : クワイエット・ナイツ

「C・C、時間だぞ? 起きろ」

「……んう……」

「ほら、唸ってないで。朝食を食いつばぐれても構わないのか?」

「……ベッドで食べる……ここまで運んで来い」

「月曜の朝から甘えるな。ほら、いいから起きろ。こっちもいい加減空腹なんだからな、世話を焼かせるな」

「……むう……仕方のない男だな……」

「どっちが。……ほら」

「ん、……おはよう、ルルーシュ」

毎朝当たり前のように目覚めのキスで起こされて、朝夕には必ず食事の席を同じにする。

平日には一緒に居られる時間が限られているけれど、それでも家に帰れば必ず顔を見ていられることの安心感。

最初の出会いから指折り数えて、もうずいぶんと長い時間を一緒に過ごしているけれど、一向に飽きない相手もいるものだなと他人事のように感心してしまう。

もちろんその時間のうちの大半が、浮ついた気分でいられる状況とはまったく無縁のものだった。

けれども、そうした時間の果てに今の時間を過ごしている自分は、単純に認めてしまうなら、これ以上もなく幸福ではないのだろうか?

何か欲しいものを言ってみると言われても、とっさには何も思い浮かばないような日々。

そんな私にルルーシュは、「本当に欲の浅い女だな」と物足りな

さそうな顔をしてみせるけど、ただでさえ構いたがりのおまえに四六時中愛されるこっちの身にもなってみると、言えるものなら言うてしまいたい。

あんまり愛されすぎていて、離れていても愛されている感覚を、肌の上に纏っているような面映さ。

「もちろん初めのうちはネエ、茶飲み話のついでに昔話をするのが愉しくってネエ。でも最近は、幸せそうなアンタの顔を眺めるのが嬉しいのさ」

バイト先のカフェに足繁く通ってきている老婦人は、いつもそんなふうな感想を洩らしては、対処に困ってしまう私の顔を羞恥の色に染めさせる。

あんまり当たり前の顔をして言われるのが恥ずかしくて、迂闊にそれを否定しようものなら、

「今のアンタが幸福でないなら、世も末だよ！」

と周り中から一斉に反撃されてしまうので、なおさら恥ずかしいといったらない。

そんなには態度でノロケているのだろうかと赤面しながら鏡を覗けば、そこには何の屈託もなく幸福そうに微笑む少女の姿を見つけてしまつて。『ものの見事に笑顔の約束は叶えられてしまったなア』と意味もなく羞恥に頬を染めながら、ルルーシュの見事な手腕に思わず拍手を送りたいような気分を誘われる。

たった一年足らずのあいだに。

離れていた期間を含めても、出会ってからまだわずかに数年だ。

それなのに、それまで過ごしてきた数百年をすっかり過去に置き去りにして、今まで自分が焦がれていた新しい人生を着実に歩まされてしまっている。

ルルーシュは、「おまえが自力で幸福を求める気になったんだ」と、あくまで私の主体性を支持してくれているけれど、果てること

のない人生の途上で迷子になっていた私を、強引にも正しい道に連れ戻して背中を押してくれたのは他ならぬルルーシュのほうだった。ルルーシュとの出会いがあったから、今の私は幸福な人生を歩むことができる。

「まア、なんだな。贅沢な話だが、こうも毎日海の幸が続くとな」
月日の巡るのは早いもので、気がついてみれば七月も下旬。

周り中を海に囲まれている土地柄、年中休みなく潮風が吹き抜けているおかげで湿気に悩まされることは予想外に少なかったが、日照時間が長いものだから日増しに最高気温は更新を続けていて。そんな空の下30分も自転車を転がせば、それだけでも簡単に私の身体は干からびる。

ただでさえ、ここ最近は何十年もアクティブとは無縁の生活を送り続けているのである。

そんな私を見かねたルルーシュが、突然水着をプレゼントしてくれたのはまだ一週間前のことだった。

あんまり嬉しかったものだから、私は毎日欠かさず小一時間は海で泳いで遊んでいる。

その間にもせっせと夕食作りに余念がない男のために、せめて海の幸を土産に収穫して帰るのが習慣になっていたのだが、さすがに一週間も同じ種類が続いてしまうと手持ちのレシピも出尽くしてしまった様子で。目の前で元気にウニウニと蠢いている山盛りのウニや力キを眺めながら、ルルーシュが困ったふうに嘆息した。

私は、明日からは別の種類にしようと反省しながら、飄々とした

様子で返す。

「新鮮なんだから、そのままでも充分美味だろう？」

言うより先にナイフ一本で手早く捌いて、軽く塩水で洗っただけのウニとカキをそのまま氷の上に並べると、床下のワインセラーから鼻歌まじりに白ワインを取り出した。

そんな私を眺めながら、しみじみ感心している様子のルルーシュが皮肉たつぷりに感想を洩らした。

「おまえがこんなに酒飲みだったとは知らなかったぞ」

「いいじゃないか、家で飲むのが一番美味しいんだ」

あんまり飲み過ぎるとたちまちコードが異常と判断して一瞬で分解してしまうが、適量を守っているかぎり、ほろ酔い加減を愉しんでいられる。

だから以前から飲酒はけっこう嫌いでないのだが、今までは自力で身を守る必要があったので、なかなか愉しむ機会に恵まれていなかったただけだ。

けれども今は、いざとなったらルルーシュが守ってくれる。

その安心感に甘えているだけの私に、気付いているのか、いないのか。

最低でもワインのストックは切らさずに用意しておいてくれるのは、むしろルルーシュのほうなのである。

やがて私がポンツと小気味の良い音を鳴らしてコルクを外して、「たまには付き合わないか？」と水を向けると、ルルーシュはわざとらしいクールさで、「仕方がない奴だな」とそれに応じた。

最近すっかり意識的な寛容で女を甘やかす愉悦に目覚めてしまっているのを知っている。

そんな態度に出くわすたびに私のほうこそ、『一人前に成長したものだな』とこそばゆさを感じてしまうが。

もちろん私は、そんなルルーシュに甘やかされるのが大好きだ。

だが、割合で言い表すならば、果たしてそれもどうだろう？

毎日当たり前のように好きな相手とひとつベッドで眠って、目覚めて、食事の席を同じにする。

甘やかな語らいこそ皆無に等しかったが、それでも気が向いたときには、どちらからともなく自然な欲求に身を任せて唇を重ねる。愛されている実感を、絶え間なく肌身で実感してられる日々。今の日々が幸福であるから余計に、今まで一度も感じる必要のなかった悔恨を私が持て余し始めている事実には、果たしてルルーシュは気付いているのだろうか？

毎日当たり前のように繰り返されている幸福のかたわらで。

ざわわ、ざわわと絶え間なく鳴る風の音。

どうやら限界まで伸びてしまったらしい緑の牧草が、まるきり水中にたゆたう海草のように見渡すかぎり一面にたなびく。

あいにく月の姿は見かけなかったが、代わりに満天に輝く星の下、ほろ酔い加減で食後の散歩を愉しんでいた私は、裏庭まで戻ってきたところで、ルルーシュが家の中から私を呼んでいるのに気付いた。夜のあいだも休みなく航海を続けている大型船に島の所在を知らせるために海上にポツリと灯台が設けられている。

一定間隔で回転する光線がそこから黒光りする波間を撫でるように照射しているが、肝心の陸地のほうには街灯ひとつ見当たらない。漆黒の夜空を背景に、ハチミツをミルクで溶かしたような甘い光が、小さな我が家を取り巻くようにあふれ出している。

慣れてしまえば本当になんでもないことではあるけれど、帰る場所を手に入れられている幸福感を、これ以上もなく味わわせてくれる無上のひととき。

「どうかしたのか？ ルルーシュ」

そうした時間のロマンティックな過ごし方を一向に解する余裕のないルルーシュは、いつもの習慣で食後に一服するついでにパソコンで家計簿を付けていたのだが、私が散歩をしている間に一風呂浴びていたのだろう。パジャマ姿で濡れ髪をタオルでかき回しながら、無言で私をリビングに手招いた。

ナナリーに関する一件でルルーシュとひと悶着起こしたのは、まだほんの一週間前のことだった。

結果的に特に案じる必要もなく、翌日にはシュナイゼルが首尾よく手を回していたので、思わずホッと胸を撫で下ろしていたのだが、ひよつとしてまた良からぬニュースでも見つけたのだろうかと私を不安にさせてくれた張本人は、何食わぬ様子でソファの端に腰を下ろすと、真顔で自分の膝を叩きながら「ここに寝転べ」と促した。「断る」

そういえば食事の際にもそれを指摘されていたのを思い出し、私はにわかに頭痛を覚えた。

どうやら耳抜きが不十分だったようで、海から上がって以来、耳の奥に少しだけ水の溜まっている感じが不快だった。

しかし、そんなものは体温で温もれば自然に解消されるのだからと、そのときにもハツキリ断っていたはずなのに。妙なところで頑固な男は、やっぱり頑固に眉をひそめてみせるのだ。

「何を照れているんだ？ 膝枕ぐらい別に初めてでもないだろう？」

この童貞がッ。

私は辛うじて赤くなるのを我慢しながら、胸の内だけで罵った。本当にここ最近のルルーシュは、とにかくタチが悪いのだ。

構いたがりの男だからとこっちが油断して身を任せれば、平気で私を慌てさせる羽目を外してみせるクセに、自分では一向にそうなる雰囲気を理解していない。

むしろ私を一方的に羞恥に追い込んで、私の反応に無意識のうちにも誘われて、勝手な行動を起こしてしまう自分自身に慌てている。よっぽどそうなる原因をわかりやすく説明してやろうかと思ったが、どうせ口で言ったところで頑固な男は納得すらないのだ。

「いいから、さっさとしろ」

私が葛藤している最中にも苛立たしげに急かされて、最終的に困るのはおまえのほうなんだからなと、私はほとんどヤケクソ気分でルルーシュの促しに従った。

ルルーシュの膝を枕に部屋を眺める格好で無造作にソファに身を投げ出して、支えの手をルルーシュの膝頭のすこし上辺りに乗せさせる。

あんまり私が渋ってみせるものだから、どうやらルルーシュも内心では呆れてでもいるのだろう。触れている肌伝いに溜息を噛み殺している気配が如実に伝わった。

「そのまましばらく動くなよ？」

それでも口調だけは淡々といつも調子で呟いて、湯上りでいつもより熱く湿っている指先がそっと耳朵の輪郭を掴んだ。

「……ッ」

おそらくこれもナナリーを相手にやり慣れているのだろう。ひどく手馴れた様子で迷いなく綿棒が耳朵の奥に入ってきて、やわらかな感触がクルクルと繊細な器官をくすぐった。

自分では日常的にやり慣れている行為でも、他人に身を任せるとなると心構えからして違ってくる。

くすぐったさに、思わずピクリと反応してしまったが、

「痛かったか？」

それを誤解したのだろう。耳朵の至近に屈み込んでいるルルーシユが、気遣わしげな優しい声音で囁く。

「ちがうつ」

私は恨みを込めて、ルルーシユの膝頭をギュツと掴んだ。

「だったら、すこしは力を抜け」

溜息混じりにそう囁く。

本当に無自覚でやっているのかと怒鳴り返してしまいたくなるくらいに甘い低音と、温かな息音に耳朵を直接くすぐられ、ついでに耳朵を掴んでいる指先にも微妙な力が加わって、奥まで見やすいようにグイツと引っ張った。

自力ではどう頑張っても確認することのできない部分を無遠慮に眺め回されているのかと思えば、嫌でも羞恥が湧いてくる。

こんな状態で、力なんて抜けるはずもないだろうと胸の内では盛大に喚きたてながら、それでもなんとか羞恥の時間に耐えていたのだが、しばらくクルクルと最奥をくすぐっていた綿棒がじきに抜け出して、何の断りもなくもつと固い感触が奥まで入ってくる。

「……な、なんだ？」

「じつとしてろ」

「バカ、止ッ、……ッッ」

それまで中をかき回すような動きだったのが、明らかに的を狙ってこすり上げるような動きに変わっていたので、要するに綿棒から耳かきに持ち替えたのだなと気付いた。

もちろん毎日風呂上りには手入れを欠かしてなかったもので、比較的短い時間で済んだのが幸いだったが、私の反応などまったく眼中にない様子で、最後の仕上げとばかりにルルーシユは温かい息をフウと大きく吹き込んだ。

「ほら、できたぞ。今度は反対側だ」

よっぽど殴り飛ばしてやろうかと思った。

けれども必死の努力でそれを我慢したのは、このままでは腹の虫が収まらなかったせいである。

私がすばやく寝返りを打ち直すと、そこでようやく私の様子に気付いたらしいルルーシュが、面白がっている様子でクスリと笑った。「なんだ？　何をそんなに赤くなっている？」

そんな私のことすら、『可愛い』と思っているのが露骨にわかってしまう言い方で。

今のうちにせいぜい調子に乗っておくがいいさと内心では罵詈雑言を並べ立てながら、私はせめてもの反論でルルーシュのパジャマの裾をギュツと掴んだ。

薄いパジャマ越しに感じるのは、余分な脂肪など一切ついていない太腿。

体力だけは壊滅的な男だったが、それでも引き締まった筋肉の感触を実感する。

単純に膝枕だけなら変に意識しないでいられる部分も、後頭部よりも敏感な頬で直接受け止めているものだから、意識するなというほうが無理な相談で。

おまけに作業の都合上、私の頭を丸ごと腹部に抱え込むようにして作業に集中しているものだから、湯の温度に温もっている肌から伝わる湿り気が次第にじわじわと私の顔中を包み始める。

どれだけ相手は無自覚なのだからと言い聞かせても、ルルーシュの体温で温められたボディーシャンプーの良い香りに包み込まれて、触れられるとどうしようもなく気持ちの良い手のひらに顔中を遠慮なく撫で回されてしまえば、とてものこと冷静を保っていられるものではなかった。

「よし、綺麗になったぞ」

意識的に息さえ詰めて必要最小限の呼吸をくり返し、羞恥から逃げ出したい一心で今にもギュツとしがみ付きたくなるのをひたすら我慢させられていた私は、無言のままムクリと身を起こすと、腹の底から大きな溜息をひとつ吐き出した。

「…………交代だ。今度はおまえが横になれ」

「は？ いや、俺は」

風呂上りにもう済ませたからと断るのはもちろん右から左に聞き流して、反対側のソファの端に座り直した私は、必要な消耗品の揃っているサイドテーブルを問答無用で引き寄せた。

「こういうものはギブ・アンド・テイクと相場が決まっているじゃないか。たまには私の好意も素直に受け取らないとなア？」

自分でも脅しつけているのがわかる表情でにっこり微笑むと、ルルーシュは鼻白んでいる様子で怪訝そうに訊ねる。

「だから、さつきから何を」

「怒ってない。気のせいだ」

にっこり。

笑顔に凄みを増しながら、さつきとしろと膝をポンポン叩いた。

ルルーシュはそれでもまだ、「その態度のどこが怒ってないんだ？」としつこくボヤキ続けていたのだが、さつきまで自分が好き放題に言っていたものだから、いまさら引っ込みがつかなくなってしまうたのだろう。見るからに気乗りしない様子で、渋々従った。

わずかに開け放してあるリビングのドアの隙間から、すこしずつ涼み始めている夜風が音もなく家の中を通り抜けてゆく。

短く刈り込んだある裏庭の芝生から虫の鳴く声が時折かすかに届いたが、それ以外には人工物の立てる物音は何ひとつとして聞こえない、いつものようにとても静かな夜だった。

夕方海から上がってすぐ風呂を済ませていた私の着衣は、前ボタンのキャミソールにジーンズ素材のミニスカートだった。あいにくパジャマを着る習慣はなかったので、湯上りにはいつもそんなふうな格好で過ごしている。

そしてルルーシュも、以前から私の肌の露出には慣れているせいだろう。今まで特に何の反応も示してなかったが、当然ながらこの格好では生足の上に直接頬を預ける格好になる。

「……………」

横になつてから初めてそれに気付いたルルーシュは、笑つてしまふくらい不自然に黙り込んでしまった。

私がしたのと同じように、膝頭のすこし上辺りに支えの手を伸ばしていたのだが、しばらくして気まずそうに触れていた手を外した。私は内心でムカムカしながらその様子を観察して、ルルーシュのしたのと同じ手順で世話焼きを開始した。

「そら、できたぞ。今度は反対側だ」

一瞬無反応だったルルーシュは、むつつり押し黙つたまま寝返りを打つ。

その際、わずかに目元が赤くなっているのに気付いたが、頭を預け直した瞬間にカツと勢いよく赤面して、慌てた様子で視線を外した。

私は、『パンツごときで動揺するな』となおさら苛立たしく思いながら、構わず同じ手順で作業を開始した。

だが、頭上に覆い被さつた瞬間に、ルルーシュがたまらず頭を浮かして逃げを打つ。

「おい、あんまりくつ付くな」

その反論を、私は鼻の先で笑い飛ばした。

「くつ付かずに、どうやって作業するんだ？」

一瞬、喉の奥でグツと息を絡めたルルーシュは、苦虫を噛み潰している表情で強引に私の肩を押しやると、無言のままムクリと身を起こした。

そのまま何も言わずにソファの端まで逃げ出して、不貞腐れた態度で足を組み、苛立たしげに前髪をかき上げる。

私は呆れて物も言えない気分で、苛立ちを直接本人にぶつけた。「ルルーシュ、いい加減素直に認めたらどうなんだ？ 仮にも私を好いてくれているのだろう？ 妙な気分になつても当然じゃないのか？」

ルルーシュは虚空の一点を睨みつけたまま、視線も返さずに言い返す。

「わかってるなら、どうしてむやみに誘うんだ？ 俺に迫られて困るのは、そっちも同じじゃないのか？」

「私は……」

言いさして、本当はすこし迷ったが、この期に及んでまで嘘をつくほうが面倒臭いような心境だったのだ。

迷わず素直な気持ちを吐き出した。

「私はおまえの意見に迎合しただけさ。あの場合は、ああ言われたほうが、おまえは楽になれるだろう？」

瞬間的にルルーシュの横顔にカツと朱が差すのがわかった。憤っている内心そのままに、横目で私を睨め付ける。

「なんだ、それは？」

私は、なんだか疲れたような気分で微笑む。本当に純真な男だなと改めて感心しながら。

「言っただろう？ 私はおまえが相手なら、きっと幸せだろうと思っている。それだけだ。どのみち私は初めてではないからな。いずれはその件で、おまえを傷付けてしまうのだけが心外だが」

「なんだ、それは？」

先と同じセリフを、ひときわ苛立たしげに言い直して、正面から睨みつけてきたルルーシュの瞳の中に流動的な焰が光った。

最近では、すっかり私を安心させるために存在していた紫水晶。アメジスト

それと同じ双眸が炎を吐く様子を、私はなんだかすこし懐かしいような気分で眺める。

「言葉通りの意味さ。どうせ私は、」

殴られるのかと思った。

けれどもルルーシュは、私を殴る代わりに組み伏せた。

反射的に押し返そうとした私の両手を乱暴に振り払い、その際、意図したのかどうかはわからなかったが、キャミソールのボタンが引き裂かれるようにして弾け飛ぶ。

強引に顎先を固定されたまま唇に噛み付かれ、露わになった乳房を力任せに握られた。

「い、痛いっ…ルルーシュッ！ 止め…ッ！」

痛みよりも動揺に私が悲鳴を上げると、ルルーシュは固めた拳でいきなりソファの背を殴りつけた。

そのまま脱兎の如くに駆け出したルルーシュは、パンツ！ と大きくリビングのドアを鳴らして裏庭に姿を消してしまった。

突然の恐慌と、静寂。

私は馬鹿みたいにハアハアと息を乱している自分の呼吸音だけを聞いていた。

そのまま都合の悪いことは何も考えなくなかったが、ルルーシュに噛まれた唇と驚掴みにされた乳房がジンジン痛んで、嫌でも私に現実を突きつけた。

まるきり怠惰を責められているようだなと思いながら、ぎこちなく身体を起こした。

ルルーシュがどれだけ私を大切に思っているかは知っている。

それでも、大切に思われている張本人が懲りずに自嘲に走ってしまうのは、心のどこかでルルーシュの清らかさを嫉ましく思っている部分が存在しているからだ。

いつそのこと、その清らかさで私を慰めてくれれば安心できるのに。

どこまで情けない女かとクスクス笑いを肺の奥から吐き出したら、目尻から一粒だけポロリと涙が滴った。

一瞬本気でルルーシュが怖かったのだなと自覚して、クスクス笑いを続けながら震える息をハアと吐き出した。

立ち上がる気力を奮い起こすのがまた大変で、いまだに強張っている全身を励ましながらか腰を上げると、おぼつかない足取りでルルーシュの姿を探した。

普段は灯りを落としているランタン。

月のない夜に眺める庭はほとんど闇の底に沈んでいて、リビングから零れるわずかな灯りが辛うじて届く庭の最果てにルルーシュの背中を見つけた。

落ち込んでいるときのクセで、深く前傾しながら寝椅子に腰を下ろしている。

頭上に枝葉の生い茂っているブナの大木。

満天に明滅している星の明かりもここには届かない。

とりあえず背後からそばに近づいてみたはいいいけれど、何を言ったらいいのかわからなくて、そのまま途方に暮れていた。

じきにルルーシュのほうが先に反応を示して、肩越しに鋭く一瞥を投げかけた。

だが、茫然と立ち尽くしている私の姿を目に収めた瞬間に腹立たしげに舌打ちして、荒々しい仕草で身に纏っていたパジャマの上衣を脱ぎ捨てると、乱暴に私に向って投げつけた。

そのとき初めて自分の格好を思い出した私は、いまさら顔が赤らむを感じながらルルーシュの温もりの残っているパジャマを素直に身につけた。

「……………教えてくれよ。あのままおまえを抱いてしまったら、俺の主体性はいつたどこに行ってしまうんだ？」

衣擦れの音の止んだところで、ルルーシュの苛立たしげな低音が静寂をかき乱すようにして呟く。

「いつたい何度、おまえの存在で俺を翻意させれば気が済むんだよ？ ええ？」

一度目は、ゼロ・レクイエムでそのまま消えるつもりだった。

二度目は、笑顔の約束だけ叶えてやるつもりだった。

そして、三度目は

ルルーシュがあえて口にしなかった部分を推察することはあまりに容易で、私はすっかり心の挫けてしまったような気分で力なく顔の筋肉を歪ませる。

「……………それを言うなら、おまえにすっかり人生観まで変えられてしまった私は、いつたいどうすればいいんだ？」

マオのことも、嚮団も、マリアンヌとの関係も。

すべてを中途半端に放置することで過去から逃げていた私に、有無を言わず決別の判断を突きつけて。

最終的にそうすることを決めたのは私だが、結局はルルーシュの望みのままに従ったようなものだった。

「後悔しているのか？」

「どうやって？ おまえを引き止めたのは私だぞ？」

「だったら、もっと俺に対して本気になれよ」

「これ以上どうやって？ 毎日おまえのことだけで一杯だ。おまえだって、知ってるはずじゃないか」

「さアな、それはどうだかな」

「……ルルーシュ……ッ」

鼻の先で嘲笑するように突き放され、調子の良いことに、いまさら肺に痛みを感じるほど呼吸が苦しくなる。

最初にルルーシュを傷付けたのは私のほうなのに。

ルルーシュはそんな私の様子にすら怒りを発して、そのまま無造作に私の手を掴み取ると、強引に自分の前に座らせた。

「本気だと言うなら、俺を信じて待てるはずだな？」

「……え……？」

悪い予感が、一気に喉元までせり上がってくる。

息が詰まる。

嫌だ。

話を聞く前から拒絶する私を冷ややかに見つめ返しながら、ルルーシュは口角に淡く微笑を刻んだ。

「おまえが本気なら、もうおまえをむやみに甘やかす必要はないだろう？ 今の俺にはギアスの謎を解明する義務がある。金輪際この力が原因で、世界に災厄をもたらすわけには行かないんだ。おまえの記憶はおまえの経験であるのと同時に、俺にとっては唯一手の届くところにある情報だ。しばらくはおまえの意思を尊重して妥協してやるつもりだったが、俺を本気で思っているんだろう？ だった

ら、潔くおまえの記憶を俺に明け渡せるな？」

「……私は……ッ」

必要な情報をルルーシュに伝えることなく、騙してきた共犯者時代。

その関係をイチからやり直すためにも、自分の口ですべての情報を開示したかった。

けれども、次第にルルーシュが焦れ始めているのにも気付いていた。

この世界に赴けば、必要な情報を好きなだけ一気に入手することが可能だからだ。

だが、それは同時に、ルルーシュには知られたくない過去まで全部さらけ出してしまうことだから、臆した私は頑なに自分の口で伝えることに固執した。

情けないまでの自分の生き方を、ルルーシュにだけは知られたくなかったのである。

人生の岐路で絶望の淵に立たされるたびに、ルルーシュにはどれだけ辛辣に接してきたことか。

そんな私が、自分の人生に対しては、どれだけ愚かな判断を重ねてきたことか。

今のルルーシュならば、そんな私の過去すら当たり前のように受け止めてくれるのかもしれない。

けれども、それはあまりに都合のいい希望的観測だ。

呆れられる可能性は考えられても、私の生き方のいったいどこに肯定的に見直される余地がある？

ルルーシュなら絶対に何があっても選択しない生き方だ。

それを正しく認識しているからこそ、ルルーシュにだけは知られてしまうことが怖かった。

婉曲にそれが原因で気持ちが冷めてしまったらどうする？

私はどうやってルルーシュの気持ちを取り戻せば良いのだろうか？

「……どうしても言うなら、私も一緒に連れて行けばいいだろう

？」

そしたら、弁解のチャンスも与えられるはずだ。
だが、今のルルーシュは、私に対してそこまで寛容ではなかった。
本気で怒らせてしまった証拠である。

俯いていた私の顔に手を伸ばすと、容赦なく顎の先を掴んで持ち上げた。

「この際だから言わせてもらうがな、今更いくらやり直してみたところで、おまえは確かに卑劣な手段で俺を騙して利用した。だが俺が、そんなおまえの本質を理解して、それでも必要としているんだ。今更おまえの過去に何があっても、おまえを必要としている事実に変わりはない。ロクでもない可能性に脅える前に、俺の示してきた行動を思い出せ。俺が一度でもおまえの期待を裏切ったことがあったか？」

私は力なく左右に首を振ってそれに応じる。

「……おまえを傷付けるのが嫌なんだ……」

自分でも、馬鹿みたいだと自覚している生き方だ。

けれども、私はそんなふうにしかな生きられなかった。

私自身でさえ全貌は忘れてしまったような過去。

もう今更どこの部分を掘り返しても、自分の過去では傷付かない。
だが、その記憶の一端を覗いただけでも、あれほど心を痛めてくれたおまえのことだ。

単純に情報のひとつとして、正気で見過ごせるはずもないだろう？
ルルーシュはそんな私を正視しながら、喉の奥でクツと息を絡める笑い方をして、「違うだろう」と答えた。

「おまえは、傷付く俺を見て自分が傷付くのが怖いんだ。だから今だってそうして、ほどほどのところで俺を愛する努力を止めている。悪いが俺は、おまえに關しては一切妥協を許すつもりはないんだ。
あんまり俺を見くびるな」

「ちがう……ッ」

「だったら、話は早いだろう？ 俺の要求しているのは、『信じて、

待て』、それだけだ。もつとも、無理強いはしないがな。おまえが俺を見限れば、そのとき俺の行く先は……知っているな？」

何もしない人生なんて、ただ生きているだけの命なんて、ゆるやかな死と同じだ。

そう言つて、自らの人生に反逆を続けてきた男が、今度は私に生きるための理由になつてくれと求めた。

「卑怯者ッ！ それでは単に脅しだろうッ！」

「そうかい？ 俺を生かすためになら、何だつてできるはずじゃないのか？」

容赦なく私を追いつめることに成功したルルーシュは、うな垂れたまま声も出ない私の首筋を両手で無造作に抱き寄せる。

それは一見、やさしげな行為のはずだったが、実際は断崖絶壁に立たされた者の背中を容赦なく突き飛ばすようなものだった。

私はくたりと崩れ落ちるようにして、ルルーシュの胸元に頭の先を押し付けた。

「……頼むから、必ず帰つてくると約束してくれ……ッ」

ルルーシュは、くつくつと面白がつているような口調で微笑む。

「おまえが自主的に俺を待たなきゃ意味がないだろう？」

「いまさらどうして私の本気を試す必要があるんだッ？ 今までだって私はさんざん……ッ」

「そうだな、端的に言うなら、俺がまだ経験の浅い青二才だからか？」

「どこまで最悪な男なんだ、おまえはッ！」

「嫌なら、さつさと愛想を尽かせればいい」

「それができれば、とっくの昔にそうしているさッ！」

私を置いて死ぬつもりだと聞かされても、それでも想うことを止められなかった相手である。

万が一にもそれが可能なら、とうの昔に実行していたはずだ。見放してしまえば、それ以上は苦しむ必要はないわけだから。そして私は何よりも、あきらめることに慣れていたはずだった。

息も絶え絶えに涙も出ない私を、さすがにルルーシュも嘆息しながら両腕の中にやりわり抱きしめ直して、私の後頭部に顎の先を押し付けながら、思わずと言った感じに苦笑した。

「と言うよりも、あんまり俺を脅かすな。おまえがそこまで怖気づくような経験って」

「……逆だ。軟弱な生き方だと、呆れられるのが怖いだけさ」

たとえばこの先、何かが原因でルルーシュと別れる可能性を考える。

普通に過ごしていて辿り着いた結論なら、甘んじて受け入れられる覚悟はある。

人が一対一で付き合っただけ上では、どうしても避けられない可能性だからだ。

けれども、今はまだ駄目だった。

こんなふうな幸福を手に入れて、だが自分の過去が原因で別れに繋がってしまうなんて、自分の存在を全否定されたも同然だ。

だから本当は言うつもりはなかった素直な弱気を吐き出すと、しばらく沈黙を守っていたルルーシュは、やがてポツリとひとりごちるように呟いた。

「案外おまえ、俺のことをまだ何も知らないんだな」

なんだか新鮮な発見をしたような言い方で。

しみじみ噛み締めるように呟いて、それきりあっさり私の身体を押し離れた。

私はすっかり途方に暮れてしまった気分で、情けない顔をしてルルーシュを見上げた。

ルルーシュは温もりのある視線でそれを受け止めて、小さな子供を見つめるみたいに目を細める。

「いい機会だから、この一年のことをひとりでゆっくり考えろ。そのうち何かが見付かるだろう」

「……見付からなかったら？」

ルルーシュはそれには何も答えずに、すばやく触れるだけのキス

を落とした。

「そろそろ寝るぞ。明日も仕事だろう？」

そう言って、さっさと家の中に戻ってしまった。

再びぼつねんと後に取り残されてしまった私は、完全に全身から力が抜けてしまっていた。

いったいどうすればルルーシュを見限ることが可能かと、ついつい習慣で逃げ道を探し始めてしまうが、そもそも抜け殻のようになっている状態では、そんな重要なことを考える気力はカケラも残っていないくて。

涙を流す元氣すらすっかり奪い尽くしてしまった女を、こんな場所にひとりではっぱり出しておくなんて、本当に最低な男だなと思ってしまうが、そんな男をわざわざ選んで必要としているのは私自身なのである。

こんな場所で朝まで打ちひしがれていても、鼻の先で呆れたように笑ってみせるだけで、迎えに来てくれるほど寛容な男でないのも知っていた。

要するに、前々からルルーシュの言っていた、『か弱い女は守れない』とはこういう意味だったのかと、いまさらのように思い知らされながら、私はまるきり断頭台へと続く階段を上り始める心境で、仕方なくルルーシュの後に続いた。

だがてつきり寢室に引き上げたとばかり思っていたルルーシュが、まだリビングにいたので驚いた。

しかも挙動不審なことこの上なく、俯きがちにソファの周りをウロウロとろつき回っている。

「……何してる？」

ドアのところに茫然と突っ立ったまま、私が小さくそう訊ねると、「うん、いや……」

胡乱な返事を寄越したルルーシュは、ソファの足元に見つけた何かを気まずそうにすばやく拾った。

それでようやくピンと来た私は、思い出した羞恥に思わず真っ赤

になりながら訊ねる。

「……何個見付かった？」

ルルーシュも意識的に視線を外したまま、「今ので3個目だ」とぶつきらぼうに答える。

よくよく見なくても、耳朶まで真っ赤に染まっていた。

私は借り着のパジャマの胸元からこっそり覗いて、すっかり前の寛いでしまっているキャミソールのボタンホールの数を数える。

「……じゃア、残り2個だな」

「ここはいいから、おまえは」

「うん、でも……」

一緒にいるだけで、今は気恥ずかしさが募ってしまうから、私を追い払おうとしているのは理解していたが、だからといって先に寝室で待っているほうが恥ずかしい。

視線も合わせられない気分で、結局二人で一緒に探索を続けて、やがて半時間ほどですべてのボタンを回収した。

さっそく縫い付け直してくれている寝室で、ルルーシュが背中を向けたままぶつきらぼうに呟いた。

「……さつきは乱暴にして悪かったな」

私にパジャマの上衣を貸しているおかげで、いまだに上半身裸のままだった。

ルルーシュも、あえて返せとは言わなかった。

ベッドの壁際で漠然と作業の終わるのを待っていた私は、何も言わずにベッドの上を移動してルルーシュの背中に唇を押し付けた。

肩甲骨のちょうど真ん中にコードを有している印が刻まれている。私の場合ひたいに刻まれているそれだが、場所が場所だから、なんだか小さな羽根みたいだなと思った。

ルルーシュは何の反応も示さずに無言で作業を続けていたのだが、しばらくしてハアと肩から大きく息を吐き出すと、なんだかひどく恨めしそうに呟いた。

「……だから、むやみに誘うなど言うのに」

ルルーシュにしては珍しく素直な実感あふれる言い方に、私は思わず笑ってしまいながら、背中からゆったり身体の前に腕を回してルルーシュを抱きしめた。

「今夜くらい、素直に誘われたらどうなんだ？」

しばらく逢えなくなるんだろう？

あれから私も、ルルーシュも、あえて話を蒸し返そうとしなかったので、具体的なことは何ひとつわからない。

わかっているのは、放っておけばこのまま明日にでも何も言わずに出かけてしまうということだ。

暗黙の了解で、私にはその結果だけを受け入れろと求めている。冗談ではなかった。

決して私は、ルルーシュにとって都合の良い人形ではないのだから。

だから最後の抵抗のつもりで、ルルーシュの反応次第では結構本気で誘うつもりだったのだが、ルルーシュはまったく動じた様子もなくいつもの調子で、「断る」とそっけなく答えた。

こんなことぐらいで傷付く自分が馬鹿みたいだなと思いながら、私は「ひどい男だな」と露骨に批難した。

その頃ちようどボタン付けの終わったらしいルルーシュは、綺麗に畳んだキャミソールを目線も向けずに差し出して、逃げるように私の腕をほどいて立ち上がると、裁縫道具を片付ける片手間に怒っているような早口で答えた。

「ここで決心が鈍ったら、さすがに情けないだろう？」

そそくさとクローゼットのある奥の部屋に姿を消して、やがて別なパジャマの上衣を身につけて戻ってきた。

何も言わずに部屋の電気を消してしまうと、何事もなかった様子でベッドの上に身を横たえて、いつもの習慣で私を胸元に抱え込む。

「キスも駄目なのか？」

そのタイミングを待っていた私は、されるがままに身を任せながらルルーシュの胸元から囁いた。

ルルーシュは、喉奥にグツと息を絡めて返事に窮した。

一転して窮地に立たされたルルーシュは、ずいぶん長いあいだ葛藤を続けていたのだが、やがて本当によやくと言った感じに私のひたいに唇を押し当てた。

「さつさと、寝ろ！」

すげなく言つて、すかさず抱き寄せた私の頭頂部に顎の先を押し付けてしまうのだ。

私は何だか情けないような、泣きたいような気分であきらめの息を吐き出すと、恨めしげにルルーシュのわき腹付近を抱きしめながら、いつもの習慣でルルーシュの左胸に頬をギュツと押し付けた。

「……どうして私は、おまえみたいなひどい男のことが好きなんだろうかな？」

要らないというのに、胸焼けするほど甘い砂糖菓子をせっせと与えて。

いざとなったら、容赦なく自分勝手に放り出す。

一度ならずも、二度までも。

以前ならまだしも平然と見送ることも可能だっただろうに。いつだって自分を戒めてきたつもりが、すっかり甘やかされ慣れていた情けなさに、恨み言を呟くようにして小さな声で吐き出すと、それをしっかり耳に入れていたルルーシュが、なぜだかクスリと人の悪い笑い方をした。

「なんだ、おまえ俺のことが好きだったのか？」

私は憮然とした表情で、上目遣いにルルーシュを睨め付ける。

「私を馬鹿にしているのか？」

だがルルーシュは、クスクスと笑ったまますこしも動じない。
「たぶん無意識なんだろうがな、おまえのほうから好きだと言ったのは今のが初めてだぞ？」

驚きに、私は茫然としたまま、すぐには言葉も返せなかった。

「……言つて、なかったか？」

「まア、お互い様だがな」

「おまえは言つてくれてるじゃないか」

「つい最近な。まだひと月も経過してないだろう？」

「……そうだったか？」

「そんなものだ」

いつだって態度のほうが能弁で、いちいち会話の端々にその必要性を感じすらなかった。

そして、ルルーシュのほうからも一度も求めようとしなかった。

せつせと私の口に、甘い砂糖菓子を放り込んでくれる一方で。

そんなルルーシュのパジャマの胸元に、意識的にギュツと頬を押し付け直した。

「……私はおまえが好きだぞ、ルルーシュ」

ルルーシュも笑いながら私の肩口を抱きしめ直した。

「だから、誘うな」

それでいて、女を寛容で甘やかしているときの口調で。

すっかり余裕の態度であしらわれている恨めしさに、私は不貞腐れた態度でギュウギュウとルルーシュを抱きしめながら息巻いた。

「誰が誘うか。おまえみたいな変な男は初めてだ」

ルルーシュは私の頭頂部に顎の先を押し付けたまま、いつもの口調で淡々と呟く。

「放っておけ。俺はけっこう今の自分が好きなんだ」

「昔からおまえはそういう奴だろう？」

「そうだな。おまえの知っている俺は、そうかもな」

妙にしみじみと噛み締めるようにして呟いて、私の頭頂部に唇の先を押し付けると、「おやすみ」と笑っている声で囁いた。

こんな気分で眠れるかと私は思ったが、一定のリズムでゆっくりと繰り返しているルルーシュの呼吸音と心音に包み込まれているうちに、いつしかいつもの習慣で眠りに落ちていたらしい。

あまりにも完璧に演出されたいつもと同じ朝。

いつもの習慣でルルーシュのキスで起こされて、忙しく時間に追い立てられながら朝食をしっかり腹に収めて、玄関先で慌しくいつもの習慣のキスに送り出される。

私のほうから何か訊ねれば、ルルーシュのほうにも答える用意があったのかもしれないが、私にはそれができないことをルルーシュは経験から知っていた。

いつもの習慣を崩さないことで、私もルルーシュに最後の翻意を求めていたのだ。

「行ってきます」

「ああ、気をつけてな」

そして、ルルーシュは。

最後の最後まで、私の良く知っているルルーシュだった。

夕方バイト先から帰宅した私は、玄関に鍵が掛かっているのに気付いて、『本当に行ってしまったのか』とようやくあきらめる気持ちになっていた。

いつそのこと腹いせに、私もどこか適当な場所に旅立ってしまったおうかと考えたが、いずれにせよ家の中に入らなければ旅支度すら整えようがないのである。

おかげで、鍵の隠し場所を思い出すのにずいぶん苦心して、疲れ

ていたせいもあり、ようやく家の中に入った頃には、悲しいよりも腹立たしさのほうが勝っているような状態だった。

おまえのほうこそ本気で私が好きだというならば、何も言わずに嫌がる場所に出かけてしまうか？

「……でも、おまえはそういう奴なんだよなア……」

そついう男だと知っていて、勝手に惚れているのは私のほうなのである。

昨日から何度となく噛み締めている実感を、改めて砂を噛むような気持ちで噛み締めて。

おそらく朝、私を送り出してから間もなく出かけてしまったのだろう。室内にはムツと息の詰まるような熱気が立ち込めていた。

とりあえず温度を下げるために家中の窓を開け放ちキッチンに向った。

テーブルの上に書置きがあるのに気付いたが、なんとなく今は立ち止まらずに素通りして、いつもの習慣どおりにまっすぐ冷蔵庫の前に立つ。

毎日私のために作って、冷やしておいてくれるハーブティー。もちろん中にはそれが用意されていて、私は満足げに微笑みながら冷えたグラスを取り出した。

さつそくグラスを傾けながら、テーブルの上の書置きに目を通したが、冷蔵庫の中に用意されている常備菜と、床下の食物庫の在庫を一から十まで全部書き出してあるだけだった。

おまえは私の母親かと思わず笑ってしまいがちながら、グラスを手にリビングに戻って、ルルーシュのパソコンを起動する。

毎日ルルーシュが、どういった情報を集めているかは知っていた。別段そばについて教えられたわけではなかったが、実際やってみて初めて代理が可能だったことに気付いて、最初からあらゆる可能性を想定してルルーシュが行動していたことに気付いた。

「……結局おまえ、いずれはこうするつもりだったんだろう？」

そのクセ、相変わらず必要なことは何ひとつ伝えずに、いざとなったら自分の思うままに行動する。

あんまり勝手な行動が癪に障ったものだから、私はその日からパソコンで日記をしたためることにした。

文字にしてみればたったの数行。

書き出しはルルーシュに対する愚痴から始まって、集めた情報に対する所感を書き連ねた後に、やっぱり恨み言で締めくくった。

それから、いつもの習慣で小一時間ばかり海で泳いで、風呂に浸かってさっぱりしてから夕食の準備を始めた。

とは言え、その日の夕食と翌日の朝食まではルルーシュが作っておいてくれたので、今夜のところは素直に用意された好意に甘んじた。

明日の夕食からは少しばかりいつもの習慣を変える必要があるだろう。

「いただきます」

ルルーシュが毎朝焼いているライ麦パン。季節の野菜をたっぷり使った彩りサラダに、アボカドのディップ。メインディッシュは肉汁の滴るハンバーグ。コーンポタージュにはスライスしたホワイトアスパラガスが浮いていて、デザートには洋梨を使ったコンポートが用意されていた。添えられているバニラアイスまでルルーシュの手作りである。

考えてみれば贅沢な食事情だなアといまさらのように思ったが、二人で座ると狭いくらいのテーブルが、あまりにもただっ広いような感じがして、せつかくの美味しい料理が味気ないような感じがして。我ながら少女趣味だと思ったが、結局いつもの習慣でルルーシュの分も皿とカトラリーを用意して、ようやく落ち着いたような気分ですごした。

「まったく習慣というのは恐ろしいものだな」

本来ならば、積極的に食事の必要はないはずだったのに、ルルーシュの手料理に慣らされているうちに、時間になると身体が勝手に欲するようになってしまっていた。

「いい機会だからこの際、すこしは真面目に料理の腕を磨いてやるのもいいかもしれないア」

どのみち明日の夕食からは自分で作らないといけないのである。

「結局おまえは一度も私の料理に及第点を出してくれなかったが、まさかこの機会を見越していたわけではあるまいな？」

だったら、それはそれで業腹だぞ。

「しかし、献立を考えるのが面倒くさいな。まったくおまえは精神構造からして主夫に向いているんだ」

意識的にルルーシュの皿に向って話し続けているのは、ひとりでする食事に思いのほか動揺していたせいだ。

いつから二人でする食事が当たり前になっていたのだろうか？

「……ひょっとして、毎日おまえはそれを実感していたか？」

唯一、ルルーシュとは一緒に食べないお昼時。

私のほうはいつだって、バイト先のカフェでたくさんの人間に囲まれていた。

根は寂しがり屋なおまえのことだから、だからなおさら朝夕の食事を大切に考えていてくれたのかもしれない。

そんなことに思いを馳せながら、ゆっくり味わいながら食事を終えて、やっぱりいつもの習慣で食後の散歩を愉しんだ。

やがてひとりで戻った寝室で、私は不思議な感慨を間近に感じていた。

きっと、泣くだろうと思っていたのだ。

ひとりで置き去りにされてしまった寂しさに。

ところが、どうだ？

ルルーシュにすべてを知られてしまうのはやっぱり怖いし、胸の奥底に重石を乗せられているような不安も感じているけれど、だか

らと言つて感情が激するほどの動揺はすこしも感じていない。

「……なんだかこうしているだけで、おまえの腕の中で寛いでいるみたいな気がするものな」

あんまり愛されすぎていて、離れていても愛されている感覚を、肌の上に纏っているような面映さ。

あまりに漠然と、私はその感覚を味わい続けていたけれど、ルルーシュは本当にそんなふうな愛し方で私を守り続けていたのである。万が一、これから先に何が起ころうとも、私が悲しまないで済むように。

私の記憶に確実に刻み付けるようにして、私を愛し尽くしてくれていた。

「今まで迂闊に見過ごしてきた自分がけっこうショックだぞ？」

鈍感なのは、ルルーシュのほうの専売特許だとばかり思い込んでいた。

ところが、どうだ？

こんなにも確実に、ルルーシュは私を攻略してしまっている。

「私は……」

果たして、私は？

ルルーシュの注いでくれる愛情に、どれくらい真剣に応えてきたのだろうか？

万が一にも、現状とはまったく逆の状況で、ルルーシュのほうに置き去りにされてしまった場合を考える。

果たして、今の私が感じているような安心感をルルーシュが味わうことは可能だろうか？

あんまり愛されすぎていて、逆に将来を不安に思つばかりに、たびたび自嘲に走っていたような私が。

どれくらい真剣に、ルルーシュを愛し尽くしていたと断言することが可能だろうか？

「……………」

にわかに不安を感じた私は、またぞろ都合の良い逃げ場を求めて、久方ぶりにチーズくんの存在を思い出した。

いつしか定位置になっていたクローゼットの上から抱き上げて、何も考えずに胸元にギュツと抱きしめる。

「ん？」

その際、腕に馴染みのない固い感触が触れたものだから、私は不審に思いながら腕の中のチーズくんを覗き込む。

こんなところにまでルルーシュの世話焼きは徹底していて、チーズくんのどこにも埃ひとつ積もってなかったが、首から見覚えのない小箱を提げているのに気付いた。

犯人はルルーシュに決まっているが、いったいいつからそこにあるのだろうか？

とりあえずベッドまでチーズくんを運んで、無断で開けてもいいのだろうかとしばし悩んで。

チーズくんの所有者は私なのだからと結論して、チーズくんの首から紐を外すと、手のひら大の小箱を開封した。

「ルルーシュ、…おまえ…」

中に収められていたのは指輪だ。

中央には輝石で装飾されたハート、その上に王冠が配されて、それを左右から人の手が抱える繊細なモチーフだ。

古くからこの島に伝わる民芸品で、ルルーシュが手先の器用さを活かして、たまに修理を請け負うようになっていたのだが、私にプレゼントしてくれたのはもちろんこれが初めてのことだった。

単純に装飾品としての価値も高かったが、何しろこの指輪には謂れがある。

指に嵌める方向次第で、含まれる意味が逆転するのだ。

ハートを内側にすれば、『恋人がいます』。

そして、その逆ならば、

「『恋人募集中』。……おまえ、本気で私の気持ちを試すつも

りだな？」

だからこそ期限も伝えずに、「信じて、待て」とだけ言い置いて、私をひとり残して出て行った。

「愛されている実感が足りないと感じていたなら、素直に口でそう言えばいいだろう？」

私は呆れたように小さくそう呟いて、右手の小指から順に指輪を嵌めてみる。

変なところで頑固で、意地っぱりで、素直でない性格で。

よっぽどこの世界に乗り込んで文句を言ってやろうかと思ったが、ルルーシュは暗黙のうちに「結果で示せ」と私に求めている。

「おまえにこんなふうに愛されて、いまさら他の誰かで満足できると思うのか？」

俺を待ち切れなくなってしまうたら、いつでも他の男を捜せと婉曲に勧めるような真似をして。

そのクセ指輪は、最終的に私の左手薬指にジャストサイズで落ちて着いてしまうのだ。

私は、「最初からわかっていたさ」と呟きながら、背後のベッドに身を投げ出した。

腕の中のチーズくんを思い切りギュツと抱きしめながら。

けれども、以前はあれほど私に安心感をもたらしてくれたはずの存在が、今の私にはどうしようもなく頼りないように感じてしまっ

て。すっかりルルーシュの胸の厚みを覚えてしまっているのに気付いて、さすがに切なさがじんわりと胸に迫った。

ルルーシュの長い手足に四肢を絡め取られるときの感覚、暑苦しいほどの体温、繰り返される胸の鼓動、おだやかに頬をくすぐる彼の吐息、大きな手のひらに肩口を抱きしめられるときの絶対なる安心感。

そんなものを徹底的に私に刻み付けてから、私をひとり残して出て行った。

おそらく、そうでもしなければ、ルルーシュのほうに不安だったのだ。

「……馬鹿だなア……」

自分の大切な者たちを守るために、世界さえも変えてしまった男が。

そこらに居る普通の男みたいに、好きな女の心変わりを心配して自分がどれだけ特別な存在か、ちっとも正しく理解していないのだ。

案外おまえ、俺のことをまだ何も知らないんだな。

「……ああ、悔しいが、おまえの言うとおりみたいだな」

おまえの愛し方を、私はすこしも理解していなかった。

私は指輪に唇を押し付けると、ルルーシュにすると同じように目を閉じながらキスをした。

ざわわ、ざわわと絶え間なく鳴る風の音。

濃い緑の枝葉を幾重にも茂らせていたブナの大木。

緑の牧草地もすっかり色づき始めていて、黄金色にたなびく小麦畑を彷彿とさせていた。

最近ではめっきり太陽の輝いている時間が短くなっていたから、こんなふうに自然の恩恵を味わうのは実に貴重だ。

この家に移り住んで間もなく、自分で編んだハンモック。

次第にボロボロに破れて使えなくなってしまうたので、馴染みの

漁師に教えを乞うて完璧に作り直した。

まるきり空中に浮かんでいるような揺り籠。

その日も朝から私は、その心地好さをひとりで満喫していた。

閉じた目蓋越しにも感じている、温かい木漏れ日。

もう少しばかり紅葉が進めば、そのうち散ってしまう落葉樹。

記憶の片隅に残っている冬の風景を彷彿としながら、いつしか私は眠っていたらしい。

何度か玄関のチャイムが鳴らされているのに気付いたが、今日は朝からひとりで過ごす決めていたので、そのまま居留守を決め込んだ。

ときおり表の通りを、子供たちが歓声を上げながら走ってゆくのが聞こえる。

世界が平和な証だ。

しばらくして、またふいに意識が浮上したのは、唇に他人の体温を感じたせいだ。

目を閉じたまま、犯人を逃がさぬように首筋に両腕を回して掴まえた。

すこしだけ顔を離して、目の前の相手の顔を見つめる。

「……なんか、おまえ……すこし老けたなア？」

それとも、これは夢なのだろうか？

私がそう呟くと、素顔を晒しているルルーシュは呆れている様子で苦笑した。

「おまえは、まだ夢なんかに悩まされているのか？ すこしは成長しろよ」

すげなく言った口ぶりは、記憶にあるそのままで。

ようやく私は、安心した気分で微笑んだ。

「うるさい。夢でも逢いに来ない薄情な男に、そろそろ文句を言つてやりに行こうかと思っていたところだ」

「フン、その口ぶりだと、大方の予想はしていたんだろう?」

私は何も言わずにルルーシュを抱き寄せると、自分のほうからキスをした。

一度も忘れたつもりはなかったけれども、より確かな実感を求めて唇の上に記憶する。

愛しい男の吐く吐息、柔らかな唇の感触、抱きしめられる腕の温かさ。

「……おかえり、ルルーシュ」

世界中が悪逆皇帝の死を祝って沸き返る。

ルルーシュが死を迎えたあの日から、ちょうど一年目のことだった。

番外？：フル・ムーン

「月見酒に付き合え」

藪から棒にC・C・Cがそう誘ってみせるので、ルルーシュは仕方なく溜息混じりにキッチンに向かった。

歩みながら、なんとなくリビングの窓を見上げると、漆黒の夜空を背景に黄金色の大きな満月が豊潤な輝きを滴り落としているのに気付いた。

周囲一面に人工物が皆無に等しいものだから、以前には意識した覚えのないこうした光景を頻々と目に留めているような感じがする。朝靄の中に太陽が白々と昇ってゆく様子だとか、宵闇に沈み込む直前にまるきり水中に没してゆくような錯覚を覚えさせる大気の青。要するに、どこの世界にも等しく存在しているような、自然が織り成す一瞬だけの造形美。

以前の自分は、そうしたものに心を揺り動かされる余裕が存在していなかったことに、最近になってルルーシュは気付かされてばかりいる。

そしてふと思ってしまうのだ。

これと同じ夜空をナナリーも見上げているのだろうか。

あれでいて何かに集中し始めると、周りが見えなくなってしまうところは兄妹揃ってよく似ていて。

ふたりがまだ幼かった時分には、ユフィやスザクといった身近な存在が、なにげない一言でその事実気付かせてくれたものだった。はたして今は、元気で過ごしているのだろうか？

思いがけなく物思いに囚われていた背中に、にわかにC・C・Cが冷え切った声音で更なる追い討ちをかけてくれたものである。

「本当に冷たい男だな」

「は？」

どうして突然、機嫌を損ねているのかわからずに驚きながらルルーシュが振り向くと、C・Cは露骨にフィツと顔を逸らせた。「寝る前に一杯付き合ってくれくらい、別に構わないだろう？」暇そうにしていたから、ついでに声を掛けただけなんだからな、と。

なんだかすこし傷付いているような声音のニュアンスで。それを読み取ることができるのは、世界広しといえどもルルーシュくらいのものであろう。

どう鼻肩目に受け取っても、高飛車に腹を立てているようにしか聞こえなかったのだ。

おそらくルルーシュが返事をしなかったものだから、せつかくの誘いを断られたとでも誤解しているのだろう。

ルルーシュは高飛車に顎の先を反らせると、負けずに横柄な態度でやり返した。

「だから、酒の肴を用意してやると言っているんだ。いいから先に行って、待っている」

我ながら不器用な優しさだなとは思ったが、それでも見る間にCの瞳がホツと安堵に緩むのがわかった。

そしてルルーシュの予想した通り、次の瞬間には、相変わらずの可愛げなさを装ってみせるのである。

「花より団子か？　こういう場合には、風流を愉しむものだぞ、ルルーシュ？」

「うるさい。単なる酒飲みの口実だろうが」

「フンッ、酒の旨味を解しているからこそ、シチュエーションを選びもするのだろう？」

まア、お子様には100年早いがなと、言葉ではなく露骨な態度で匂わして、クスクス笑いながら上機嫌できびすを返した。

裏庭に歩み行く背中を見送りながら、ルルーシュは、「どっちが子供だ」と顔を顰めた。

C・Cがあんな具合にわざと高飛車に何かを持ちかけてくる場

合は、まず間違いなく本心からそれを叶えてほしい時なのだ。

それでも断られるのが怖いから、いつだって逃げられる余地を残したがっている。

「まったく、おまえは…いつまでそうやって」

いつそのこと、一度くらいは徹底的に追いつめて、「お願いだから」となりふり構わず懇願させてやりたいような衝動に駆られてしまう。

以前ならともかく、今の自分にはそれが可能であることをルルーシュは自覚しているわけだから。

それでも手加減してやっているのは、アレでも多少なりとも成長しているのに気付いているからである。

以前のC・C・なら、ルルーシュを誘うまでもなく一人で解決していたはずだから。

「本当に焦れたい女だな」

しみじみ呟きを吐き出して、やがてルルーシュも止めていた歩みを再開させるとキッチンに向った。

通りすがりに鉢植えのハーブから適当な数葉を摘み取って、夕食前にC・C・が摘まんでいたビスケットの小袋を回収する。

その足でまっすぐ冷蔵庫に向うと、ヨーグルトチーズとゴーダチーズを取り出した。

ビスケットをクラッカー代わりに使用して、チーズを挟めばまず一品。

アンチョビが半端に余っていたはずだから、ついでにそれも取り出して、夕食に食べるつもりで忘れていた二色の肉厚ピーマンも。

オリーブオイルで軽く炒めて、アンチョビの塩味とレモン果汁で味付けを済ませたらちょうど良い酒の肴になるだろう。

「毎日あれだけ頻繁にキスして、一緒に眠って、なおかつ好きだと言わせておいて、あと…いつか何かが不満なんだ？」

ダンダンツと苛立たしげな音を響かせながら包丁を使う片手間に、ルルーシュは本人には言えない憤懣を吐き出した。

それでも現実には、不満に思われているからこそ、いつまで経ってもあんな具合に一步引いた態度を取り続けているのである。

自分のような青二才が少々頑張ったくらいでは到底追いつきようなない人生を、あの魔女は今までひとりで孤独に過ごしているわけだから。

それを、早晩生まれ変われとせっついていて自分のほうが、辛抱が足りないだけなのだ。

それでも、と。

ルルーシュは、ふいに作業の手を休めると、憂鬱の色味が濃い溜息を力いっぱい吐き出した。

「……実際、青二才と呼ばれる歳なんだから、仕方がないだろう？」
どれだけ意識的な寛容を装って見たところで、実際の話、20年足らずしか生きていない人生に変わりはない。

それでも、経験が少ないなりに自分では最善を尽くしているつもりだが。

ここまで手応えの無い状態が続いてしまうと、本当におまえは俺のことが好きなのかと思わず問い詰めてしまいたくもなる。

「……どうせおまえは、俺がキスを始めた理由すら気付いてないのだろう？」

おまえにキスをされると安心すると零してみせたから。

ルルーシュ自身も追ってその感覚を体感して、ならばと習慣化できる口実を即座に考案してみせたのだ。

それなのに、あいつはそのうちの数回を、「多すぎる」とぞんざいに却下しやがった。

そのクセ、キスをするたびに何とも言えず幸福そうな顔を晒してみせるので、仕掛けているルルーシュのほうこそ安堵の実感を手に

したがっている事実に気付いてしまつて。

ああ、こいつの気持ちは、今俺の手元にあるのだなと。

C・Cの垣間見せる表情から受け取ることが可能だから。

早い話が、口には出さないC・Cの本心を確かめたがつているだけなのだ。

そんな手段に頼らないでも、好きでもない男の言いなりに従っているほど辛抱強い女でないのは重々承知しているにも関わらず。

思うほどに、なんだか自分が、とてつもなく矮小な人間に思えてしまつて。

ルルーシュは、今のうちにひととき重苦しい溜息を吐き出すと、しみじみ複雑な心境を味わいながら中断させていた作業の手を再開させた。

透き通った黄金色に熟成したような大きな満月。

それをC・Cの肩越しに眺めながら、ルルーシュは草原の上でワイングラスを傾ける。

てつきり裏庭に常設してある寝椅子カウチで待っているのかと思いきや、普段は使っていないカフェテーブルをわざわざ垣根の先の牧草地にまで運んでいたものだから驚いた。

だったら、だって、自分が来るまでおとなしく待っていれば良いだろうに。

どうやらC・Cは、以前に言ったルルーシュの言葉を曲解している節がある。

か弱い女と表現したのは、決してそういう意味ではなかったのだがな。

とは言うものの、テーブルの材質はプラスチック製で、見た目よりもずいぶん軽いので、Ｃ・Ｃ・が運んでも別段無理はないはずだった。

どう考えても、男女の配役が逆のような感じがして、ルルーシュの気持ち的には面白くないわけである。

「あ、やっぱり気付いたか？ ビスケットが残っているはずだと思いついていたところだ」

一足先に始めていたＣ・Ｃ・は、もちろん上機嫌でルルーシュを迎えた。

ホクホク顔でルルーシュの手から料理の皿を受け取って、チーズを挟んであるビスケットをさっそく口の中に頬張った。

本当に、機嫌の良いときの表情は可愛い奴だなと感心する。

黙っているとは怖いくらいに美人だねと感想を洩したのは、Ｃ・

Ｃ・が現在世話になっているバイト先の店主だったか。

そんなセリフを臆面もなく語ってみせるので、今まで一度もＣ・に対してそのような印象を抱いたことのなかったルルーシュは呆気にとられてしまったが。後にＣ・Ｃ・本人から「おまえも、とっさにあれくらいの子辞は言えるようにならないと？」と揶揄されて。思わず苦虫を噛み潰してしまったのは、人形的に取り澄ましている表情よりも、よっぽどバカみたいに笑い転げている時のほうが可愛いことを知っているからだ。

人には何くれとなく「鈍感」だのと文句を言っで見せる割に、Ｃ・のほうがよくよほど重症だろうとルルーシュのほうでは思っている。

思っている、それを口には出さないのは、反論されるとこっちが困ってしまうからだ。

「どうした？ 呑んでばかりでは、身体に悪いのではなかったか

？」

思っている最中にも、クスクス笑いながらルルーシュが小言のように繰り返しているいつものセリフで揶揄されて。むしろＣ・Ｃの姿を着代わりに愛で眺めていたのに気付いたルルーシュは、さすがに自分の思考に羞恥を感じてフィと視線を逸らした。

「別に？ 平気だろう、ワインの一本くらい」

どれだけ我を忘れて痛飲したくても、過剰なアルコールの摂取は、それだけでコードが異常と判断して、一瞬で分解してしまうのだ。

その事情は何かの際にＣ・Ｃから説明を受けていたのだが、いまだかつてその限界まで達したことの無いルルーシュだ。

手慰みにビスケットの一片に手を伸ばしながらそっけなく呟くと、なんだか神妙に言葉を選んでいる様子のＣ・Ｃが続けた。

「……血だな」

「うん？」

頬杖を付きながら目線を向けると、今度は先にＣ・Ｃのほうが視線を逸らしていた。

横顔の輪郭を照らし出している黄金色の満月が白磁の肌によく映えて、伏し目がちの長い睫毛が瞳の中の黄金にわずかな影を落としている。

「……シャルルはザルで、マリアンヌはワクだったからな。あいつらに出会って初めて、私は自分の限界酒量を知ったんだ」

Ｃ・Ｃが話すのをためらった理由を察して、ルルーシュは思わず無然としてしまう。

それくらいの話題で、いちいち余計な気を遣うなと思ってしまったが、この場合、彼女にそれをさせているのは、日頃の自分の行いだ。

曲がりなりにも、この手で抹殺してしまった両親に関する話である。今でも内心に燦っている重苦しい感情を思えば、愉しげに盛り上がるはずもなかったが、だからといってＣ・Ｃのほうにしてみれば、唯一話の通じる旧知の相手である。ルルーシュの場合、ナ

ナリーやスザクの存在に置き換えると、時には昔話に興じてみたくなる気持ちもわかるような気はするし、あんまり毛嫌いしすぎるのも大人げないような感じもする。

そうやって、とっさに無難な言い訳を用意すると、ルルーシュは単純に話を聞きたがつている自分の気持ちを容認した。

「けっこう頻繁に飲み食いしてたんだな？」

見た目ばかりはいつもの冷静を装いながら訊ねると、察したC・は瞳の中にホッと安堵の色を浮かべた。

「安心して話せる人間が私くらいのもだったからな。マリアンヌもあれで案外寂しかったのだろうさ。私と一緒にいるときには、むしろシャルルのほうが遠慮していたくらいだ」

もつとも、おまえたち兄妹が生まれる前の話だがな、とC・C・はポツリと付け加えた。

元は平民の出身で、後に騎士侯の位を手にしていたとはいえ、所詮は一代限りの限定貴族。

その母親が、実質的には皇帝の寵愛を独占していたわけだから、その他の皇妃たちが面白うかろうはずがない。

ルルーシュも記憶しているかぎり、母親が別の皇族たちと愉しげに会談していた姿を見たのは皆無だったし、陰湿なやり口で倦厭されていた印象しか特に残っていない。

もつとも、マリアンヌのほうこそ、負けずに強気の態度で積極的に周り中の貴族たちを毛嫌いしていたような気もするが。

「それで今度は、俺の酒量を知ろうというわけか？」

どっちにしろ、あんまりむやみに掘り下げたい話でもなかったもので、適当に無難な方向に話題を転じると、C・C・も悪戯な調子で軽く答えた。

「別に一度くらいなら、酔って暴れてみても構わないぞ？ 後々からかうネタになるからな」

ルルーシュは、軽く鼻の先であしらった。

「バカか。自分の酒量くらい、コードに頼らないでも知っているも

のだろう？」

言いながら、ルルーシュは摘まんだだけでちつとも食指の動かなかったビスケットを、そのままＣ・Ｃの口元に運んだ。

Ｃ・Ｃは、一瞬だけ戸惑う様子を見せたのだが、案外素直に口を開けるとパクリと口の中に頬張った。

咀嚼しながら「ふふっ」と笑って見せる表情が、本当にこんな場合にだけ開けっぴるげに素直な感情を示している。

つつい餌付けする気分で、今度はマリネのほうを一口サイズに摘み上げると、同じようにＣ・Ｃの口元に運んだ。

今度も迷いなくパクリと口に含んだ表情は可愛い一言だったが、指先を汚してしまったオリーブオイルの始末に困って、ルルーシュは仕方なく自分の舌でぺろりとそれを舐め取った。

「おまえのほうこそ」

「ん？」

「本気で酔っ払ったらどうなるんだ？」

それに近い状態なら、つい最近にも目にした覚えがある。

だが、あれはどちらかと言えば、騒いで疲れて一気に眠気が襲ってきたようなものだった。

そんな質問を、ルルーシュが自分の指を舐める片手間に平然と訊ねてみせるので、Ｃ・Ｃは少し憮然と顔を顰めた。

「……そんなものは秘密だ」

蠟燭一本用意してない場所だったが、背後から射し込む月光がほどよく視界の明度を上げているので、ルルーシュの位置からは丸みを帯びた頬のラインが真っ赤に染まっているのが良くわかった。

たしかにルルーシュの望んでいる手応えは、いまだに得られてないのかもしれない。

けれども、とルルーシュは、すこしだけ考えを改めたい気分になっていた。

結果的にＣ・Ｃを「笑わせてやる」という行為は、ルルーシュの予測していたのとはまた別の副産物を与えてくれたのもまた事実

で。

笑いがC・Cの日常に当たり前に浸透してゆくにしたがって、感情の揺れ幅がどんどん魔女のコントロールの配下から逸脱しているのが手に取るようにわかるのだ。

その調子で、どんどん俺の手中で変わってしまえばいいとルルーシュは思う。

もう二度と、無感動な魔女なんかに戻る道がわからなくなるくらいに。

自分でもまだ見たことのない表情を晒して笑って、自分でも気が付かぬうちにそんな自分に慣れてしまえばいい。

「見せてみるよ」

いつになく優しげに微笑んでみせながら、ルルーシュは空いていたC・Cのグラスにワインを注いだ。

もちろんC・Cは、胡散臭そうにそんなルルーシュを眺め返しながら、可愛らしく染めた両の目元に批難の色を浮かべている。

「何をえらそうに……」

「いまさら？」

ルルーシュは笑い混じりに嘯きながら、それまで開けずに置いていたチョコレート箱の箱に手を伸ばすと、一粒摘まんでC・Cの口元に運んだ。

先日、隣の島に足を運んだ際になにげなく購入した品物だったが、どうやらC・Cの味覚に合った様子で、気がついたときには一箱ぺろりと平らげてしまっていた。

だから、さつそく翌日にも酒類を注文するついに取り寄せておいたのだが、今朝方それが届いたばかりだったのだ。

今までその存在に気付いてなかったC・Cは、二重の意味で羞恥を感じて。

けれども、ルルーシュが「さつさとしろ」と仕草で急かすと、わざと強引に奪い取るようにして噛み付いて、今度は自分も同じチョコレートの一粒をルルーシュの口元に運んだ。

ルルーシュは何の抵抗もなくそれを口に含んだ。

視線を重ね合わせたままチョコレートの美味を伝えて微笑むと、だから余計に羞恥が高じてしまうのだろう、見る間にＣ・Ｃの機嫌が斜めに傾いてゆく。

「……タチが悪いな」

「どうして？」

「そう言うところは、マリアンヌにそっくりだ」

すっかり慚然と唇の先を尖らせながら指摘され、思わずルルーシュも笑ってしまう。

そんなことを言われてしまっても、ルルーシュの認識していたマリアンヌの性格と、実際の性格とでは若干の隔たりが存在していたのだ。

たしかに周りの皇族連中と比較すれば、桁外れに放埒な印象は強かったが、それでも子供に対してはあくまで優しく理想的な母親だった。

その柔らかな胸元に何度もギュツと抱きしめられた感覚を、なぜだか突然リアルな皮膚感覚で思い出し。

まだ忘れてなかったのかと、少々物憂いような心境でルルーシュはそれを苦笑で誤魔化した。

その母親と、外見的な遺伝を別にすれば、似ている箇所など皆無だと思い込んでいたのだが。その双方と付き合いのあるＣ・Ｃがそう言っているわけだから、知らぬうちに気性すら引き継いでいる部分も存在しているのかもしれない。

「おまえの態度が、そういう気分にはさせるんだ」

低めた声音で囁きながら、ルルーシュは片手を伸ばすと、さりげなくＣ・Ｃの顎先を固定した。

軽い口直しのつもりで、さんざん触れて柔らかいことを知っている唇に自分の唇を押し付けると、あっさりすぐに顔を離れた。

相変わらず唇の表面に温もりを確認しあうだけの口接けだったが、それでも回数を重ねるほどに学習したことが無数にある。

今度は無難にフォークを使ってマリネを食べて、アンチョビの塩味とレモン果汁の酸味を愉しみながら、後口を辛口の白ワインで洗い流した。

どうせメインで消費するのはＣ・Ｃ・だったから、Ｃ・Ｃ・の好みに合わせて用意している品物だったが、たまの機会に付き合わされていくうちに、いつしかルルーシュの味覚のほうに慣れてしまっただけらしい。

中辛口好みだったはずの口内に、キリリと刺す辛口の刺激が心地よい。

ひょっとすると不老不死の身体でありながら、味覚だけ成長しているのかもしれないが。

いずれにせよ、経済的にも望ましい変化のひとつではある。

「どうかしたのか？」

問われて、その間にもずっと恨めしげにルルーシュを睨んでいたのに気付いたＣ・Ｃ・は、気まずそうに視線を外した。

目を閉じる暇もなくあっさり奪われた口接けだったから、要するに物足りなかったわけなのだ。

だから、無意識のうちにも視線で誘った。

日頃からＣ・Ｃ・はそうだった。

疲れて人肌恋しくなった場合などに、無意識のうちにも視線がルルーシュの姿を追いかける。

初めてそれに気付いたときには、思わずルルーシュも笑ってしまったものだが。「可愛い女だな」と揶揄しても、本人にはまるきり自覚がない様子で。ルルーシュのほうから意図的にそうした雰囲気を用意してやらなければ、いまだに自分のほうからはキスのひとつも素直に求めようとしなかったのだ。

そのクセ、とっさの言動では、いつだって余裕の態度であしらってくれるのだからタチが悪い。

ひょっとして、俺がまた甘やかし過ぎているだけなのか？

思わず自戒し始めるルルーシュの眼前で、ぶっきらぼうに呟く声が聞こえた。

「……女のあしらいに慣れてしまうと、増長するのは父親譲りだなッ」

ルルーシュは安物の椅子を蹴倒す勢いで立ち上がると、後ろも見ないできびすを返した。

「ルルーシュッ？」

静まり返った海上に滴り落ちる黄金色の満月。

ざわわ、ざわわと絶え間なく吹き続ける風の音。

心地好かったはずの静寂を、露骨に焦りを滲ませながら不器用にかき乱す声がすぐに背中を追いかけてくるが、もちろんルルーシュは振り向かずにとこへともなく歩みを進めた。

自分でも理不尽な態度だと自覚している。

それでも、あの男と比較されるのだけは我慢ならないのだ。

「冗談でも、あんな男と一緒にするなッ！」

引き止めの腕がルルーシュの腕に触れてきたところで、ルルーシュは荒々しい態度で振り向くと、息を呑むＣ・Ｃに構わずまくし立てた。

アーカーシャの剣で見せ付けられた二人のワンシーン。

それ以外のシヨックが激しすぎて、いちいち構っている場合ではなかったが、だからといって親密そうに寄り添っていた二人の姿を忘れてしまったわけではない。

「そもそもおまえは、あの男と……ッ！」

ルルーシュにしては珍しく、考えるより先に口走ってしまった矢先に、何の予備動作もなく平手で思い切り頬を張られた。

「妙な誤解をするなッ！ 私は断じて違うッ！」

言いがかりだ。

それくらい、ルルーシュだって十二分に自覚している。それでも。

だったら、いったいどうなのだ？

おまえは、何が理由で俺と一緒に暮らしている？

相手が、俺だったからなのか。

それとも、共に生きると誓った契約者に過ぎないからなのか。

自分の中にC・Cの存在感を根強く意識し始めることに、今まで揺るぎもなかった自信すら呆気なく地盤を崩してしまうから。

ルルーシュは、無言のまま華奢な相手の身体を腕の中に閉じ込めると、問答無用で唇をC・Cの顔に寄せていった。

「ルルツ……う……ッ」

口接けの方法くらい知っている。

己の欲望の赴くままに、相手の口中を蹂躪すれば良いだけだ。

けれども、四六時中ルルーシュの行動を監視している頭の中の批評家が、「やっぱりおまえも口先だけか」と高飛車に嘲笑してくれるので。ルルーシュは、寸でのところで狙いをわずか上方へ移動させると、ぷっくり膨らみを帯びている頬の表面に噛み付いた。

激情に流されている一方で、どうしてこいつの身体はこんなに柔らかいのかと感心させられる。

唇で触れたまま耳朶までの距離を辿り上げると、耳たぶを甘噛みする要領で前歯のあいだに挟みこむ。

弾力を味わうために力を加えた瞬間に、腕の中の身体がビクリと小さく弾んだが、しばらく待ってもそれ以上は一瞬たりとも逃げ出す様子もない。

どっちにしろ、今は逃がすつもりはなかったルルーシュは、耳朶から頬、そして唇までのラインを淡いキスの感触で辿り上げると、そこから自分を引き剥がすようにしてC・Cの身体を抱きしめた。つむじの付近に自分の頬を強く押し付けながら、他人事の心境で冷静に自分が呟くのを聞いている。

「……このまま頭から、バリバリ喰らい尽くしてしまいたいな……」
あんまり思いがけなかったのだろっ。

絶句している様子のC・Cが、ややあってルルーシュの胸元に

頬を預けてきながら囁いた。

「……試してみるか？　蘇生するのは保障済みだからな、だいじょうぶだとは思うが」

「馬鹿が」

逆に叱りつける口調で返しながら、ルルーシュはC・Cのひたいに自分のひたいを押し当てる。

瞳は閉じたまま、C・Cの視線だけは間近に感じながら。

「そこは冗談でも、泣いて嫌がる場面だろう？」

「おまえが真面目な顔で言うからだ」

真面目な顔で言いさえすれば、何にでも従ってみせるのかと、とつさにルルーシュは思ってしまったが、間近から覗き込んだ両の瞳が真実を如実に物語ってしまったていた。

全身全霊を込めて、自分のすべてを捧げてしまっているその瞳。

勘弁してくれと、ルルーシュは思った。

こっちはまだ20年足らずしか生きちゃいないんだ。

何百年も苦難の経験を重ねてきた魔女の人生を、今すぐ一思いに背負ってやれるほど人間もできちゃいないし、そもそも肝心の覚悟さえ固まっちゃいない。

まだまだ成長途上にある、ただの青二才なんだから。

そんな男に、すべてをゆだねるのは止めてくれ。

ルルーシュは、思わず逃げ腰になる自分の本心を隠したい一心でC・Cの頭頂部に頬を押し付けると、性懲りもなく強気を装う男の声を聞いていた。

「……何か欲しい物はないのか？　何でもいい、俺が叶えてやる」

C・Cは溜息混じりにルルーシュの背中を抱きしめ返すと、苦笑混じりに明るさを装う声が囁く。

「そんなにして貰わなくても、私なら平気だと伝えてあるだろう？」

「何だそれは……本当に欲の浅い女だな」

「言つたろう？　おまえがちょっと強欲なんだ」

今はまだ、自分のことだけで精一杯で。

C・Cも以前そう口にしたように、今はまだ満足に周りのことが見えていない。

だから、目の前にある幸福だけで満足してられるんだ。

そのクセ、俺には自分のすべてを丸投げにして。

俺まで無欲になつてしまつたら、俺たち二人の将来にはいったい何が待ち受けているんだ？

この先の人生もおまえは、今と同じような毎日が永遠にも続けば良いと思つていいのか？

その程度の幸福しか、俺には期待してないわけなのか？

言葉に言い表しきれない苛立ちを噛み殺しながら茫然と立ち尽くしているルルーシュの耳元に、ややあつて、ためらいがちに言うC・Cの声が聞こえた。

「おまえは？」

「……………ん？」

「そう言うおまえは、何か欲しい物はないのか？」

あんまり高価な品は無理だがな、少なからず小遣いも稼いでいることだしな、とC・Cは神妙な口調で訊ねた。

「そういえば、先日貰つたプレゼントのお返しもまだだつただろう？」

ルルーシュはなんだか笑つてしまった。

笑いながら、腕の中にある柔らかな女の身体を抱きしめる。

「……………だつたら、キスしてくれ、おまえのほうから」

C・Cは怪訝そうに声をひそめた。

「それくらい、いつもしていることだろう？」

だつたら、今すぐ俺の望むように愛してくれなんて。

言つても、おまえが困るだけだろう？

「いいだろ、別に。……………今はそういう気分なんだ」

C・Cの前ですら、平然と演技を続けられる自分をルルーシュは不思議に思つた。

ひよつとすると根本的な原因は、自分がC・Cを甘やかしてい

るというよりも。

やはり、自分が

「仕方のない男だな」

羞恥を誤魔化すために溜息混じりに呟きながら、大切そうに両手の中にルルーシュの頬を抱きしめてきたC・Cは、軽く背伸びをしてくるとルルーシュの唇に顔を寄せてきた。

ルルーシュは、頭の中に渦巻く数多の感情に身もだえするような心境で、そんな女の背中を力いっぱい抱きしめた。

腕の中で安心しきった表情で眠る女の寝顔を見守りながら、ルルーシュは黙々と考える。

抱いたら何かが変えられるのだろうか。

少なくとも、自分の不安は慰められる。

物理的にC・Cを所有すること。

だが、それでは所有される側のC・Cの幸福はどうなる？

毎日たがいが安心するために交わしている口付け。

それと同じ理由で、今度はたがいの身体を使って慰め合って？

一見して甘いだけの愛情という鳥籠に、どこまでC・Cを閉じ込めれば気が済むのか。

人の記憶は、物理的に脳細胞が欠損しなければ失われることはない。

夜毎に記憶の優先順位に従ってシナプスの統廃合を繰り返している脳細胞が、情報の精査を行っているだけだ。

だから一度は忘れてしまったはずの記憶でも、何かの刺激を与えれば、簡単に思い出すことが可能になるわけだ。

毎週末ごとに続けている話し合い。

コードの知識を共有するために始めたはずのそれだったが、まさしくその話し合いが刺激になり、忘れていたはずの記憶に頻繁な復活を促してしまっているのに気付いた。

だからルルーシュは、迷ってしまったのだ。

思い出した記憶を全部包み隠さず話してくれれば、ルルーシュだっていくらでも心の痛みを共有してやることも可能なのだ。

だがC・C・は、まるきり当然のように自分ひとりで抱え込んでしまうから。

表面的に甘やかな部分に関しては、丸ごと全部こちらにゆだねようとするクセに、今までひとりで背負ってきた心の傷に関しては、依然としてルルーシュの手の届く範囲から遠ざけてしまう。

よっぽど強引に「話せ」と迫ってしまいたかったが、強気な立場をかざしてC・C・にそれを促して？

そんな方法を繰り返せば、本当に心の距離を縮めることが可能なのか？

少なくとも、ルルーシュはそう思わない。

自分自身の幼少時代の記憶を悪戯に「話せ」と強要されれば、相手に対する嫌悪感を募らせてしまうだけで、どう間違っても心を許すことなど有り得ないと実感しているからだ。

だからC・C・のほうから自主的に、それを望んでくれるのであれば、いつまで経ってもルルーシュは、支えの腕を広げたまま茫然と立ち尽くしているしか方法がないわけだ。

そんな状態で、関係だけを進めてみる。下手をするとコイツは、この先一生隠し事を続けるはずだ。

今までの関係をやり直したいと望んでくれている一方で、実際は、共犯者時代の関係が続けているだけだ。

ルルーシュの愛情を利用して、今までずっと何百年も焦がれ続けてきた「愛される」感覚を表面的に手中に収めているだけに過ぎない。

どれだけルルーシュがそれを否定してやりたくても、C・C・自身が頑なにその境界線に踏み止まってしまっているわけだから。

おまえがもつと欲を出してくれさえすれば、俺だって潔く覚悟を決めることができるんだ。

もちろん焦る必要はないとわかっている。
時間をかけて着実に、C・C・の信頼を得るための努力を続けてゆけばいい。

もどかしいながらも、少しずつでも変化の兆しを感じ取っているわけだから。

ルルーシュだって初めのうちは、のんびり数年計画で樂觀視していられるつもりだった。

しかし。

「……ん……るるーしゅ……？」

吐くに吐けない溜息をかみ殺しながら、スルリとベッドから抜け出したところで、運悪く目覚めを促してしまったのだろう。

ほとんど寝言のような呟きで背中をかけられて、ルルーシュは顔を顰めながらぶつきらばうに返した。

「トイレだ。いいから、おまえは眠ってろ」

「……ふん、……えらそうに……」

滑舌の甘い舌足らずな言い方で、憎まれ口を返して。

さっそく身体を丸めて眠りに戻ろうとするＣ・Ｃ・に、軽くムツとしたルルーシュは、いつもはしないキスを落とした。

一瞬だけ薄目を開けたＣ・Ｃ・は、じきに満足そうに微笑むと、

ルルーシュが見守っているうちにも寝息を洩らして眠ってしまった。ルルーシュはしみじみ嘆息しながら、きびすを返した。

いつもはしない、眠る前に交わすキス。

習慣化を提示した範疇にも、最初からそのキスだけは意識的に除外していた。

今までもうずっと何年間も同居の関係を続けているわけだから、これから先だって何事もなく平穩に過ごしていられるとばかり思い込んでいた。

だがしかし、笑いがＣ・Ｃ・の日常に当たり前に浸透してゆくにしたがって、当然ながらそれに接しているルルーシュにも、それなりの変化をもたらしてしまっているのだろう。

シラフならともかく、あんなのが腕の中で眠っていて正気でいられるかッ。

正直、素直になったＣ・Ｃ・が、ここまで可愛くなってしまったとは。

ルルーシュの予想を遥かに超越した大誤算であり、それゆえにルルーシュは焦り始めているのである。

子供騙しなキスのひとつであんなに喜んでみせるなら、もっといくらでもＣ・Ｃ・が満足するまで構い倒してしまいたい。

いや、もっと露骨な言い方をするならば。

せっかくここまで素直になり始めた可愛い女を、横から別の男に奪われるくらいなら、今のうちに確実に自分の物にしてしまいたい。端的に言うなら、そう言うことだ。

「……自分でも、どの口が言うのかと罵倒してやりたい気分だがな……」

光源氏を気取るつもりはなかったが、さりとて今まで正常に機能し続けてきたはずの鉄の理性が揺るぎ始めているのもまた事実で。

C・Cの自主性を大切に見守ってやりたい気持ちも確かに存在するはずなのに、素直になるC・Cの可愛さが尋常でないものだから、嫌でも不安に駆られてしまうわけである。

「別に、男女の友情を否定するつもりはないけどね、でも客観的に見て、きみたち二人の関係は異常だよ！」

いつだったか、スザクに目くじら立てて言われた言葉を思い出し、ルルーシュは、思わずひとりで吹き出した。

そうそう、あれはたしか三人で同居を始めた初日だったな。

アーカーシャの剣から帰還して、一路向ったバグダードで。

ホテルの部屋を二部屋用意したまでは良かったが、当然の顔をしてくるC・Cの部屋に向うルルーシュに、スザクが顔を顰めながら言ったものだ。

「状況を考えなよ。気持ちは理解できるけど」

「……何の話だ？」

ただでさえ久方ぶりの再会で。

しかも考え得るかぎり最悪の状態まで気持ちが荒んでいるのを察していたのだろう。

恋人が当然の権利を行使して、ベッドの上で胡乱な真似に及んでしまう心配をスザクはしたのだ。

だが、もちろんその当時のルルーシュには、スザクの心配が理解できなかった。

顔中で疑問を呈しながら訊ねると、惚けていると誤解したのだろ

う、スザクが見る間に機嫌を傾けた。

「いいから、きみは僕と同じ部屋を使いなよ。彼女に免じて、それくらいの辛抱ならしてあげるから」

「馬鹿を言っな！」

今度はルルーシュが、口角泡を飛ばす番だった。

C・Cがどれだけ一人では何もできないかを実例を挙げながら力説し。

「そんな女を一人にさせてみる！ ホテルの設備が…果ては連帯責任で、こっちの迷惑になるのが目に見えている！」

スザクはそれでも信用した様子ではなかったが、あっさりルルーシュの言い分を通してしまったのは、夜中にC・Cの悲鳴のひとも聞こえたら、その時点で実力行使に出る算段でいたのだろう。

翌朝、まだ早い時間に部屋までルルーシュを迎えに来たスザクは、ひとつのベッドを平然と分けあつて眠る二人の姿を見つけて、憤然と先のセリフを叫んでくれたものである。

しかも例の如くにC・Cは、ルルーシュのシャツ一枚の格好で眠っていたものだから尚更だ。

しかし、なア…。

ルルーシュは、思い出した懐かしい記憶にクスクス肩を震わせる。あの当時は実際問題、ただの同居だったのだから仕方がない。

無意識のうちにもC・Cの存在に安眠を誘われることはあつても、やましい衝動に悩まされた記憶はただの一度もないのだから。

自分でも感心するほどに、見事なまでに皆無だったのだ。

それと同じ自分が、今はこうして同じ女を相手に胡乱な悩みを抱えているのだから可笑しなものだ。

古来、人間という生物は、生命の危機に直面した場合のほうがつぽど異性の存在を求めたがるものだ。

万が一、自分の身に何が起こつても、残される子孫が自分の存在

を後世に引き継いでくれるはずだから。

だが、ルルーシュが一度たりともその必要性を感じなかったのは、自分に対する愛情がそのまま形になっていたからだ。

自分の大切な者たちを守るために、世界を壊し、世界を創った。

新しい世界で大切な者たちが味わう幸福が、そのまま自分の幸福に繋がるわけだから。

だから自分が生きることをあきらめた世界に、わざわざ子孫を残す必要性を感じはしなかったのである。

「本当に、我ながら……ロクでもない生き方だったからな」

いつだって幸福は身近な場所に存在したのに、盲目的に信じる道だけを追いかけた。

目的を達成した後の世界に、はたして自分は何を思い描いていたのだろうか。

「……いまさら言っても、仕方のない結果論だな」

ひょっとして、自分以外の誰かではなく、自分が笑っている姿を想像する余裕が備わっていたなら。

また別な結論を導き出すことも可能だったのだろうか。

一度はその道を選べなかったはずの自分が、今はこうして迷走を続けながらも、C・C.と一緒に生きていたいと望みを繋げてしまっている。

おそらくC・C.を愛する一方で、自分は確かめたいのではないのだろうか。

自分のような男でも、生き方次第では幸福になれたのかもしれない。

だからこそ自分自身で完璧に生きる余地をなくしてしまった新しい世界で、こうして影ながらに無力に生きている自分を許容することができている。

みつともなく足掻きながらも、それでも本当の幸福を味わってみたいのだ。

「……こんな俺を、おまえは……許してくれるか？」

結果的に、おまえの幸福だけは全部根こそぎ取り上げて。今もまだこうして、俺はおまえに嘘をつき続けている。潔く、後の世界を守る決意を示してくれた枢木スザク。

俺がコードを継承している事実に気付いていても、それでも俺の信じるままに最後まで付き合い続けてくれた男。

「……会いたいな……」

そして、罵倒でも何でも構わないから話をしたい。

あれから一年近く経過して、ずいぶんとＣ・Ｃとの関係も変わってしまったが、今でもスザクは有り得ないと断言してくれるのだろうか？

今でもＣ・Ｃがどんなに厄介な女であるのか、あいつなら呆れ顔をしながらでも最後まで話を聞いてくれるはずだから。

そうして頼みもしないのに、アドバイスめいた発言を返してくれるはずだから。

「……自分は、おまえの大切な相手を殺しておいて……虫の良い話だな」

だから、会わない。

会うことはできない。

スザクにも、ナナリーにも　いずれ集合無意識に吸収され行く全員に。

それが、俺の選んだ罰だった。

ルルーシュは、憂鬱の色味を増しゆく濃い溜息を肩から大きく吐き出すと、先に宣言したトイレではなくキッチンに向った。

体内に残留しているアルコールを、寝る前にリセットしておく必要性を感じたからである。

たとえＣ・Ｃがどんなに厄介な相手でも、だからと言って誰に

も相談することも許されず、頼みの綱は自分の判断力ひとつきりなのだから、鉄の理性が頼りにならない今、慎重な行動が過ぎるといふことはない。

だから『迎え酒』ならぬ、限界酒量に導くために更なるアルコールを欲したわけだったが。

最終的にスコッチのボトルを丸々二本、一気飲みしたところでようやくコードが発動した。

「不経済だろう」

ルルーシュは、ひとりで憤然と不満を吐き出した。

第五話：フォー・エバー

このお話は「R-18」の作品となります。
18歳以上の方は、下記のアドレスにアクセスしてください。

掲載サイト：ノクターンノベルズ（男性向け18禁。 <http://noc.syosetu.com/>）
第五話：フォー・エバー：<http://novel18.syosetu.com/n2258m/8/>

番外？：ゲラン・ダムール（？）

夏の時期ほど濃淡の明瞭でない青天井には、薄い絹を丁寧に広げたような白雲がわずかばかりに浮かんでいる。

きらめく波間を優しく撫でるように吹きゆく潮風は、すっかり冬支度を終えている黄金色の牧草地に受け継がれ、野中の一軒家の裏庭に所狭しと干してある色とりどりの洗濯物を興味深げに揺らしては、悪戯が見つかる前に颯爽と通り過ぎてゆく。

牧歌的な冬の離島の風景を丸ごと見本に切り取って、大切に保存しておきたくなるような温かな午後のひととき。

そうでなくても今日という一日だけは、何が何でも穏便に過ごしたいと切つてみせるのだと、朝から厳格に祈りを込めて誓いを立てていたルルーシュは、目前に差し出されているケーキの皿を前にして、どうしようもなく唇の端が引き攣るのを感じていた。

「パパッ！」

「おとーさんッ！」

「たんじょうび、おめでとウッ！」「ございますッ！」

「……はいはい」

うなじのラインでスッキリ切り揃えられた黒髪。

形の良いひたいは無造作にさらけ出し、優しげに細められた眼差しは、髪の色をそっくり映したような烏羽色だ。からすば

彼の容姿の印象的な部分に若干の変化を与えることで、一見した風貌を30歳前後の青年風に変えてはあるが、全体的な雰囲気は少々シニカルで、相変わらず情には脆いルルーシュ独自のものである。そんな彼の一挙一動を、テーブルを挟んだ向かい側から熱心に見守る二対の眼差しがある。

うなじのラインまでサラリと流れ落ちている黒髪。

ふっくら丸みを帯びている両頬は、今にも喜びと緊張の興奮には

ち切れんばかりだ。

そっくり同じ容姿の三歳児が仲良く肩を並べている事情に関してなら、彼らが性別だけの違った一卵性の双生児である事実だけでも簡単に説明がついてしまうが。

成長を重ねるほどに、まるきり生き写しかと疑うほどに皇子時代の自分に似てくるのは、正直父親であるルルーシュに、じんわり焦りを覚えさせてしまうほどである。

だがしかし、自分を見つめるキラキラとした金の眼差し。

そこから得られる圧倒的な圧力だけは、どう考えても『母親譲りだろうッ！』と恨み混じりに考えながら、ルルーシュは、見た目ばかりは冷静にフォークを取り上げると、サクリと一口サイズに切り取ったケーキを口の中に運んだ。

「おいしい？」

ルルーシュは、こめかみにビキビキと青筋を浮かべながら、それでもニッコリ満面の笑みを浮かべた。

「ああ、美味しいよ。どうもありがとう」

たとえスポンジの厚みが1センチに足りていなくても、これは何が何でもケーキなのだ。

たとえデコレーションされているのが、ベーコン、アボカド、パイナップルに三色ピーマン、フルーツトマトに山盛りのチーズでも最上部に純白の生クリームで飾り付けがされている以上、これは何が何でも誕生日ケーキなのだ。

「わあッ！」

「やったあッ！」

たちまち躍り上がって喜ぶ双子は、我先に自分もフォークを取り上げると、さっそくケーキに齧り付こうとした。

だが、今度ばかりは余裕の態度で双子の行動を読んでいたルルーシュは、実にさりげない仕草ひとつでその勢いを遮った。

「駄目だぞ、これは俺のものだ」

「ええええッ！！」

「記念の品だからな、今日のところはアイツの作った分で我慢しておけ」

やさしげな視線のひと振り、部屋の入り口のほうを指し示す。温かな冬の陽射しに満ち溢れているダイニング。

屋敷に備え付けの家具は、^{アンティーク}しつかり隅々まで手入れの行き届いている証拠に、清潔感に溢れた光沢でそこら中をキラキラ輝かせていた。

疑うことを知らない子供たちが素直に振り向いた先から、一瞬の間を挟んで、彼らの母親が颯爽と姿を現した。

絹糸のように美しい緑の長髪を首の後ろで束ねたエプロン姿で、両腕に抱えるほど大きなトレイを運んでいる。

「まったくもおっッ！」

「しかたがないなあッ！」

赤く実った林檎を思わせるツルリとした頬つぺたを精一杯に膨らませながら生意気を言う双子の鼻先をわざと掠めるようにして、優しい微笑を浮かべた母親が通り過ぎてゆく。

ふんわり甘いミルクのような母親の匂いとは、また別のイイ匂いを発見した子供たちは、あっという間に興味の矛先を移していた。

わくわくと瞳を輝かせながら母親が純白の特大ケーキを切り分けてくれるのを待ち、「さア召し上げれ」と許しが出たのを合図に、シロップ漬けの白桃と洋梨が敷き詰められているスポンジケーキを口の中一杯に頬張って、感激のあまり軽く涙目になりながら、満足そうに「あまいー」と舌鼓を打っている。

「おい、おまえ」

やがて聖女のような微笑みを浮かべながら、テーブルを回って歩み寄ってきたC・Cに、ルルーシュはこっそり小声で囁みついた。「どうして止めなかったんだ？」

「何の話だ？」

「とぼけるな。黒コショウが利き過ぎている割りに、塩を使い忘れているが、ベーコンとチーズの塩加減で、それなりに食べられない

物じゃない」

「だろう？ 完成する直前にピザのトッピングだけ試食させてもらったが、初めて作った割りに、なかなかの腕前だと感心したぞ？」
「だったら尚更だ、どうして止めない？ ピザの上に山ほど盛り付けてある甘い生クリームの味わいが…… まったり喉の奥まで張りついて……」

いかにも辛そうに声を詰まらせる様子に、C・Cは涼やかな微笑を浮かべながら、用意しておいた口直しのハーブティーを渡した。そして傍目には、まるきり愛の言葉でも囁き合っているような雰囲気、至極ご満悦に言って聞かせたものである。

「気色の悪い薄ら笑いを浮かべるな。子供たちが真似をしたらどうする？」

「黙れ。俺だって好きでやっているわけではない」

「やせ我慢しないで、素直に感想を伝えてやれば良いだろう？ 初めのうちは、傷つくのも経験のうちだぞ？」

「フン、そういうセリフは、来年のおまえの誕生日で、実行に移してから言ってもらえるか？」

「フツ、何のためのスケープゴートだと思うてる？ 愛する奥さんのためだろう、せいぜい張り切って料理の腕を上げてやれ」

「寝言をほざくな。そもそも今回の場合は」

「自業自得だろう？ そもそも私は一度も頼んだ覚えは無い。毎年勝手にエスカレートして、凝った演出に走りたがるおまえが悪いんだ」

たがいに顔の表面には親密そうな微笑を貼りつけながら、ふふふっとひととき可愛らしく微笑を交わしたC・Cは、小鳥のように可憐に小首を傾げながら平然とのたまった。

せっかくの努力を悪しざまにトドメを刺されたルルーシュは、さすがに目の端がピクピクツと痙攣するのを止められない。

今を去ること二週間前。

世間的には『ピザの日』である11月20日に、C・Cは23回目になる誕生日を迎えた。

もちろんルルーシュが八年前に、勝手に決めた誕生日に過ぎなかったが。

ついでにその日は『結婚記念日』も兼ねているが故に、どうしてもC・Cに対して甘い演出に走りがちだが、幼い子供の目にも幸福そうな両親の姿を見るにつけ、わずかばかりの疎外感を覚えてしまったのだろう。何が何でも自分たちの力だけで、愛する父親の誕生日を祝うのだと、こっさり それでも両親の目にはバレバレの様子で 騒ぎ始めて、慎重に協議を重ねた結果、「父親の好物を作る」という結論に達したのだ。

「それで、どうしてこんな『ピザもどき』が完成するんだ？」

あくまでピザは、おまえの好物だろう？ と視線のやり方だけで揶揄すると、

「あれだけ頻繁にピザを作っている姿を眺めていれば、誰だって誤解もする」

C・Cは、どことなく視線を逸らし気味にそう答えた。

結局、おまえの責任じゃないか。

内心で思い切り舌打ちしたルルーシュは、ひときわ晴れやかな日にふさわしい満面の笑みを浮かべた。

「だったら、これは二等分だな」

我ながら虫唾が走るほど甘ったるい口調で言っただけで聞かせてやりながら、サクサクと二等分に切り分けてしまったしサイズの誕生日ケーキを、ここぞとばかりに遠慮なくC・Cの皿にこっそり盛り付けた。

C・Cは、たちまち眉間に苦渋の皺を刻んだが、最初からあきらめる用意はしていたのだろう。

じきに観念した様子で、隣りの席に腰を下ろした。

「うっ」

「笑え。眉間に縦皺が寄っているぞ？」

「しかし、……何だア？ この妙に甘くてねっとりした感覚は？」

「生クリームの中に、大量の溶かしバターが投入してあるんだ。隣家の奥さんが得意なレシピだな」

「うっつ、今頃になって黒コショウが利いてきた……ッだ、誰だッ、わたしがあれほど止めたのにッ……ご丁寧にもスポンジの中には……ニッ、ニンニクとタマネギまでッ？ ……ッしかも、この黒いツブツブは……ッ！」

「どう考えてもバナニラビーンズだな。ついでにバナニラエッセンスまで大量に投入してあるせいで完成している苦味だ。おまえの監督不行き届きだろう？ あきらめろ」

すっかり達観した様子のルルーシュが涼しげに言うのも道理、早朝から「キッチンには立ち入り禁止！」を厳重に言い渡されていたわけだから、見張り役はＣ・Ｃに一任されていたわけなのだ。

ためしに一度双子の実力を測ってやるつもりで、基本は放置で温かく見守っていただけのＣ・Ｃは、今にも泣き出しそうな顔をしながら、食道にまとわり付く生クリームの残滓をハーブティーで洗い流した。

「……これで笑っていられる、おまえの気が知れん……」

あんまり憐れっぽく呟いてみせるものだから、さっそく意趣返しをした気分のルルーシュは、愉しげにクツクツと肩を揺らして笑っていた。

仲睦まじげに囁き合う夫婦の様子を、テーブルを挟んだ向かい側から、双子はチラチラと上目遣いに観察していたのだが、

「……おいしい？」

ややあつて不安そうな面持ちで、今度はＣ・Ｃに感想を求めてきた。

すかさずテーブルの下でルルーシュに爪先を蹴られていたＣ・Ｃ・

は、ニツコリ満面の笑みでルルーシュの向こう脛を蹴り返ししながら答えた。

「ああ、美味しいぞ。是非とも、お父さんにも作り方を教えてやってくれ」

「うんツ、よろこんでツ!!」

喜んだ双子は、ついでおかわりの催促をしてきた。

C・Cは、「一度だけだぞ?」とやさしく念を押しながら、双子の皿に自分の作った甘いケーキの一片を盛り付けた。

そして、また内心では盛大に溜息を吐き出しながら、山ほど残っている拷問のような品物を片付ける作業に着手したのだが。四口目あたりで切実に口直しの必要を感じて、C・Cは自分の皿にも切り分けたケーキの一片を盛り付けた。

その様子を、黙々と口を動かしながら、見るとはなしに眺めていたルルーシュは、ややあつて万感がない交ぜになっている溜息をこっそり吐き出した。

「俺の分も残しておけよ」

「まだ食べる気か?」

この拷問食材を完食した後で?

気でも違ったか? といわんばかりに、大きく目を見開きながら驚くC・Cの様子に、むしろルルーシュは、胡散臭げな顔つきでぶつきらばうに返した。

「俺のために作ったケーキだろう? 俺が味わわないで、どうするんだ」

言いながら、ホイップクリームで白ひげ状態になっているナナリの口元を拭ってやり、その様子を横から羨ましそうに眺めていた口口の頬つぺたも、意味なくギョツと無造作につまんでやる。

普段から、ときどき態度にはそっけない所もあるけれど、その指先の温もりを知っている父親から均等に世話を焼かれた幸福感から、

今度は双子がクスクスと肩を寄せ合い囁き合う番だった。

「ほらほらみて、ナナリー？」

「うん、またやってるね」

「おかあさん、まっかつか」

「わたし、しってる。それってね、パパのことが、だぁゝいすきな
ショーコ？　なんだって。となりのおばさんが、いった。でもね、
ショーコ？　ってなに？　ロロおにいちゃん」

「……うるさいぞ、おまえたち」

幼い子供たちの遠慮のない指摘に、Ｃ・Ｃ・は白磁の頬を真っ赤に染めながら唸るように返した。

だが、あまりに弱々しい反撃だったので、食べるのに夢中だった子供たちの耳には届かず、慣れているルルーシュは故意に無視した。
「なんだおまえ、去年よりまた腕を上げてるか？　子供たちが好んで食べるには、少しばかりリキジュールが強いような気もするが」

「でも、ママのもおいしいよ！」

「うん、おいしい！」

「フン、平気な顔をして。今から将来が愉しみだ」

その頃には、すっかり子供たちのケーキを完食し、Ｃ・Ｃ・の作ったケーキを食べ始めていたルルーシュに真面目な顔で感想を告げられて。

Ｃ・Ｃ・は、ひとり懔然と羞恥に頬を染めながら、ばくりと口の中一杯に子供たちのケーキを詰め込んだ。

「黒百合を一本」

実の兄とは言え、悪逆皇帝などと呼ばれた非道の男には、それだけでも充分すぎるほどですわ。

ナナリーは、微塵も表情を変えることなく、満座を埋め尽くした記者たちに向かってそう宣言した。

しかし陛下は いえ失礼、かの悪逆皇帝は、幼少の時分から、男手一つで貴女を守って育ててこられた。その恩に報いる必要は感じられないのですか？

「恩？」

その恩とは、世間一般の常識に照らし合わせて、果たして全うに通用する類いのものでしょうか？

たとえば貴方の奥様が、何かの間違いで、通りすがりの人間を無分別に千人殺したと致しましょう。

その千人の中に運悪く、貴方のご両親や、ご子息、ご令嬢が含まれていたと致しましょう。

それでも貴方は奥様の正義を信じて、その存在に感謝の念を抱き続けることが可能でしょうか？

「わたくしの兄は実際に、今の例え話を上回る悪行を重ねたのです。残念ですが、情状酌量の余地は、微塵も残されておりませんわ。

「他に、ご質問は？」

無ければ、これで終わります。

自力で車椅子を操って、会見場の舞台袖まで引き上げてきたナナリーは、まるきり矢継ぎ早に投げつけられる石つぶてにも等しい無数のフラッシュに照らされても、一瞬もその双眸を揺らしはしなかった。

「お疲れ様です、ナナリー様」

やがて日常的に使い慣れている庁舎の一つに戻ってきたナナリーは、今ではすっかり見慣れてしまった仮面の男に出迎えられた。

全身を装飾的なスーツに包み込んでいる細身な立ち姿。

鋭角的な印象の際立つフルフェイスのマスク姿を眺めても、沸き立つ感情をなだめることは今では容易なはずだったが、仮面越しにも感じられる眼差しの織り成す雰囲気、意地を張り続けている自分のほうが何だか馬鹿馬鹿しく感じられて。意識的に顎先をグツと手前に引き締めると、ナナリーは禁断の問いを投げかけた。

「ゼロ　いえ、スザクさん。今から二時間だけ、そう呼ぶことを許して貰えませんか？」

もちろん仮面の男から返答は無かった。

最初からそれを予感しながら、覆ることのなかった現実、ナナリーは小首を傾げながら儚く微笑む。

「八年経っても、あなたはお兄様のギアスに掛かったままなのですね」

ナナリーはそう言って、疲労の滲んだ苦笑を洩らすと、ふたたび他愛無い質問を投げかけた。

「スザクさん　いえ、ゼロ。どちらでも構いません、午後からのご予定は？」

「例年通りです」

それには間髪入れずに返された、無機質な変声機越しの声。

ゼロ・レクイエムの後、後世の歴史家を気取ったジャーナリスト達が、悪逆皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの私生活を掘り返すのと同時に、宿命のライバルとしてゼロの正体にも執拗に探りを入れ始め、過去の演説を判断材料に、こぞって声紋鑑定に持ち込んだが、それでも男女の判別すら言明することは難しかった。

元は、廃嫡皇子である身分を隠すため。

だが、こうなってしまった現在、まるきり最初から中身が入れ

替わることを前提に、デザインを含めた詳細を詰めてあったのではないだろうか？ と時々ナナリーは考える。

「では、お願いします」

軽く吐息しながら車椅子の背に背中を預けると、仮面の男は軽い仕草でマントをひるがえし、ナナリーの車椅子を押し始めた。

歴代の皇族たちが葬られている地下霊廟。

その末席に神聖ブリタニア帝国最後の皇帝として雑然と放逐されているのが、かの悪逆皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの亡骸を納めてある粗末な棺である。

もちろん一般市民は立ち入ることを許されず、長年世襲する形で管理の全般を担当しているはずの墓守さえ、生理的な嫌悪感から世話を焼くのを放棄しているのだろう、生前あれほど潔癖症であった事実が、今では皮肉な結果に成り下がり、一年のうちに堆積した埃にすっかり埋没してしまっていた。

最初からそれを承知で、掃除の道具を持参していたナナリーは、時折仮面の男の手を借りながら、石灰色の粗末な棺を本来の色味に戻してゆく作業を続ける。

けれども、日常的に雨風に晒されているわけでもなければ、単純に時の経過に伴なって堆積しただけの綿ホコリや砂塵を取り除くだけの作業など小一時間も経たずに完了して、ナナリーは棺のそばに車椅子を押しつけると、まるきり生前兄と対峙した時と同じように話し始めた。

「お兄様、誕生日おめでとございます。私はこの10月で23歳

になりました。もう五年も、お兄様より年長なんですよ?」

言いながら、棺の下の胸元に当たる部分に差し出したのは、先に宣言していた通り、一本の黒百合だけである。

ナナリーは、その細く、美麗に整えられた指先で、戯れに花弁を弄びながら囁き続ける。

「一度でいいから、お兄様のお顔をひとめ拝見したくて…先日ジェレミア卿を、少々脅してしまいましたの」

「ナッ」

その背後から、とつさに押し殺し切れなかった驚きの声が発せられた。

声の主は、もちろんゼロである。

変声機越しの無機質な声音に違いはなかったが、常ならぬ動揺の気配が可笑しくて。

ナナリーはクスクスと明るい笑い声を、ひとしきり天井の高い空間に溢れさす。

「お兄様のお骨なら、たぶん美しいと思うのです。一度でいいから思う存分に抱きしめて、八年分の恨みつらみを直接ぶつけても構いませんか?」

「ナナリー様、……それは、許されざる死者への冒瀆だ」

激憤を辛うじて押し殺しているような呟きが背後から発せられて、ナナリーはゆるく両腕で兄の棺を抱擁しながら返した。

「どうしてです? 八年前、その手でお兄様を殺した張本人が。今頃お兄様の尊厳を守る行為に一体何の価値がありますか?」

「悪逆皇帝ルルーシュは、その命で犯してきた罪過を贖った。それ以上の断罪は、唯一神だけに許される行為だ。たとえ相手があなたであれ、踏み込んで良い領域ではない」

「調子の良いことを仰るのですね。本当は、恐れているだけのクセに」

「ナナリー様」

「お兄様と対面して、今のご自分との違いを見せつけられる。ご自

分の成された、『行動』の『結果』を直視するのが怖いのでしょうか？」

「……………」

返されたのは、重苦しいまでの沈黙。

ナナリーは、臆した様子もなく可憐に微笑む。

「先日、行政特区日本の惨劇を、この目で委細洩らさず確認致しました」

「……………」

「メディアに対する封印も、そろそろ綻びが目立ち始める時期ですもの。もしかやと疑ってみましたら、案の定でしたわ。取り急ぎ、次善の策は指示しておきましたからご心配なく」

ゼロは、冷え切った声音で了解した旨を伝えた。

ナナリーは、歌うような抑揚で話を続ける。

「いずれにせよ、驚きました。噂どおりユーフェミア副総督は、本当に笑いながら無抵抗の日本人に銃弾を放っておられた」

「しかしあはは、ルルーシュ皇帝のギアスに操られ」

「そこで疑問に思うのです。私がルルーシュ皇帝なら、最初の銃弾が発砲された段階で、何より先にユーフェミア副総督の身柄をどこか安全な場所に確保して、後々交渉に利用するための人的財産として拘束する道を選んでいたはずでしょう。コーネリア総督がユーフェミア副総督に大変お甘いのは、ブリタニアの内外問わず周知の事実だった。それなのに、みすみす貴方に殺させた」

「……………」

「あの時点で、誰よりホツと胸を撫で下ろしていたのは、他ならぬシュナイゼル第二皇子でしょうね。ユーフェミア副総督に行政特区日本の宣言を許可したのは彼ですから。あまつさえ半ばその権力でコーネリア総督の反対さえも押し切った。あのままユーフェミア副総督が存命していれば、さぞかしその後の扱いに苦慮したでしょうし、果たしてその失態を、先王シャルル・ジ・ブリタニアが看過してくれたでしょうか？」

「あの時点で、第一に優先すべきは、可及的速やかに人的被害規模を縮小する以外に考えられなかった筈だ。相手が誰あれ、そのように人命を軽視すべきではない」

「ああ、なるほど？ ひよつとすると、あらかじめ口封じの約束を交わしていたのかもしれませんがね？ 肚の探り合いと、水面下の交渉事は、何より貴方とシュナイゼル第二皇子の常套手段でしたもの」

「……………ナナリー様」

「それから更に一年後、ルルーシュ皇帝はゼロを抹殺する目的で、トウキョウ租界にフレリアを投下した。発射スイッチを押したのは、ルルーシュ皇帝のギアスに操られていた枢木スザクです」

「……………ナナリー、様」

「戦力的に大きな開きはあったとはいえ、あの当時から既に貴方の用いていた戦略は、シュナイゼル第二皇子率いるブリタニア軍に逼迫していた。ルルーシュ皇帝の目的は、あわよくば世界二頭の指導者であるシュナイゼル第二皇子とゼロを同時に抹殺すること。結果的に壊滅状態に陥った両軍は、ついに表舞台に姿を現したルルーシュ皇帝の前に、互いの利益を優先して手を結ぶしか方法が残されていなかった」

「……………」

「それでも、お兄様は目的を達せられたのです。当初の目的は、不具の身体である私が誰より住みやすい『優しい世界』を創るため。けれども私は、微塵もそんな世界の実現を望んでいなかった。結果的に逆鱗に触れられてしまったお兄様は、……………ふふっ、お可哀想に。個人的な復讐の手段として、世界を恐怖政治で牛耳った。憐れなものですわね、実の妹に拒絶されたぐらいで、あれほど簡単に見境を失って」

眩きながらナナリーは、黒百合の輪郭を愛撫するように、執拗に繰り返していた。

だが、刹那。

ナナリーは、力強く握った拳で、黒百合の花弁を叩き潰した。

震える肩のラインは、ゼロ・レクイエム後の八年間で、少女のそれから妙齡の貴婦人へと目覚ましい変化を遂げていた。

けれども、今現在の医学をもつてしても、決して動かぬその両脚。

「……どうして私に、ひとこと相談してくれなかったのですッ？ お兄様は昔からそうだった、何でも自分ひとりで抱え込もうとして、私には決して本心を明かしてくれようとはしなかったッ！

結局、お兄様を追いつめてしまったのは、ほかならぬ私自身なのです。私さえ迂闊に、『優しい世界』など望もうとしなければ、

いいえ、そもそも私など、初めから存在しなければ……ッ！」

激昂しながらナナリーは、何度も棺の上の黒百合を叩き潰した。

ナナリーが口にしたのは、ルルーシュの創り上げた『優しい世界』にまかり通っている湾曲された真実。

ダモクレスの最終決戦で、ナナリーが自らの意思でフレイアを発射した事実さえ、ルルーシュのギアスに操られた結果として、まことしやかに嘘がまかり通ってしまったている。

実の妹すら効率的に利用することで、ギアスという力の残虐性を見せつけ、影ながらその力を行使していた自らの存在悪を、より卑劣な方向に演出しているのだ。

おかげで、戦争という特殊な状況下で、自らの内面に潜んでいた残虐性に気付いた一般人までもが、「自分はルルーシュ皇帝のギアスに操られていたのだから仕方が無い」と有りもしない事実をでっち上げ、いつしか既成事実として信じ切ってしまったている。

戦争が無くなり、心の平穏を取り戻した後の人々が、悩まされて当然の良心の呵責すら、ルルーシュは自らの身を代償に集めてしまったのだ。

そうして、当たり前のように存続されている『優しい世界』。

「さあ！ これで全てのシナリオは出揃いましたわ！ ご満足でしょうか？ すべてはお兄様のお望み通り順調に軌道に乗っているんですもの。でしたら今度は、私の願いを叶えて！ お兄

様に会いたいッ……お兄様の声が聞きたいッ…… お兄様は……嘘つきです……ッ……どうしてこんな……ひどい……嘘ッ……ッ……」

ダンッ、ダンッ、と鈍い音を響かせながら打ち続けるうちに、四散してしまった黒百合の花弁をナナリーはギュッと激しく爪を立てながら、手のひらの中で握り潰した。

せつかく綺麗にしたばかりの石蓋には、黒百合の花汁が作ったシミが転々と散りばめられ、まるきり乾いた血痕のように黒く、その周囲を汚している。

「……………こんな、他人にだけ『優しい世界』……ッ……本当に、私が望んでいたと思うのですかッ?! 答えてください……ッ……おにいさま……ッ……!! ……」答えなさいッ……!!」

そう叫ぶなりナナリーは、両手で握った拳でダンッ! とひときわ激しく兄の眠る場所を打ち据えた。

ゼロ・レクイエム後の八年間、一度もハサミを入れることの無かったハニー・ブラウンの長髪が、ナナリーの動作に数秒遅れて棺の上に降り注ぐ。

「……………きみはそう言つて、自分を責めてるみたいだけどね……」
「……………」

甲高い女の悲鳴と、石の棺を打つ残響が、天井の高い乾いた空間に染み入るように消えた頃、

変声機越しではなく発せられた男の肉声に、ナナリーはまさかの心境で茫然と絶句しながら振り向いた。

「……………スザク、……………さん……?」

仮面の男は、両手で抱えた黒の仮面に語りかけるように、静かな口調で話し続けていた。

「残念だけどルルーシュは、きみの考えているほど強い人間じゃない。きみが存在しなければ下手をするとルルーシュは、八年前よりずっと以前に自分で時間を止めていたはずだよ」

遠い夏、枢木神社に送られてきた幼い少年の姿のままで。

朴訥に語り続ける男の声音は、当然ながら、八年前とまったく同

じというわけにはいかない。

どこかしら甘みを残している話口調に変化はなかったが、喉元に鋭くせり出している喉仏の形に比例して低く、一般的な26の青年が用いるよりも深みのある独特の落ち着きが備わっていた。

ともすると、自分でも忘れてしまいそうになる男の素顔。

黒光りする仮面の表面に、ぼんやり映し出されているその姿を、

無感動に眺めながらスザクは語った。

一段と感情の見えない声音で淡々と。

「ルルーシュは、交渉の道具として利用しなかったわけじゃなく、単純に、自分が昔されたのと同じ手段で、生きながらユフィを利用するのに耐えられなかった。それ以前に、自分のギアスが狂わせた、彼女の姿を直視してられなかっただけなんだよ。だから、殺した。思い出の中のユフィを穢したくない一心でね」

「……………」

「それでもルルーシュは、大義名分をあきらめることが出来なかった。その意味では、確かにルルーシュを今生に繋ぎ止めていたのはきみだよ。だから僕は、その大義名分を完全に消し去るために、きみに向かってフレリアを打ち込んだ。その時点で、ルルーシュには生きていく理由が無くなった」

天井の高い空間には、12月独特の冷え切った大気が鈍重に動きを失くしてたぐまって、物言わぬ無数の屍を包み込んでいる。

ナナリーは、自分の指先がカタカタと、小さく音を鳴らして震えている事実気付いていなかった。

「……………でしたら、…………お兄様は、単純に自殺をしたただけだと…………あなたはその手伝いをしたただけだと…………そう仰りたいのですか？」
呟きは無数に水蒸気の輪を作り出し、その勢いに比べれば、実際に言葉として成立した単語はわずかなものだった。

だが、察したのだろう。スザクは、横目で流し見るようにナナリーに視線を注いで、若干瞳の力を抜くことで微笑んだ。

「違うよ、ナナリー。ルルーシュは、生きていたんだ。きみという

存在を失っても、それでも彼は生きていた。生きたいと望んでいる自分に気付いてしまったんだ。だから、必要とした。生きるために必要になる新しい理由をね」

「でしたら、お兄様は…どうしてッ」

「きみを失っても、まだルルーシュの手元には、きみから託された願いが生きていた。その世界を実現することが、唯一18年の人生を生きてきた理由にも繋がる」

「自分が存在できない世界の実現なんてッ！」

「でも、最初からルルーシュは、それしか望んでなかったんだよ。

混沌とした世界の成れの果てで、それでも自分は、大切な人々たちを守りたいと願った。そのためには一体何が必要か？ 簡単だ、戦争を失くしてしまえばいい。では、争いの引き金となるのは何物か？ ルルーシュは、『憎しみの感情』であると考えた。たとえば一時的にしる『憎しみの感情』の連鎖を断ち切ることが可能なら、その間に人は、よりもっと生きやすい方法を模索することも可能はずだ。真実きみが願っていた通りのね」

「私は一度もッ…そんな世界ッ！！」

「願ったことが無いと、僕の前でも誓える？ 残酷なようだけ

ど、きみと、僕と、そしてルルーシュが、願っていたのは、たったそれ一つだけのことだった。単純に、それを実現するために、選んだ方法だけが違っていた。僕は、ブリタニアを中から変えたいと願った。ルルーシュは、最終的に自分が勝つことで…自分が選んだ誰かを勝たせてやることで、戦争を終わらせたいと願った。そして

きみは、他人に優しくなれる世界を願った。僕たち三人の願いがそれぞれ叶った形で、今の世界がここにある。ただ、それだけの話さ」

「そんな…ッ…！」

腕の力だけで、半ば棺の上に身を乗り出していたナナリーの身体が、小さく叫んで茫然自失した瞬間に、ガックリ支えを失って、そのままズルリと力なく床の上に滑り落ちてゆく。

「それではお兄様は最初から…、私と共に『生きる』という選択肢は考えて下さらなかったのですか？」

「……………」

「たしかに私は、お兄様の優しさに甘えるばかりで…出来ない妹だったのかもしれない。自分の力だけでは何ひとつ、真実を見抜こうとする努力すら怠ってきたのかもしれない。……それでも」

「……………」

「それでも、私はいつだって、……お兄様と一緒に居られることを前提に、『優しい世界』を望んでいて……お兄様が、創りたいと望んだ世界だからこそ、今もこうして……こうして…ッ…！」

まるきり何かの間違いで突堤から海中に転落した人がするように、無意識のうちにも懸命に、両腕の力だけで石の棺に縋りつき。

けれども、そこで初めて、語りかけていた相手が、物言わぬ棺に過ぎないことを自覚したような表情で、ナナリーは茫然と冷たい棺の側面にひたいを押しつけた。

たしかに、認めたくないだけだったのかもしれない。

兄のシナリオの実現に毎日忙しく傾注することで、この八年来、少なくともその日常には以前と変わらず兄の意志が生きていた。

たとえ姿かたちは眼に見えなくても、兄の存在感が変わらず感じ続けていたのである。

だからこそ、この八年来、ずっと意識的に禁断にしていたその問いかけ。

どうして兄は、自分を置いて一人で逝ってしまったのか？

兄の残してくれたシナリオが出尽くしてしまった今、これから先は兄の遺志に従って、自分の力だけで、『優しい世界』を守って行かねばならないから。

だから決して、志半ばで心が挫けてしまわぬように

カラカラと遠ざかってゆく車椅子の乾いた音をBGMに、慟哭するナナリーの背中を眺めながら、スザクはややあって黙想するように目を閉ざした。

ナナリーが、ジェレミアを「脅した」というその一件。

おそらく、棺を開蓋するために必要となる、パスワードを訊き出したのであろう。

だが、そのパスワードが無効であることを、既にスザクは承知していた。

八年前、自分も同じ手段で、確認済みだったから。

「　　なア、スザク？　勝手な言い分に聞こえるかもしれないが、俺は、おまえに出会えた１８年の人生が間違いなく幸福だったと思えるよ」

毎日忙しく、他人のために働き詰めだった仮の皇宮で。

慣れない事務方の作業に、スザクの集中力が途切れた一瞬に、同じように、つかの間の休息を求めて、窓の外の景色を眺めていたルーシュが、何の前触れも無くそう言った。

燦然と輝く窓からの陽射しに、幸福そうに眼を細めて微笑みながら。

スザクは一瞬、そのまま手放して泣いてしまいたいと思った。

そして、二人のいる場所が、堅苦しい執務室などではなく、過ぎ慣れたアッシュフォード生徒会の一室だったら、スザクは何のためらいも無くそうしていただろう。

だからこそ、今の状況でそれを言うルーシュが　許せないとスザクは思った。

「ん、どうした？」

だが許せないほどに、妙なところでプライドばかりが高くて強情

で、自分が信じた道以外は一切マトモに見ようもしない男は、スザクが言葉を失くしている様子を不思議がり、形の良い眉を怪訝そうに顰めた。

ここで自分が彼に殴りかかったら、誰でもいいからゼロ・レクイエムが完了するまで、自分を地下牢獄に繋いでおいてくれないかな？ などと他愛無い本心を、内心だけに吐き出しながら、スザクは目の前の男に対し慣れた穏やかな微笑みを浮かべた。

「過去形で言うには、まだずいぶん気が早いと思うけどね？」

「ああ、そうか。まだ二週間もあるんだからな」

そう言っただけでルルーシュは、屈託のない様子で笑ったが。

二週間後、スザクの手により命を絶ったルルーシュは、やはり最後の瞬間まで、満足そうな笑みを浮かべていた。

そして、後に託されたのは、ルルーシュの計画通り成された世界。あまりに世界が従順にルルーシュの考え通り歓喜に沸き立ち、悪逆皇帝をまんまと始末した自分の功績を手放しで褒めちぎってくれるので、次第に感情の行き場を失くしてしまったスザクは、ほとんど発作的にせめてもの救いを求めて、ルルーシュの姿を確認するために棺の前に足を運んだ。

だが、ジェレミアから力ずくで聞き出したパスワードは、逆に、棺を管理するシステムを永遠に沈黙させるためのものだったのだ。

どうせきみのことだから、一定以上の衝撃が加われば、棺ごと破壊するつもりなんだろう？

ルルーシュならば、棺の内部だけに有効なフレイアを仕掛けてないとも限らない。

容易にそれが想像できてしまうからこそ、スザクは実力行使に訴えることも出来やしない。

C・Cの行方を探りを入れ始めたのは、その事件があつた先のことだつた。

最初のうちの数ヶ月は、コーネリアの元に密偵を送り込むことで、ある程度の動向を掴むことは可能だつたが。やがて行き過ぎた干渉の結果、バグダードで行方を見失つて以来、シュナイゼルの情報網をもつてしても、いまだに消息を掴むことが出来ないでいる。

この徹底したやり方は、あるいはルルーシュ、きみの……。

だが、そもそもゼロ・レクイエム以前に、逃走ルートをC・Cに託していた可能性も否めない。

二人の関係は最後の瞬間まで完璧に、秘密を共有し続けてきた『共犯者』で有り過ぎて、ゼロ・レクイエム以前の数ヶ月間、それなりに密接した日々を送っていた筈の自分すら、立ち入る隙の無かつた瞬間が無数に存在していたのだ。

口では否定していたけど、あのルルーシュが、C・Cをあのまま放置できるはずも無いか……。

そしてルルーシュが自分の知る男なら、八年経過した現在も、この棺の下には、何ら変わることのない姿で永遠のときを眠り続けているルルーシュの姿を見つけるはずだつた。

先王シャルル・ジ・ブリタニアからコードを継承し、コードのもたらしてきた罪過ごと、贖罪の生贄に自らを供したいと望んだ彼ならば。

けれどもルルーシュには、誰にも、C・C・にさえも、明かすことの出来ない可能性が存在していた。

その可能性が、何よりスザクは 怖いのだ。

コードの継承に失敗していたらどうする？

万が一にも、棺の蓋をこじ開けて、腐乱して朽ち果てているルルーシュの姿を見つける。

そのとき自分は、只人であるルルーシュを殺したことになるわけだ。

ルルーシュが、その可能性すらも納得ずくで、ゼロ・レクイエムの当日を迎えた事実を知っている。

自分にすら、最後まで計画の全貌を明かそうとはしなかったが、今生に対する未練や迷い、恐れのようなものが一切感じられなかったのだから、他にはどうにも考えようが無い。

結果は、結果として全てを受け入れる覚悟を伴って、ルルーシュは自らの足で公開処刑の現場に足を運んだのだ。

けれども、たとえルルーシュ自身が、その結果に満足していようとも、スザクの胸中が収まらない。

「ナナリー、これはきみに対する罰だよ」

声を振り絞るように泣き咽んでいたナナリーの背中が、まるきり感電したように激しくビクリと痙攣した。

淡々と言葉をつむぎ出す男の低音が、静謐の底を這うように冷然

と続いている。

「きみは、ダモクレスに憎しみを集めるために、フレイアの発射ボタンを押したね？」

「……ッ……」

「あいにく憎しみの部分は、ルルーシュがすっかり引き受けてしまったかもしれないけど、だからと言って、今更その役割を放棄することは許されない。ルルーシュの託した『願い』を実現するために、きみと僕たちは、『優しい世界』を維持する義務があるんだ」

そして、ルルーシュ。

きみには、僕らに託した世界の行く末を見守り続ける義務がある。

「僕たち三人は、信じた方法で望みを叶えるために、あまりに多くの人命を犠牲にした。だからこそ、これは何があっても、引き受けなければならぬ義務なんだ」

だからこそ、この八年間を一心不乱に過ごしてきた。

声もなく、涙に息を詰まらせるナナリーの表情は、そう物語っていたけれども。

冷淡に事実を暴き立てるスザクの瞳は、たしかに一瞬チラリと笑んでいた。

「そうは言ってもねエ、僕だって、たまにはシュナイゼルが憎らしいとは感じるよ？ ふたこと目には『ゼロ様、ゼロ様』って、あの人から指示を待たれる僕の身にもなつて欲しいよ。僕が言わなきゃ、ちつとも動こうとしないんだからさア」

意識的に発したセリフとは言え、飄々と愚痴を垂れ流すスザクの様子を、茫然と眺めていたナナリーは。

瞳の中に溜まっていた涙のしずくを、ポロポロと押し出しながら、淡い微笑を浮かべた。

「……それではいっそ、シュナイゼルお兄様に、全権をゆだねてしまえば宜しいのでは？」

「馬鹿ア言っちゃいけないよ。どうせまたあの人の勝手な価値観で『優しい世界』がゴリ押しされて、苦しむ下々の者たちが続出するのが関の山だからね。基本的な考え方が、いつまで経っても『お貴族様』なんだからさア」

「そうでしょうか？ つい先日カノンさんが、『ずいぶん殿下も、様変わりなされて…』と頭を抱えてらっしゃる姿をお見掛けしたばかりですけれども」

「んん？ ひょっとして例の一件かな？ あんなのは、まだまだ序の口だよ。 だからね、ナナリー？ 正直な話、今の状態できみにイチ抜けされてしまったら、僕が、途方に暮れてしまうんだ。僕の立場でルルーシュの批難を続ければ、そのうち『優しい世界』を、良心の呵責を慰めるために利用しているだけだと、騒ぎ始める連中が出没しかねない。苦しいとは思うけど、肉親であるきみがその役目を引き受けてくれているからこそ、効果も生まれるし、情状酌量の余地も生まれるんだ」

「……」

声もなく驚愕に目を見開くナナリーに、スザクは柔らかな表情で頷き返した。

「この先当分は、許されざる悪行を働いた非道の悪逆皇帝だよ、ルルーシュは。彼の意向で多少の虚飾を織り交ぜているのは事実でも、実際にルルーシュが、大勢の人間を殺めた事実だけは、有耶無耶のうちに消し去ってはならない。 けど、そのうち…もう少しだけ人の記憶と、憎しみの感情も薄まれば、肉親にすら冷徹に見放された『非望の皇帝』という線に落ち着く。これは決して、ルルーシュの望んだ考え方ではないけれど、それでも最後は、『馬鹿な皇帝』の一人として世間から見放され、忘れ去られてしまうのが一番なんだ。ルルーシュだって初めから、今の世界が永遠に存続するとは考えていない。ただ少しだけ、人が努力する必要を覚えていれば、それでも別に構わないんだ」

「努力する、必要……ですか？」

「そうだよ、ナナリー。他人に優しくする必要をね」

死を迎える瞬間まで、ユフィもシャーリーもそれを実行に移していた。

人間は、自らの利益を守るためになら、いくらでも他人を犠牲に出来てしまえる生物だ。

弱肉強食の鉄則に則るわけでもなく、必要もないのに安易に他人を裏切り傷つける。

けれども、ミラーの法則は、現に存在しているのだ。

自ら放った悪意は、必ず自らの頭上に跳ね返されてくる。

その事実を、恐怖政治という形で、誰の目にもわかりやすく体现したのが悪逆皇帝ルルーシュ。

世界に数多の悪意を放出し続けていた悪逆皇帝は、撃たれるべくして、その思惑が完成される寸前で、自らの放ったブーメランの切っ先で心臓を串刺しに葬ったのだ。

撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ。

「だからこそ、僕たちも生きている以上は、何らかの努力を続けて行かなければならない。それがルルーシュから託された『願い』であり、きみが望んでいた『優しい世界』の完成形だ。ナナリー？ きみは今でも、その世界の実現を望んでいるのかい？」

やさしい声音で問いかける。

それは、枢木神社の小さな土蔵で過ごしていた夏の数ヶ月から、根底には変わらぬ響きを伴ったものだった。

ナナリーは、問われた内容よりも、ほとんどその響きだけに誘われて、コクリと小さく頷いて。

続けて、その内容を理解して。

またたく間に、新たな涙で、顎先までしとどに濡らしてしまうのを止められなかったが、だからこそ今度は自然に力を抜いて、笑えている自分を自覚してもいた。

「……………ひどい罰ですね。お兄様は昔から、何かというと小言ばかり。……………でも、そうして心から愛されて育ってきたからこそ、私は闇の中でも、『絶望』という選択肢を選ぶ必要もなく、『優しい世界』を望むことが可能だった。……………お兄様が私に、他人に優しくする心のあり方を教えてくれたのです。……………心の底から、愛しています……………お兄様」

ナナリーは、パタパタと涙のしずくを滴らせながら、ルルーシュの棺の上に柔らかな接吻を残した。

そして、スザクの手を借り、車椅子の上に身体を落ち着け直すと、静かな口調で呟いた。

「行きましよう、ゼロ。今日中に片付けたい用件が残っています。迂闊にスケジュールを遅らせてしまつては、足元を掬いたがつている方々を喜ばせてしまうだけですから」

スザクは何も言わずに、目元と唇の端を緩めると、静かな動作で仮面を顔面にかざした。

「はい、ナナリー様」

変声機越しに発せられる、無機質な人の声。

けれども、それこそ二人の記憶に刻みつけられている、ルルーシュの演じていたゼロの肉声でもあった。

結局僕は、きみの存在を継承することで、きみの生きていた証を立証し続けているんだ。

枢木スザクは死んだ。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアも、ルルーシュ・ランペルージも死んだ。

唯一生きているのは、このゼロという存在だけ。

今でも、時折心が逃げ場を求めて、無性に死に焦がれてしまう瞬間は存在しているけれど。

いつだって、その思いを払拭してくれるのは、背中に感じている

ルルーシュの存在感だ。

きみの遺してくれた『優しい世界』の構想は、^{シナリオ}ついに今年で
タマ切れた。

だから今後は、真実の意味で、自分とシュナイゼルの双肩に全ての
判断がゆだねられている。

自信は無い。だがしかし、この八年間で少なからず手にした実感
は、自分たちの望んだ世界が、おそらく他人に対しても優しいこと
を立証してくれていた。

見てるんだろう、ルルーシュ？

この世界か、はたまた世界の最果てか。

棺の下で無力に朽ち果て、潰えてしまえるほど、きみが無計画な
男だとは思わない。

心配性な彼のことだから、何らかの手段で必ず、自分の創世した
世界の行く末を見守り続けているはずだ。

C・C、結局きみの願いは叶ったのかい？

暗黙の了解で、不老不死である彼女には、まさしく、世界の行く
末を見守り続ける役目が期待されていた事实に、いつの頃からかス
ザクも気付いていた。

それを承知で、ずいぶん残酷な質問だと思ったが、ゼロ・レクイ
エムの数日前に、「今でもまだ死にたいと思っているのかい？」と
訊ねたのだ。

C・Cは思いのほかに、肩から力を抜いた様子で笑って。

「アイツと交わした約束があるからな」

「約束って？」

「フツ、この私に、笑顔をくれるのだそうだ」

そう言ったときの、少しはにかむような彼女の笑顔を覚えている。約束なら、既に叶えられているじゃないかと、スザクは呑気に考えたものだが。

しかし、あの時にはまだ少なくとも、ルルーシュが傍にいた。「……今でもきみは……笑ってくれてるかい？」

「はい？」

考え事に没頭するうちに返事が返されて、独り言に気付いたスザクは、慌てて内心で気を引き締める。

C・C・に同行者がいるのは知っていた。

しかも、報告では　おそらく男の。

その相手がルルーシュであることを望んでしまうのは、それこそ一縷の望みを無くしたくない、心の逃げ場に等しかった。

本格的に探す気になれば、あれほど特徴的な少女ひとり探し出すことなど造作も無い。

だがしかし、実際に同行しているのが、『ルルーシュではない』可能性を知らされるのが、　おそらく自分は怖いのだ。

そんな話を、わざわざナナリーの耳に入れる必要はないと感じていた。

「　いや、C・C・のことなんだけど。今頃どこで何をしているのかと思ってさ」

それでもスザクが、割合素直に口を割る気になったのは、迂闊な嘘などナナリーには簡単に見破られてしまうことを経験から知り過ぎていたからだ。

しばらく沈黙を守っていたナナリーは、やがて帰り支度を整えたスザクが、車椅子を押し始めたところで、ようやく重い口を開いた。「……結局、あのお二人は……おたがい好き合っていたのでしょうか？」

「さア、それはどうだろう？　少なくとも、特別な存在だったのは事実だけだ」

けれどもスザクの目から見るかぎり、一般的な男女が恋をしている様子とは程遠いように感じていた。

恋とか、愛とか、そういう浮ついた言葉ひとつで一概に説明できるような関係なら、少なくともあの当時の自分は、決してC・C・の存在を容認できなかった筈だから。

「それでも、おたがいに大切に思い合っているお二人が、引き裂かれてしまう世の中は間違っていると思うのです」

「……そうだね、ナナリー」

スザクは一瞬、恋したその人の姿を胸の奥に思い描いて。

それきり二人は何も言わずに、静かにルルーシュの眠る場所を後にした。

番外？：ゲラン・ダムール（？）

夏場には涼やかに聞こえる潮の満ち引きも、木枯らしの吹きすさぶ夜に眺めてみるのなら、これ以上に心侘しいものも無い。

C・C・は、長い緑の髪を無造作に風の手にゆだねながら、憤然とした足取りで無人の砂浜をひとり寡黙に歩いていた。

海上にポツリと設けてある年代物の灯台の灯火。音もなくゆつくり稼動している回転灯が、周囲の暗闇を突き刺すように照らしている。ユラユラと細かく波の立つ大海原は、黄金色の灯りが届いた一瞬だけ暗闇の中からボウツと姿を現した。

C・C・だつて何も好き好んで、こんな夜中に散歩を愉しんでいるわけではない。

本来ならば今の時間は、ベッドの中でぬくぬくと安穩無事なひとときを愉しんでいるはずだった。もちろんルルーシュと二人きりで後ろ髪を引かれる思いで、何度となく背後に残してきた愛しの我が家を振り返る。ずいぶん遠くに離れてしまった小さな家の灯火。そこから点々と足跡の刻みつけられている波打ち際。見えているうちにも、ザアツと打ち寄せてきた波の穂が、あつという間にすべての痕跡を消してしまった。

たしかに姿を消すには、うつつつけの夜かもしれないさ…。

かつては彼女の共犯者。

そして今現在は、不老不死の命運を共に負っているルルーシュに、年に一度だけ精神的な変調が見られるようになったのは、二人が結婚した翌年のことだった。

C・C・の作った誕生祝いの手料理を二人で一緒に愉しんで、深夜遅くまで仲睦まじくベッドの中で過ごしてから、「ちよつと出か

けてくる」とルルーシュは一人で散歩に出かけてしまった。

もちろん誘われてもＣ・Ｃは、即座に断っていただろうが。なんとなくルルーシュが帰宅した明け方まで、Ｃ・Ｃも眠れないまま転々とベッドの中で過ごしていた。

双子が産まれてからの三年來は、さすがにルルーシュも氣後れを感じたのだろう。「一時間したら戻る」と先に言い訳して、きつちり一時間後には戻ってきていた。

そして、今年は

なんとなく、やり切れないものを感じながら、なおさら厳しさを乗じた眼差しで、Ｃ・Ｃはぐるりの風景を眺め渡した。

見渡すかぎりに広がるのは、先の見えない大海原。

人生なんてそんなものは、いつだって、不安と、錯覚と、脅迫概念のくりかえしだ。

どれだけ真面目に努力に励んでいるつもりでも、誰かが都合良く、太鼓判を押してくれるわけではない。

その輪郭を辛うじて『幸福』であると認識させているのは、今となっては具体的に立場を主張している双子の存在だった。

アイツらが腹を空かせてピーピー泣き喚きさえしなければ、
とうの昔に私だって……。

決して今の生活から逃げ出したいわけではないけれども、それでも時にはどうしようもなく人生に対して『囚われている』という錯覚に陥ってしまう瞬間は、依然として日常的に存在しているのだ。

「……まったく、自分でも勝手な言い分だとは思わがな……」

十年前には、欲しいとすら考えつかなかった『夢のような生活』。その生活に、いつしか『慣れ』の氣配が漂い始めるにつれ、無意識のうちにもアレコレ不満を抱いてしまうのは、それだけ今の自分が、手にしている『幸福』に慣れてしまっている証拠なんだろう。

「それでも私は、その不満すら、二人で一緒に共有してないか

？ ルルーシュ……」

眩きの言葉尻を奪い取るように、ザアツと足元に打ち寄せてきた波の穂が、雪のように白い泡を飛ばして一瞬のうちに消え去った。無感動にその様子を眺めていたつもりでC・Cは、知らぬうちに頬の筋肉がゆるんでいたのに気付いて、小さく苦笑を洩らした。通奏低音のように、毎日の傍らに繰り返している海のさざなみ。

海を怖がる子供たちを両脇に抱えて、毎日のように泳ぎに通ったのも今年の夏が初めての経験だった。

三日もすれば、何事にも順応性の高い子供たちは、すっかり味を占めてしまつて。

「いつまでコレが続くんだ？」と、ほんの数ヶ月前までルルーシュと、クタクタに疲れ切っている互いの顔を笑い合つたものだった。

「共有してこそ、二人で一緒に笑い飛ばせるようになる。……そうでもしなければ、単なる苦痛で記憶は終わってしまうぞ？」少なくとも、ゼロ・レクイエムを生き延びる判断を下してくれたおまえは、実体験として私に、それを教えてくれた。

今もまだ沖合いにポツンと取り残されている灯台の灯火は、漆黒の大海原を無気力そうに照らしている。

客観的に眺めているのと、実際に生きてみるのでは、こんなに違うものなんだな。

その実感を、C・Cは決して悪い気分でなく、今現在も味わっている最中だった。

理由を訊ねられても、満足に答えられそうも無い。

それでも今年はなんとなく、そんなふうな予感はしていた。

黒檀に、砕いたガラス片を無造作にばら撒いたような満天の星空。ゆるやかな傾斜のある砂浜に、半分意識を失いかけている状態で茫然と横たわり続けて、どれくらいの時間が経過したのだろう。

辛うじて北極星^{ポラリス}の位置だけは覚えていたから、記憶の前後の緯度の差分を計算して経過時間を割り出してみようかとも考えたが、なんだか余計に馬鹿馬鹿しさに拍車^{パチマ}が掛かりそうな気がして止めた。

「……どのみち、俺が俺である事実だけは、変えられそうに無いんだからな……」

だったら、悩んでいるだけ時間の無駄だ。

そう、自分でもわかっている。つもりだ。

にわか^{ニワカ}の疼痛に襲われた人の様子で顔を顰める。

目蓋という、皮膚の薄い一部分で瞳を遮ってしまうだけで、視界からは一切の星空が追い出されてしまうのだ。

結局のところ、今の自分が選んでいる人生なんてものは、土台がコレと大差ない話だ。

そういう生き方を、すべからく自分自身で選んでいるわけだから。いまさら後悔なんて 許されるはずも無いだろう？

「なんだ、愉しそうじゃないか？ そうと知ってたら、チビたちも一緒に連れて来てやっただがな」

もちろん声を掛けられる以前から、人の気配には気付いていた。何しろ砂浜に直接全身を預けているのである。砂を踏むわずかな振動と特徴的な歩き方で、相手が誰であるかも確信していた。

それでもルルーシュが思わず息を詰めてしまったのは、相手が言い終えるより先に、頭上から毛布の塊が襲ってきたからだ。

とっさに舌打ちしながら払い除けると、涼しい顔をして腰を下ろしてきたC・C・を睨み返した。

「……ようやく寝ついたばかりなんだろう？　はしゃいでいるんだ、余計な心配を掛けさせるな」

年を追うごとに、咲き初めの白薔薇を思わせる、妙に迫力のある美貌をひときり磨き上げている最中の女は、黄金色の灯火にその姿を無造作に照らしながら、口角にだけ皮肉な笑みを刻んでいる。

「今のおまえが言っても、笑ってしまうくらい説得力は皆無だが？」
「うるさい、おまえに言っているんだ。夜道に迷う子供でもあるまいに、いちいち姿が見えない程度で捜しに来るな」

「おや？　私はちよつと腹ごなしに、寝る前の散歩を愉しんでいるだけだぞ？　さすがの私も、アレには結構こたえた。そしたら偶然、おまえを見つけたただけだ」

わざわざ毛布持参でか？

思わず皮肉にそう思ってしまうが、そうしている最中にも、意識の片隅ではC・Cが絶え間なく家の方向に神経を配っているのに気付いていた。

あっさりトイレトレーニングをクリアしてしまったナナリーとは違って、口口のほうは今しばらく世話焼きが必要な状態なのだ。

ほとんど一日がかりで大騒ぎした後だったから、一度眠りに落ちてしまえば簡単に目覚めるはずもない。それがわかつているのに、それでも注意がそちらに向いてしまうのは、今ではすっかり彼女の日常に染みついてしまっている『母親』としての習慣だった。

その子供たちには今の自分の姿を見せたくない一心で、寝る前に必要になる世話焼きの一切を無断でC・Cに押しつけて、あてどもなく夜の散歩に出かけてきたルルーシュだったから、自分でもみっともないとわかる具合に顔が歪んでしまうのを感じていた。

「……」

不器用な真実を、無粋な光の下に晒してやろうと手ぐすね引いて待っている。焦れたいほどにゆっくり回転している黄金色の灯火が、やがて過ぎて行くのを待ち、ルルーシュはダラリと力なく上体を起こした。

自分でもそうとわかるほど神経質に、身体中に纏いつている砂を払い落とすと、グツタリ頭（カッパ）を落として、大きく足を開いて座り直した。

これ以上、無様な姿を晒すのは「勘弁してくれ」と本気で思うのに、海上から直接吹きつけてくる寒風に、身体の隙間をことごとく冷やされて、思い切りゾクゾクツと丸めた背中が震えてしまった。

溜息混じりに隣りに身を寄せてきたＣ・Ｃは、そっけないほど無造作に二人の背中に毛布を着せかけた。

「こんな夜中に寒中水泳か？ おまえがそこまでスポーツに熱心だったとは知らなかったぞ」

「……………うるさい。ちょっと腹ごなしに、泳いでみようとしたただだ」

「フン、とんだ似たもの夫婦だな」

意地を張るためには平然と、子供の存在すら利用して。

いちいち言葉に変換するまでもなく伝わってしまう部分がある。

それを承知でＣ・Ｃは、二人を均等に笑い飛ばした。

ルルーシュは、瞬間的に身震いするほど凶暴な怒りを感じたが、Ｃ・Ｃが構わず無造作に毛布の両端を身体の前でかき合わせてしまつので、強制的に密着する体温に、結局は逃げ場のないままに、ルルーシュは激しく自分の感情を持て余した。

昔からの習慣で、Ｃ・Ｃの前では感情の抑制をするのが難しい。今は少しか、そうした関係が鬱陶しいと感じながら。

「……………会長が、……………」

沈黙に耐えかねたルルーシュは、喉の奥に絡んだ息を、ゴホリと吐き出しながら続けた。

「やたらに毎年、騒々しく祝ってくれただろう？ ……アレはひよつとすると、気付かれていたのじゃないかと今頃になって気付いてな」

妙なところで付き合いのいいＣ・Ｃは、「ミレイ・アッシュフォードか、懐かしいな」と適当な相槌を打つことで、自然と話しや

すい雰囲気を作り出している。

長年の付き合いで、こっちの事情にはすっかり精通しているわけだから、たまには本気で放っておいて欲しいと思うのに、この寒空に骨の髄まで冷え切ってしまったている身体には、束の間でも手に入れた体温が手放しがたくて。結局は、体よく差し出してくる魔女の甘えの手段に、自分が嵌められているだけの心地にも陥ってくる。

ルルーシュは、手負いの獣が自暴自棄になると同じような心境で、いまさら認めたくもない真実を唇の上に乗せさせた。

「おまえだつて、薄々感づいているんだろっ？」

ナナリーと暮らし始めてからは必ずナナリーが。

アッシュフォードの世話になり始めてからは、ミレイが勝手に恒例行事に仕立て上げ、関係のない生徒まで巻き込んでパーティの口実に利用されてしまっていた。

そして、母が死ぬまでは毎年母が。

必ず手作りのケーキを焼いて祝ってくれたのだ。

だが、しかし。

死んでおる。おまえは、生まれた時から死んでおるのだ。

あの瞬間に、ルルーシュは自らの生まれと境遇に反逆する必要性を誓った。

自分は死んでなどいない。生きている。

だがしかし、激しくそれを希求する裏側で、時には疑問を感じずにはいられなくて。

その疑問が、ある意味では最高潮に達してしまう12月5日。

いったい自分は、何の必要があつて、この世に生まれてきたのか？

実の父親すら憎悪するしかない人生だったから。婉曲に、それが開始されたに等しい『誕生日』などに、特別な感情を残していられるほど、あの当時のルルーシュは、夢や希望のある状態ではなかつ

た。

そんなルルーシュの本心に気付いていたからこそ、ナナリーもミレイも普段以上に温かい心のもてなしで祝いたがってくれたのではないのだろうか？

放っておくと、このまま一晩中でも落ち込んでしまいそうな雰囲気、すっかり他人事の様子で耳を傾けていたC・Cは、クスリと小さく苦笑を洩らした。

「その法則で行くと、あのチビたちの行動にも、なにやら不穏な裏があるように聞こえるが？」

ルルーシュは、それには何も答えようとしなかった。

沈黙から、必要な回答を収集したC・Cは、温容に笑いだけを深めた。

「考え過ぎだよ。仮に裏があるとして、受け取るのはおまえだぞ？ スザクならともかく、おまえは昔から、他人の差し出す過剰な好意には『必ず裏があるはずだ』と猜疑心バリバリで、頭から警戒していた馬鹿な坊やだったじゃないか」

言葉のニュアンスで、C・Cがアツシフオードに転がり込んできた当時の話をしているのに、すぐに気付いた。

出会いの当初、あのシンジユクで、垣間見せていた雰囲気など夢のごとくに、最初から押しつけがましい態度で高飛車に振る舞い続けた謎の女。

そんな相手に、突拍子もなく「共犯者」などと言われて、信じる馬鹿がどこの世界にいるのかと、ルルーシュはひととき憤然としながら思う。

結果的に、自分でも驚くほど安直に、信じてしまったからこそ、ここにこうして彼女と暮らす羽目に陥っているわけだが。

「だいいち、だ」

思わず横目でギロリと睨んでしまうルルーシュには構わずに、C・Cは何やら含みのある様子でニヤリと口角を吊り上げた。

「賭けてもいいが、今年も利用されていると思うぞ？」

「……何が？」

「だから、おまえの誕生日だ。カレンもニーナも大学院を卒業して、それぞれ目指す道に進んだろう？ よっぼど特別な理由でもない限り、集まるには個人の日常が多忙な時期であるはずだ。あのお祭り女が、せっかくの口実を見逃していると思うのか？」

C・Cがそれを知っているのは、双方が社会的に注目されている有望株であるからだ。

一時期は黒の騎士団のエース・パイロットとして、また一方では大量破壊兵器フレイアを開発した技術者として、社会からは石もて追われる立場にあった二人。

しかし、ゼロ・レクイエム後の八年間で積み重ねてきた研鑽が、それぞれ新しく踏み出した分野でも着実に実を結ぶ形で、今では社会のほうに追い風となつて、彼女らふたりの成長を見守り続けている。

「……だからと言って、既に死んでいる男の誕生日を祝うのか？ 趣味が悪すぎる」

「関係ないさ、おまえの『生誕を祝いたい』と思う連中の気持ちままで死んだわけではないからな。おまえの命日に集つて、しんみり過去を振り返るよりも、よっぼどミレイ・アッシュフォードらしいと私なら考えるが？」

本人と直接面識もないクセに、おまえに会長の何がわかるんだ？ と反論してやりたいのは山々だが、実際、C・Cの言う通りだと、納得してしまえるから癪に障るのだ。

ルルーシュは、それきりムツツリ口を閉じてしまった。

その様子を、横から感慨深げに観察していたC・Cは、さすがに呆れた様子で肩をすくめた。

「結局、私が何を言つても機嫌を損ねるのか？ それならいつそ、また以前のように、憂さ晴らして私を抱くか？ そっちのほうが、よっぼど面倒が少なく、私の手間も省けるが？」

「……いつまでも昔の話を」

「事実だろう？」

たしかに、否定はしない。

C・Cの前では、とにかく感情の抑制をするのが難しくて。

それを承知で逃げようとしないう彼女の術中に嵌る形で、まるきり人形を抱くように、際限なく彼女の肉体に当り散らしてしまった経験が少なからず存在してしまうのだ。

けれども、子供が産まれて以来、頻繁に垣間見せるようになって
いる彼女の横顔。

少女的な微笑の傍らに、ふとすると見つけてしまう『母親』としての表情に、どうにも侵しがたい神域のようなものを感じてしまうのだ。

以前なら、ナナリーに対してだけ感じていたはずの絶対的な庇護欲が、いつしかC・Cに対しても当たり前のように存在していて、これは何があっても絶対に傷つけてはならない『宝』だという防衛本能が、行動を起こす以前にルルーシュの理性に働きかける。

そして、その事実気付いているC・Cは、可笑しくてたまらないといった様子で吹き出してしまうけれど。

「……呑気に笑うな。それを言うなら、どうしてもっと建設的に、
アイツらの弟妹作りを検討しないんだ？」

ほとんどルルーシュの肩の上に後頭部を預けて、大胆に笑い転がっていたC・Cは、やがて潮が引いてゆく時のように緩慢に笑いの発作を鎮めた。

「……何度も言わせるな。今は誰にも邪魔されたくない。……私の言いたいのは、それだけさ」

「それだけ、ね……」

毎日の傍らに緩慢に、潮の満ち引きを繰り返している海のさざなみ。

笑いも、涙も、喜びも、悲しみも。

この何でもない風景に、ほとんど全てが結びついているから、その時々^の心象風景によって、胸の奥に甦ってくる数多の記憶は異な

る。

その全てが、今はほんの少しだけ煩わしいように感じて。ルルーシュは、さりげない身じろぎ一つでC・Cの重みをかわした。

そのままズリりと力なく滑り落ちていったC・Cは、何も言わずに体勢を立て直すと、ルルーシュの背中に自分の背中を押しつけた。

風の吹き込んでくる方向をカバーして毛布で遮ってはいるけれど、密着しているのが、背中的一部分に過ぎなかったので、最前からと比べると、得られる体温はほんのわずかなものだった。

「……………なア？」

ルルーシュは、今にも風に流されて消えてしまいそうな声音で咳く。

「おまえは本当に…………後悔していないのか？」

C・Cと結婚して、C・Cに子供を産んでもらって。

毎日のすべてが手探り状態で、それでも何かに集中していられる間はマシだった。

悩むためにはまず必要になる、時間的な余裕も、精神的な余裕も、どこにも存在しないから。

けれども油断をしていると、すぐにも足元を掬われそうになってしまう。

頼りになるのは、この背中合わせに存在している相手ひとりきり。それは共犯者として過ごしていた時代から、いつだって間近に感じていたことではあるけれど、そこから一步前向きに歩き出しているつもりの今現在も、ふとした瞬間に否応なくお互いに孤独な存在であるのを知られる。

「私に訊くな。いまさら後悔しているなどと言われても、私の腹には戻しようがないだろう？」

「話を曲解するな。単純に俺は」

「そんな言葉を口に出せる時点で、おまえの肚の底など見え透いているさ。どうせおまえは」

「ああ、だからこつちも最善を尽くすべく、準備は整い済みだろう？ 多少はまア、軌道の修正が必要になるくらいで」

双子を守り、育ててゆく。

自分の創世した『優しい世界』で。

そのために必要になる環境面の整備なら、双子が生まれるずっと以前から完璧に整い済みだった。

だから、こんなものは杞憂だ。わかっている。

頭では、そう理解しているつもりだが。

「だったら私が、今からでもチビたちを抱えて、ナナリーの所に駆け込んでやろうか？」

「ッ……」

痙攣したように、ルルーシュの背中が震えた。

たったそれ一つだけの反応で、C・Cの怒りに火を放つのは充分だった。

「ああッ、おあつらえ向きのご面相だろうさッ！ 私があのチビたちを抱えて行くだけで、ナナリーなら全ての事情を納得するはずだッ！ いまさらアイツらの存在に疑問を感じるくらいなら、どうしてさつさと会いに行こうとしないんだッ？ いつまでも女々しく悲嘆に暮れるような真似は、もういい加減にしてくれッ！」

ルルーシュだって、わかっている。

子供の問題さえ関係していなければ、C・Cだって冷静に対処することが可能だったはずだ。

彼女の勢いに流されて、自分が、迂闊な発言を強いられる必要は無いはずだった。

けれども、今の場合は、ルルーシュだって追いつめられていたのである。

「だったら、おまえは自分の口から、俺の犯してきた所業を説明できると言っただな？」

「ッ……！」

素早く身をひるがえしていたルルーシュは、両手でC・Cの手

首を逃さず拘束していた。

「こうして面と向かって、あのチビたちに向かって、俺の犯してきた悪行を説明できると言うんだな？」

C・Cは、ゆるく首を振ることで、もう自分の間違いを認めていた。

それがわかつているのに、激憤に駆られてしまったルルーシュの言葉は止められない。

「俺は復讐の皮切りに、ギアスという人外の力を使ってクロヴィスを殺した」

「止めるッ」

「そもそも、サクラダイトの利権獲得が目的で、エリア11を軍事的に占領したのは俺だよ。先王シャルル・ジ・ブリタニアも、シュナイゼルも、俺の操るギアスの盤上で踊らされていたに過ぎない。ナリタの惨劇も、ゼロの行動予測を立てていた俺の仕組んだ罠の一つだ。ユーフェミアをギアスで操り、大量のイレブンを虐殺したのも、贗の情報でゼロを操り、ブラック・リベリオンがわざと失敗するよう煽動したのも、フレイアが完成するまでの時間稼ぎだ」

「もう、わかったからッ！ 止めると言うのにッ！ ルルーシュッ！」

「一年後、ついに時は熟したさ。超合衆国を率いるまでに、しぶとく勢力を伸ばしていたゼロを討つために、俺は大量破壊兵器フレイアを使用した全面戦争を仕掛けた。シュナイゼルは、想像以上に見事な茶番を演じてくれたさ。そして世界は、望みどおり俺の手中に陥った。どれだけ少なく見積もっても、億の単位で犠牲を払ってな。それが、神聖ブリタニア帝国最後の皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが成し得た前代未聞の復讐だ。その事実を、あのチビたちに説明できると言うのなら、俺だって喜んでナナリーの前に姿を晒してやるさ」

「だがそれはッ、おまえがゼロ・レクイエムのためにでっち上げたシナリオだろうッ――！」

「それがどうした？ 多少の違いはあれ、すべては俺が関与した事

実には変わりはない。アイツらの父親は、公衆の面前で惨殺されて然るべき罪状を背負った極悪人なんだよ」

「ルルーシュ……ッ！」

いまさら確認するまでもない真実だった。

『共犯者』として、ルルーシュの行動全てに関与したわけだから。だが、今は 単なる一人の『母親』として、血を分けた我が子に災いする可能性に脅えている。

苦しげに歪めた顔を何度も横に振りながら、力なく手のひらに顔を埋めてしまった女の姿を、冷え切った眼差しで眼下に見下ろしながら。

やがて脱力したルルーシュは、激情のままに握り締めていたC・Cの手首を無造作に投げ出した。

そのままダラリと力なく、砂の上に自分の両手を投げ出した。

「……シャーリーの一件で、おまえに覚悟を問われた時……俺は本気で、答えているつもりだったんだがな……」

覚悟はあるさッ！ あの時……クロヴィスを殺したあの時からなッ！

「あの当時の俺には、ナナリーのために世界を変えてやることしか考えられなかった。それ以外の何かを抱え込む余裕など、正直俺には存在しなかった。だが、駄目だな……頭ではそうわかっているはずなのに、アイツらの瞳を眺めていると、無邪気に訊ねてくるんだ。『本当に、考え直す余地はなかったの？』とな……」

力なく投げ出した手のひらを上にして、砂の中に指先を埋める。そしてまた軽く持ち上げると、広げている指の隙間から、サラサラと止め処なく全ての砂が舞い落ちた。

ルルーシュの瞳はただ漠然と、こぼれ落ちてゆく砂の様子を眺めている。

「そもそも俺は、ブリタニアからの解放を唱えながら、心の底では

イレブンたちを蔑視していたのさ。敵国の皇子であるというだけで、俺を虐待した連中をどうしても許す気持ちにはなれなかった。それでもなければ、どうして冗談にも『日本人を殺せ』などと口走る必要がある？」

悲痛な表情に顔を歪めながら、「殺したくない…ッ！」と抵抗を続けていたユーフェミア。

彼女の穢れなき魂が、ギアスの毒に侵されてゆく姿を、自分はただ茫然と眺めているしかなかった。

「勝手な話さ…。最終的に作戦が成功するなら、俺とは直接面識の無い連中がどうなるうと関係なかった。だからナリタの一件も、机上の数値でしか被害規模を把握する必要を感じてなかった。スザクがトウキョウ租界にフレリアを撃ち込んだ一件はもつと酷いな。俺はナナリーの救出よりも、スザクの殺害を優先させた。いつだって俺の悪意が、意味もなく戦況を悪化させていたんだ。その事実を、今頃になってアイツらの瞳が無邪気に問うてくる。『本当に、人の命の重さをわかっていたの？ おとうさん』とな……」

「ルルーシュ……」

わかっている。

訊ねているのは、ルルーシュの良心だ。

穢れを知らない無垢な魂に照らされて、罪惡の一部始終を知っている自分の魂が脅えている。

最終的に自分は、世界に恨まれる道を選んで、『優しい世界』を創世した。

その代償に、持てる全てを投げ出して、世界に命を捧げようとしているわけだから、ゼロ・レクイエムさえ完成してしまえば、同時に犯してきた罪過も無罪放免だ。

あるいは心のどこかで安直に、そうした打算が働いていたのではないのだろうか？

冗談ではない。

たとえ自分に残されていた人生分の重みを加味しても、あのとき

受けた痛苦一つで簡単に贖えるような罪ではない。

毎日のように当たり前に、C・C・が向けてくれる屈託のない微笑み。

そしてまた、子供たちが向けてくれる打算の無い愛情を間近に受け取っているからこそ、今まで自分が蹂躪してきた命の本当の重さを、今頃になつて痛感させられているのだ。

見渡すかぎりに広がる大海原。

沈黙の底には、人が眠るときと同じ鼓動のリズムで、寄せては返す静かな波音だけが響いている。

少なくともルルーシュは、そんな自分の心音だけに耳を傾けていた。

一度はたしかに停止した音。

そして甘受したコードの呪いにより、二度とは決して停止する機会を失ってしまった胸の鼓動。

この心音が響いているかぎり、自分は犯してきた罪過に、永遠に責め苛まれながら生きるのだ。

C・C・と共に贖罪の人生を歩むと決心した瞬間から、その覚悟を胸に今日まで過ごしてきた。

けれども、やはり本当の意味では、何ひとつ理解してなかったのだ。

ある意味では、『理解していない』という事実を、理解するために生き長らえているような人生のひとつとき。

「……………仕事場を一軒、別の場所に借りないか？」
アトリエ

憂えるでもなく、単なる事実としてそれを思うルルーシュの耳に、殺伐とした女の声が届いた。

ルルーシュは伏せていた顔を上げると、チラリと上目遣いにC・C・の顔に視線を注いだ。

「親の勝手な口実で捨てられた人間に、同じように我が子を捨てる
と勧めるのか？」

「……………同じにはならない」

そう口では反論するくせに、とつさに臆した様子で、視線を外したのはＣ・Ｃ・のほうだった。

「同じさ。今の俺には、あのチビたちを笑顔で死なせてやる義務がある。それが実現した時に初めて、俺の構想した『優しい世界』が正解だったと立証されるんだ。それ以前に、俺がその役割を放棄するのは、あのチビたちから、俺が、見限られたその時だけだ」

そんな顔で死ぬなッ！ 最後まで笑い笑って死ぬッ！ 必ず俺が笑わせてやるッ……だからッ！！

Ｃ・Ｃ・を引き止めたい一心で、何を考えるより先に口走ったアーカーシャの剣で。

あのとき無意識のうちにもルルーシュは、自ら焦がれていた本心に辿りついてしまったのだ。

実の父親すら憎悪する道しか選べなかった自分が、笑いながら人生の終焉を迎えられたら どんなにか満たされた心地を味わえることだろうか？

自分の本心すら騙し続けながら、アッシュフォードで暮らした学生時代。

数多の仮面の代償に手に入れられた安逸な時間に、何も考えずに身をゆだね切ってしまうえば、果たして自分は幸福な人生を歩み続けることが可能だったろうか？

ルルーシュには、臨終の床で屈辱に震えながら、人生の虚無にまみれている自分の姿しか想像することが敵わない。

「結果的に、俺の選んできた人生観が、誰より残酷にあのチビたちを傷つけてしまうのかも知れない。俺の味わった以上の絶望を、あのチビたちにも味わわせてしまうのかも知れない。それでも俺は、その可能性と天秤に掛けても、決して自分の創世した世界を、否定する気持ちにはなれないんだ。誰かがやらなければ、今でも世界は、ブリタニアの圧制と搾取に苦しめられていたはずだ。そして俺は、その世界の存続を否定した。後悔などはしていない。今後も俺が、俺であり続けるかぎり、辿りつく結論だけは絶対に覆り

ようがないんだ」

たしかに、方法は間違っていたのかもしれない。

その自覚が、後年ルルーシュを良心の呵責に苦しめる。

だが、行動を起こす以前から、いつたい誰が、結果を予言する
ことが可能だったろうか？

あるいは俺に発現したのが、『未来を読む』ギアスだったな
ら…。

一瞬ルルーシュは、その可能性に思いを致したが、いまさら考
えでも無駄なこと。

それでも自分は結果的に、自分に出来うる最大限の方法で、唯
一無二の願いを叶えられたわけだから。

「……そうやって、自分を騙し騙し、生きているのは愉しいか？」

星が鳴く声が聞こえてきそうな、凜と高く澄み渡った冬の星空。
ともすると、静寂と見分けがつかないほどに、落ち着き払った女
の声が無感動に呟く。

「……どういう意味だ？」

ルルーシュが訊ねると、漠然と海を眺めていたC・Cは、フツ
と短く息を零して苦笑した。

「どうもこうもないだろう？ 結果は既に成されている。そして、
おまえも口先では後悔しないと言っている。それでも時間が必要な
のだろう？ だったら私も潔く責任を取ってやると言っているんだ」

黄金色の灯火が漆黒の暗闇をなぎ払い、ルルーシュの瞳を彼本来
の紫水晶色アメジストに輝かせながらゆっくり通り過ぎてゆく。

その横顔を、同じ光線に照らされながら、C・Cは完璧な無表
情のまま微動だにする気配も無かったが、むしろルルーシュから発
せられる怒りの圧力に、観念した様子で肩をすくめる。

「幸福だったのだろう？ 私が邪魔をしなければ、おまえは永遠に
変わらぬ幸福を手に入れていたはずだ」

「……冷たい棺の中で、自分が愚かである事実も知らずにか？」

「それでも、幸福だったのだろうか？」

たしかに八年前、ルルーシュはその事実を認めた。

だが、その後の変遷は互いに承知している事実であり、そもそも意識の改革を促してきたのは誰なんだ。

「なら、おまえはどうなんだ？ あのとて俺が別の選択肢を選んでも、八年後のおまえは幸福だったのか？」

「幸福だったさ」

間髪入れずに返してきたC・Cは、別段意地を張っている様子も無く、彼女本来の力強い眼差しでルルーシュを射る。

「おまえが、それを手に入れるにふさわしい舞台を用意してくれたのだらう？ だったら、あとは私が自力で笑顔を手に入れるだけの話さ。私を誰だと思ってる？」

言うなり、笑う。

咲き初めの白薔薇を思わせる、妙に迫力のある微笑みで。

「そして私は10年後も20年後も、一度手にした笑顔を放棄する気はないからな。いざとなったら遠慮なく、両脇にチビたちを抱えて、ナナリーの所にだって駆け込んでやるさ」

「C・C」

結局そこに話が帰結するのかと、さすがに絶句させられたルルーシュは、激しく批難する眼差しでC・Cを責め立てた。

だが、逆に、強気で攻め返してきたのはC・Cのほうだった。

燃えるような金色に気炎を発している眼の下に濃い皺を刻みながら、なおさら挑発的に美々しく微笑む。

「おまえが言ったのだろうか？ おまえがアイツらを守り切れないと言うならば、私は遠慮なくおまえに騙されていた立場を装って、アイツらを守るための手段を優先させてやるさ。だがその際、私が選んで行く先は、おまえが事前に用意してくれた逃走ルートだ。おまえは決して手前勝手な口実で、私たち母子を放棄するわけではない」

「ちよつと待て、俺がいつそんな話を」

「関係ない。私は、万が一の話をしているんだ」

いったいどうしてそんな話になるのかと、慌てて口を挟んだルルーシユの反論をあつさり封じ込め。

だが、爛々と輝きを増している金の瞳の眼差しが、切羽詰っているがゆえの敵愾心に燃えていることに、この時までルルーシユは気付いていなかった。

「時間が必要なのだろうか？ 心配するな、私が責任を果たしてやる。自力ではどうしても間に合わない場合だけ、私の判断でナナリーの所に駆け込む。枢木スザクや、シュナイゼルだって同じことだ。使える手駒は何だって、骨の髄まで利用し尽くしてやる。おまえと一緒に過ごせなくなった場合でも、何の支障もなく、私が死力を尽くして、あのチビたちを必ず『幸福』にしてやるのだから、いったい何をそんなに思い煩う必要があるんだッ？！」

そう言つてC・Cは、突然息を呑む激しさで、羽織っていた毛布をかなぐり捨てた。

決して認めたくはないのだが、出る所に出てしまえば、一瞬で『ゼロ・レクイエム』を帳消しにする効力を持つている存在なのだ、あの双子は。

迂闊にマスコミなどに正体が明かされてしまったら、ルルーシユの命と引き換えに、折角集めた憎しみの感情が、たちまち双子の頭上で炸裂しかねない。

仮にナナリーの所に助けを求め駆け込んでも、そこが『ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア』を『憎しみの象徴』として、永続的に批難する陣営の最先鋒である限り、わざわざリミッターを解除した臨界状態のフレイアを抱えて脅しに行くようなものだった。

いずれは『優しい世界』すら道連れに、爆発しかねぬ危険性を感じながら営み続ける避難生活で、双方共に望ましい結果など得られないはずもない。

結局のところ、ルルーシユの采配任せに丸ごと世話になっているしか、双子の身の安全を確実に保障してやる方法は残されてないの

だから。

その事実を、誰より正しく認識しているのはC・C・のほうだった。

毎日当たり前のように暮らしている『夢のような生活』。

だが、いざとなったら自分には、計画性のカケラもない、愚直な言い逃れしか出来ない。

今まで何百年も生きてきて

衝動的に固めた拳で、C・C・は、ダンッ！ と激しく砂の上を打ち据えた。

そのまま、ダンッ、ダンッ！ と同じ動作をくりかえして。

狂おしく燃え盛っている呼吸を、上下する肩の上で荒々しく喘がせながら、悔しげに歯噛みしている女の姿を声もなく傍観していたルルーシュは、結局そのまま何も言わずに視線の先を逃していた。

おまえが、『騙されていた』立場を装えるうちは、まだしも救いのある状況なんだよ……。

それさえ許されぬ窮地に立たされた場合でさえ、いくらでも方法を見つけることは簡単だった。

双子の感情を、度外視するならいくらでも

「想定され得る事故なら、何千通りも日常的に俺がシミュレーションを重ねているんだ。現に、この七年来一度でも、おまえを不安にさせたことがあったのか？ 将来的な心配事に関しては、最初から俺に任せる約束だったはずだろう？ くだらない心配に費やしている時間が有ったら、明日の朝いちばんにアイツらが喜ぶ献立の一つでも考えてろ」

C・C・と結婚して、C・C・に子供を産んでもらって。

そうすることが互いに『幸福』になる近道と判断したから、ルルーシュは迷いながらも、新しい人生の扉を開いたのだ。

そして今、たしかに二人は『幸福』だった。

それなのに、新しい『幸福』を手中に収めるたび、同時に、それ以外の感情まで切り離せなくなってしまうのは、いったいどういう人生の悪戯なのだろう。

本当に、今の俺は……間違っていないのか？

断言することなど、出来はしない。だからこそ、「後悔しない」と決意を新たにする端から、先の見えない迷いの濁流に、うっかり全身を吞まれてしまいそんな不安に襲われる。

だが、俺が、信じてやらなければ、C・C・はどうなる？

そんな俺を、信じている彼女まで、一蓮托生に寄る辺なき相手を失ってしまうではないか。

その存在感が、際限なく自分の中で成長してゆくに任せ、ルルーシュは、どうしようもなく人生に対して、自縄自縛に陥っている自分を感じていた。

自分の抱えている責任の大きさに、いまさら気付いて、怖気づいているようなものだった。

だが、それでも今の自分は、もう決して、他人から与えられた人生を、意味も無く生かされているわけではないのだから。

「……調子に乗るなよ、家出男が」

力の入らぬ低音で無感動に返したC・C・は、しばしの間を挟んで、顔を上げる余裕を取り戻したところで、ゆるりと背中を伸ばして振り向いた。

「言われなくても、私は最初からそのつもりだったさ、いったい誰が面倒を増やしてくれたと思ってる？」

「俺は別に頼んだ覚えはない」

泣いてしまえばスッキリするのだろうに。

わずかに充血している金の瞳を不機嫌そうにスツと細めて、そのまま何も言わずに腰を上げたC・C・は、苛立たしげに砂を払った毛布を畳み始めた。

どこことなく思い詰めている表情を隠して。

文句が有るならハッキリ口で言えいいだろうとルルーシュが水を向けかけた矢先、Ｃ・Ｃのほうから先に言ってきた。

「この際だから、言わせてもらうがな。この七年来、私が本当に、不安を感じてないと思うのか？」

「何？」

思わずルルーシュが声を低めると、すかさずＣ・Ｃは「安心しろ」と目線も向けずに突っぱねた。

「おまえの正体に関することなら皆無だからな、いちいち話す必要を感じてないだけだ」

だからといって、ルルーシュが納得するはずも無い。

眉間に皺を刻んだままＣ・Ｃの横顔を睨んでいると、腕に抱えるのにちょうど良いサイズまで毛布を畳み終えたＣ・Ｃは、まるきり自分の考え事にピリオドを打つようなタイミングで、フンツと乾いた笑みを洩らした。

「黒百合の花言葉を知っているか？」

怪訝げに顔を顰めたルルーシュは、「呪いと復讐だろう？」と答えた。

もちろん『黒百合』が何を意味するのか知っている口調で。

それでもＣ・Ｃは、「無粋だなア」と、なんだか妙な笑い方をした。

「アレには、よっぽどおまえたち兄妹にふさわしい言い伝えがあるんだが」

「言い伝え？」

「ああ、なんでも眠る相手の胸元に飾っておくと、やがて恋が叶うのだそうだ」

ルルーシュは、思いがけず渋柿を食ってしまったような表情で、精一杯に満面で苦虫を噛み潰した。

「……実の兄妹で、恋もへったくれもあるものか」

「気にするなよ。ナナリーも恋しがっているんだ、やせ我慢もいい

加減にして、素直に会いに行つてやれば良いだろうに」

「しつこいぞ、いまさら枕元に立つような真似ができるか」

「頑固者め」

どのみち死んだ人間には、敵わないというからな。

きびすを返しざまにそう言った。

砂を踏みしめる音に紛れて、ほとんど耳には届かなかったけれども。

思わず啞然とその背中を見送ってしまったルルーシュは、そのままバツタリ砂浜に倒れ伏してしまいたい気分で、自分の足元に向かつて忌々しげに大きく息を吐き出した。

海水を含んでパサついている黒髪を、苛立たしげに掻き上げながら軽く唸り声さえ発して。そのまま数分固まっていたところで、やがて重い腰を上げると、その頃にはとつくに家路を辿り始めていたC・C・の隣りに肩を並べた。

月のない夜の浜辺に、潮騒だけが静かに響いている。

むつつり唇を引き結んだまま、視線も向けようとしないルルーシュが、頑なに抵抗の意思を示していたからだ。

「……………怒ったのか？」

先に根負けしたのはC・C・のほうだった。

もちろん彼女なりに、反省する気持ちが強かったのだろう。

この場合、死んだ人間とは、ルルーシュを示しているわけではないのだから。

「……………結局、おまえが俺を捜しに来たのは、それが原因だったのか？」

足掛け七年もそうやって、俺に不当な嫌疑を掛けていたわけなのか？

たしかに、否定はしない。

初めのうちの数年は、ナナリーに対する恋しさと、それを上回る

申し訳ない気分が先立って、C・C・から受け取る幸福感を、素直に消化できずにいたわけだから。

その上に、三年前からは、双子に対する良心の呵責が上積みされているだけの話だ。

純粹に、誕生日を祝いたがってくれているC・C・と、子供たちの気持ちの本当にありがたいと思ったから、個人的な理由で苦しんでいる姿を見せたくないと思った。

それが理由で、今まで必要な説明の手間さえ省いてきた。自分の非はすっかり棚に上げているのを自覚した上で、鋭く質問を發したルルーシュの隣りで、C・C・は腕に抱えた毛布の塊を苛立たしげにギュツと抱きしめた。

「私ひとりの話なら、別にどうだって構いはしないさ。だが、あのチビたちは血を分けた実の家族だろう？ いざという場合に、おまえがどちらを優先する気にいるのか、少々不安に感じたただけだ」

とつさに苛立ちを我慢し切れなかったルルーシュは、小さく舌打ちしながら、満天に広がる星空のほうに視線を逸らしていた。

気まずいだけの沈黙を引きずりながら、家路を辿って歩みを進める。

定期的に過ぎゆく黄金色の灯火が、暗闇の中からC・C・の完璧な無表情を浮かび上がらせるのさえ癪に障って、ルルーシュは意識的に視線を逸らし続けていた。

おかげで、視界の片隅に、小さく灯った家の灯りをいち早く見つけてしまつて。

相手がC・C・ひとりだけの話なら、これ以上むやみに折れてやる必要などカケラも感じてなかったが、ほとんど条件反射で取り戻していた『父親』としての義務感で、ルルーシュは齒噛みしながら重い口を開いた。

「要するに、おまえの論理で仮定すると、俺とナナリーは、母さん一人に負けた計算になるわけだが？」

C・C・は、口を開こうとする気配すら見せようとしなかった。

ルルーシュは、構わず忌々しげに話を続ける。

「そんなもの、どっちが勝っても負けても空しいだけだろう？ 一概に愛情と総括されるものの正体は、全くの別物にも等しい感情からなる集合体だ。」

たとえば俺が、おまえと子供たちに対する感情を、いちいち論理的に細分化して、わかりやすくチャートに貼り出したら、おまえはそれで満足なのか？」

露骨に苛立たしげに口を開いたC・Cは、どうでも良さそうに「興味はあるが、ム力つくだろうな」と答えた。

「それが答えだ」

そっけなくルルーシュもそれに応じる。

「今の俺には、ナナリーを含めた世界の行く末を見守る義務がある。そして、いずれはあのチビたちを笑顔で送り出してやる義務がある。」

どちらの優先順位を考えるまでもなく、その気持ちは何の支障もなく両立できるものなんだ。馬鹿馬鹿しい、いまさら俺に、

くだらない念を押させるな」

それきり話は終わったとばかりに、ルルーシュは一人でさっさと歩を進めた。

結婚してから早くも七年、知り合ってから十年以上の歳月が経過しようとしていた。

その間に着々と培ってきた彼女に対するイメージに、再三「買いかぶりすぎだ」とケチを付けていたのはC・Cだ。

それが今では、ルルーシュ自身も、積極的にその事実を認め始めていた。

数百年の時の歩みを孤独に過ごしてきた魔女。その歳月の大半を、無意味に費やしてきたただけと言いながら、いざという場合に頼りになる判断を下せるのは圧倒的にC・Cのほうが多くて。たかだか八年程度の主夫の知恵では、到底太刀打ちできない領域に到達している事実を、日増しにルルーシュは体感しているのだ。

その反面、人の心の深遠には、今まで立ち入ることを拒んできたC・Cは、時折ルルーシュを閉口させる軽拳妄動に先走りがちだ。

論理的に考えれば、おまえならわかつて当然だろう？ とルルーシュが判断することにかぎって、意外に理解できてない場合が多いのだ。

「 だったらおまえは、どうする気でいるんだ？ 」

次第にムカムカと苛立ちが我慢し切れなくなってしまったルルーシュは、激しい身振りで足元の砂をザツと蹴飛ばしながら振り向くと、半ば暗闇に紛れている相手に向かって鋭く質問を浴びせかけた。「そのうち俺が、ナナリーとあのチビたちを見送って、ついでおまえに絶縁状を叩きつけたら、おまえはあっさりそれを受け取るのか？」

回転する黄金色の灯火が、激怒するルルーシュの姿を照らし出し、三メートルほど離れて立ち止まっているＣ・Ｃの姿を数秒遅れで照らし出す。

暗闇の中からじわじわと姿を露わにしていったＣ・Ｃが、とつさに表情を取り繕うのがルルーシュの目にはハッキリ映った。

「 おまえは馬鹿だツ！ 最悪だツ！！ 」

返事を待たずに激しくそう切って捨てると、瞬間的に激怒したＣ・Ｃは、ものすごい勢いで、地面に毛布を投げ捨てた。

「 私だつてなツ、むやみに干渉されるのは好みじゃないんだツ！ おまえが変に隠そうとさえしなければ、相手がナナリーだろうが、別の女だろうが知ったことかツ！ 何だったら、好きなだけ泣き言のひとつくらい聞いてやったんだ！ それをおまえがツ 」

「 ナナリーはともかく、何だ、その『別の女』というのは？ 妙な言いがかりをつけるつもりなら 」

「 ハッ、いい機会だからな、この際こっちのほうから、前例を作っておいてやると言っているのさ 」

「 前例？ 」

わざと上段から振り下ろすように切り込んでくる、何度か聞き覚えのある口ぶりに、どのみち口クでもない返事が返ってくるのだろうとルルーシュは察したが、

「うんざりなのさ、これ以上むやみに不安な思いをしながら、おまえの帰りを待ちたくない。だから将来的に必要なに迫られた場合には、下手に遠慮をしないで、最初から私に事情を話してくれ。用件さえハッキリしていれば、おまえがどこで何をしていようが、こんなふうに騒ぎ立てることなど二度としないさ、誓う」

そこだけは恐ろしいほど生真面目に、神妙な態度で誓ってみせるのだ。

思わず呼吸困難に喘ぎそうになる気分で、とっさに天を仰いでいたルルーシュは、腹の底から精一杯に濃い溜息を吐き出した。

「……………そんなに俺に、浮気をして欲しいのか？」

「別に？　そうではないが、『備えあれば憂い無し』と言うだろう？　その必要を、私のほうで少々感じたまでだ」

あくまで涼しく言い置いて、それきり話は終わったとばかりに、C・C・は一人でさつさと家に向かって去ってしまった。

声もなく茫然とその背中を見送っていたルルーシュは、やがて砂を踏む足音も届かなくなったところで、それに気付いて、忌々しげに視線を外した。

その先で、C・C・が投げ捨てていった毛布の塊を見つけてしまったものだから、ずいぶんと気だるい思いをしながら数歩の距離を戻って回収した。

こんな羽目に陥るくらいなら、

「……………最初から、おまえに当り散らしてやれば良かったのか？」

何も言わずに不貞腐れた態度を晒して、C・C・の隣りで過ごしてやれば良かったのか？

どうせおまえのことだから、俺の機嫌には構わずに平然と突っ掛かってきたはずだから、十中八九まず間違いなく、そのまま喧嘩に発展したはずだ。

それではルルーシュの気分も悪いし、子供たちの教育上も良くな

いことと判断したから、無意味な衝突を避けるためにも選んだ最善ルートของ筈なのに、なおさらギスギスと関係が気まづくなっているのは、結局どちらの考え方が甘いのか。

いずれにせよ、ルルーシュなりの気遣いが相手に伝わっているところか、延々七年間も完全に気持ちのすれ違っていた事実の前に、いまさら考えるのも馬鹿馬鹿しくなるような倦怠感を引きずりながら気だるく家路を辿り始めて。

やがて家に帰りついたルルーシュは、風呂に入って、パジャマに着替えたところで、迷わず子供部屋に直行した。数時間遅れで「おやすみ」のキスをするついでにトイレに起こして、10分ほど本を読み聞かせるリクエストに応じてやってから、いつものようにすんなり寝かしつけた。

その間、一度も姿を見せなかったC・Cは、家中の戸締りと消灯を確認したルルーシュが、やがて寝室に足を運んだ際には、とくにパジャマ姿でベッドに潜っていて。ルルーシュなど、まったく眼中にない様子で読書に耽っていた。

ちなみに、現在夢中になっているのは、二週間前にルルーシュがプレゼントした品物だ。

露骨な流血シーンなどは苦手になっているが、それでもエルキユール・ポアロやシャーロック・ホームズが活躍する推理モノは好みに合っている様子で、寝る前の日課にせつせと愉しんでいる最中だ。ベッドの端に腰を下ろして、しばらくその様子を眺めていたルルーシュは、頭上に本を掲げているC・Cの指先が五回ほどページをめくる動作を見届けたところで、「さて」とばかりに遠慮なく、毛布の上から彼女に押し掛かった。

「……悪いが今夜は、とてもそんな気分になれない」

あんな話をした直後に、よくそんな気になれるな？　と言いたげに、ゲッソリしている内心を隠しもしないで本の下から半眼で視線を返してくる。

ルルーシュは、含み笑いを浮かべた頬杖の上から皮肉で返した。

「毎年のことだろう？ もう少しくらい機嫌良く付き合えないものなのか？」

「家出男が寝言をほざくな」

「どこかの魔女が妙な心配をしなければ、単なる気分転換で済んでいたはずだ。俺の責任じゃない」

「だったら、書き置きぐらい残しておくのが礼儀だろう？」

「来年からはそうするさ」

「悔い改めるという選択肢は、おまえにはないのか？」

「事情を話せば良いんだろう？ なら、さっき話したとおりだ。俺のほうで事情が変われば、また改めて話し合いの場を設けるさ。それまで不必要に騒ぎ立てる真似はしないんだろう？ なら、いいじゃないか、別に」

薄笑いを浮かべたまま、当てつけがましい物言いで、C・Cの投げ捨てていった言葉を丁寧になぞり直すと、見る間に、眉間にキリキリと濃い縦皺を刻んだC・Cは、一瞬チラリと本のほうに視線を逃した。

今は目障りなだけのハードカバーを、ルルーシュはやりわり掴んで取り上げると、腕だけ伸ばしてヘッドボードの先にある本棚に返してしまった。

むつつり唇を引き結んだまま、枕の上でおとなしく成り行きを見守っていたC・Cは、やがて唇を狙って屈み込んできたルルーシュと眼が合うと、金の瞳を獐猛に光らせながら、待っていた顔つきで静かに憤懣を吐き出した。

「どうして、私が悪いという話になっているのか、皆目見当がつかないが？ そもそも、おまえが」

「ナナリーとおまえと、どちらのほうが大切な、俺の口からハツキリ言っただけかい？」

吐息が触れるような至近距離から、何の皮肉もなく質問で遮る。

とっさに黙り込んでしまったC・Cは、すぐにも瞳の奥の表情を覗かれるのを嫌って、そっけなく視線を外してしまうと、「今は

それほど必要じゃない」と例のごとくに突っぱねた。

ルルーシュは、C・Cの顔の上も構わずに、フンツと短く笑いを吐きこぼす。

「大した愛され方だなア。アイツらのためなら、優先順位を気にするのにな？ 本当はおまえ、それほど俺が必要じゃないんだろう？」

「……ッ……仕方がないだろう……！」

突然堰を切ったように小さく叫んだC・Cは、ルルーシュの鼻面を枕の上に叩きつけるような勢いで、彼の後ろ髪を乱暴に鷲掴んだ。

最初からそれが目的で仕掛けていたルルーシュに抵抗の意志はなかったが、痛いほど指を絡めて縋りついてくる無言の告白に、少々イジメが過ぎてしまったかと反省して、とっさに受身を取っていた姿勢からあっさり脱力した。

遠慮なく体重を預けてくる男の下で、苦しげに荒々しい呼吸を繰り返していたC・Cは、おもむろに身体を大きく膨らませてから吐息すると、ルルーシュの首筋に絡めていた両腕をグツタリ投げやりしにシーツの上に投げ出した。

「……わたしは、別に……」

ルルーシュは、C・Cの肩越しに枕の上に頬を預けた至近距離から乾いた女の呟き声を聞いている。

「別に私ひとりの話なら、どうしても暮らしていけるんだ。おまえが、そういう世界を用意してくれたんだからな。……だが、あのチビたちは……おまえが守ってやるのでなければ、笑顔のひとつも与えようがない」

「……」

「あのチビたちの『幸福』以外、欲しい物なんかひとつもない。いつそ私が将来的に受け取る分まで、丸ごと全部渡したって構わない。そうやって願うだけなら簡単さ。……いったい私はどうしてやれば、もつと確実にあのチビたちを『幸福』にしてやれるんだ？」

淡々と呟く女の声が聞こえなくなっても、しばらくじっと動かず

にいたルルーシュは、なんとなく目を瞑って息を吸い込んで。その息をフウと長めに吐き出しながら、やわらかな女の身体の上から横向きに寝返りを打ち直した。

後頭部を片手で支える高みから、冷静に自分を見つめる男の表情を、力なくC・C・は見つめ返している。

いつになく鈍重に、金の瞳を曇らせながら。

もちろん彼女を不用意に、追いつめてしまったのは自分だ。

それでもルルーシュは、なんとなく意識的に、彼女の過去の生き方を垣間見るような心地に誘われた。

Cの世界で余さず覗いてしまった記憶の断片。

おそらくC・C・も、それを意識しているからこそ

……いまさら、忘れたフリも通用しないか。

小指の爪の先ほども気の進まぬ本心を隠しながら、ルルーシュは、さりげなくC・C・の指先だけを握った。

「おまえのそれは、理想が高すぎるな」

「そんなことはない、現におまえは」

「いいから、聞け。 おまえの言う、『より確かな方法』を求めて、俺は世界を変えてしまったが、実際どうなった？ 結局その先は、ナナリーの努力任せだ。どれだけ相手のために、『良かれ』と思って防御を固めても、押しつけの善意がそのまま『幸福』に転じるわけではない。土台を固めてやる以上の愛し方は、そのうちアイツらに閉塞感を与えてしまうだけだ。もしくは、異常に依存心の高い人間が完成するかだな」

C・C・は、微動だにしなかったが、たしかに一瞬、指先がピクリと震えたのがルルーシュには伝わった。

ルルーシュは構わず話を続ける。

「おまえの不安が、いったい何に端を発しているのか？ 今はヤブヘビになりそうだから訊ねることはしないが、いずれにせよ、おま

えの言う『守る』と、俺の言う『守る』は、全くの別物であることを忘れるな」

「……別物？」

小さく掠れた声で、怪訝そうに問い返す。

表面上に現れた動揺はその程度のもだったが、それでも、『あの男と過ごした歳月は、今でもまだ忘れたわけではないのだな』と確認して、安堵している自分に、ルルーシュは奇妙な可笑しさを感じた。

忘れられるはずもない。自分の孤独を慰めるために、言ってみれば独善的に愛し過ぎてしまった男を、最後まで独断で処分してしまったわけだから。

おまえは卑劣だと罵倒して、責任を追及したルルーシュの要求を叶えた形だが、それでもC・Cの『人を愛する』という情熱を、間近で体感している今だからこそ、時には不安を覚えてしまう部分も少なからず存在しているのだ。

「ああ、そうだとも。今でも充分、構い過ぎだとは思うがな。それでも感心するほどに心根の純粋な子供に成長しているじゃないか。目先の心配は全部おまえに任せているからな。おかげで、俺のほうでも気兼ねなく、将来的に広義な立場から、アイツらを守ってやるシナリオを構築する余裕も生まれるわけだ」

もちろん日常的に必要なとなる仕事の分担は、必要に応じて公平に割り振っている。

だが、心配事に関しては、よりもっと明確に範囲を切り分けてしまおうと、プロポーズを受ける際にC・Cのほうから提案した。

将来的な心配を、ルルーシュが。

目先の心配を、C・Cが。

そうやって、この七年来を、これといった支障もなく、何とか無事に乗り越えてきている。

ルルーシュに指先を弄ばれるまま無抵抗に、ぼんやり目の前の空間を眺めていたC・Cは、

「あのチビたちの人生を、そんなふう簡単に、お得意の理論で片付けるな」と不満を洩らしたが、何だか奇妙に冴えない言い方だった。

咲き初めの白薔薇を思わせる　　まるきり荒野にポツリと狂い咲いてしまったような白皙の横顔。

彼女の美貌に何より華々しい笑顔の花を咲かせる『幸福』を、今も変わらず追及しているのは自分だが、それを受け取る彼女自身は、本当に負担に感じてないのだろうか？

まるきりルルーシュの思考を読むようなタイミングで、自嘲気味に小さく苦笑したC・Cは、チラリと横目で流し見るように視線を返してきた。

「……別に無理して持ち上げる必要は無いぞ？　どう頑張っても、今の私にはおまえの悩み事に気付いてやる余裕など皆無だった。どころか、むしろ意識的に考える時間を惜しんでいたのさ。どうせおまえのことだから、いつものように『ナナリー恋しさ』で片付けてしまえば、私はその間にせっせとチビたちを愛する時間に専念してられる。その点に関してなら、私は現におまえを必要と感じていないのさ」

ルルーシュは、わざとそっけなくC・Cの手を投げ出すと、溜息混じりに訊ねた。

「そんなに好きか、アイツらが？」

C・Cは、そこでもまたクスリと笑って、顔の上に手のひらを押しつけると、「気が狂いそうだ」と笑っている声で冷静に呟く。

「自分でも、どうかしてるとわかっているのさ。それでも、なりふり構ってられないんだ」

「……………」

「一度その実感を、肌身で味わってしまった子供の探究心はすごいぞ？　毎日こつちがヘトヘトになるまで愛しても、愛せば、愛した分だけ、平然と態度で返してくるんだ。その場かぎりじゃない、前に愛した分も、あのチビたちは、小さな頭でしっかり覚えていて、

こっちが面倒臭がつて手抜きをしようものなら、すかさず『もつと寄越せ』と泣きわめく。ならばと、こっちもムキになって愛してやれば、あのチビたちは当然のように受け取って、吸収して、まったく懲りた様子もなく、『もつと寄越せ』と求めてくるんだ。私はその要求を受け取るのがうれしくて、ついつい時間を忘れて夢中になる。その繰り返しさ。だから、さっきおまえに、マオのことを言われた時には、正直言つて血の気が引いたぞ？」

顔の全体を隠した指の隙間から、息が洩れるような笑い声がひっそり静寂の邪魔をする。

横臥に寝そべる至近距離から、ルルーシュは冷静にそんなＣ・Ｃの姿を見つめている。

「おまえだつて別に、忘れたわけではないんだろう？」

「さア、その点が、タチの悪さの真骨頂だな。本音を言えば、私は忘れてしまいたかった。おまえがあの子たちに感じた呵責と同じ理由で。マオのことを『無かったこと』にしてしまえば、私は何の気兼ねもなく、純粹にあの子たちを愛する時間に夢中になっていられる。だからなア、ルルーシュ？」

一瞬きつく両手で顔を押さえつけ。息さえ詰めていたＣ・Ｃは、やがて潔くその手を外してしまうと、微苦笑まじりに途方に暮れたような視線を返してくる。

「白状すれば、今の私に、『贖罪を果たすための義務』とか、『世界の正しさを立証するための理念』とか、説かれてもピンと来ない……それどころか、そんなことに費やしている時間が有つたら、『もつと真面目にアイツらの将来を考えてやれよ』と苛立つだけなんだ」

「……………」

「過去に悪行を働いたからどうした？ 今更そんなもの悔やんでも、アイツらを愛するために一体何の役に立つんだ？ 私はそうやって、おまえと交わした約束さえも都合良く忘れてしまいたいのだ。我欲の欲するままに、数多の不幸を貪り続けてきた魔女の本性を晒

してな」

「……………」

「あぐくの果てに産まれてくる子供のほうは最悪だ。おまえが前に言った通りさ。我ながら、こんな身勝手な女が母親で、一体どうしてやれば正常な人間まともが育つのだろうな？ やっぱり、おこがましいことだったんだよ、こんな女が…人並みの『幸福』を求めるなんて真似事は」

「C・C、止めろ」

「それでも実際、もう産んでしまったのだから私の腹には戻しようがないだろう？ 誰かに『間違っている』と後ろ指を差されても、私にはこんな愛し方しかわからない。…愛することまで止められてしまったら、私は一体どうやってアイツらを守ればいいんだ？

…ッ…もう気が狂いそうなんだよ、ルルーシュッ！」

C・Cは決して、子供に關係する事柄では涙を流さない。

自分の涙が、見えない『不幸』を確定してしまうのが怖いのだ。だが、最後のそれだけは、どうやら自制が追いつかなかった様子で、小さな声で叫ぶなり、すばやく頭の上まで毛布を被ってしまった。

そして、脅えた子供がするように、クロスさせた両腕で頭をがちり抱え込み、今にも暴れだしそうになる感情に必死の抵抗が続いている。

「バカか、おまえは」

こんな場合に、余計な口出しをするのは、火中に爆竹を投じるのと同じようなものだった。

どうせまた馬鹿みたいに怒り狂うのがわかっていたから、ルルーシュも極力冷静に徹する努力を続けていたのだが、いい加減、我慢の限界だった。

それでも、こっちも長年の付き合いで、多少なりとも気持ちも理解できるから、辛うじて冷静さは失わずに済んでいた口調で、淡々と愚痴を吐き出すように言っただけで聞かせた。

「今更おまえが泣いたところで、影もかたちも見えないどこかの誰かにつけ入る隙を与えるほど脆弱なシナリオなど用意した覚えはない。仮にそうした部分を含んでいるにしろ、今のおまえは『幸福』なんだろう？　だったら、せいぜい今の時間を有効に活用して、より完璧な状態にシナリオを練り直してやるだけの話だ。それとも何か？　俺は惚れた女を泣かせる余裕もない、駄目な男か？　そうやって俺を見下しているんだぞ、今のおまえは」
本当は、ルルーシュだって、C・C・が泣かない理由に気付いている。

そのうち、感情に歯止めが利かなくなりそうで怖いのだ。
数百年の長きに渡って、『誰かを愛し、愛されたい』と飢えてきた魔女。

愛情が満たされるという感覚を、初めて肌身で味わっているのは、C・C・のほうでも同じことだった。

そして今なら、望めば望んだだけ、満たしてくれる相手が手近な場所に存在しているのだ。

油断をすれば、どれだけ貪欲に、幼い子供たちを魔女の本性の生贄に食ってやろうかと手ぐすね引いて待っている。

そんな自分の内面に気付いているからこそ、確実に意志の力だけでコントロールが可能な部分を残しておきたいのだ。

だったら俺は、何のために一緒にいるんだ？

おまえが暴走していると判断したなら、いつだって俺がおまえを止めてやる。

今までだってそうやって、二人で一緒に助け合ってきたんだろう？
「余計な干渉をするなッ！　これだって立派に、私なりの愛し方なんだ！　自分で決めたことくらい、最後まで貫き通す自由くらい与えてくれたってかわないだろうッ！」

怒髪天を突いてしまったルルーシュは、激しく舌を鳴らしてベッ

ドを抜け出すと、ドアの音も高らかに部屋から飛び出した。

にわかに静まり返った部屋の中に、ひとり取り残されてしまったC・C・は、わずかに安堵さえ覚えながら、小さく丸めた身体を痛いほどに締めつけて、ブルブル震えながら感情の荒波に逆らう努力を続けていたのだが、ややあつて開きっぱなしのドアの向こう側から、ひっそり話し込んでいる声が近づいてくるのに気付いて、思わず憤然と歯噛みしながら毛布を蹴り上げた。

「……卑怯だぞ……ッ！」

とつさに名前を呼ぶのを避けていたのは、やがて寝室に戻ってきたルルーシュが、両腕に眠い顔をした子供たちを抱えていたからだ。激怒しているC・C・には、チラッとだけ冷たい視線を投げかけて、その最中にも子供たちにはゆったりしたいつもの話し方で、「さア、それがなア、お父さんにもよくわからなくて困っているんだ」などと説明を続けている。

「どうやら、お父さんが外で悪いことをして、おまえたちと一緒に居られなくなる夢を見たらしいんだがな」

ただでさえ、しばらく前に寝ついたところを、再び強引に起こされているものだから、口口は腕の中で眠りの最中で。寝起きの悪いナナリーは、今にもぐずり始める一步手前の顔つきで精一杯に顔を顰めている。

それでもじきにベッドの至近まで辿りつくと、安眠を妨害する父親の腕からはさっさと抜け出して、膝を抱えて顔を伏せている母親の背中に遠慮なくペツタリ張りついた。

「ママ、こわいの？　ないてるの？」

生まれて初めて目にする、母親の弱々しい姿に、驚いているのは事実だが、それでもどこか真剣みには欠けていた。

今はとにかく自分が眠いのだ。だからすぐにも振り向いて、「だいたいどうぶだぞ？」といったものように優しい抱擁で甘やかしてもらうことを期待している。

それがわかってしまうから、C・C・もとつさにいつもの自分を

取り戻し、何かしら優しい言葉を発しようとするのだが、今の自分が迂闊に口を開けば、大惨事を招きかねないことにも気付いていた。

とにかくルルーシュに、腹が立つて仕方ないのだ。

激怒したC・Cが「自由にさせる」と求めたから、ルルーシュはあっさり要求に従ったのだ。

ただし、『子供たち』という掟破りの賓客を招いて、自分は高みの見物を気取るつもりだ。

どこまで姑息な男かと、考えるだに腸が煮えくり返ってしまうが、それが一番の弱点であることを承知しているわけだから、反撃に転じたルルーシュが手加減するはずも無い。

結局、顔を上げる余裕すら取り戻せないままに、腕だけ伸ばしてナナリーの後頭部を撫でて慰めた。

予想に反して、ちっともいつものように甘やかしてくれない母親に、ナナリーは、さっきよりも余計に怒っている顔をして、突然クルリと振り向くと、ベッドの上で座ったまま眠っているロロの頬っぺたを両手で挟んでバチバチ叩き始めた。

ロロはビックリして飛び起きた。見る見るうちに、両頬が赤く染まってゆく。ナナリーが本気で叩いたのだ。

「なあに？ いたいよう、ナナリー」

「なあに、じゃないの。ママが、ないてるの」

「えっ、どうして？」

「パパが、わるいの。だから、ないてるの」

「えっ、どうして？」

起き抜けに突然そんなことを言われても、状況が理解できるはずもない。

結局、縋りつくような眼差しでルルーシュに助けを求めてきた。

その頃には、そっけなくベッドの上の足元付近に転がって、仕事に関係したファッション雑誌を眺め始めていたルルーシュは、ほとんどうわの空のような話し方で、簡潔にナナリーにしたのと同じ説

明をしてやる。

いつになく冷たい父親の態度に、得体の知れない不安を感じながらも、話の大筋は理解したのだろう。

すぐにも母親の前に回りこむと、熱心に声を掛け始めた。

「おかあさん、ほら、おとうさんも、いるよ？ こわくないよ？」

「そうよ、こわくないのよ？」

ロロと一緒に落ち着いて話を聞かされて、ナナリーなりに母親の態度の意味を理解したのだろう。

たちまちロロには負けじとばかりに、熱心に声を掛け始める。

普段は自分たちのほうが同じような文言で、さんざん世話を焼かれているわけだから、二人共なかなか堂に入った慰め方だった。

だが、今のＣ・Ｃ・にしてみれば、倒れそうになっている斜塔をグラグラ揺らされているようなものだった。

急場を凌ぎたい一心で、平常心を取り戻そうと躍起になっているのがわかる。

その足元から、『慰める』という口実で、双子が競い合うように『構ってくれ』と邪魔をしているのだ。

相手は自己顕示欲の強い三歳児のこと、とにかく何でもいいから構ってやりさえすれば、あっさり欲求が満たされて、別のことに興味を移しもするのだ。

経験上、それがわかっているはずなのに、出来ないでいるＣ・Ｃ・は、結局、子供たちには見せられる顔を作れなかった様子で。「だいじょうぶだから心配するな」と、両腕で抱えた膝にひたいを強く押しつけながら苛立ちに引き攣っている小声で応じた。

とっさに鼻先で思い切り吹き出してしまったルルーシュは、読んでいた雑誌をバサリと無造作に床の上に放り投げると、大きな瞳を真ん丸に見開いている子供たちのほうに向かって寝返りを打ち直した。

そして、不安を慰めてやるどころか、なおさら不安を掻き立ててやるような態度で、冷然と突き放すように訊ねたものである。

「だがな、おまえたち、本当に、お父さんが居なくなったらどうする？」

普段から、「物を大切にしなさい」とさんざん言われ慣れているナナリーは、すかさず怖い顔をして「わるいことしちゃ、だめなのよ？」と、ルルーシュをたしなめた。

「どうする？」

ルルーシュは、それには返事もしないで、自分を見つめる口口に向かつて訊ねる。

普段から、叱責の際に容赦しないのは、もちろん父親のほうだった。

だが、その際にも決して見られなかった種類の違う冷たさに、口口は無意識のうちにも母親のパジャマに縋って助けを求めたが、期待した反応が返らなくても、母親の体温に触れたことで安心したのだろう。

「ぼくがいるよ」と、まるきり自分を励ますように、母親の身体をギュツと両腕で抱きしめながら答えた。

「ほらほらみて、おかあさん、ぼくがいるよ？ こわくないよ？」

「わたしも！ わたしも！」

父親が相手をしてくれない腹立たしさも手伝って、ナナリーはなおさら母親の背中にピョンピョンとしがみ付きながら元氣よく答えた。

「わたし、しってる。こわいの、ゆめ、うそなのよ？ だっこしてねる？ 口口おにいちちゃんなんか、いっつもよ？」

「そんなの、ナナリーだって」

「わたしは、しないもん」

「うそだよ。だって」

「しないもん！」

どちらが先に、母親に相手をしてもらうのか、どうしても張り合う気持ちがあるものだから、次第に小競り合いが始まってしまいが、それでもまだ母親が顔さえ上げようとしないものだから、しまいに

は癪癪を起こし始めたナナリーが、怒りで不安を誤魔化しているような訊ね方をしてくる。

「パパは、いっちゃうの？ どこに、いっちゃうの？」

それ以前に、どうして構ってくれないの？ と悔しそうに訊ねてくる、母親譲りの金の瞳。

見る見るうちに、大粒の涙が溢れて頬を伝ってゆく様子を確認しながら、ルルーシュは、しみじみ万感を溜息に混せて吐き出した。

「いいや、夢の話だぞ？ さっきから、そう話しているだろう？」

「だつてっ！」

だつたら、どうしてママは構ってくれないの！ と地団太を踏むナナリーが態度で告げてくる。

その隣りで、容易に身じろぐことすら出来なくなってしまうているC・Cは、ますます強ばらせている身体を激しく締めつけながら首を振り、『もう止めてくれ』とルルーシュだけに伝わる方法で告げてくる。

もちろん意図的に、C・Cを限界まで追いつめるつもりでいたルルーシュは、『ふざけるな』と内心で怒りを吐き出した。

「今更おまえが怖気づくような世界か？ 少なくとも俺は、このチビたちが、将来的に努力次第で『幸福』を掴める程度の世界は用意したつもりだ。土台は用意してやったのだから、あとは次の時代を生きてゆく人間たちが、好きなように努力に励むしかないだろう？ いったい何をそんなにトチ狂っているのか知らないが、おまえがどれだけ死に物狂いで努力に励んだところで、そこから得られるのは『幸福』おまえ自身のための『幸福』だ。こいつらに与えられるのは『幸福』そのものじゃない、あくまで『愛されている』実感だけなんだ。勝手にその部分を、自分に都合の良いように履き違えるな」

ルルーシュ自身、まさにその部分を履き違えていたのに気付いているからこそ、断言してしまえる結論だ。

自らの欲得だけで構成されていた世界に、少しだけ客観性を与えたのが『優しい世界』。

その存続を願っている人間たちが、今の世界を主軸に構成して努力に励んでいるわけだから、おまえがそこまで必死に守ってやらなくても、こいつらが自力で『幸福』を求め始める頃には、もう少しばかりマシな世界に落ち着いているはずじゃないのか？　そう
いったニュアンスを理解するには、少なくともあと十年は早い子供たちは、急に始まった難しい話に目を白黒させているだけだったが、その最中にも決して母親を抱きしめている腕を、離そうとは考え付かないようだった。

本能的に、今は父親が、母親の味方でないことを察知しているのだ。

まったく、大した愛され方だよと、ひどく恨みがましい気分で内心に愚痴を吐き出しながら、ルルーシュはいい加減うんざりし始めている口調で、最後通牒を投げつけた。

「それで、おまえは結局、誰の『幸福』を一番優先したいんだ？」

C・Cは、何も答えることが出来なかった。

双子の『幸福』を望む以外、欲しい物などひとつもない　決ま
っている。

だから万が一にも、子供たちの愛している『母親』以外の自分が、子供たちを傷つける心配のないように、内心で荒れ狂っている激情を、必死で抑えつける努力を続けていたのだが、同時に、その質問だけはどうしても放置することが出来なかった。

「……ッ」

ここで動けばルルーシュの策に嵌まるのは百も承知で、それでも痛いほどに抱きしめていた両脚をペタリ内股に倒してしまうと、胸の位置まで顔を垂らしたまま、双子の背中に両腕を回して抱きしめた。

それでもまだ意地のかぎりを総動員して、感情を押し殺してしま
うのだから、何とも憎らしいかぎりだが。

ルルーシュが相手なら、「余計な世話を焼くなッ！」と邪険に徹
してしまえるところも、ほとんど真下から顔を覗き込んできている

子供たちには通用しなかった。

小さな四つの手のひらで、ペタペタと顔中を撫で回されながら、
「だいじょうぶ？」としつこく訊ねられ。

本心では、『どうして構ってくれないの？』と今にも泣き出しそうに傷ついているのがわかってしまうのに、今の自分では、もうどうにも相手をしてやる事が出来なくて。何も言えずに、顔の位置だけが、どんどん下へ下へと降りて行くばかり。

「おとうさん！」

ついには、のんびり派の口口にまで、癩癩を起こす一步手前の顔つきで助けを求められ、ルルーシユはやれやれと仕方なく腰を上げると、C・C・のすぐ目前にどっかり腰を下ろした。

そして、だしぬけに人差し指でC・C・のつむじをグイッと下方に押しやると、しみじみ呆れ口調で言って聞かせたものである。

「本当に、おまえはこんな愛し方しかできないのか？ おまえが、それで満足しているなら話は別だがな。方法がわからないなりに、こいつらの模範として価値観を養っているのはおまえなんだ。いまさら俺がどれだけ知った顔をして講釈を垂れたがっても、おまえの言い分を、よりずっと素直に聞き入れる感受性が育ち始めているのだから仕方が無いだろう？ いいから、さっさとあきらめて、泣け！」

それでもまだ抵抗をあきらめないC・C・は、あぐらを組むルルーシユの太腿に激しく爪を立ててきた。

えらそうに言うおまえのほうこそ、肝心なところでいつまで経っても過去を捨て切れずに、義務やら罪やら唱える以前に、父親である自覚がちつとも追いつきもしないで。

恨みの爪が渾身の力で食い込んでくる感触に、さすがにルルーシユも痛みに顔を歪めてしまうが。

どんなにC・C・が認めたくなくても、手のひら越しに伝わって

くるのは腹立たしいほどに落ち着き払っているルルーシュの体温。たったこれしきの状況下で、口も利けないほどに追いつめられている自分と違って、きっちり正面から子供たちと向かい合っているのはルルーシュのほうだった。

そう思った瞬間に、パタパタと勢い良くあふれ出してしまった涙の連続に、心底ビックリしている子供たちが茫然と目を丸くしながらルルーシュの顔を凝視してくるので、ルルーシュは片手でＣ・Ｃの後頭部を抱き寄せながら苦笑した。

「お母さんはな、おまえ達まで悲しくなるんじゃないかと心配して、今までずっと泣くのを我慢していたんだ。いいよなア、別に？ 怖い夢を見たときくらい、泣いたって」

すっかり驚いてしまっている子供たちは、しばらく声も出せない様子だった。

ルルーシュの説明を、頭で理解したというよりも、動じる気配もない父親の態度に「心配ない」と納得したのだらう。じきに、ナナリーがひと足先に立ち直った。

「そんなの、口口おにちゃんなんか、いつつもよ？」

「もうっ、ずるいよ、ナナリー！」

思わず笑ってしまいがち、さりげなくＣ・Ｃの背中に両腕を回して胸元までしっかり抱き寄せると、それに気付いたナナリーが、負けるものとペツタリ背中に張り付いた。

先を越されると、なぜだか躊躇してしまう口口は、羨ましそうにナナリーの姿を眺めたが、その性質を理解しているルルーシュが、こっそりナナリーには気付かれないように、指先だけで「来い」と手招くと、たちまち少しはにかむような顔をして、ナナリーの反対側からＣ・Ｃの背中にペツタリ張り付いた。

ルルーシュは、Ｃ・Ｃの背中ごと子供たちの背中も同時に抱きしめて、やがて喜んだ双子がキヤアキヤア騒ぎ始めるまで、ギユウギユウと巻きつけた腕を離そうとしなかった。

「不思議なものだよな……」

それから半時間ほどが経過して。

夫婦のベッドの中央で、すっかり気持ち良さげに寝息を立てている双子の姿を眺めながらルルーシュがポツリと呟いた。

その向かい側に横になっているC・Cは、どことなく放心している顔つきで、子供たちの胸元に抱擁の腕を伸ばしながら、「……うん？」とすっかり泣き疲れている小さな掠れ声で応じた。

母親が号泣する姿を、生まれて初めて目撃した子供たちは、それぞれ別な反応を示した。

ナナリーは、こましゃくれた様子で肩をすくめがちに。

ロロは、涙する母親の姿に純粹に感動している様子で。

小さくても、やっぱり男だなアと、単純にルルーシュは感心したもののだが。

まんまとルルーシュの策略に嵌められてしまったC・Cは、泣いた後の始末にずいぶん困って。すっかり途方に暮れていたところを、また三人がかりで毛布の中に追いやられ、今に至っているような次第である。

そんなC・Cの指先に、やはり手慰みを求めて他愛無い悪戯を仕掛けている最中のルルーシュは、目線だけは双子の上に据えたまま、淡々と静かな声で話を続けている。

「おまえが妊娠したと知ったとき、嬉しかったが、やっぱり心のどこかでは、他人事の気分を拭い切れずにいたからな。産まれる前からそれなりに『可愛い』とは感じたが、まさかこんなに情が移るとは正直考えていなかったんだ」

なんとなく聞かされるままに淡々と話に耳を傾けていたC・Cは、「おまえのそれなりには、ずいぶん常軌を逸していたと思うがな？」とからかったが、ルルーシュはフンツと短く笑っただけで相手をしなかった。

「それが今では、この有り様だ。こいつらを失望させないで済むのなら、俺はどんな嘘だって平気で重ねてやる。だが、それでも俺は……たとえこいつらに面罵されるのがわかっていても、世界を変えたいと願う気持ちのほうを優先させただろう。おそらく今のおまえなら、こいつらのために死に物狂いで、俺を止めようとするんじゃないのか？」

今度はC・C・が返事をしなかった。

だが、伏し目がちにチラツと泳いだ視線のやり方で、「どうせおまえは、言っても聞かないクセに」と思っているのが一目瞭然だった。

ルルーシュは、なんとなく面映い気分を隠して、こっそり息を殺して微笑む。

「こいつらにとって、何が一番必要か？ おそらくそれが一番よくわかってるのは、C・C・、おまえだ。今のおまえなら、おまえ自身の弱さから、こいつらを簡単に守り通せるはずだと思うぞ？ 少なくとも俺は、この七年来、ずっとそう思いながら暮らしているんだ」

双子が産まれる以前から、C・C・がどれだけ自分に厳しく接してきたか、ルルーシュはその全てを見て、知っている。

その大半が、彼女の保有しているコードに対する反逆だったが、結果的にそれを実現するためにはC・C・自身が根本的な心の改革に乗り出すしか方法がなかった。

そして、今現在も悩み続けているルルーシュと同じように、今もまだ全ての結論が出尽くしているわけではないけれど、それでも。

試行錯誤の最中に、辿りついた一つの結論として、ここに、こうして双子が眠っている。

「どっちみち、おまえがどれだけ身勝手に、こいつらを愛したいと頑張っても、あとほんの数年の話だぞ？ 放っておいても、そのうち外の世界に飛び出して行ってしまうんだ。四六時中こうしてベタベタ過ごしてられるのも、せいぜい一、二年か？ まアそれだけ

樂觀的に見積もっても、三年以上は有り得ないだろうな。学校や、友人たちと過ごす時間も、飛躍的に増えていくだろうし、それ以前に、じきに反抗期を迎えれば、親になんか見向きもしくなくなるんだ。要するに、おまえに残されている時間の猶予は、今でも充分秒読み段階だと言いたいわけなんだがな、さアどうする？」

最後のそれは、もちろん皮肉混じりに、からかう口調で。

言っている本人も、本当にそうであることを自覚して、思わずほんのり切ない気分を味わってしまうが。

しばらくじつと黙り込んでいたC・Cは、パチパチツと忙しく瞬きを繰り返して。

また少しホロリと来ている涙目で、恨めしそうにルルーシュを見上げた。

「まったく、おまえは：私の敵なのか、味方なのかどっちなんだ？ おまえが、すぐそうやってそのかしてくれるから、ついつい私まで、『じゃア、やってみるか？』なんて気分になる。いざ蓋を開けてみれば、どうせまた途方もない苦労と忍耐の日々が、待ち受けているのがわかり切っているはずなのにな。一度その気になってしまったら、今度は私が、納得するまで止める気になれないんだ。正直言つて、その点に関してなら私はもうずいぶんと後悔しているぞ？」

その口調が、いかにも彼女らしい憎まれ口だったので、ルルーシュはクツクツと喉の奥で愉しげに笑いを弾ませながら、「仕事帰りに飲むビールが美味しいのと同じ理屈だな」と呟いた。

「苦労の後に味わうからこそ、些細な『幸福』がひとときわ際立つ」「最悪だ」

呆れた様子で笑ったC・Cは、それまでずっと眼で愛撫していた双子の上に屈み込み、慣れた仕草でチュツ、チュツと頬の上にキスを落とした。

そのとき見せた、ほんのり切ない眼差しで、考えていることが手に取るようにわかってしまつて。

やがてC・Cが顔を上げるのを待ち、ルルーシュはその唇をチユツとすばやく盗んだ。

「それでも俺は、今の時間を味わっているからこそ、その前の18年も結構悪くなかったと実感できるんだ」

いつだって、そのときの自分が選んでいる人生に、絶対的な確信など得られるはずもない。

けれども、信じた道を歩み続けていられる　そんな自分を確信していられる限り、たとえどんな人生を歩んでも、決して自分は後悔することはないだろう。

「肉体的な成長は止めたかもしれないが、今はこいつらと一緒に、精神的な成長を極めるのも悪くはないと思っている。言うほど効果が見えないのがアレだがな、まア、そのうち…、追い越されないように頑張るさ」

ほんのり赤い顔をして話に耳を傾けていたC・Cは、たちまちフツと息を抜くように微笑して、ぐずる双子を慰めるときと同じやり方で、悪戯にルルーシュの顎の下をくすぐった。

「世話の焼ける子が一番カワイイとはよく言ったものだが。おや？ 私の産んだのは三つ子だったかな？」

「黙れ、魔女」

陽気にクスクスと笑い転げる女の背中を、子供たちと三人同時に抱きしめて。

ルルーシュは腕の中に存在している確かな温もりで、胸の奥に存在している弱気な自分をこっそり慰めた。

番外？：ゲラン・ダムール（？）

天高く澄み渡っている青空の彼方から、甲高く鳴くヒバリの声が響いている。

凜とした冬の陽射しは、朝露に湿った黄金色の牧草地をサツと染め上げて、一瞬のうちにその温もりで大気の頑なさを甘く緩ませる。道を行く人々の口元には、いずれも白い水蒸気の輪が目立ち、身体の表面を照らしゆく太陽の温もりをずいぶん待ち焦がれていた様子で、忙しく両の手指をすり合わせる動きが多く見られた。

「なんとも寒い朝になりましたね……」

「本当に……」

「でもあるいは、こんな朝には……」

短い挨拶の言葉尻に重なって、カーン、カーンと荘厳に鐘を鳴らす音が響くのは、まもなく始まる葬列を知らせるための合図だった。一瞬で数多の郷愁に引き込まれ、言葉を失くしてしまった人々は茫然とその場に立ち尽くし、過ぎし日の思い出にその身をゆだねては、それぞれに物憂い溜息を吐きこぼす。

「……何年だつて、長すぎると言うことはないでしょうが……」

「……ええ、早すぎますね……今から彼の皮肉が懐かしい……」

言葉少なに思いを交し合った人々は、なんとなくお互いに顔を見合わせながら苦笑を洩らすと、最後の挨拶をするために、かの人の待つ野中の一軒家に集合した。

繊細な鏤刻の成されている木製の棺は、既に親族の手により閉蓋が済まされており、あとは出棺の時を待つばかりだ。

思い思いに故人を偲んで集いゆく人の波は絶えることなく、哀惜に沈みがちになる沈黙を慰めるように、しめやかに思い出話を弾ませる。

その裏庭では、今日も変わらず無関心を装っている淡い潮風が、

二本の大きなブナの木の葉を悪戯に揺らしていた。

冬の季節を迎えると、すっかり寂しくなってしまう落葉樹。

わずかばかりに残っている木の葉は、それでも冬の陽射しを存分に反射していて、遠景にキラキラと輝く海岸線と同種の和やかさに満ちていた。

長年、その木の下に放置されていた古風な寝椅子カウチは、風雨の影響で随分くたびれてしまったが、物欲の少ない故人が珍しく愛着を示していた品物だったので、おそらく当分の間はこのまま片付ける気分になれないのだろうなと思いつながら、彼女は放心した様子でそこに腰を下ろしていた。

その身を包む、繊細な喪服のワンピース。

涙にほつれた漆黒の髪の毛は、乾く暇もなく玉の素肌に張り付いて、元来華やかである彼女の美貌に、色濃い疲労の影を落としていた。

だが、憔悴に面竄れはしているが、看病疲れを思わせる蓄積された疲労の影はない。

昔からワガママ放題な少年の振る舞いを悔い改める暇もなく老境の粹に達してしまった彼女の父親が、80歳の誕生日を迎えると同時に、最期を看取る暇もなく勝手に他界してしまったので、思わず怒り心頭に達してしまった彼女が、全力で泣き疲れてしまっているだけなのだ。

「…本当に、夫婦して勝手すぎるのよ。ママの場合もそうだったけど、お別れを言うまもなく旅立ってしまうのは、あんまり身勝手すぎるわ。……そりゃあね？ 苦痛のないのは幸いだっただけど、それでも…、残される側には、それなりに心の準備とか…、名残りを惜しむための時間とか…ッ、…まだまだたくさん、パパに聞いてもらいたい話があったのにッ、…ッ…！」

こんなに早く別れが訪れると知っていたなら、いつそのこと一晩中だって付き添って、「愛してるわ」とうんざりするまで言っただけであらうのに。

永遠に伝える機会を失ってしまった言葉があんまり多くあり過ぎて、溢れ出してくる感情のコントロールをすっかり見失っている感じがしていた。

「でもねえ、案外僕は、そんなふうに泣いている姿を見せてしまうよりは、よっぽど親孝行だったような気がするよ？　最近ほら、お父さん涙もろかったから」

冷たい冬の大気に晒されて、すっかり凍えていた背中側から、暖かなコートを着せ掛けられるのと同時に、優しく声を掛けられて。

ナナリーは、身体ごと相手にぶつかる勢いで、その胸元に飛び込んだ。

「~~~~ツ!!」

視界に入らなくても感じられる。

自分を見つめるその眼差し。

やさしげに笑った面差しが、まるきり父親の盛年時代を彷彿とさせていて。

「すっかり満足するまで泣いたかい？　お父さんなら、もうすこしくらい待たせておけばいい。きみが無理をする必要はないんだからね？」

そして、何よりも。彼女を甘やかすのに慣れている、気遣わしげな甘い声。

それを聞かされるたびにナナリーは、泣き止む努力を邪魔されながら、「だいじょうぶだから」と首を振る。

それでも、ずいぶん長く気持ちを静める時間を要した後で、ようやく相手の胸元から顔を離れた。

「……………なんかね、いろいろ…思い出しちゃった、……………口口おにいちちゃん」

「うん？」

ずいぶん久方ぶりに幼い頃の呼び方で名を呼ばれて。ほんのり面映い気分を隠しながら、口口は喪服の内ポケットから真っ白なハンカチを取り出した。

それを受け取ったナナリーは、大きく広げたハンカチを、仰のけた顔の上にそのまま乗せさせて。ゆっくり顔の輪郭を確かめるように両手の中に包み込む。

「……何もねえ…自分の誕生日につて考えると、ずいぶん悲しかったけど、……やっぱり、そういうところもパパらしいのかな？　っ
て思つて…」

乾いた砂が雨粒を呑み込むのと同じ要領で、男物の厚手のハンカチが何の感慨もなく涙の跡をすっかり吸収してしまう。

それでも拭い切れない感傷を吐き出したい一心で、ナナリーは顔の上にハンカチを乗せたまま気だるい息を吐き出した。

用済みのハンカチがふわりと一瞬間に浮いたところを、さりげなく横から回収するついでに肩を寄せ合う至近に腰を下ろした口口は、開いた手のひらでポンポンとナナリーの後ろ髪を慰めた。

「思っただけだね、僕の予想だと、今頃お母さんも呆れているはずだよ？」

「呆れもするわよ、毎年ワガママ放題だったもの。…本当に、呆れるほど自分の誕生日が大好きで、大威張りでママに甘える口実に甘えて、翌朝には必ずシャツが干してあるのが当たり前の光景で、小さい頃にはちつとも不思議に思わなかったけど、考えてみれば、ママって本当に大変だったのよ。この歳になつてようやくママの苦労が身に染みるわ」

生まれてこのかた50年の歳月を、唯一共有している気兼ねの無さが言わせたものか、とつさに返答に困つてしまふ記憶を彷彿とさせられてしまった口口は、それでも結局、誘われるままに苦笑を洩らした。

「なにしろ30年ぶりだからねえ…。きつとまた例の調子で甘えてるよ、『俺の誕生日を祝え！』ってね」

「ママの場合は、自業自得だもの。……うんざりするといいんだわ」
アイロニー
感傷的な皮肉で、夫婦の再会を祝つてしまえるほど割り切った気分にはなれない。

どころか、いつそ置き去りにされたに近しい寂寥感で一杯で、思わず拗ねたくもなるナナリーの気持ちを察して、ロロはナナリーの黒髪をゆるく撫でながら肩の上に抱き寄せた。

「でもね…、やっぱり羨ましいことだと僕は思うよ。うんざりするまで、誰かを愛せるなんて…さ」

自分が家庭を持つてみると、余計にその実感が身に染みる。

自分達が腰を下ろしているこの場所に、彼らの両親が肩を並べて何時間も語り合っていた姿を、今でも鮮明に覚えている。

それは、時として甘やかな憧憬を抱いてしまう雰囲気ではあったけれども、自分達には知れない理由で深刻そうに口論に費やしている時間さえ、ロロにはなぜだか激しく羨望を覚えてしまう類いのものだった。

どうしてあんなに物怖じすることなく、相手に立ち向かってゆくことが可能だったのだろうか？

血の繋がりのあるのは、むしろ子供である自分達のほうなのに。それでも自分達が相手では、決して立ち入ることの許されなかったその瞬間。

「だから、悔しいんじゃないの。あんなに馬鹿みたいだと思ってたはずなのに、いざ自分が同じ立場に立たされてみると、まるきり歯が立たないの」

あんまり悔しそうに言うものだから、それには思わずロロも笑ってしまった。

「そうだねえ……お手本なら、あんなにたくさん見ながら育っていたはずなんだけどね…」

思わず茫然とさせられる子供の目も構わずに、いつだって基本はマイペース自分に忠実に振舞う父の行状に、母は心底困り果てていた様子だったけれども。気付かぬうちに父の策略に嵌められて、うっかり大胆な行動を晒してしまう面に関しては、母だって父のことを言えた義理ではなかった。

まったく時には兄妹のように、時には親子のように、理想的な夫

婦の完全体であり続けた、在りし日の『幸福』の思い出。

「だからと言って、負けてなんかいられるものですか。そのうち絶対パパとママを見返してあげるんだから。『ほうら、私だってこんなに幸福だったのよ！』ってね」

今に見てらっしゃい！と意気込む様子に、とても僕には敵わないアと、ロロは内心で苦笑を洩らした。

「そうだね。きみなら、きっと叶えられるよ」

「ああ、それを仰るロロお兄様だって」

しばらく他人行儀にフッフツと微笑を交し合い、最後はクスクスと吹き出してしまいながら、肩を寄せ合う双子の背後から、控え目に近づいてくる人の気配に気付いた。

肩越しに双子が同時に振り向くと、そこに立っていたのは40代半ばの一人の婦人。

ロロがそつなく目礼を交わすと、清楚な喪服に身を包んだその婦人も、すぐに軽い会釈で応じた。

すっかり泣き腫らしている顔をして。

瞳の色と同じ濃いブラウンの長髪を頭の後ろで編み込みにして、形の良い後頭部を丸く囲う形でいつものように品よく纏めている。

華奢な肢体の立ち姿は、実際の年齢を忘れさせる瑞々しい色香のようなものを隠していて、正直ロロは20年前の出会いの当初から、彼女に対してある特別な感情を抱いているのに気付いていた。

ロロの感じた第一印象は、彼女に対する激しい反発心だったから。

「しかしねえ、おばさん？ さっきから何度も申し上げているよう

に、むしろ乗り気でないのは、父のほうなんですよ？ 僕たちだつて何も無理やり、『お願いですから、再婚してください』なんて勧められるワケないじゃないですか？」

30年前に彼らの母親が旅先で夭折してまもなく、まるきり絶好のタイミングを狙い澄ましたように、父の元には矢継ぎ早に再婚話が寄せられているのは知っていた。

彼らの父親は、昔からひどく牽引力のある大人の包容力と、無頓着な子供の放埒さを同時に合わせ持つ不思議な魅力にあふれる人物だったから。

人生半ばにして、早くも独り身をかこつのは、「もったいない」と世間が騒ぎ立てるのも理解できるような気もしたが、最初から終始一貫して、母に操立する決意を固めている父の本心に気付いていなければ、さぞかし子供心ながらに気の休まる暇も無かつたことだろう。

「でもねエ、口口ちゃん？ 男のやもめ暮らしつてのはさア、やつぱり…ねエ？ 周りが見向きもしなくなつてから、慌てて下手な女に捕まるよりも、よっぽどお父さんのためになると思うんだけどねエ？」

「ええ、その辺りの事情はね、再三話を伺っているので、たしかに仰るとおりだと思うんですが…」

なにしろ再婚するのは僕ではないので…と、曖昧に言葉を濁しながら横目でナナリーに助けを求めると、ナナリーは満面に美しい微笑を浮かべながら、芳しい紅茶の香気を愉しんでいる最中だった。

ナナリーが激怒している時のクセである。

「あアら、結構なお話じゃない？ いっそ綺麗サツパリお任せしたらどうかしら。そうまで言つて下さるんですもの、お好きなだけパの眼鏡にかなう相手を連れてきてくださいナ？ こちらとしても精一杯、応援だけはさせて頂きますわ」

「だからさア、さつきからそれを『教えてくれ』って何度もお願いしてるんじゃないかね、ナナリーちゃん」

面倒を嫌った父が一切を放棄してくれたおかげで、もっぱら口口が窓口役を引き受けて、最後はナナリーが追い払うのが定番だった。たしかに他人の言うように、かつては四人家族で毎日明るく賑わっていた我が家に、たった一人で取り残されてしまった父の寂しさだけは心配の種だった。

そのうちナナリーが、実家の近くに新居を構える話が決まったので、安堵にホッと胸を撫で下ろしていた歳月もつかの間。

驚いたことに、やがて還暦を迎えた父が、自ら率先して雇い入れたのが彼女だったのだ。

出会いの当初、20代半ばだった彼女は、清楚な奥ゆかしさを感じさせる、どちらかといえば印象の地味な女性だった。

「信じられないッ！ 私がいるじゃない！！」

ナナリーは、当然ながら激怒した。

十年来、毎日のように実家に通い続けていたプライドを、自分より年下である未知の女性に、邪魔されるのが我慢ならなかったであろう。

しかし、ナナリー自身、幼い三児を抱えた家庭の主婦である立場を考えると、少しでも負担を避けたいと考慮したのだろう父の気持ちも無理なく察せし、それ以外にも客観的な見地から、妥当な判断ではないかと口口には感じられた。

程よく社交的で、機知に富み、元来人から好かれるタイプであった父は、意外なことに神経質すぎるほど警戒心が強かった。

自分を演出する能力に長けていたから、人にはそう感じさせないように振舞っているのだが、まず滅多なことでは他人に本心を明かさない。というよりも、不用意に他人を接近させ過ぎないように、絶え間なく自分の周囲を客観的に観察している雰囲気を感じていた。抽象的な表現をするならば、顰め面をして父の監視をしている人物と、腕組しながら皮肉混じりに周囲の観察をしている人物、それ

らの人物を背後に従えながら、悠然と微笑み混じりに腰を下ろしている父の姿をイメージする雰囲気だ。

もちろん家族だけで過ごしている最中は完全にリラックスしているのを感じるが、それでも母と二人きりで過ごしている最中は、より積極的に自分のほうから胸襟を開いて、より深い場所まで母を引きずり込もうと悪戯に策略している雰囲気を感じられたものだ。それが父に対して抱いていた個人的なイメージだったから、将来的に加齢の影響で他人の援助が必要になる場合を考えると、身体的にも精神的にも、過不足なく生命力に溢れている今の段階から腹心となる人物を育てておくのは、何より父のために必要不可欠な判断であるように感じられたのだ。

だから、半ば事後承諾の形で話を聞かされた段階では、かなり前向きに賛成だったのである。

ところが、実際に紹介された女性を前にして、口口は激しく心を乱された。

口口は晩婚だったせいもあり、当時はまだ新婚気分の抜け切らない状態だったから、なおさら自分の反応には驚きを感じた。

はつきり危険であると認識したのである。

父が他人を魅惑するよりも、よりもっと強烈な誘引力でもって激しく惹きつけられている自分を感じたからこそ、口口はとっさに父に対して不審を抱いた。

なぜなら口口は、自分の好みが、父譲りであることを正しく認識していたので。

「はア？ 馬鹿馬鹿しい、あんな小娘を相手に、いちいち騒ぎ立てる必要があるのか？ 俺より三回りも下なんだぞ？ 冗談じゃない」

けれども父は、最初から耳を貸そうとしなかった。

ふたこと目には、「あんな小娘」の一点張りで。だったら、最初から信頼できる相手を雇えば良いだろうと思わず反感を抱いてしまいう口口の本心には気付かずに、結局彼女との雇用関係を確定してしまっただ。

もちろん、それから数ヶ月は大変だった。

こっそりナナリーと共同戦線を張る形で、忙しくたがいの自宅に父を招いては、なんとかして父の本心を探り出し、胡乱な目的を隠しているのではないかと問い詰めるために必死だった。

そして実際、自分でも情けないことに、三カ月後には口口は早々に白旗を投げ出した。

どれだけしつこく探りを入れようと、父の心は母だけのものであり、それ以上に、雇われている彼女のほうが、無味乾燥にも思われる真面目な態度に終始していたので。

「父は時々頑固一徹で、世話の焼ける人でしょ？」

あまりに淡々とした彼女の態度に、今度は別の心配を始めた口口は、彼女がひとりでいる所を狙ってそう訊ねた。

父の魅力に誘われて、必要以上に手厚く世話を焼かれてしまうのも困るが、かと言って、万が一の場合を考えると、安心して父の無事を任せられないようでは困るので。

ためしに一度、客観的な見地から、彼女に対する父の信頼度を推量してやるつもりで、藪から棒に質問を発すると、しばらく無表情に黙り込んでいた彼女は、

「いいえ？ 言葉の通じる分、赤ちゃんの世話を焼くよりマシですから」

平然と口口の言い分を認めてしまうのだ。

安直にこの質問を否定できる段階なら、父も、まだそれほど、この人物を信頼してないわけで

単純に、その部分だけを確認するつもりでいた口口は、一瞬、何を言われたのか判断に困って。

思わず絶句していると、遠慮なく吹き出してしまった彼女は、満面に浮かべた屈託のない笑顔で、確かに厄介な相手には違いないが、それでも仕事を愉しんでいる本心を打ち明けてくれた。

おかげで、ようやく安心して父を任せる気分になれた口口は、以来、年に数回だけ顔を合わせるペースに限定して、意識的に彼女との距離感を保ってきた。

その頃には、より自分の気持ちが明確に、彼女に惹かれているのに気付いていたので。

そして今、最後に顔を合わせてから、ほとんど半年ぶりに口口は彼女と対面していた。

さんざん泣き疲れてすっかり憔悴している目の下には、元から薄い化粧では隠し切れない青みがかったクマが覗いている。

普段から礼節の面に関しては何かと口煩かったあの父が、一言も

文句を付ける隙のなくらい徹底した品行方正に努めていた人だったから、そんなふうには隙のある姿を目にするのは今回が初めてで、今にも折れてしまいそうな弱々しい姿に視線を縫いとめながら、

口口は、内心に沸き立つ葛藤とひそかに戦い続けていた。

何も言わずに傍まで走っていった、両腕の中に力強く抱きしめてしまいたい。

だが、彼女の登場は、同時にナナリーの号泣を誘っていた。

彼女は、出棺の時刻を知らせに来たのである。

口口は何も言わずに両腕の中にきつくナナリーを抱きしめて、こっそり自分とナナリーの気持ちを同時に慰めた。

「……すこしは落ち着いた？」

声もなく涙ながらに頷くナナリーの顔中を丁寧にハンカチで拭いてやり、最後は子供にするように背中をポンポンと叩いてやってから身体を離れた。

「今まで本当にお世話になりました」

やがて振り向くと、待たせていた彼女の至近に歩み寄り、感謝を伝えるための握手を交わした。

水のように落ち着き払った顔つきで彼女は握手に応じたが、こうした際には、いつも決まって唇を内部にきつく吸い込んでギュッと噛み締めてしまうので、後になって目になると、必ずそこだけぷっくり腫れて赤みを増してしまうのだ。

おそらく、そうでもしていなければ、あっけなく涙腺が壊れてしまいかねないのだろうが。おかげで口口は、内心に高じる葛藤にずいぶんまた激しく心を乱されて、意識的に短い時間で最後の挨拶を終わらせた。

「おいで、ナナリー。そろそろお父さん、癪癪起こすといけなから」

放っておくといつまで経っても涙の止まらない雰囲気、口口は意識的に軽い口調で促すと、ナナリーの肩に腕を回して、思い出の詰まった裏庭を何も言わずにゆっくり歩み始めた。

やがてリビング前のドアに辿りつくと、ナナリーのために重厚な造りのドアを開けてやり、後に続いた彼女のために口口はドアの所に留まった。

ところが、振り向いて見た彼女は、カウチ寝椅子の傍から一步も動いていなかった。

その場所からハンモックを透かして、黄金色の牧草地に繋がる海の様子を眺めていた。

口口は思わずひとつ溜息を洩らすと、ゆるい足取りで彼女の傍へと戻った。

「……ひょっとして、父のことが好きだったのでしょうか？　もちろん、一人の男性として」

そんなふうになを掛ける気になったのは、『これで、彼女に会うのも最後だ』という、あきらめの気持ちが勝っていたせいもあるのかもしれない。

背後に人の気配さえ察してなかった様子の彼女は、思わずビクンツと身体を震わせるほどに動揺して、身体の前で組み合わせた両手を揉み絞るようにきつく握った。

「……尊敬、していました。……一人の男性として」

やがて聞き取りにくい低音こしえでも返事が返されたのに気を良くして、口口は無遠慮でない距離を残した隣りに肩を並べた。

父より上背のある口口に比べると、なおさら小柄な印象の際立つ彼女の繊細さが強調され、口口は容易につむじを覗ける高みから、さりげなく彼女の横顔に視線を注いだ。

「あなたの尊敬に値するようなことを、父が何かしましたか？」

父譲りの、まろみを帯びた甘い声。

客観的には、ずいぶん不躰に思える質問も、わざと明るく歌うような抑揚で訊ねてしまえば、まずもって気後れを感じるのは相手のほうで、嫌でも質問の内容を好意的に解釈せざるを得なくなっ

まう。

厄介な相手を追いつめる際には、父がもっぱら採用していた常套手段だが、十中八九狙い通りの結果を得られることを、口口は経験から知っていた。

だから今回の場合も、遠慮なく率直に訊ねてみたわけだが。

しばらく沈黙を守っていた彼女は、動きの少ない表情で顔を上げると、口口の瞳をまっすぐ射抜いた。

逆に動揺させられたのは口口のほうで、うろたえている内心が瞳の上に露わになる。

それきり動きの止まってしまった口口の表情を、彼女はじつと無表情に見つめていたのだが、やがて瞳の表情をフツとゆるめて苦笑すると、さりげなく視線を外しながら静かに笑った。

「そうですね　初めのうちは、ずいぶん面倒臭いと感じた人でした。とにかく細かいことにまで口煩くて、短気な割りに情には脆くて、かまい始めるとしつこくて……」

「どうしてまた、尊敬するようになったんです？」

放っておくと、際限なく父の短所を並べてくれそうな雰囲気、驚きながら質問を発すると、彼女は「どうしてかしら？」と返答に困っている様子で小首を傾げる。

「嘘がつけない人の隣りで、嘘をつき続けるほど心苦しいことはない。そういった当たり前の教訓を、彼からいろいろ学んだせいだと思います。悔しいけれど、最後は結局見習いたいと思うようになっていきますもの。もちろん、文句を言い始めるとキリがないですけど」「それでも、父のことを愛しているのでしょうか？」

いまさら彼女に認めさせて、何が変わるわけでもない。

ただ歴然と、存在しているその事実を、彼女に認めさせたいだけかもしれない。

いずれにせよ、自虐的な行為だなど、冷たく自分を卑下していたその傍らで、突然彼女がクスクスと声に出して笑い始めたものだから驚いた。

「おかしいですか？」

「おかしいですよ。ご存知でしょう？ 私は」

「単なる職務上の付き合いで、限定できない程度には、父のほうでも大切にあなたを愛していたはずだ」

もつとも、その愛し方は、実の娘に対するものとまったく同じ種類のものだつた。

いつだつて「あんな小娘」扱いで。傍にいてこっちのほうが『大丈夫なのか？』と心配になるほど遠慮なく接しているのが常だったが、父のような人物にとっては、そうした接し方すら、かなり希少な愛情表現で。感心するほど無抵抗に、彼女の好きに身の回りの世話を焼かせる時間を愉しんでいたわけだから。

「それとも、あなたのほうでは違つた？ 死んでしまえば簡単に、忘れてしまえる程度の人ですか？」

一見した表情に変化はなかつたが、口口を見つめる瞳の中にたしかに一瞬、嵐の気配が過ぎてゆくのを口口は認めた。

彼女も自覚したのだらう。とつさに失敗を悔いている顔つきで視線を外してしまったが、なんとも頼りない眼差しがしばらく辺りをさまよつた。

その様子が、まるきり見えない誰かに助けを求めているようにも感じて、口口はまた内心で複雑な心境を禁じえなかつたが、こうした場合には、おそらく彼女を助けてくれたはずの父はもうここには居ないのだ。

沈黙という見えない武器で、今度は逆に追いつめられてしまった彼女は、途方に暮れた様子でためらいがちに内心にある言葉を語つた。

「……………自分でもまだ認めるのに慣れていないだけです。……………」
人を愛する』という気持ちを初めて知りましたから……………」

口口は不思議に、落ち着き払っている自分自身を感じていた。

「父にも同じ気持ちで愛されて、初めて自覚したわけですか？」

「ちがいます。比較になりません。とても大きな愛情でしたから」

「満足しましたか？」

「もちろんです」

「でしたら、あなたは『幸福』だった？」

「いっそ、そのまま泣いてしまうのではないかと思った。

次第に追いつめられて行くのが、見ていてわかってしまうのだ。

内心に生じる動揺を、まったく隠せなくなっている彼女は、波打つように一瞬、その瞳を大きく揺らした。

「……どうでしょう？……本当は、今でもまだ夢のようです。

……私が『幸福』を知る……そんなことは、本来あつてはならないはずだった」

「どうしてですか？ 戦前ならともかく、今の世界なら誰にだって当然の権利であるはずだ」

「だからです」

毅然とした口ぶりでそう言つて、顔を上げた彼女の瞳が忙しくまばたく。

その瞳が、愛しげに細められてゆく様子を、口口は漠然と瞳の上に映していた。

「誰もが『幸福』になれる……そんな優しい世界でさえ、私には『幸福』を手に入れる方法がわからなかった。そんな私に、あの人が……人の愛し方を教えてくれました。……そして何より、人に愛される喜びを」

ふいに差し伸べられた手のひらは、そつと口口の頬の上にとどまつた。

「あなたと、あなたの妹さんが、彼に教えてくれたのです。彼は、あなた達に愛されて、初めて人に愛される喜びを味わった。私は、そんな彼を見ているだけでも幸福だったのです。……今まで本当に、ありがとうございます」

口口は突然、激しく喉元を締めつけられた心地がした。息が、出来ない。

どうして、こんなことくらいで 胸が苦しい？

「フツ、父のことなら先刻承知というわけだ？　それで？　遺された家族に対するアフター・ケアも、もちろん職務の一環ですか？　それとも、それこそ父に対する愛情のなせる業ですか？」

自分でも、どうして苛立っているのかわからずに、動揺から逃れるために、邪険に彼女の指先から顔を背けると、彼女は一瞬、痛みを我慢するような面持ちで瞳を細めて笑って。

「何にも知りません。この20年、彼が話してくれたこと以外は、何ひとつ」

「……………」

「だから私は、彼には嫉妬していた。どんなに自分が、家族に恵まれ、家族を愛して、家族に愛されているかの幸福を……彼ほど満足そうに話せる人を私はほかには知りません。できることならこのまま永遠に、この幸せなひとときが続けばいいと本気で信じて疑いたくもなかった。彼には『甘えるな』と怒られてしまいましたけど、それでも。目で見て得られる『幸福』が本当にあつたのです。短い間でしたが、一緒に過ごす時間を得られた幸運に感謝しています」

父と過ごした時間を大切そうに反芻しながら、素直な気持ちを語ってくれた彼女は、一瞬ためらい、それでも毅然とした態度で、自分のほうから挨拶の手を差し出した。

どこかしら誇らしげにも見えてしまう眼差しを、美しい水の色に潤ませながら。

落涙こそしなかったものの、父の『幸福』を真摯に受け止めて涙している彼女の姿を眺めながら、口口は初めて自分の心中を察していた。

喉元に熱く、何かの感情がこみ上げてくる時の感じ。

そうした感覚に襲われることすら、ずいぶんと久しぶりの経験だったから。

だが、僕が泣いてしまったら、いったい父は、誰の前で涙を流せばいいのだ？

あんなに愛していた母を、突然亡くしてしまったあの日から、父はたった一人きりの努力で、きっちり二人分の愛情を注ぎ続けてくれていた。

以前と変わらぬ愛情を、懸命に繋ぎ止めてくれている父の努力に気付いていたからこそ、今度は自分が父の支えになってやるつもりで、無意識のうちにも覚悟を固めていたのかもしれない。

そんな自分の心情に、今頃になって気付かされ。我ながらの呑気に、口口は少しだけ笑ってしまいたい気分を隠しながら溜息を噛み殺すと、意識的に冷静に彼女の手を握り返した。

「……嫉妬という話なら、僕のほうこそですよ」

「どうしてです？」

心配そうに小首を傾げて訊ねてくる彼女は、本当にその理由を理解してない様子だった。

父はいったいどんな気持ちで、延々20年間もこんな彼女と一緒に過ごしていたのかと不思議に思う。

ひょっとして、自分たちを遺してゆく以上に、彼女を遺してゆくのは、さぞかし心残りではないのだろうかと思いつながら、無難なところで握っていた手を離れた。

「せっかく褒めて頂いたのにアレですが、僕は実際、21でこの家を出るまで、両親が捧げてくれた愛情の本当のところを何ひとつ理解していなかった。世間の荒波に揉まれてみて初めてその事実を嫌というほど実感したわけですから、早い話が、この家の存在そのものが、甘い子供時代に対する郷愁なんですよ」

小首を傾げたまま話に耳を傾けていた彼女は、唇の端にだけ遠慮深い微笑を浮かべた。

「できれば、もうすこし甘えていたかった？」

「さて、それはどうでしょう。最近では、会えば小言ばかりでしたからね」

それでも顔を合わせれば、ほとんど条件反射で癒されてしまう心

の部分が存在したのだ。

ふいに訪れた沈黙に誘われて、そのまま彼女を見つめてしまいそうだった自分に気付いて、口口はさりげなく歩を進めると、ハンモックの頭の部分で立ち止まった。

寄り添うように植えられている大きな二本のブナの木。

その木の下に最初に父が寝椅子カウチを用意して、後になって母が自力でハンモックを編んで真上に吊るしてしまったのだと、事あるごとに父から話を聞かされた。

そのたび母は、真っ赤になって反論したものだけど。

そのハンモックも母の死後、父が何度となく張替え作業を行っていたから、当時のものでは決してない。

それでも父は、決して、自分の寝椅子カウチを利用しようとはしなかった。

そこに横たわれれば、どうしても視界に入ってしまう無人のハンモックから、母の不在を実感するのが辛いのだろうと口口は察したが、実際は、母の目線で、風景を愉しむ時間を満喫していたのかもしれない。

季節を問わず温かな陽射しを独占している海岸線。

見渡すかぎりに続いている海の蒼さと、空の青。

そして、白金色に輝く、太陽光線のすばらしい美しさのコントラスト。

時折、横目で視線の先を遊ばせながら、難解な哲学書の類いを好んで読み耽っていた父の後ろ姿。

いつだって、まぶしいものを眺めるような憧憬と、ごく自然に敬う気持ちの湧いていた、敬愛の対象であり続けた、とてつもなく大きな存在を、ついに自分は失ってしまったのだなと口口は疲れた気分で考える。

まったく、なんてタチの悪い冗談だ。

「この先、もう行くアテは決まってるんですか？」

もしも、決まっていなければ……

本当に言いたいのは、それだったのかもしれない。

だが、ロロが言葉を継ぐより先に、彼女のほうから明快な返答が寄せられた。

「そうですね、これから彼と、相談して決めます」

その返答に、少なからずショックを受けたロロは、「恋人がいるんですか？」と無粋な問いを投げかけた。

問われて初めて驚いているような顔つきで、パチパチッとまばたきした彼女は、やがてしとやかな喜色を浮かべて、小さく一度うなずいて。少しだけはいかにでいる表情で、うれしそうに眼を細めた。それきりあっさりきびすを返してしまうので、ロロは数歩だけ遅れて隣りに肩を並べながら、内心ではひどく当惑していた。

彼女は、父のことを愛しているのではなかったのか？

だが、そんな疑問には関係なく、彼女はその人物と先の人生を歩んで行ってしまうのだ。

ほとんど何も考える暇もないままに、リビング前のドアに辿りつき。

ロロは、自分でも理由の知れない焦りから、口早に乾いた唇を動かした。

「僕は あなたを愛しています。そして今も、これから先も、できれはずっとあなたを愛していたい」

表面上はエスコートの名目で、リビングのドアを押さえている腕の下から、彼女の瞳が臆することなくロロの瞳を見つめ返している。「私の幸福は、あなたの人生とは、もはや何の関係もありません」事務的に事実を告げるときの口調で淡々と。

断られるにしろ、もう少しくらいは、何かしら優しいセリフを彼女の口から引き出せるつもりでいたロロは、暗澹と絶望に打ちのめされている無様な男の声を聞いていた。

「……なんて言いぐさだ。驚いた顔ひとつしないで……」

「……………」

「僕の気持ちに気付いていたのでしょうか？　僕を憐れんでいたわけですか？　それとも、僕のひとり芝居を眺めながら、内心では僕の愛情を嘲笑していた？」

「違います、私は単にあなたのお父様の」

「　　だったら、あなたはッ！　……迷惑な顔のひとつくらい見せてくれる誠意があっても良いはずだ。僕がどんなに、あなたに会えるチャンスをお待ちにしていたか……まさか気付いてなかったわけですか？」

言いがかりだ。

ロロだって、充分すぎるほどにわかっている。

それでも、自分が今あきらめてしまえば、彼女はきびすを返して去ってしまう。

決して二度とは手の届かぬところに旅立ってしまうのだ。

彼女を引き止めたい一心で、彼女の良心に訴えかけるロロの言葉に、彼女は露骨に傷ついた顔をした。

けれどもそれは、ロロの予想とは少々様子が違っていた。

たとえばそれは、路肩に咲く花を何気なく摘んでしまった少女が、見咎められて初めて罪の意識を自覚するような、驚きに満ちた傷つき方だった。

おそらく彼女は本当に、ロロの気持ちに気付いていたのだろう。

気付いていて、それでも穏便に気付かぬフリを装い続けることで、ロロの気持ちを育ててしまった罪の深さには気付かずに。

「　　私も、これからもっと『幸福』になりますから」

だが、傷ついていたのは一瞬だけで、逆に瞳に意志の力を強めると、彼女は毅然とした態度で微笑んだ。

あなたの『幸福』など、知ったことか。

ロロは、彼女を逃さぬようにドアに両肘を押しつけると、グッタ

り虚脱してしまいたい気分で彼女の頭上に気だるくひたいを押しつけた。

「……だからどうだと言うんです？ 本当は、僕の『幸福』など、どうだって構わないクセに」

もちろん彼女の『幸福』を、誰より切実に願いたい気持ちはある。ただし、他人ではなく、自分の隣りで、だ。

この先、彼女がどんな人生を歩もうが、どうせ隣りにいるのは、自分ではない別の男だ。

だったら、そこで得られる『幸福』などに、いったい何の価値がある？

少なくとも自分には、一切関係のない話だ。

鼻先の距離で苦悩する口口の表情を、じっと見守りながら黙り込んでいた彼女は、おもむろに優しい目をして微笑むと、口口の頬の上に手のひらを伸ばした。

長時間外気に晒されていた彼女の手のひらは冷たかったが、じきに口口の体温が移って、二人で一つの体温を共有していた。

「私が嫉妬しているのを百も承知で、それでも『甘えるな』なんて冷淡に突き放してしまえるあの人が本当に憎らしいと思っていた。

……とつさに言い返せなかったから、なおさらです」

「……………」

「あの人から話を聞かされて、あの子の幸福そうな姿を眺めているだけでも私は満足しているはずだった。それなのに、あの子があまり愉しげに自分の『幸福』を見せびらかしてくるから、そのうち私も、もっと自分の力で努力して、生身で味わう『幸福』を手に入れたいと願うようになってしまった。そして、何より悔しいことに、今の私はそれを手に入れる方法を知っているのです。だったら、あとは学んだばかりの経験を肥やしに、自分なりに努力を始めてみるしかないでしょう？」

「……………」

「もちろん苦勞は、また…それなりにするのでしょうが、それもま

た私の選んだ人生でありますし。どのみち後悔だけは、絶対しません。しないために、こうしてまた新しく努力を始めるわけですから……ですから、あなたも自力でがんばって」

どれだけ否定したくても、温もりに満ち溢れているその手のひらなんて卑怯な人なんだろうと、口口はそのまま倒れ伏してしまいたい気分で考える。

彼女のほうでも少なからず、自分に対して未練を感じているのだ。「……いまさら努力なんてしなくても、僕なら一生あなたを愛してあげるのに。一緒にいてくれるだけで構いません。後悔なんて絶対させません。……一度くらい、僕にもチャンスを与えてくれてもいいでしょう?」

彼女の本心に探りを入れない一心で、口口は自分のほうからも彼女の頬に手を伸ばした。

彼女は一瞬も迷いもしないで、その温もりを愛しむように眼を細めているクセに、「努力する苦労を知らない人生なんて、退屈すぎるだけです」などと、もつともらしく答えている。

「あなたの歳で、退屈を味わうのは、もう飽き飽きしているというわけですか?」

「そうですね。否定はしません」

「あなたは、卑劣だ。あなたの優柔不断が、どれだけ僕の人生に不要な影を落としているか……」

責任転嫁も、ここまで極めれば立派なものだ。

自虐的な心境で、口口は苦々しく思いを噛み締める。

彼女に初めて出会ったあの日から、早いものでもう20年 決して短い歳月ではない。

その間に、彼女と交わしてきた他愛無い言葉の数々。見せてくれた笑顔の一切すら、その意味を失くしてしまうつもりなら、いつそのこと、あなた自身も一生消えない心の傷を、その身に刻んでから消えてしまえ。

簡単には消えない心の傷を、抱えているのはむしろ自分のほうだ

った。

何が何でも自分の存在を、彼女の中でも意味のあるものに変えてしまいたい。

しかし彼女は、ロクの悪あがきに傷ついてくれるどころか、愚昧なセリフを、平然と答えている。

「ずいぶん昔に、彼にも同じセリフを言われました。それでも自分では、ずいぶん成長しているつもりなんですが、なかなか思うようにはいかないものですね？」

完敗だ。

ロクはそのまま死んでしまいたいような心境で、彼女の頭上でグツタリ濃い溜息を吐き出した。

「……好きになさい。……願わくば、十年後もあなたの人生が『幸福』であることを祈っていますよ。お別れのキスをして構いませんか？」

とつさに驚きの表情を浮かべた彼女が、たじろぎに一瞬、身を硬くするのに気付いていたけれど。

「子供が母親に求めるキスだと思ってください。……実際、ああ……それだと40年ぶりになりますよ」

自分でも呆れるほどに、狡猾な男だなどと感心してしまう。

もちろん彼女の母性本能に付け入るつもりでいた。

呆れた男だと、見下したいならそうすればいい。

どのみち、この機会を逃してしまえば、彼女とは永遠にお別れなのだ。

この期に及んでまで守るべきプライドなど、ロクには微塵も存在しなかった。

だが彼女は、それ以上一瞬もひるむことなく、ロクの瞳を見つめ返していて。

「甘え方が上手いと言われませんか？」

「おかげさまでね、父譲りですよ」

「でしたら、彼には内緒にしておきます」

「……はい？」

そう、訊ね返した瞬間に。

ロ口は驚愕に目を見開きながら、彼女の顔が近づいてくるのを凝視していた。

「あなたは……ッ！」

たしかに触れたのだ。

両方の頬つぺたの上に。

まるきり母親が、小さな子供を愛しむようにして。

ロ口は思わず真っ赤になりながら憤然と叫んだが、その頃にはりビングの中ほどまで颯爽と歩みを進めていた彼女は、肩越しに振り向くなり、初めて見せるような表情でニヤツと相好を崩した。

「だって、マズイでしょう？　これから『幸福』になろうという矢先に、浮気は」

あいにく、彼が嫉妬深いので。

どうしてそんなに幸せそうに笑っていられるのだろうか？

思わず陶然と時間を忘れて見惚れてしまいたくなる。そんな表情で、屈託のない笑顔を振り撒きながら、彼女は颯爽と扉を開けると、そのまま快活な足取りで、父の待つ玄関のほうに姿を消してしまった。

こんなにあっさりと　終わってしまうのか　自分と、彼女の関係は。

一時的な動揺が過ぎ去ってしまうと、突然部屋の中の様子が、たまらなく空虚なものに感じられた。

20年だ。その間ひたむきに恋しく想ってきて。

何がしかの結末を予測したわけではないけれど、それでも。具体的に、何かを考える必要性がなかったからこそ、得られた無尽蔵の幸福感があったのだ。

そうした一切を、自分はこんなにあっさり失ってしまうのか？

考えているうちにも、こめかみで打つ激しい脈拍が、一瞬のうちに目蓋の裏側まで流れ込んできた心地がした。

冬の日の特徴で、低い位置から射し込んできている太陽光線が、部屋の奥のほうまで黄金色に照らしている。

後年すっかり体力の落ちていた父は、昼食後に仮眠を取るのが習慣で。

そのクセ、口口には、「夕食を付き合え」と必ず強要するものだから、仕方なく父が目覚めるまでの時間潰しに、リビングのソファに腰を下ろしては、読書などに勤しんだ。

その傍らで、彼女はもっぱら忙しく家事に精を出しているのが常だったが。

ある時、ふと気がつくと、床の上にペタリ腰を下ろして、繕い物に勤しんでいるのに気付いた。

驚いた口口が、「ソファに座れば良いでしょう？」と勧めると、彼女は「遠慮します」とそっけない口ぶりで、あっさり口口の気遣いをあしらった。

その口ぶりがまるきり、「余計な世話です」と突き放しているようにも聞こえて。

彼女の冷淡な反応には、すっかり慣れているつもりだった口口も、それには思わずムツとしてしまったが。じきに、彼女が何事もなかった顔つきで、鼻歌を歌い始めたのには、正直言って面食らった。

こっそり横目で盗み見るように彼女の姿に視線を注ぐと、白金色に輝くやわらかな冬の陽射しが、温容に彼女の全身を包み込んでいるのに気付いた。

日照時間の短い冬のこと。ただでさえ貴重なそれを、彼女なりの

愉しみ方で心底満喫していたのだろう。なんだかひどく心地好さげに、安らいでいるようにも見えてしまった彼女の横顔。

あのとき二人で過ごした沈黙のひとときが、この20年の歳月に確固として刻みつけられていた『幸福』のイメージだった

ロ口は蒼白な表情でよろめきながら、彼女が出て行った状態のまま開きっぱなしのドアに向かって、吸い寄せられるように歩みを進めていた。

いまさら後を追ったところで、取り戻せるはずは無い。そう、わかっている。

それでも、自滅するとわかっているのに、夜毎に誘蛾灯に集まる憐れな小虫のように、ロ口は自分を感じていた。

いずれにせよ このまま彼女を失ってしまえば、後に残される自分の人生なんて

もう既に死んでしまったも同然だ。

「呆れたものね、まだ懲りないの？」

「……ナナリー……」

まもなく部屋を抜け出るところで、その眼前に立ち塞がるように、ドアの影からナナリーが姿を現した。

ロ口は反射的に数歩の距離を後ずさったが、全身から憤りを発しているナナリーが、なおさら執拗に鼻先の距離までにじり寄ってくる。

「それとも、ようやく奥さんと離婚する決意を固めたわけかしら？ それなら私も心置きなく、『おめでとう』を言わせてもらうけど？」

ロ口は、満足に呼吸もできない状態で、混乱していた。

道ならぬ恋だと知っていて、それでも彼女を求めてしまう激しい衝動。

もちろんロ口が、彼女に思いを寄せている事実は、ナナリーにも秘密のほずだった。

父の手前、本来ならば彼女自身にも、決して気持ちを取りられる心配のないように、厳しく自分を監視し続けていたわけだから。

そんな口口の様子を、辛辣な表情で覗き込みながら、なおさら侮蔑的に鼻を鳴らしたナナリーは、顎先でぞんざいに彼女の消えたほうを指し示した。

「大嫌いだったわ、あの女。わざわざ、あんな人を探して来てまで寂しい思いを我慢するくらいなら、いつそ再婚すれば良かったのよ。なのにパパったら一切耳を貸そうともしないで、愛情だけはママの元に残して、物理的な寂しさだけを他人に埋めさせた。大嫌いだったわ、あの女ッ！ 他人のそら似とわかつているのに、それでもあの人の存在が許せなかった。……どうして偽者なんかで我慢できるの？ そんな相手の方にも失礼だし、だいいちママに対する冒瀆よッ！」

まるきり毛嫌いしている毒虫を扱うときの表情で。

全身から彼女に対する拒絶を示している、そんなナナリーの姿が、口口には俄かに信じられなかった。

初めのうちの数年は、たしかに彼女の前でも意識的に好戦的な態度に徹していたのは事実だが。

次第に、警戒心の激しい野良猫たちが、互いにテリトリー内に相手の存在を認め合うようにして、頻繁にキツチンでテール越しに顔を突き合わせては、素直でない彼女らなりの方法で純朴なコミュニケーションに励んでいた姿を何度も目にして知っていたので。

正直言って、そちらに対する衝撃のほうが強かったので、口口にはナナリーの言っている内容がまったく理解できていなかった。

やがて察したのだろう。ナナリーは、なおさら嘲笑的に鼻を鳴らした。

「呑気なものね、イイ歳をして、自覚すらしてなかったの？」

「しかしね、きみ……」

驚いたことにナナリーは、「彼女が、母に似ている」と言っているのだった。

口口は、軽く肩をすくめると、「似てないよ」と確信に満ちた口調で返した。

「お母さんは、彼女ほど空虚でもなければ、生きること全般に対して貪欲でもなかった。いつだって僕らの『幸福』だけを願って、行動していた。自分の『幸福』なんてものは二の次にね」

それだからこそ、無性に守ってあげたい人だった。

それに比べて彼女は、人生の途上で、激しい挫折を知る種類の人間だった。

いつだって行動の裏側には、失ってしまった物に対する激しい未練がチラつく。

立ち入った話には、一度も踏み込む必要を感じてなかったが、口口は自分が同種の間人であるだけに、不運にも折れてしまった心の傷を隠しているらしい事には、直感的に気付いていた。

それだからこそ、無性に守ってあげたいと思ってしまったのだ。

「ぜんぜん違うよ。彼女とお母さんを比較するのは、それこそ、きみの言葉を借りるなら、お母さんに対する冒涇だ」

母なら決して彼女のように、口口が傷つくと知っている選択肢は選ばないはずだから。

じつと黙り込んだまま話に耳を傾けていたナナリーは、口口が刹那の回想から戻ったときには、もう既に水のようになめらかな表情で落ち着きを取り戻していた。

ナナリーが、内心に怒りを隠しているときのクセである。

「いつそ感動に値するわね。それでも理知的に振舞ってるつもりなんだから、感情で生きてる生物としては開いた口が塞がらないわ」

どうやら賛同を得られなかったことが、心底不満らしい。

だが、こればかりは、何と言われても、自分の直感を覆すわけにはいかないのだ。

単純に、母に似ているから　そんな安直な理由で、足掛け20年も彼女を恋しく想っているわけではないのだから。

「『だいじょうぶよ、ナナリーちゃん。私なら、あの人を信じてい

られるから』」

「……ッ?!」

そして、もちろんナナリーも、ロロという男の人間性は熟知していた。

ナナリーは、冷静に微笑を浮かべている表情で、淡々と言葉をつむぎ出してゆく。

「『ほら、結婚すると男の人って家庭を顧みなくなるというじゃない? そんな人たちに『見本にしなさい』って自慢してあげたいくらい。仕事の愚痴なんか頼まれも絶対言わないし、家庭のことだって最優先に考えてくれるわ。……ただ、結婚前よりほんの少しだけ……うわの空に見えるだけ。私だって結婚前と比べれば、ずいぶん身勝手に振舞ってるはずなのにね。案外自分のことほど見えなくなっちゃうものなのよ。それだけ。だからね、ちつとも心配いらないのよ、ナナリーちゃん?』　そうやって、信じ続けて何年よ? あんまり不憫すぎて、私の口からはとても言えないわ」

ロロは自分の胸骨を、心臓が乱雑に強打している音を聞いていた。全身の血流が猛烈な勢いで体内を駆けずり回っているのがわかるのに、一気に血の気を失ってしまった頭のほうには、一向に戻ってくる兆しもない。

「……どうして……あいつが、……きみに?……」

あんまり心臓の音がうるさくて、自分の発した声すら聞こえない。

そんな状態で、ロロが呟きを発した瞬間に、ナナリーが振り上げていた手のひらが、パンッ! と乾いた音を立てていた。

悪戯に触れていった恋しい人の唇の感触を、大切に覚えていたかった頬の上に。

「……謝らないわよ、私は……」

ナナリーは、打ったほうの手のひらを痛そうに丸めて握りながら、傍目にもそうとわかる意志の力ずくで、瞳を大きく見開いた。涙を流したくないのだ。

昔からナナリーはそうだった。喧嘩の際には、いつも必ず涙をこぼした。完全に自分が悪いと自覚をしている時でさえ。

「…… いったい何年、私が苦しんでいると思うのよ？ どうしてと訊ねたいのは、私のほうだわ。あなたは自分が苦しむのが嫌だから決して他人を裏切らない。馬鹿みたいに自制心だけは持っている人だから、本当は信じていたかったのよ。それが何？ 愛しているですって？ ハッ！ 呆れた博愛主義者でもなければ、最低の裏切り行為よ！ どうして今までお義姉様を騙してきたの？ どうしてさつさと真実を伝えて自由にしてあげなかったのよ？

欲張りなのよ、お兄様は！ 史上最低の裏切り者…… 恥知らずッ！」

「だけどね、僕は……」 口は悄然と落ち込んでいる低音で呟く。
「…… 一方的に、彼女を愛しているだけなんだよ？」
いつだって嫉妬していたのは自分のほうだった。

父が、彼女に向かって解放していた慈愛の翼。やわらかな温もりで全身を包み込み、とてつもなく大きな愛情に満たされ切っていた羽毛の中に、安心して身体を丸めて、心地好さげに埋まり込んでいた。

20年前の出会いの当初から、飛躍的に心に癒しが満ちてゆく。傍目にも、傷ついていたはずの心の部分が、見るからに快方に向かつてゆく様子を、自分はただ横目に眺めているしか方法がなかった。

試してみれば今の自分なら、絶対的な安心感で彼女を包み込んであげられるのに。

それが許される立場にいない自分が悔しくて、いつだって人を愛せる立場にある父には嫉妬していた。

自分でも目を背けたくなる醜い本心に気付いていたからこそ、意識的に遠ざかる努力を続けていたのだ。

父が彼女に与えている『幸福』を、間違っても自分の気持ちが邪魔する心配のないように。

ポロポロと、ナナリーの頬の上を滑って、涙のしずくが流れ落ちてゆく。

硬く握り締めている拳を、胸の上に痛いほど押しつけて。

それでもナナリーは必死の努力で、嗚咽だけは洩らすまいと唇を強く噛み締めた。

「……………どうしてわからないの…？」

またたく間に、顎先まで涙で濡らしながら、高ぶる感情に言葉を詰まらせながら。

そんな自分が悔しくて堪らないといった様子で、子供のするように無造作にグイッと手の甲で涙を拭ったナナリーは、口口の胸倉を両手で掴んで揺さぶり始めた。

「愛してるって、その人の『幸福』を望んでしまうことでしょうか？ 誰より一番にお兄様が、その人の『幸福』を叶えてあげたいと望んでしまうことでしょうか？ ちがう？ 心で相手を裏切る以上に、卑劣な行為が存在するなら、今すぐ私に説明してよ…………ッ」

そう言ってナナリーは、口口の胸元に顔を埋めた。

だがそれは、いつものように甘えの滲む行為でなく。

じきに、力の入らない両腕で、口口を突き飛ばしたナナリーは、そのまま口口の足元に崩れ落ちるように、背中を丸めて嗚咽を洩らし始めた。

いつになく冷淡にそんな妹の姿を眼下に見下ろしながら、口口は、まったく熱の入らぬ口ぶりで、どうでもいような反論を試みる。

「……………正直、僕には理解できないね。どうして惹かれること自体が罪になるのか？ 少なくともきみだって、彼を愛したきっかけは同じはずだよ。それとも今では、少しは違ったかい？」

「 違うに決まってるじゃないッ！ パパはあの人ほど、愚かでもなければ、残酷でもなかったわ。もっと大切に猫可愛がり私のことを愛してくれた。 それでも仕方がないじゃない、パパよりあの子のほうに愛されたいと思ってしまうんだものッ！ 何もしないで、ただ愛されるだけの人生なんて、おととい来やがれよッ！！」

『幸福』に対する、二人が共通して抱いているイメージ。そのイメージの傍らには、いつだって両親の姿が寄り添った。両親があんまり幸福そうだから、二人は当然の結果として、理想の異性像に両親の姿を思い描いた。本来ならば、仲睦まじい家族の光景として、笑い話で済んでしまっただろう。

でもね、理想の姿があんまり強烈過ぎて…、少々相手では満足出来ないんですよ……。

自分でも、問題があると理解せざるを得ないくらいに、心が勝手に母の印象に近い相手を求めてしまうのだ。

結婚した相手にしてもそうだった。

今まで口口が出会ってきた中でも、もっとも印象が母に似ている人だったから、「この人ならば」と決断した部分も少なからず自覚しているのだ。

「それなら、『幸福』を願う気持ちに大差はないはずだよ。僕は彼女を『幸福』にしてやりたいと思った。もっとも、細君とは別な方法でね。気持ちの面で彼女を大切に守ってあげたいと思った。それだけの話さ。肉体の所有者に、大した意味はないからね」

「ハッ、そんな世迷言に騙されない程度には、彼女が利口であってくれた事実に感謝を捧げるべきかしら？ たえば、考えてみなさいよ、パパがあの人と再婚していたら、お兄様は彼女をあきらめ切れた？」

投げつけるように、提示されたイメージ。

逡巡した後に、口口はたしかに一度うなずいた。

「もちろんさ。彼女を『幸福』にする適役は、どう考えても、僕よりお父さんのはずだからね」

その返答にナナリーは、癪癪を起こした子供がするように、バンツ！バンツ！と、もどかしげに平手で床を打ち鳴らした。

「ああッ！ ああッ！ そうよね、まったくお兄様の仰るとおりだわッ！ 唯一、年齢の問題だけを別にすればねッ！」

「いや、お父さんは、そんな些細な問題を気にするタイプでは無かったよ」

口口が冷静に反論した瞬間に、ナナリーは鬼気迫った表情で顔を上げると、唇の端にだけ残酷な笑みを刻んだ。

「ええ、そうね。……たしかに、そのとおりだわ。だいいち、あの人がって、年齢など問題しないと即答だったもの」

「……ッ……それは……」

「もつとも、再婚話を固辞していたのは彼女のほうなんだけど？

どんなに私が、口を酸っぱくして薦めても『それだけは、ゼツタイ有り得ません』の一点張りで、むしろパパのほうが、『そんなにハッキリ断るな』って拗ねてたくらいよ。今どき珍しいくらいに頑固で謙虚な人だったから、おそらく私とお兄様に遠慮しただけじゃないかしら？」

彼女の口からハッキリと父に対する愛情を聞かされているはずなのに、それでも口口はその話に狼狽する自分を隠せはしなかった。

そんな兄の表情を見つめるナナリーの瞳の色が、よりもっと酷薄な冷静に落ち着きを取り戻してゆく。

母譲りの、有無を言わせぬ、透き通った金の眼差し。

「毎日、朝から晩まで12時間よ？ 通勤時間を含めれば、最低でも一日のうちの16時間がパパ一人のためだけに費やされていた計算よ。パパのほうから特別に申し入れた場合でもなければ、20年間一日も休まずにね。単純な雇用関係で、どうして実現可能な行為だと考えられるのかしら？ 愛していたのよ。もちろんパパのほうでも、彼女の気持ちに気付いてた。その上で、パパに実現可能な方法で彼女を愛していたんだわ。ええ、実の子供みたいだね

！ 最初から、お兄様が立ち入る隙なんて存在しなかったのに、どうして少しだけ勇気を出して、現実を直視する努力をしなかったの……？」

不甲斐なさに身震いするほど全身から憤りを発しているナナリーは、いつしか涙の気配さえ消してしまった眼差しで、もどかしそうに口口の姿を見つめている。

そんなナナリーの姿を、足元に眺め下ろしているはずの口口は、動揺に、むしろ微動だに出来ないでいる状態で、荒ぶる呼吸を他人事のように聞いていた。

「……心外だね。僕が逃げる？ いったい何の必要があつて」

「逃げていたじゃない！ ママに似た人間を捜し求めれば、パパが愛されていたのと同じように自分も『幸福』になれるとも思つて？！ ふざけんじやないわよッ、ママだつて実の子供でもなければ、誰がそんな不甲斐ない人間を愛してくれるのですかッ！！」

正面から投げつけられた言葉の与えた衝撃の激しさに、口口は力なく震える手の中に顔を埋めていた。

だがしかし、自分でも不自然に感じるほどに、その口元だけは笑つていた。

自分でも、認めていたのかもしれない。

自分が求めている行動は、ただの、理想だ。

絶対的な安心感で、無私に、無欲に、愛し続けてくれたいた。

グラン・ダムール

あの最愛の恋人の腕の中に戻りたい一心で、あの代償を求めない愛情を取り戻したい一心で、代わりになる人間をずっと捜し求めている。

今度こそ、自分ひとりで独占しても構わない、『母』という存在を、求めていたに過ぎないわけだから。

「……それで？ そんなふうに僕に容赦なく切りつけて？ ……ひょっとして僕は、きみにまで絶縁状を突きつけられなきゃいけないわけなのかな？」

しとね

気分的には、絶望の褥で茫然と呟いている言葉のはずなのに。

あんまり絶望が激しくて、力の入らなくなってしまうている口元から発せられる言葉は、聞く者の耳に馬鹿馬鹿しさを感じさせる、

道化た響きを口口に演じさせてしまっていた。

「いったい誰が、そんな話をしているのよッ！」

憤然と叫んだナナリーは、容赦のない力加減で、口口の両足に爪を立てる。

そのままガクガク揺らされて、足場を取り払われた操り人形^{マリオネット}ながらに、その場にへたり込んでしまった口口は、長い足を不器用に折り曲げて、血気盛んに憤っているナナリーの姿を、ただ眺める。

「しっかりなさい！　いつまで呆けているの？　いまさら馬鹿みたいに醜態を演じ始めても、もうとつくに手遅れなのよ！　パパはもう決してあなたを助けてくれないの！　今までどおり自分の力だけで乗り越えて行くしか方法はないのよッ！　そんなことくらい、自分で理解できないお兄様ではないでしょうッ？　しっかりなさい！！」

掴まれている両肩を、ものすごい力で揺さぶられながら。

それ以上に、容赦のない力で乱暴に、心の襷^{ひだ}にえぐり込んでくる旋律が、口口の魂に絶望の悲鳴を上げさせる。

「　なあ、おまえ。明日にも俺が、居なくなったらどうする？」
それは一ヶ月前のことだった。

とある大学の出先機関に、出向職員として勤めている口口の職場に、何の前触れもなく父が突然訪ねて来たのだ。

とりあえず最寄りのカフェへ移動したところで用向きを訊ねると、
「何、健康診断の帰りだな」と厳めしい顔をして答える。

どうやら知人の紹介で、「是非に」と検査を受ける必要に迫られ

てしまったらしい。

その昔、母に聞いた話では、若い頃にはずいぶん無茶も重ねたらしいが。一見した容姿の繊細さに比べれば、驚くほどに頑丈な身体で。双子の子供時代に、何度か付き添いで病院の門をくぐる以外は、まったく病気とは無縁でいられた健康体だった。

その父も70の坂を越した辺りから、「最近では、めっきり気力が老朽化でな。近々改修工事が必要になるやも知れん」などと彼一流の皮肉を洩らしては、こっそり弱音を覗かせる機会も少なからず存在していた。

だからこのときも、『さては、慣れない病院通いで、気鬱に陥っているだけだな?』と口口は察して、深刻にならずにあしらった。「ひよつとして、良い人でも見つかりましたか? 近々出奔するご予定がお有りなら、必ず事前に知らせてくださいね。何かと準備が必要になりますから」

「俺が出奔するのに、おまえが何の準備をするんだ?」

「ですから、心の準備ですよ。今でもまだナナリーに泣かれるのは大変なんです」

口口が、せいぜい顔を顰めて呟くと、

「アレはなア、最近ますますアイツに似てくるからなア。逆立ちしても、おまえに勝てる敵ではない」

子供のように嬉しそうな表情で話を混ぜっ返しては、ことさら愉しげに大きな声を上げて笑った。

その無邪気に若々しい健康体の一体どこを検査する必要があるんです? と呆れながら、それでも普段どおり元気な姿に、内心ではホッと安堵の息を吐きながら、話の流れでなんとなく母に関する悪口 もとい、昔話に花を咲かせていたところで、父がまた改まった調子で訊ねてきた。

「ところで、おまえ。どうして最近、訪ねて来ない? 俺が相手では、料理の腕を振るい甲斐が無いと愚痴を垂れてる女が一人いるんだが?」

何の心構えもなかったところに、突然彼女の話振られて。

口口は一瞬、伏し目がちに動揺を隠してから、「学会前なんですよ」と答えた。

「来月には、お父さんの誕生日でしょう？ その際には、万障繰り合わせて出席させて頂きますから」

「うむ、俺もついに八十路か。めつきり老け込むワケだ」

「どこがですか？ お父さんと比べれば、僕のほうがよっぽど面壁しているようにも感じますよ」

「おまえのはアレだ、昔から精神的に老け込んでおるのだ。余計な厄介ことばかり、背負い込みおつて」

「なんの話ですか？」

今度のそれは、怪訝そうにまばたきするだけで軽く往なしたが、そこは父のほうでもクセモノで、「だから、学会前なんだろう？」と、平然と話を蒸し返した。

「おまえの性格だ。無茶をするのは勝手だが、家族の迷惑も少しは考えろ」

「ええ、そのご忠告は耳に痛いほど。最近本気で、子供に顔を忘れられそうなんです」

「自業自得だな。おまえの事情はどうあれ、最後に頼りになるのは、家族だぞ？」

「心しておきます。その点、お父さんには本当に感謝していますから」

効率的だからという理由で、自分は生涯自宅に腰を落ち着けて、複数の事業に裏から手を回していた。

おかげで、本当は恐ろしく多忙な時期でも、朝夕には欠かさず食事の席を共にして、双子の近況にまで細かく神経を配ってくれていた父だったから、それだけは本心からの感謝を伝えて微笑むと、父はたちまち鼻白んだ様子でムツと顔を顰めた。

「なんだと、実の父親を追い出す魂胆か？ 一気に尻の据わりが悪くなったぞ」

「ですから、学会前なんですよ。そろそろ勘弁してください」

「非情な男だなア。いったい誰が、そんな男に育てた？」

「残念ながら、お母さんでないことだけは事実ですよ。　そんな
にノロケ話がしたいなら、いっそナナリーの所に出向けば良いでし
ょうに？」

昔から父はそうだった。

散歩や遊びにせつせと口口を連れ回しては、他愛無い会話の延長
で、気付いたときには母の話を聞かされているような始末で。

単純な話、あんまり父が愉しげに、自慢そうに語ってくれるから、
母に対する恋しさを、口移しで植えつけられてしまった部分も多分
にあるのだ。

「アイツは、何だ。額面どおり言葉を受け取りすぎる。この歳で、
説教される俺の気持ちも考えろ」

「甘えているんですよ。ナナリーは、今でもお父さんのことが大好
きですから」

「つまらん口を叩くな。おまえの『甘え下手』は、誰に似たのか知
らんがな」

真面目な顔で苦言を呈されて、口口はとっさに苦笑で誤魔化しな
がら、おとなしく父の話に耳を傾けた。

父は、それからしばらくクドクドと双子の性格批判を続けた後で、
最後に一言「じゃアな、後のことは頼んだぞ」と言っつて、席を後に
した。

どこから見ても元気そうな後ろ姿に、口口はてつきりお茶代の精
算を任されたものと思い込み、そのままあっさり見送ってしまった
が。

実際のところ、父のほうでは何かしら予感するところがあったの
かもしれない。

その後も、週に一度程度のペースで電話で話していたが、生き
ている父の姿を目にしたのは、それが最後になってしまった。

一ヶ月後、かねてからの約束どおり、誕生祝いに訪れた実家の庭先で。

既に冷たくなっていた父の亡骸に触れてみて。

ロロが一番初めに感じたのは、失望だった。

父の精神的な支えになるために、それでも自分なりに意識的な努力を続けていた、つもりだった。

だから、これはいわゆる、『肩の荷が下りた状態なんだろうか？』と我ながら納得のいかない心理状態に首を傾げて。

よくよく自分を観察してみると、実際に変化が訪れたのは、肩の上ではなく、ロロの足元だった。

一瞬のうちに、足場が崩落してゆくような感覚。

獣の子供が発するような悲鳴を上げながら号泣しているナナリーの声を聞きながら、ロロは漠然とその名前を口にしていた。

「……………おとうさん……」

だが、もちろん返事の返るはずもない。

ことさらナナリーの慟哭を、煽り立ててしまっただけだった。

すっかり泣き腫らした顔をして、玄関先で双子とその家族の到着を迎えた彼女は、その傍らで今も新しい涙に頬を濡らしながら、懸命に嗚咽だけは洩らすまいと努力しているのに気付いた。

ロロは、その姿を漠然と瞳の上に映しながら、『もつと泣けばいいのに』と思った。

そしたら自分が、いくらでも慰めてあげられる。

それを思う自分自身が、誰より先に、それを望んでいた本心にも気付かずに。

「だからね、……本音を言えば、僕は…怖いんだ。ようやくこつちがやり直したいと思っても、今度は僕が、奥さんに愛想を尽かされているかもしれない。そうなったら僕は…いたい、どうすればいいんだろうね？」

おそらく自分は、『幸福』だったのだろう。

あんなにも惜しみのない愛情を、その生涯を通じて両親から受け取ることが可能だったわけだから。

だけど、僕は。

人から愛される喜びを知ってしまった僕は、お父さんとお母さんがいなくなった今、いったいどうしてその愛情を取り戻せば良いのだろうか？

いったい誰が、それと同じような愛情で、僕を愛してくれるというのだろうか。

「しっかりお聞きなさいな、おバカさん」

泣いて、叫んで、叱り飛ばして。

正直言って、とくにクタクタになっていたナナリーは、自分の子供に接するときと同じやり方で、自嘲を浮かべる口口の頬つぺたをギュツとつねった。

そのまま両手の間に、口口の顔をギュツと挟んだ。

「そういうセリフはね、奥さんの前で土下座して、泣きながら全部事情を話して、さんざん醜態を晒してから言ってみることね。……私だって、さんざん似たような修羅場を経験してるんだから」

思わず驚愕の色を浮かべる口口のひたいを、ナナリーはグイッと無造作に人差し指で押し返した。

「あのね、言っておきますけどね、お兄様が勝手に完璧だと思い込

んでいる夫婦にしたって同じことなの。きっと私たちの知らないところで、相当数の修羅場を乗り越えてきている。それを経験してないからこそ、私とお兄様にしたって、完全な理解には程遠いんじゃないかって？」

「……」

「誰にも頼まれやしないのに勝手にやせ我慢ばかりして、物わかりの良い大人のフリを装って それをしたがる自分の本心に、少しは真面目に耳を傾けてみなさいな。実際よりも自分が、理想に近しい存在に見られたがっているだけでしょう？ そうやって自分を、愛されるにふさわしい人間に仕立てただけでしょう？ 本物の自分は無傷のまま、望みどおり愛されたがっているだけなのよ。いたい誰がそんな得体の知れない人間を、手放して愛せる気持ちになれると思って？ お兄様の求めているものは、あまりに……虫が良すぎるわ」

「いったい今まで、何を見て育ってきたの？ そんなふうに言いたげに、ナナリーの瞳がもどかしそうに訊ねてくる。

けれども口口は、それを言うナナリーの本心にも気付いていた。「不思議だね…。きみは、そこまで冷静に判断できるのに、それでも僕とお父さんを比べたがるなんて。……それこそ、お父さんに対する冒涇には当たらないのかい？」

ナナリーは、口口の姿に、父の姿を重ねていきたいのだ。

だから、無意識のうちにも、口口に自覚を促そうと勧めてくる。

「きみには悪いけど、僕には正直、お父さんに似ている自覚はないんだ」

たしかに、近づきたいと思っていたのかもしれない。

父は、まさしく愛されるにふさわしい人だったから。

たしかに、羨ましいと思うていたのかもしれない。

口口の知るかぎり、父は唯一彼の願いを実現している人だったから。

そんな父の、精神的な支えになる。その考えは、口口の敗北

感を慰めた。

けれども、父は。

人生で唯一最後の瞬間に、たった一人きりでその人生を終えてしまった。

満足そうな安らぎに満ちている、父の死に顔を眺めながら。

ロ口はなぜだか自分が、見捨てられたような心地がした。

本当は、父には、自分の支えなど必要ではなかったのだ。

その事実を、そのとき初めて見せつけられたような心地がした。

「どうしてあなたは昔から……、パパに関することになると、そう依怙地になってしまうのかしら？」

まるきり独白を呟くように、苛立たしげなナナリーの声音が呟く。

「パパだって、タチが悪いのよ。自慢たらしく面白がつて。お兄様が葛藤している姿を、満足そうに眺めているだけなんだから」

自分にはまた理解できない話を始めたナナリーの姿を、ロ口は怪訝そうに見つめ返した。

ナナリーは軽く肩をすくめると、「文句があるなら、パパに言うて頂戴」と迷惑そうな顔つきで前置きした。

「お兄様はね、パパをライバル視しているだけなの。だからこそ、パパに負けてる『本当の自分』が認められない。自慢の息子に、そんなふうに見られる自分に愉悦を感じていたものだから、パパのほうでも意識的に、ほんの少しだけ『理想の父親像』を演じてた。でもね、パパが本当にどうしようもない姿を、お兄様が知らないだけなのよ」

ロ口は驚きに、その両眼を精一杯に見開いた。

ライバル？

その言葉に、昔の記憶を呼び覚まされながら。

「……僕たちを恨んでいませんか？ ……お父さん」

自分たちの捧げた感謝の気持ち、婉曲に愛する母の命を奪った。

極論だ。

自分でも、そうわかっている。

だがしかし、実際にすぐ目前で、愛する妻の尊い命が奪われてゆく様子を、つぶさに見せつけられてしまった父の心理的には、いったいどう判定を下されてしまうのだろうか？

果たして本当に、自分たちの『余計な節介』を、許す気持ちになれるのだろうか？

親が、子供を、愛するなんて事実は、あまりに当然過ぎる事実として、受け止めている頑固な意志が感じられた父だったから、わざわざその愛情を形にして押しつけた自分たちの心情は、父の目にはとすれば『余計な節介』として映ってしまう可能性も考えられた。その可能性に気付いてしまったからこそ、あのとき口口は、卑怯は承知でその質問を投げかけた。

……僕たちを恨んでいませんか？ ……お父さん

おそらく、父は否定するだろう。

もちろん、本心は別にして。

けれども、父は。

何も言わずに、態度で気持ちを返してくれた。

妻を亡くして悔しいと、純粹に素直な気持ちで返してくれた。

そして同時に、悲しみの底に沈んでいる自分たちの心情も察して

くれて、その事実を心の底から一緒に悲しんでくれたのだ。

あのとき父が見せてくれた涙に、本当に、自分は救われた心地がしたから、今まで母が支えてきた分も、自分が、父を支えてやりたいと思った。

それを思う気持ちに、今でも嘘はないつもりだが。

考えてみれば、物心ついて以来、とかく父の前では泣けない状態の続いていた、自分の気持ちの本当のところは？

僕は、父に弱みを見せたくないだけだったんだ……。

母を、愛するという観点でも、守るという側面でも、決して自分では、父には勝てない。

言ってみれば、精神的な弱者である自分のほうから、何を好き好んで更なる弱みを見せねばならない？

無意識のうちにも、対抗意識を燃やしていた。

それが理由で、今までずっと、意味のない意地を張り続けていたわけなのである。

「……いまさら？……それはないですよ、お父さん……。おかげ僕が今まで、どんなにか……」

一体どうやって事実を受け止めれば良いのかわからずに、口口は茫然と呟きながら両手でひたいを抱え込む。

目前で苦悩する兄の姿を眺めながら、ナナリーは「ふふっ」と他人事の様子で微笑んだ。

「まア、パパのために多少は弁護してあげるなら？ 『アイツはいったい誰に似たんだ？』 って、私の前ではずいぶんボロクソだったけど、その口ぶりのまア悔しそうなこと。自分の知らないところで勝手に成長して行くお兄様が許せなかったのよ。嫉妬した私が、本気で怒り出すまで止めようとしなんだもの。 でもね、それだからこそ案外余計に、パパのほうでも安心して、お兄様には甘えていたのじゃないかしら？」

じゃアな、後のことは頼んだぞ。

さんざん人の性格を、辛辣に批判してくれたその後で。そっけなく、きびすを返した父の後ろ姿を、今でも鮮明に覚えている。

たしかに、「額面どおり言葉を受け取りすぎる」と、ナナリーを批判したのはあなたのほうだったけれども、あなたのその素直でない性格は、正直言ってあまりに罪作りだ。

「いいんじゃないの、開き直れば？ 人生80年と考えると、この先30年は、お兄様だけの人生なんだから。その間に好きなだけ、パパを見返してやればいいじゃない？ パパにはもう、今以上の『幸福』は手に入れようがないんだから」

口口の心に刻みつけるように、ゆっくり言葉を重ねながら、やがて腰を上げたナナリーは、

「さア、これですよやく正面から、パパにお別れを言えるはずですよっ？」

口口に片手を差し伸べながら、母譲りの金の瞳を細めて微笑む。口口は、その肩越しに射す後光に、思わずまぶしく目を細めた。

物理的に角度を上げていた太陽光線が、そのときちょうどナナリーの肩越しに視界に入り込んだだけだったが。それでも口口は、自然と仰ぎ見るような心境で、ナナリーの姿を目に映した。

「……きみは、本当に自分の力で成長しているね？　今までずいぶん甘やかしたつもりなんだけど、ちつともきみの人生の邪魔にはならなかったのかい？」

「なるもんですか。これからだって遠慮なく、お兄様の愛情を吸い尽くしてあげるから、覚悟なさい？」

「残念だね。　本音を言えば、もしもの場合、僕の老後は、すっかりきみに押しつけてやる魂胆だったんだけど。どこで計算を間違ったかな？」

「ふふつ、本当に馬鹿なお兄様」

声音を弾ませながら、さりげなく甘えの腕を口口の腰に回してくる。

そんなナナリーの肩に腕を回しながら、口口はゆっくり歩き始める。

そして、リビングを後にする際に、一瞬だけ部屋の様子を眺め渡した。

裏庭の彼方には、黄金色の牧草地、そしてキラキラ輝く海岸線。吹きゆく潮風に、絶えることなくユラユラ揺れているハンモック。

愛している。

この気持ち、胸の奥底に存在し続けているかぎり。

口口はあきらめに似た心持ちを不思議に心地よく受け止めながら、瞳を細めて微笑むと、やがて静かにリビングのドアを閉ざした。

番外? : ある夜の出来事 (前書き)

ロロ&ナナリー : 5歳。

若い夫婦には、よく有りがちなネタです。

番外? : ある夜の出来事

草木も寝静まる丑三つ時。

熟睡していたロロは、ふとした拍子に隣からすすり泣く声が聞こえているのに気づいた。

それでもまだ始めのうちは、夢うつつで聞き逃していられたのだが、

「……………ロロ……………おにいちやあん……………」

涙混じりに名前を呼ばれながら、明らかに汗ばんでいるひたいを押し付けられ、さすがに呑気に眠っている場合ではないと、五歳児なりに気づいて慌てて飛び起きた。

「ど、どうしたの、ナナリー?」

驚くあまり、上ずった声音で訊ねるが、当のナナリーはとっさに返事が出来ない様子で。

小さく身体を丸めたまま、顔中を汗でぐっしより濡らしていた。

ロロは、とっさに両親の顔を思い浮かべて、ベッドから飛び降りた。

だが、ナナリーがロロの着ているパジャマの裾をしっかりと握り締めて離さなかったものだから、思い切り後ろにつんのめって、一瞬本気で息が詰まった。

「……………ナ、ナナリー……………手! 離してっ」

「……………ひとりはやだ……………こわい……………」

しかしナナリーは、しくしく涙を流しながら、消え入りそうな声音で自分の窮状を訴えるばかりで。

ロロは、自分のほうからナナリーに近づくことで窮地を脱すると、やさしくナナリーの手を掴んで外させた。

「おかあさんと呼んできてあげるから。そしたら、すぐに直してくれるから。すこしだけ待ってて」

ハッハッと短く苦しげに息を喘がせながら、ボロボロと涙をこぼしているナナリーは、声にならない嘔きで何かを呟いた。

「うん、なに？」

ロロはとつさの判断で、ナナリーの口元に顔を寄せると、小さな嘔き声を辛うじて聞き取った。

「……30秒……で……かえってきて」

「わかった！」

答えて、まさしく脱兎の如くに駆け出した。

家族四人が住むには充分すぎるほどに広い部屋だったが、それでも土地の広大さに比べたら、なんとも小さな家だった。

台風なぞに見舞われてしまうと、一瞬で家ごとどこかに吹き飛ばされてしまいそうなほどに。

だから日中は両親の寝室まで、ものの30秒もあれば余裕で歩いていけるはずだが、ロロは深夜に廊下を一人で歩くのが怖いのだ。

けれども今は、そんな弱音を吐いている場合ではなかった。

年中決して止むことの無い風の音。

ピューピューと窓の外を吹きゆくそれにとまって、ガタガタと軋みを上げている窓ガラスが時折ガタンと大きく揺れるたび、思わず飛び上がってしまいそうになるけれど。

三歳の頃、あまりの怖さに、トイレに向かう途中で間に合わずに漏らしてしまった経験が、今でも鮮明に思い出されてしまうけれども、今は最愛の妹ナナリーが苦しんでいるのだから！ と、今にも足がすくんでしまいそうになる自分に必死で言い聞かせて、なんとか無事に両親の寝室のドアの前まで辿り着くことが叶った。

思わずホッと安堵の息を吐きながら、何も考えずにドアノブをグツと下に押し下げた。

ガチャリ。

しかし予想に反して、部屋のドアには鍵が掛かっていたのだ。
一瞬で、軽いパニック状態に陥ってしまった口口は、小さな拳を
硬く握って、ドンドンと思い切り何度もドアを打ち鳴らした。

「お、おとうさんっ！ おかあさん！ 開けてっ、ナナリーがつっ
！」

言っているうちにも、得体の知れない恐怖がこみ上げてきて。
今にも泣いてしまいそうな気分で、ドンドンと必死でドアを打ち
鳴らし続けた。

ガタン、ガタンと揺れ続ける窓の音。
ピュー、ピューと吹き続ける風の音。

あの窓の向こう側には、夜中に歩き回る悪い子供を捕まえて、頭
からガブリと喰らいついてしまう口の大きな怪物が待ち構えている
のだ。

興味本位で、友達の貸してくれた怖い本なんか読むんじやなかつ
たと、口口は心底後悔しながら、最後は「たすけてっ！」と別な意
味で悲鳴まじりに大きく声を張り上げた。

時間にすれば、ものの数秒だっただろう。

ややあって、ガチャリと開いたドアの向こうから、姿を現したの
は父親だった。

見慣れた、いつものパジャマ姿。

だが、なぜだか上衣は、ボタンがふたつしか留められていなかった。
た。

普段からきつちりした服装の父親を見慣れているだけに、口口は
激しく違和感を覚えたが、とにかく今は気持ちが急くままに父親の
手を握って揺さぶった。

「ナ、ナナリーがつ、大変なのっ！ お、おかあさんはっ？」
言いながら、口口は父親の背後を覗いたが、廊下から零れる明か

りで辛うじて視界の開けた先で、ベッドの上で小さく背中を丸めている母親は、なんだか妙に苦しげにひくひくと肩を揺らして泣いていた。

えっ…どうして泣いてるの？

驚きに、目をまん丸に見開きながら、思わず部屋の中に飛び込みかけた口口をさりげなく遮って、父親は自分の背中でボタンとドアを閉じてしまった。

口口は一瞬だけ、ナナリーのことを忘れてしまうと、不安そうに父親の顔を見上げた。

「…お、おかあさんも…どこか痛いのか？」

思わずそう訊ねてしまったのは、母親の背中がどこかしら苦痛を訴えているナナリーの姿と酷似していたせいだ。

父親は、なぜだか目元を真っ赤に染めて、気まずそうに視線を落とすと、「ああ」と低く掠れた声で答えた。

「心配しなくていい。…その、もう薬を飲ませたからな」

それより今はナナリーのほうが心配だろう？ と口早に続けられ、ようやく本来の目的を思い出した口口は、父親の手を強く握って、「はやく！ はやく！」と我先に子供部屋へと急いだ。

「それで？ ナナリーは無事だったのだろうか？」

小一時間ほどで夫婦の寝室に戻ったルルーシュは、物音を立てぬ

ように細心の注意を払ってドアを薄く開いた。

その隙間から、まるで脅しつけるようにして、聞き慣れた嫁の怒り声で啖呵を切られて、ガックリ肩を落としたルルーシュは、ハアとあきらめの息を吐き出した。

これは…怒っているよな？ やっぱり…。

災難から逃れたい一心で、思わずそのままボタンとドアを閉じてしまいたい衝動に駆られたが。

そんなことをしてしまえば、またいつものように容赦なく、尻尾を踏まれた猫みたいに怒り狂った嫁と修羅場になるのは目に見えていた。

仕方なく、部屋の中に歩みを進めると、後ろ手に鍵を閉めるのも忘れずに、惘然とした表情でまっすぐベッドに向かった。

なんとなく嘆息まじりにベッドの端に腰を下ろしたら、無言でバチンツと後頭部を叩かれてしまったが。

この程度の報復で済めば幸いと甘んじて受け止めると、何も言わずに身体を反転させて、背後からC・Cの身体を抱きしめた。

子供を産んで以来、ようやく自主的に身に着けるようになったルルーシュと揃いのパジャマ姿で、同じく惘然とした目つきで睨んできたC・Cは、割合素直に背中をルルーシュの胸元に預けてきた。

ルルーシュは、内心でホツと息を吐きながら、見た目ばかりは惘然と顔を顰めると、慣れた仕草でC・Cの肩口を抱きしめた。

「…ただの腹痛だ。　どうやらアイツ、夜中に盗み食いをするクセがあるみたいだぞ？」

ロロの話では、翌朝双子に持たせるつもりで作って寝かせておいたロールケーキを、ひとりで丸々一本平らげてしまったそうだから、寝ている間に消化の追いつかなかった胃が驚いてしまったのだろう。鎮痛効果と、消化吸収を助けるハーブを調合して飲ませてやり、症状が落ち着くまで双子のベッドで添い寝してやっているうちに、

いつしか口口も安心した表情で眠っていた。

そう話を聞かせてやると、C・C・は大して驚きもしないでクスツと軽く鼻を鳴らした。

「ああ、知ってるぞ？ ストレスが溜まり始めると、どうしても我慢できなくなるみたいだな」

「 ストレスだと？ あの歳でか？」

驚いたルルーシュが思わず素っ頓狂な声を上げると、軽蔑の眼差しを注いできたC・C・が、「相変わらず、おまえは鈍感だなア」とあきれたように呟いた。

「あの歳だからさ。言いたいことは無数にあるのに、ボキャブラリーの貧困さが発言に制約を設けてしまう。自分が納得するまで悩み始めると止まらなくなるのは、案外おまえ譲りだぞ？」

たしかに思い当たる節は無数にあるのだが、そんなふうには冷静に切り返されてしまうと、正直言って、面白くない。

ルルーシュは、拗ねたような気分で、ぶっきらぼうにやり返す。

「文句を言い始めると、容赦なく相手を打ちのめすのは、むしろおまえ譲りだろう？」

「詰めが甘いくせに、やけに頭の回転が速いのは、どう考えてもおまえ譲りだ」

「よく言う。アイツの口の悪さで、泣いてる男がどれだけ居ると思うんだ？」

「身の程もわきまえずに適わぬ敵に歯向かって、泣かされるような真似をしてくる男のほうが悪い。相手のためにも、良い人生教訓になってるじゃないか」

「どうだかな。そのたび相手の親から厭味を聞かされる、俺の身にもなってみろ」

「ハッ、そんなの、安い相談じゃないか。それとも、ルルーシュ？ まさか、ナナリーに、『黙って泣かされて来い』とでも言うつもりか？」

「馬鹿か、おまえは。そんなものは論外に決まってる」

「ほら見る。どうせおまえのことだから、眼を三角にして怒り狂って、相手の親が三日三晩眠れなくなるような反撃を平気でやりかねないだろう？ そんな恥ずかしい真似をされるくらいなら、私はむしろナナリーを応援してやりたい気分さ」

「馬鹿を言つな。俺はそこまで非常識じゃない」

「さア、それはどうか？」

しばらくの間、その調子で睨み合いが続いたが、事は子供に関わる問題であることを思い出し、ルルーシュが話を戻した。

「それはともかくだ。盗み食いの件、気づいていたなら、どうして先に注意してやらなかったんだ？」

「注意してやったさ、そのうち痛い目を見ても知らないぞ？ とない奴だな」となじった。

「一度で聞かないようなら、理解するまで何度でも言っただけで聞かせろ、相手はまだ五歳なんだぞ？ 過食症がトラウマにでもなったら、どうするつもりだ？」

「大げさな奴だなア。だいたい、おまえが知らないだけで、もうこれで八度目だぞ？ 五歳児とはいえ、ナナリーに学習能力が無さ過ぎるのさ」

「八度目？ そんなにか？」

焦ったようにそう言った。

その表情を横目に眺めていたC・Cは、露骨にうんざりした顔つきで、ハアと大きく嘆息して見せた。

「言っておくがな、ルルーシュ？ この程度で、医者のお世話になるつもりなら、私は全力で阻止するからな」

「どうしてだ？」

軽くムキになって訊ね返すと、フンツと辛辣に鼻を鳴らしたC・Cは、

「この週末はヒマか？」

と、唐突に質問を投げてきた。

ルルーシュは、一瞬言葉に詰まったが、即座に頭の中のスケジュール帳に目を通すと、素直に「ああ」と答える。

本当は、仕事の付き合いで終日予定が埋まっていたのだが、そんなものは、前倒しで片付けてしまえば済む話だ。

C・Cは、なぜだかフイツと視線を逸らしてしまうと、

「だったら、ナナリーを連れて、一日外で遊んで来い」

と続けた。

「最近おまえ仕事ばかりに夢中で、ロクに遊んでやってないだろう？　だから半分は、おまえに構って欲しくてワザとやっているんだよ」

そっけなく突き放すように言われて、そういえば昔、ナナリーにも同じ事を言われたことがあったなど、ルルーシュは懐かしい記憶にすこしだけ切ない気分を味わった。

ゼロ・レクイエムから、既に十年。

つい先日、双子が五歳の誕生日を迎えるのと同時に、ブリタニア本国で25回目の誕生日を迎えたナナリーは、歳を経ることに母親譲りの美貌に磨きをかけていて。

片時も離れることなく、側近を務めているゼロとの恋仲が次第に囁かれ、「ご成婚は秒読みか？」などと、こぞって一般大衆紙は取り上げているのだが、なんとなくその可能性は低いようにルルーシュは感じている。

もちろん本心では、『一緒になればいい』と思っている。

だが、なんとなく以前のルルーシュとC・Cの関係のように、一緒に居るだけで得られる満足以上の幸福を求めないような感じがするからだ。

一緒に居るだけで、ほかの誰というよりも安心する。

けれども、その安心感を上回るほどに、胸を熱く焼き焦がすような感情は存在しない。

たがいに穏やかな毎日を共有して、今でもたがいの背中に、ルル

ーシュの存在を透かして見ている。

その状態から一步前に踏み出さないかぎり、あの二人の性格を考えると、ルルーシュたち以上に変化を求めるのは難しいような気がする。

ルルーシュとC・Cが今の状態に発展しているのは、ひとえにゼロ・レクイエムで物理的にも、精神的にも別れを経験しているからだ。

C・Cが、本心では俺との別れを、どれだけ我慢していたかも知らずに、な……。

なんとなく感傷に浸ってしまったルルーシュは、毎日当たり前のように眺めている嫁の素顔を見つめた。

たちまち「なんだ？」と怪訝そうな顔つきで眉を顰めて見せるので、『こういうのは、俺らしくなかったか』と、すこしばかり自嘲まじりに、ほろ苦い気分でルルーシュは笑った。

「だったら、家族で出かければいいだろう？　どうしてナナリーだけなんだ？」

C・Cは、それはもう無然とした表情で続けた。

「本当に馬鹿だな、おまえは。ナナリーが、おまえを独占したがつているからに決まっているだろう？」

「口口はどうする？」

「いい機会だから、たまには私を独占させてやるさ。最近、妙にナナリーに遠慮しているからな」

その傾向は、今に始まった話ではなく。昔から、乳を吸う順番さえ、ナナリーに譲っていたほどだ。

たまには口口に、勢いの良いところを飲ませてやろうと順番を入れ替えると、すぐさま待たされているナナリーが火がついたように泣き始めるので、口口は遠慮して吸うのを止めてしまうのだ。

おまえは本当に、よく出来たお兄ちゃんだなア（どこかの誰かさ

んとは違つて) と、再三皮肉を言われた記憶まで思い出し、ルルーシュはぶつきらばうに唇の先を尖らせる。

「なら来週は、俺がロロに独占されてやるから、おまえはナナリーに独占されてろ」

「ふん、言われなくても、私はいつだって、チビたちには独占されてるさ」

言つてしまつてから、いささか不自然にC・Cは口を嚙んだ。

ルルーシュの策に嵌ったことを自覚したのだ。

ルルーシュは、「へえ？」とこれ見よがしに、たつた今気づいたフリを装つた。

「そう言えばおまえも、たしか俺を独占し足りないと拗ねているクチだつたか？」

これ以上、馬鹿な戯言に付き合つてられるかと、C・Cはさすがルルーシュの腕から逃げ出した。

その行動を読んでいたルルーシュは、さりげなく身体の前に回していた両腕で、C・Cの華奢な身体を羽交い絞めにした。

「離せっ」と文句を言うのをあつさり無視すると、緑の髪を片手で梳きながら、夜目にも鮮やかに赤く染まつている目元と耳元にひとつずつ、音を立てない小さなキスを落とした。

悔しいことに、そんなふうを抱きしめられるのも、キスをされるのも嫌だと思えないものだから、しばらく羞恥に唇を噛んでいたC・Cは、ややあつて溜息まじりに抵抗をあきらめた。

「……それで？」

「うん？」

「……ロロには気づかれて無いのだろうな？」

必死の形相で、夫婦の寝室を訪ねてきたロロを迎えてやるのが遅れてしまったのも道理で、運悪く意地の悪い方法で、さんざんC・Cを泣かせている最中だったのだ。

幸い真つ最中ではなかったが、終わつた直後だっただけに、二人ともとつさに身動きの取れない状態であつた。

その件もあってC・Cは、激しく立腹していたわけだが。ルルーシュは、思わずハアと溜息を漏らすと、「大丈夫だ」と続けた。

「アイツは、妙に鈍感なところがあるからな。……いったい誰に似たのかは知らないが」

少なくとも、迎えに来たのがナナリーだったらと考えると、ルルーシュには正直言つて、誤魔化し切れた自信は無い。

決して早熟なわけではないのだろうが、いつの頃からか、深夜に夫婦の寝室を訪ねる場合には、必ず事前にノックを怠らないのは、ナナリーが自発的に始めた習慣だった。

C・Cは、赤く染めたままの頬を皮肉に歪めると、「自覚しているようなら安心だよ」と高飛車に憎まれ口を叩いた。

羞恥が言わせた、可愛い照れ隠しだ。

それくらい、ルルーシュだって理解している。

それでも、ムツとしてしまうのだから仕方ない。

腕の中にC・Cを抱えたまま背後のベッドに倒れ込んだルルーシュは、すばやく上下の位置を入れ替えると、身体の下にC・Cを組み敷いた。

勝気な上目遣いで睨み付けてくる、C・Cの鼻先の距離から言い返した。

「おまえはそう言つて、俺にばかり責任を押し付けてくれるがな。そもそも、おまえが余計な意地を張らなければ、小一時間も前に済んでいたはずだろう？」

そもそもの発端は、寝る前に枕の上で交わすのが決まり事になっている『おやすみのキス』を、C・Cが「今夜は嫌だ」と理由も言わずに拒んでくれたのだ。

そのまま背中を向けて布団を被ってしまうので、「いったい俺が何をしたんだ？」とムキになったルルーシュが訊ねても、むっつり口を噤んだまま何も答えようとしないので、気づいた時には嫌がるC・Cを強引に組み敷いて

延々一時間近くも、絶頂の間際まで追いつめては、達する寸前でわざと引き抜いて、体位を変えてしまおうという実に意地の悪い方法で、C・C・の口を割らせるために苦心したのだ。

結局、C・C・は最後まで口を割ろうとしなかったが、素直に口を割るよりも、よっぽど恥ずかしい懇願のセリフをさんざん口走ってしまった記憶まで思い出してしまったものだから、一瞬で火がついたように顔をカッと熱くして、ルルーシュの視線から逃れるために両腕で首筋にギュッとしがみ付いた。

逃げれば追う男の本能を、十二分に理解した上での行動だったが、それでも羞恥を感じてしまうのは仕方なく。必要以上にギュウギュウと、ルルーシュの首筋を締め上げながら、ぶっきらぼうに言い返した。

「……………だからアレは、おまえが勝手に妙な誤解をするから……………」

「俺が誤解をして、どうしておまえが拗ねる必要があるんだ？」
「たちまち優勢を取り戻したルルーシュが冷静に訊ねると、C・C・はむつつり口を噤んで黙り込んでしまった。」

要するに、ナナリーとご同様に、淋しくて拗ねていただけなのだ。

出合いの当初は共犯者。

いつしかそれが、表現の困る相手に成長していたC・C・と、ルルーシュが華燭の典をあげたのは、今を去ること九年前の11月20日のことである。

ちなみに、その日は世間的には『ピザの日』で、ルルーシュが勝手に決めた『C・C・の誕生日』であるのは単なる余談だ。

必要に迫られて、婚礼に使用したウェディングドレスまで自らデザインしてしまったルルーシュは、後にC・C・の勤めているバイト先で評判を集めてしまったのが原因で、自ら起業する羽目に陥った。

そのときルルーシュが立ち上げたブライダル・コレクションが『

グランデ・フィオリ
大きな花』である。

ゼロの衣装や、黒の騎士団の制服などを皮切りに、必要に応じてナイトメアの外装に至るまで以前から細かく指示を出していたルーシユだったから、元々デザイナーのセンスに恵まれていたのだろう。

ブランド創設後ただの一度もアイデアの枯渇に悩まされた経験は皆無だったが。唯一の問題は、実際にそれを着る相手のサイズが違う点だった。

「このデザインで、もうあと10センチウエストサイズを広げてみる。腰周りにゆとりを持たせた、フレアーの効果が完全に破壊されるだろうか？」

C・C・のサイズで描かれているデザイン画を元に、実際に依頼主と折衷を繰り返しているデザイナーから変更を加えられたデザイン画が、やがてルーシユの手元に返されてくる。

最終的にルーシユが、全体的なデザインを調整し直したところで、縫製の段階以降に回されるわけだが、今回のように、イチからデザインを考え直したほうが早いような場合も少なからずあつてしまふのだ。

こめかみに青筋を立てながら憤るルーシユの姿を、あきれたように横目で観察しながら、他人事の気楽さで、C・C・が溜息まじりに呟いた。

「だったら、試しに一度、おまえがフレアーに固執するクセを改善すれば良いだろう？ 妙なところで、頭の硬い男だな」

だが、それこそまさに、『グランデ・フィオリ大きな花の奇跡』と言わしめた定番のデザインなのである。

ルーシユの気持ち的には、それを外すことなど論外だった。

「おまえが着て、映えるデザインでなければ、俺が作る意味が無いだろう？」

実際に着る相手が誰であろうと、C・C・以外のモデルを想定するなど考えられない。

「どれだけ「仕事だから」と頭では割り切っても、肝心の筆が進まなくなってしまうのだから仕方が無い。」

「……………実際に着るのは、私ではない」

丸々一分近くも沈黙を守った後に返された反論に、ルルーシユもたっぷり含みを持たせて反論した。

「だから？」

決して妥協を許さないデザイナーの意地が幸いして、元々のデザイン画だけを集めた個展がたびたび開催されるほどに、顧客の幅は、毎年口コミで増える一方で。

初めのうちは、年に数着限定のプレタクチュールとオーダーレantalだけの扱いだったのが、次第にそうも言っていられなくなり。最近では、月に数着のペースでデザイン画の締め切りを抱える身になってしまった。

おかげで子供たちと接する時間が減ってしまったわけだが、今までルルーシユが気にかかる必要もなく仕事に専念していたのは、ひとえにC・C・の内助の功の賜物である。

だが実際、蓋を開けてみると、そのC・C・自身が拗ねていた。どれだけ長く一緒に過ごしていても、たとえ全てのデザインがC・C・のために考案されているのだとしても、実際に着るのはC・C・ではない。別の女だ。

まさかコイツが、ヤキモチを妬いてくれるとは…。

一緒に暮らし始めて、10年以上の歳月が経過しているにもかかわらず、いまだに自分のほうからは、甘い言葉のひとつも素直に求めようとしていない女。

その女が、迂闊に見せてしまった素顔の部分に面映さを誘われて、状況も忘れてクスツと肩を揺らしてしまったら、すかさず報復に出たC・C・に思いつきりギョツと強くわき腹をつねられた。

本気で悲鳴を上げそうになったルルーシュは、子供たちを起こさぬように、死ぬ気で激痛を耐え忍んだ。

「……おまえという女はっ……」

痛みにゼイゼイと肩を喘がせながら恨み言を発すると、真っ赤に顔を染めているＣ・Ｃは、知らぬ様子で視線を外した。

「自業自得だろう？」

言われて、今度はルルーシュも、素直に白旗を投げ出した。

「ああ、そうだとも。　　口口も、ナナリーも、意外に淋しがり屋で不器用なのは、俺たち二人譲りだ。少しは懲りて、俺も以後は配慮を心掛けるさ」

そんな自分たちが、初めて産んで育てているにしては、正直『出来すぎだ』と感じるくらいに、まっすぐに伸びやかな子供に成長している。

昔からＣ・Ｃは、「私はやれば出来る子なんだぞ？」と口癖のように言っていたが。実際に、本気でやる気になれば、大工仕事から家事全般まで、大概のことは何でもこなせてしまう良く出来た嫁でもあった。

それを素直に口にして褒められないのは、ルルーシュ自身の不器用なところで。感謝の意味を込めてＣ・Ｃの耳朶にキスを落とすと、くすぐったそうに肩をすくめたＣ・Ｃが、すかさず横目で睨んできた。

ルルーシュは、構わずその唇に、ひととき触れるだけのキスを落とした。

「それで？　おまえはアレで満足だったのか？」

わざと羞恥を煽るような言い方をしてしまうのは、抱いてる最中に泣きながら「もっと」と縋り付いてくるＣ・Ｃがあまり可愛くて、久しぶりに我を忘れて激しく抱いてしまった自覚がルルーシュのほうにもあってしまうからだが。

しばらく無言で睨み返していたＣ・Ｃは、そのまま何も言わずに、ひたいをギュッとルルーシュの胸元に押し付けた。

「うん？」

一度は、止まってしまった心臓の音。
そして今は、コードの力で二度とは止まらなくなってしまった胸の鼓動。

その心音を確認ながら、眠るのがC・C・は好きだった。

察したルルーシュが優しい声で促すと、C・C・は辛うじて耳に届くくらいの小さな声で囁いた。

「……このまましばらく……黙ってる」

私が眠ってしまうまで。

「了解」

声には出せなかった部分に、ひときわこそばゆさを感じたルルーシュは、おとなしくC・C・の後ろ髪を撫ぜ始めた。

結婚して、子供を作って、産んで育てて。

それでもまだ変えられないC・C・の頑なさ。

そんな部分すら、今のルルーシュには愛しくてたまらないと思えてしまう。

案外親も、子供と一緒に育っていくものだぞ？ とは、双子が産まれた日にC・C・に言われたセリフだったが、C・C・もある意味、頑なであり続けることで、ルルーシュの目には成長しているように映ってしまうのだ。

頑なな自分さえ、ルルーシュが受け止めてくれることを知っているから、意識的に甘えているのだ。

言えば、おまえは決して認めようとしなないだろうがな。

しかし、頑なな彼女が言わせた強がりの文句を、忙しさにかまけて聞き流していた自分は、たしかに失敗だったとルルーシュは反省する。

俺もまだまだ青いということか…。

考えて、ふたたびルルーシュの唇を形作ったのは、幸福感がさせる苦笑いだった。

自分が少し構ってやらないだけで、淋しいと拗ねてしまう家族が三人もいるのだ。

身近に自分を愛してくれる人のいてくれる心地好さ。

それを意識するほどに、どうしようもなく笑いがこみ上げて我慢しようもなかったが。

しばらく呆れていたC・Cも、そのうち襲いくる疲れと安堵には抗い切れずに、静かな寝息を立て始めた。

最近は何れ方に数時間だけ同衾する生活を続けていたから、おそらく安心したのだろう。

ややあつて、覗いてみた彼女の寝顔が、心底安らいでいるのを確認して、ルルーシュは抱きしめ直した腕の中で小さく囁いた。

「……愛しているぞ、C・C……」

おまえを、おまえたちを、おまえたちの生きているこの世界を。

ひいては、自分の作り出した『やさしい世界を』。

何の見返りもなく、心底愛していると断言するに足る実感を、これ以上もなく手中に収められている。

ああ、やつぱり、あのとき俺の下した結論は、間違いではなかったのだな、と。

ルルーシュは、自分も眠りに落ちてゆく傍らで微笑みながら、数多の思いを噛み締めた。

番外？：沈丁花の花が咲く頃に（前書き）

還暦を迎えたルルーシュと、C・C・vs ナナリー。

番外？：沈丁花の花が咲く頃に

いつかはきっと、そのうち。

やってしまっただろうと思っていたのだ。

だって、本当に腹が立つほど良く似ているんですもの。

「　　ねエ、ママ？　ここに置いてあったサラミとオイルサーデインの缶詰知らない？」

「はい？」

何かを躊躇うような一瞬の沈黙の後、途端に二オクターブほど跳ね上がる彼女の声。

一体何をそんなに驚いているのよ？　と怪訝に思ったナナリーは、冷やかすような笑いを浮かべながら振り向いて。

視線の先に見つけた人の姿に、ようやく自分のした失敗に気がついた。

気まずい　　なんてモンじゃない沈黙。

本名なんて、聞いたその日に意識的に忘れてしまった。

パパはなぜだか「C・C・」なんて、妙に馴れ馴れしく愛称で呼んでる人。

昨年還暦を迎えたパパの誕生日に、突然「我が家」に乗り込んできた「侵略者」だ。

まア、もつとも？

既に嫁に行ってしまった身としては、「我が家」と呼ぶよりも「実家」と呼ぶほうが正しいことくらい知ってる。

それに、「侵略者」と思っているのは自分と兄の口口くらいのもので、パパの気持ち的には、立派に契約を結んでいる「介護人」だ。交通便利の悪い離島で、孤独なひとり暮らしを続けてるパパの面倒を見るために、毎朝7時から夕方7時まで12時間、一日も欠かさず隣の島から通ってきている。

簡単に「隣の島」って言ったって、本当に便利の悪い場所だったから、片道フェリーで二時間も掛かってしまうのだ。

要するに、通勤時間も加味すると、一日のうちの16時間を、パパ一人のためだけに費やしてくれている、本当に真面目な介護人。

そんな相手に向かつて、「侵略者」だなんて言っちゃうちこの神経を疑われそうなものだけど。

それを言うなら、以前から再三「一緒に暮らそう」と頼み込んでいるナナリーと口口の嘆願に、知らん顔を決め込んでいるパパが一番悪いのだ。

そりゃアね？ 愛するママと27年間も一緒に暮らし続けてきた愛しの我が家だ。

ナナリーたちが知るよりも、途方もない思い出が一杯に詰まっているのかもしれない。

41歳なんて若さで客死したママの思い出を大切に守りたい気持ちもわかるけど、だからって、そのためだけに、「お願いだから」って何百回も頭を下げて頼み込んでいる実の子供の誘いを振り切つてまで、介護人を雇って実家に留まる必要がある？

何が気に食わないと言って、パパが介護人を選んだ彼女が、ナナリーよりもちよつと年下で、ちよつと儚い感じに色気のある美人だからだ。

ママに対しては、一緒にいるところを見ているだけで胸焼けがす

るほど大甘だったパパだけど、基本的にそれ以外の女性に対しては単なる八方美人のフェミニストで。ママとは完全に扱いを別にしてるって感じが、子供心ながらに何度も胸のすく思いを味わったものだった。

いや、これでは、流石にちよつと褒めすぎだわね。

本当に、あの二人は、恥ずかしい夫婦だったんだから。

あまりに平然と、子供の見ている前も構わずにイチャイチャしまくってくれるものだから、どこの親でもそれが当然なのだと、すっかりナナリーたちは誤解していた。

世間一般の常識に直面したのは、ナナリーが八歳の頃、友人宅に泊まりに行った時のことだった。

「どうして『行つてらっしゃい』や、『おかえりなさい』や、『おはよう』や、『おやすみ』のキスをしないの？」

寝る前に、「おやすみなさい」を言いに行くついでに、純粹に疑問に感じてそう訊ねると、友人のご両親は引き攣ったような薄ら笑いを浮かべて、

「……………ナナリーちゃんのご両親は、とっても仲がよろしいようだね」

と、奥歯に物が挟まったような感想を伝えられたものだった。

その返事が不満だったナナリーは、眠ってしまうまで友人に、「絶対キスをするほうが普通だよ」と両親の弁護に励んだものだったが。

そんなナナリーも、四人の子供を抱えている今現在、絶対の自信を持って断言できる。

ウチの両親は、かなり異常だ。

一体どこのバカップルが、結婚後十年を過ぎてまで、毎日最低で

も4回はしっかり抱き合ってキスをするのよ？

キスそのものは軽く唇を触れ合わせる程度のものだったけど、パパのほうはどう見ても、腕の中にすっぽり収まる感じのママを抱きしめて喜んでた。

「本当におまえは、暑苦しい男だなっ！」と、時々ママがキレてたくらいだけど、そういうママだって、パパが仕事で手が離せなかったりすると、見るからにドン底のレベルまでテンションが下がり切っていた。

おかげで後年ナナリーは、「ウチの恥ずかしい夫婦」と口癖のように言う羽目に陥ってしまったものだが。もちろん本心では、「いつかは、私もあなりたい」と憧れていたのは事実であり、何年経っても仲の良い両親を心底誇りに思っていた。

そのパパが、よりもよって六十路を迎えた途端に、若い女に目覚めたのかと初めのうちは疑心暗鬼に陥ったものだが。アレから一年、嫌がらせのように毎日実家に足を運んで、仔細な観察を続けてきた結果によると、相変わらずパパはママのことしか眼中になかったし、C・C・と呼んでる彼女のことは、男友達でも相手にしているような小ざっぱりした雰囲気で、完全に手のひらの上で転がして愉しんでいる感じでもあった。

それが、わかっているにも関わらず。

どうして、わざわざこんな相手を見つけ出してきたのよ　とナナリーは、恨みに思わずにいられない。

「……………何かヘンなことを言いました、わたし？」

瞳の色と同じ濃いブラウンの長髪を頭の後ろで編み込みにして、形の良い後頭部を丸く囲う形でいつものように品よく纏めている。

どこからどう見ても、年下にしか見えないその人。

そんな彼女と丸々三分近くも睨み合いを続けた後、ナナリーは突然いけしゃあしゃあと開き直った。

このあたりの人を食ったテクニツクは、嫌というほど両親から実地で教えられたものだった。

もつとも、それを言ったら、「冗談じゃない！」と口を揃えて文句を言うに決まっているけれど。ナナリーの気持ち的には、こっちこそ「冗談じゃない」だ。

パパの一風変わった教育方針には、子供心ながら面白おかしく感心させられたものだったが。おかげで旦那からは、「あんまり小さいうちから、妙なことを教えるなよ？」と厭味を言われる毎日だ。

まア、もつともナナリーも、いちいちそんなことくらいでヘコ垂れるような可愛い性格をしていなかったが。

いや、そんなコトは、ともかくだ。

あまりに突然の開き直りっぷりに、さすがに一瞬、彼女も驚いていた様子だったが。

表面上はいつものように落ち着き払った態度で、あっさり話を合わせてきた。

「そうですね、今朝わたしがこちらにお邪魔する前に、お父さまが何か作っていらしたようだから、ひよっとするとご存知かも」

パパが趣味で作っているサラミのソーセージと、オイルサーデインの缶詰。

たまにはパパのために、パスタでも作ってあげようかしら？とちよっと気まぐれに考えただけだったので、今となっては、そんなものはどうでもいいことだった。

ナナリーは、意識的な冷たさで目を細めると、そっけなくきびすを返した。

「そう。なら、今からちよつと行って、訊いてきます」

お互いに、いつものようにぎこちなく会話して。

ナナリーはキッチンから抜け出すと、リビング脇に小さなスペースを設けてある父の書斎に足を運んだ。

やがて まもなく。

そちらの方向から聞こえてきた、ナナリーの泣き声。

彼女は C・C・は、クシャリと顔を歪めると、キッチン脇の勝手口から脱兎の如くに逃げ出した。

・
・
・
・
・
・
・

「そして俺は、ここでも泣き女の相手をしなければいけないワケか？」

それから小一時間ほどが経過して。

気づいた時には、頭の先に立っていたルルーシュが、そんなふう
に愚痴をこぼしていた。

夕陽に赤々と染まっている海岸線。

泣き声を押し殺すために、砂の上を転がりまくっていたから、全
身の至るところが砂だらけだった。

溜息を吐きながら頭の先に腰を下ろしてきたルルーシュは、頬の
上まで白砂を付着させているC・C・の顔中を手のひらで拭って、
最後は子供にするみたいにC・C・の前髪をグシャグシャにかき回

した。

「本当に、ナナリーといい、おまえといい、変なところで手の焼ける連中だな」

その連中の世話を焼き慣れている男は、当然のように飲み物持参で足を運んでいるのだ。

リンゴに似た甘い匂いが特徴的なカモミールティー。

わざわざマグカップまで持参して、ポットから注いだ熱いミルクティーをC・C・の顔の上に差し出した。

いい加減、身体中の水分が干からびた気分だったC・C・は、ぐずぐずと鼻を鳴らしながら気だるそうに身体を起こすと、素直にマグカップを受け取った。

デミタスカップよりも少しだけ大きいサイズのそれを、両手の間に包み込み。「……口を塞ぐと、息が出来ないから苦しい」と文句を言いながら、ズズツと少しずつ口の中を含んだ。

その隣でルルーシュも、泣いてる人間用に甘めにし過ぎたミルクティーに顔を顰めながら、いつもの口調で話を切り出す。

「おまえ、明日は一日仕事を休め。ナナリーには俺のほうから適当に言っておいてやるから」

C・C・は無言で、「いやだ」と首を振って断った。

ルルーシュは溜息まじりに、ズズツと熱い紅茶を啜った。

「なら明日は俺が、一日休暇を取るまでだ」

言っている意味がわからなくてC・C・が顔を上げると、ルルーシュは人差し指でグイと無造作にC・C・のひたいを押しやった。

「面倒を見る相手がいないじゃ、おまえがウチに来ても仕方ないだろう？ だから俺は、急遽仕事の都合で、明日は終日留守にするわかったな？」

恨めしそうな上目遣いでルルーシュを見つめ返した後、しばらく俯いて何かを考え込んでいたC・C・は、やがて顔を上げると、ルルーシュの意表をつく質問を逆に投げしてきた。

「……どこか行く宛てはあるのか？」

「さあな、いい機会だから、この際エージェントのところにも、お礼参りに出かけるさ」

ゼロ・レクイエムから40年近い歳月が経過している今現在も、表立って顔を出すわけにはいかない都合から、代理人に現場を任せ、ルルーシュは自宅から指示を与える参謀役に徹していた。

その相手のところに、たまには顔を出してみるつもりでいたのだが。

「だったら、私の部屋に遊びに来い。今住んでる場所には、まだ一度も訪ねて来たことがないだろう？」

ルルーシュは驚いたが、否やを唱える必要も感じていなかった。

・
・
・
・
・
・
・

焼きたてのフランスパンに、同じく焼きたてのベイクドチーズケーキ。

自宅の庭で丹精しているスターチスと、ピンクの薔薇にかすみ草。ちよつと小粋な花束に仕立て上げ、ルルーシュは渡された地図の場所に向かった。

気分的には、なんだか別れた奥さんに、久方ぶりに会いに行く亭主のノリだった。

実際には、毎日のように顔を合わせているとはいえ、介護人として振舞っている時のC・Cは、一切の馴れ馴れしい態度を許さない。

決してナナリーたちに怪しまれる心配のないように、完全に他人の素振りを演じ切っているのだった。

歳を重ねることの出来ない不老不死の身体の都合から、普段のル

ルーシユは身体の表面にべたべたと人工皮膚を貼り付けて、六十路の男を演じ切っている。

「これも『仮面夫婦』と呼ぶのかな？」なんて、ちょっと皮肉に思ってみたりもするけれど。

その日は思い切って何十年ぶりに本来の姿を晒して、C・C・の住む家まで訪ねて行った。

毎日四時間にも及ぶ無駄な通勤時間を費やして、普段は寝るためだけに帰ってきている小さなアパート。

その佇まいを見るからに、何だか我が子を思う魔女の執念を垣間見るような感じがして、ルーシユは溜息まじりに肩をすくめた。

古ぼけたチヨコレート色の玄関ドアには、古風な叩き金ノッカーが備え付けてあったが、ルーシユは無難にその横にあるインタフォンを鳴らした。

数秒待つて、ドアの向こう側でバタバタと駆けてくる物音。

ガチャリと開いたドアの先から、懐かしくも美しい緑の髪が本来の姿を現した。

「早かったな」

「ああ、……まあな」

そっけなく必要最低限の言葉を交わし合い、他人に本来の姿を見られる前に、ルーシユはスリと音もなくドアの内側に招かれる。部屋の内装は、キッチンだけが別に設けてある1K。

ガランとただっ広いフローリングの片隅に、綺麗にベッドメイクを済ませてある鉄製のシングルベッドが一台据えてある。

小さな本棚がその隣にちょこんと鎮座している以外は、めぼしい家具の一つもない。

一体どこで飯を食うんだ？ と疑問に思ったが、ベッドの脇に折りたたみ式の小さなテーブルが立てかけてあったので、必要に応じて、アレを出して使っているのだろう。

だったら、絨毯くらい敷けばいいだろうに　と思いつながら、玄関先で靴を脱いでいたルーシユの手元から、土産の品をさっさと

受け取っていたＣ・Ｃは、そそくさとキッチンに足を運んで茶の用意を始めている。

「朝だから、コーヒーで良かったよな？」

「そうだな。シュガーレスで、ミルクを多めに入れてくれ」

「すまない。どっちも無い。悪いが、そこにあるテーブルを出してくれないか？」

形も大きさも違うマグカップをふたつ手にしてキッチンから姿を現したＣ・Ｃの姿を目にして、ルルーシュは、内心でムツと顔を顰めながら、言われたとおり指示に従った。

Ｃ・Ｃは、少しだけ驚いている様子で小首を傾げる。

「なんだ、突然？ 機嫌が悪いな」

「べつに」

「そうか？ おまえがそう言うなら、あえて追求はしないが」

ここまで露骨に態度で表しても、気づきもしない。

ルルーシュは無然と無表情を装いながら、Ｃ・Ｃのすぐ目の前に立つ。

「た、だ、い、ま」

それでようやく納得したＣ・Ｃは軽く吹き出すと、用意されたテーブルの上にマグカップをふたつ並べた。

そして、自分のほうからルルーシュの腰周りに抱きしめの腕を回すと、眼を閉じながら仰向いて、唇の上にチュツと軽く触れるだけのキスをした。

「おかえり、ルルーシュ」

ルルーシュは、両腕の中にしじみ包み込むようにして、華奢な伴侶の身体を抱きしめた。

Ｃ・Ｃが一度死んでからの十年間、離れ離れの生活を続けた後だったから、初めのうちは毎日のように顔を合わせるだけでも幸福だった。

けれども、あくまで介護人の役を演じ切っている時のＣ・Ｃは、こんなふうな接触すらも一切許してくれないのだ。

「……ルルーシュ、痛い」

「我慢しろ。……一年ぶりなんだぞ？」

十年前までは、毎日当たり前のように、繰り返していたはずの抱擁と口付け。

そのさりげない接触に、どれだけ自分が飢えていたのか、こうして腕の中に取り戻してみてもわかる。

「……なア、C・C.？ 挨拶のキスくらい、復活させても構わないだろう？ どうせナナリーは、昼前にしか顔を見せないんだから」

C・C.は、溜息まじりにルルーシュの背中を抱きしめ返しながら、「駄目だ」と小声で呟いた。

「そうやって、ナアナアを続けているうちに、絶対ボロが出る」

「出てもいいだろ？ ナナリーだって、本気でおまえと再婚しろと勧めてる」

「駄目だ。アイツが『ママ』と呼んでいいのは、緑の髪に、金の瞳をした『母親』ひとりだけだからな」

そうやって、母子で培ってきた大切な思い出を守りたいという気持ちもわかる。

だが、しかし。

「……いまさら別の女が現れたところで、アイツらの母親は、死ぬまでおまえ一人に決まってるじゃないか、C・C.。どれだけ他人が『忘れる』と強要したところで、忘れるはずも無いだろう？」

「当然だろう？ 我ながら、子煩悩な母親だったからな」

だが、しかし、その子煩悩さが災いして、ナナリーは若干、疑い始めている。

疑っているというよりも、『ママの生まれ変わりだったらいいのに』と、計算の合わないのは承知で、せめてもの繋がりを求めているのだ。

最初にC・C.に「似ている」と指摘された時、C・C.の変装に一役買っていたルルーシュは、「一体どこがだ？」としみじみ首を傾げたものだった。

けれども、子煩悩だった母親に育てられた子供ならではの嗅覚を、ずいぶん甘く見ていたことにすぐに気づいた。

どれだけ見た目を変えたところで、すぐに匂いで気づいてしまうのだ。

物理的な体臭。そして、内面から滲み出してくる雰囲気。

そんなものまで変えてしまう変装術をルルーシュは知らない。

だからこそ、かつての自分も、ユーフェミアに正体を見破られてしまったことを思い出し、何十年経っても決して忘れられない切ない感傷に、少しだけ息が詰まるような気分を味わう。

C・Cは少しだけ強引にルルーシュの身体を押し離すと、さつきよりも親密なキスをして、言った。

「ほら、ルルーシュ。おとなしく朝飯を食って一服したら、抱かせてやるから。どうせおまえも、一人でいろいろ余計なストレスを溜め込んでいるのだろう？」

そんな身も蓋もないセリフで簡単にあしらわれ。思わずルルーシュは目の淵を赤く染め上げたが。

まったく異論はなかったので、言われるまま無抵抗に従った。

・
・
・
・
・
・
・

「……ッひア、あっあっああっ、ッ……ル、ルルーシュ……ッ……」

安物のベッドは、ルルーシュが腰を振るたびにキュコキュコとやかましく。

それ以前に、どうやらアパートの壁が薄いらしく、平日の朝っぱらから情事に耽溺している事実を気にしたC・Cは、初めのうち

声を出すのを我慢した。

それに誘われてしまったルルーシュが、既に三度も白濁を撃ち出しているC・Cの最奥に、ドクリツと新しい体液を注ぎ込むと、かん高く喜悅の声を発しながらブルブル震えていたC・Cが、やがて死んだようにグツタリ四肢を投げ出した。

ルルーシュは、壁際の余白にゴロリと疲れた身体を投げ出すと、狭いベッドを有効活用するために、ハアハアと肩で息を喘がせているC・Cの身体を、自分の身体の上に抱き上げた。

普段は傍目にも感心するくらい淡泊な生活を続けている男のことだったから、てつきりコツチの方面に対する関心は薄れてしまったのかと思いきや。久方ぶりにルルーシュの執着心を見せ付けられてしまったC・Cは、露骨に拗ねているような声音で愚痴を言う。

「……愛人の一人や二人作っても、別に私は文句なんか言わないぞ？」

十年前ならともかく、ルルーシュはいまさら怒りもしないで、淡々と天井を眺めた。

「……仕事先で、誘われたことなら何度かあるけどな」

「そうなのか？」

C・Cのほうこそ、怒りもしないで、パチパチツと驚いたように覗き込んでくる金の瞳。

どうやら先に言ったのは本心のように、その瞳の中には興味の色しか浮いてない。

ルルーシュは、懽然とした顔つきで視線を外した。

「……かなりの美人揃いだったがな、抱きたいと思う以前に、キスをしたいとすら思えなかった。……腕に抱いた感じも、おまえほど良いとは感じなかったしな」

「不甲斐ない男だなア、それで結局手をつけずに帰ってしまったのか？ 相手の女に逆恨みされて、『あの男はゲイだ』なんて吹聴されてなきゃ良いけどな」

そう言って、クスクス笑い転げてくれる女の恨めしさ。

ルルーシュは、慔然と顔を顰めたまま、Ｃ・Ｃの柔らかな頬にガブリと噛みついた。

「痛い」と文句を言いながら、それでもまだ笑っているＣ・Ｃが、自分のほうからしつとり唇を重ねてくる。

そして、鼻先の距離から、平然と言ってくれたものだった。

「私も、誘われたことなら、何度かあるぞ？」

あまりにあっけらかんと言ってくれるので、ルルーシュは思わず一瞬、怒りを我慢する努力を忘れた。

「それで？」

ゼロを演じていた際に用いていた発声法。

脅しつけるような低音で訊ねると、いったい何が嬉しいのか知らないが、Ｃ・Ｃはクスリと面映げに金の瞳を細めて微笑む。

「もちろん、鄭重にお断りしたさ。一生に一度きりと決めた相手がいるからな」

しゃあしゃあと。

そうやって自分は男を袖にしているクセに、ルルーシュには「浮気をしてもいいぞ？」なんて勧めてくる。

寛容なフリをして野放しにされているからこそ、かえって浮気の虫が騒ぎようのない事実を、ルルーシュだってイイ歳だ。いい加減、嫌というほど自覚している。

しばらくチュツ、チュツとルルーシュの唇と戯れていたＣ・Ｃは、ややあつて真面目な顔をして顔を離すと、しみじみ耳に染み入るような声で言う。

「だから、悪いが、今現在の私の雇用主とも浮気をするつもりはないんだ。茶色の髪と、茶色の目をしている女は、私であつて、私ではないからな」

だから、今までどおり、「他人のフリを続けるぞ？」と求められ、言われなくても、承知の上だったルルーシュは、しみじみあきらの息を吐き出すと、恨みまじりにひとしきりＣ・Ｃの身体を腕の中にギュッと抱きしめた。

「今からちよつと出かけるぞ。支度しろ」

「出かけるつて、どこに？」

「買い物だ。何なんだ、この部屋は。必要なものが何ひとつ揃ってないじゃないか」

顎の先を振って促すと、C・Cは露骨に慥然とした顔つきで眉をひそめる。

「帰ってきてても、どうせ寝るだけなんだぞ？ 充分に必要なものは揃ってる」

ルルーシュも、負けずに慥然とやり返した。

「こんな部屋に、おまえを一人で帰したくないから言っているんだ。これ以上ワガママを言つて、俺を困らせて、実家に無理やり監禁拘束されなくなったら、素直に俺の言うことを聞いておけ」

「……はいはい、わかつたよ。お父さん」

C・Cの気持ち的には、もちろん厭味のつもりで言つたセリフだったが、その響きがあんまり懐かしいものだったので、思わずルルーシュは唇の端をゆるめた。

それに気づいたC・Cは、遠慮なく呆れた顔をして、「まったく、懲りない男だなア」と、だらしなくヤニ下がっているルルーシュの頬に、遠慮なくガブリと噛みついた。

・
・
・
・
・
・
・

明けて翌日、顔を合わせたキッチンで。

ナナリーは開口一番、C・Cに慥然と噛みついた。

「まあた、パパのプロポーズを断つたんですつて？」

結局、あの後ルルーシュは、C・C・の家に泊まらず実家に帰った。

「丸一日留守にすると、ナナリーが心配するからな」と、口先ではしかつめらしく言っていたが、何のことはない、ナナリーに愚痴を聞かせるために帰りたかっただけなのである。

『まったく、イイ根性をしているじゃないか』と、思わずC・C・は内心でグツと怒りの鉄拳を固めたが、表面上は楚々とした様子で、「そんな大層なものでは……」と困ったふうに言葉を濁した。

ナナリーは、ちつとも納得してない様子で不機嫌顔を続けたが、「ところで、提案があるんですけどね」と、いささか唐突に、取っつけたような澄ました顔で切り出した。

「おそらく、きつとこの先あなたとは、ずいぶん長いお付き合いになると思うんです」

言われて、C・C・は少しだけドキリとした。

この先　ずいぶん長くは無い　かもしれない。

何しろルルーシュは、80歳の誕生日を迎えると同時に死ぬのだ。自分でその予定を立てていて、そのために20年の歳月を精一杯ナナリーたちと愉しむ予定でいる。

その事実を、当然ながらナナリーたちは知らない。

顔には出さない動揺に、心臓がキリリと引き攣るような感覚を味わった。

それに気づくはずもないナナリーは、なぜだか目元を赤くした視線を逸らしながら、淡々と話を続けた。

「そこで、先に言った提案なんですけど。いつまでも他人行儀に、『あなた』と呼んでいるのも、ちよつとアレじゃないですか」

「はあ……」

懸命に、落ち着き払った演技を続けているC・C・の頬の上にも、平筆で薄っすら刷いたような薄紅色がサツと乗る。

さっきよりも心臓が大きく動悸していた。

だって、これはどう考えても、ナナリーのほうから精一杯、歩み寄ろうと努力しているワケだ。

そう考えただけでも、単純に　嬉しい。

だからと言って、それでも。

ママなんて、絶対に呼ばせなくなかったし、呼びたいと思われるだけでも心外だった。

あの名前は、あくまで母親である自分だけの独占物なのだから。ルルーシュには心底呆れられてしまったが、『好きなだけ呆れる』という気分だった。

あの呼び名は、C・C　が生まれて初めて自力で手に入れた、納得のいく「好きな名前」なのだから。

「C・C　さん　と、お呼びしてもいいですか？」

「　は、はい？」

C・C　は、一瞬自分の耳を疑った。

驚いている顔つきで問い返されて、さっきよりも露骨にナナリーの顔が赤くなる。

「……　べ、別に嫌なら、無理強いはしませんけど」

内心でドキドキグルグル結構大変だったC・C　を軽く横目で睨め付けると、完全に拗ねている口調でナナリーが言う。

その口調に、ほんのわずかだけ甘えの気配を嗅ぎ取って、C・C　は自分でも手の付けようのないほどに動揺した。

なぜだか知らないが、ナナリーは突然C・C　を対等に付き合う相手として認めてくれた様子だった。

しかも、ポジション的には、どうやら仲の良い『友人候補生』的な意味合いで。

「それとも、本当は嫌なんですか？」

「あ、いえっ……別に……嫌とか……あの、ですから……その……」
あまりの動揺に、自分でも、もう何を言っているのかわからない。

けれども表面上は、なんだか喧嘩でもしているような雰囲気で、二人してテーブルの上を凝視しながら、ナナリーがポツリと嫌そうに話を続けた。

「……あと、せっかくですから、敬語も止めませんか？ 肩が懲りますから」

「……はあ……」

「もちろん、あなたを雇っているのはパパなんですし？ 単なる娘にしか過ぎない私には、何を言う権利も無いわけですけど。でも、どっちみち、嫌でもこの先、長い付き合いになるわけですから」

「……まあ、……はい……そうですね……」

「いえ、ですから、この場合の『嫌でも』というのは、決して『パパに長生きして欲しくない』とかいう意味ではなくって、ですね」

「はあ……はい。……大体のことは、わかってます」

「だ、……だったら別に、いいんです。……た、単純に、それだけの話なんですから」

「はあ……そうですね……」

その光景を、キッチン脇のダイニングからそれとなく観察していたルルーシュは、コーヒークップを片手にしみじみ長い息を吐く。

おまえたちは親子して、一体何をそんなに不器用に照れ合っているんだ？ と大いに突っ込んでやりたい気分だったが、まさかにも実行に移すわけにもいかない。

仕方なく、助け舟を漕ぎ出すことにした。

「おい、C・C・？ 洗濯機のブザーが鳴ってるぞ？」

「あ、はい。今行きます」

果てしなく長く続いたような沈黙の後、ルルーシュの声でハッと我を取り戻したC・Cは、大急ぎでナナリーに会釈を残して席を立つ。

洗濯機のある場所に向かうには、リビングの扉から裏庭に抜けるのが近道だった。迷わずそのルートを辿ると、先にリビングまで移

動していたルルーシュが、口パクで『良かったな』と伝えてきた。

本当の名前も、生き方も、もちろん魔女としての人生なんて教えることは言語道断。

だから、この先20年も、贗の名前で呼ばれるのが当然と覚悟を決めていた。

それが、こんな土壇場になって、魔女の名前で呼ばれただけでも嬉しいとを感じるなんて。

今の生活を始めると同時に、ルルーシュが何の相談もなく「C・C」と呼び始めた時には、『何を考えているんだ、おまえはっ？！』とずいぶん驚いてしまったものだが。ナナリーの性格を正しく判断して、やがてこうなることを狙っていたのかと、今更ながらに気づいてしまった策略に、C・Cは同じく口パクで『うるさい』とやり返した。

頬の上には、一瞬であふれ出してしまった涙をボロボロ流しながら。

小走りでリビングのドアを抜け出していく背中を見送ったルルーシュは、やがて小さく肩をすくめると、キッチンにいるナナリーのところに向かった。

あの調子では、徹底的に気の済むまで一度泣かせてやったほうがスッキリするだろうと判断したからだった。

さりげなく小道具を手に進めると、キッチンにひとり取り残されているナナリーは、なにやら慚然と顔を顰めながら、ひとりでブツブツ文句を言っていた。

唇の動きから察するに、「どうして私が…」と後悔している様子だった。

こう見えてナナリーは、結構人見知りするタイプだったから、あんまり自分のほうからは積極的に女友達を作ろうとしなかった。

そんなことをしなくても、遺伝子まで全てを共有している仲の良

い兄がいる。だから以前から、なかなか他人に心を開こうとしなかった。けれども、人として当たり前前の欲求として、やっぱり気持ちのどこかでは、そんな自分に寂しさを感じていたらしい。

ああ、その調子でな、せいぜいあの女と仲良くなって、子守でも何でも押しつけてやればいいんだ。

C・Cは、困った顔をするだろう。

内心では、きつとどう対処していいのかわからずに。

けれども、嫌でも強制的に、幸せな気分を味わわせてやればいいんだ。

そんな無責任なセリフを内心で呟きながら、ルルーシュは何気なく持参していた小道具を、ヒラヒラとナナリーの面前に差し出した。

「おい、ナナリー？　ちょっとコレ、試着してみてくれないか？」

こここのフリルのデザインを確かめたいんだがな」

「もうっ、パパったら、またアゝ？」

C・Cが一度死んだ時に、立ち上げていたブライダル・コレクションは他人に譲渡してしまったが、近隣住民との付き合い上、たまには簡単なドレスの発注を引き受けることがあった。

グランデ・フイオリ

もっとも、相手がかの有名な「大きな花」のデザイナーとは知らずに、ナナリー経由で持ち込まれてくる依頼が大半ではあったが。

ルルーシュは、高飛車に顎の先を突き出すと、「いいだろ、別にと娘の憎まれ口を簡単にあしらった。

「たまには、おまえも少しくらい親孝行の真似事をしてみる」

「人聞きの悪いこと言わないでくださる？　いい加減、こっちは本気で、ママの分まで親孝行させられてる気分なんだから」

「生意気言っな。それに、こう言っちゃ何だがな、今のおまえと同じような年代でも、アイツのほうが百倍スタイルが良かったぞ？」

「信じられないっ！　そういうセリフを、実の娘に言うっ？！」

「実の娘以外に言うよりも、角は立たないと思うがな。いいから、ほら。さっさと着てみる」

「ああもうっ、ムカつく！ ママーッ！ パパが理不尽な理由で、可愛い娘をいたぶって愉しんでいるんですけどーッ！！」

喧々諤々とやりあう二人のやり取りを聞きながら、洗濯機の陰に身を潜めて小さく身体を丸めて座り込んでいたC・Cは、泣きながら笑いを噛み殺すのに忙しく、ひとしきり得も言われぬ幸福な時間を満喫した。

番外？：沈丁花の花が咲く頃に（後書き）

自分は既に死んでる存在なので、母親である事実は決して告白するわけには行かないけれど、その代わり、後に続いた20年の歳月で、『親友』的立場を手に入れたC・C。

そのクセ、ナナリーが「ゲラン・ダムール」の中で「大嫌い！」と告白していたのは、C・Cが最後までルルーシュと再婚しなかったからです。

再婚さえしてくれたら、遠慮なく「ママ」と呼びたい時に呼んで、もつと素直に甘えることも出来るのに。その気持ちを察しているクセに、最後まで叶えてくれなかったC・Cを逆恨みしていたわけです。

母子の葛藤を物語れるほど、書いてる本人が人生を重ねていないので、このあたりの描写は筆力不足だよなアと思いつつ。ナナリーが「恥ずかしい夫婦」の描写をするシーンは、書いていて愉しかったです（笑）。

ありがとうございました！

番外？：螺旋の子守唄（前書き）

口口&ナナリー：0歳。

若い夫婦には、（たぶん）よく有りがちなネタです。

番外？：螺旋の子守唄

「おまえも一応、一家の大黒柱なのだから」

と言われて、リビングの片隅に、申し訳程度に設けてある仕事部屋。

可動式の書架で区切られているだけのほんの僅かなスペースだが、どことなくイカルガ内に設けていたゼロの私室を彷彿とさせていて、その場所に腰を落着けるとルルーシュは、ごく自然に仕事に集中することができた。

何件かのペーパー・カンパニーを間に挟んで、巧みにトップの存在を秘匿している通信と物流業。

実質はCEOの立場に居ながら、複数存在している代理人に現場を任せている都合上、何かと不便なことも多かったが、ルルーシュの位置から見る限り網の目のように張り巡らされている組織図は、互いの企業を完璧に補助し合っみごころていて、効率的であると同時に機能的に美しい。

株式による資産の共有を一切していないどころか、ライバル企業を同時に包括して市場価格を操作している場合も少なくなかったから、下手をすると独占物禁止法とインサイダー取引で訴えられそうな気もしたが、ルルーシュ以外は誰一人として互いの企業に関連付けがあることは知らないわけだから、やってみると影の総督という立場は中々やりがいのある仕事でもあった。

自社株を10パーセント保有しているだけでも、総額数兆円にも及ぶ大資産家になるはずだったが、私腹を肥やすことには全く興味のなかったルルーシュは、所有している企業の数进行勘定するついでに、それぞれ一株ずつしか持っていなかった。

そんなことよりも、かつては大変世話になったオレンジ農園のみかんが、一個でも安く広範囲で売れたほうが嬉しかった。

ひそかに咲世子と恋仲であったらしいジェレミアは、二人のあいだにアーニヤを養子に迎えて、慎ましくも幸せな家庭を築いているように安心した。

アーニヤが趣味で運営している「オレンジ畑通信」は、写真を中心に記事を集めてあるブログサイトだが、毎日のように投稿されている記事を眺めているだけでも、ジェレミアたちの生活をリアルに垣間見ることは可能だった。

ゼロ・レクイエムの後、世話になっていたジェレミアの預金口座には、貸して貰った分の十倍返しで入金を済ませて以来、こちらの足取りを掴まれるような真似は完全に避けていたので、今となってはジェレミアでさえルルーシュたちの消息を知らないのだ。

そうやって、少しずつだが着実に、ルルーシュたちを知る者たちが少なくなっていく。

正直言えば、寂しくないわけではなかったが、たとえ一方通行の愛情でも、自分たちが相手のことを決して忘れないわけだから、それでもいいとルルーシュは思った。

不死の人生を生きていく自分たちには、感傷は似合わない。

こんな気持ちをC・Cは、今までずっとひとりで抱えながら生きてきたわけなんだよな　と改めて魔女であり続けようとした女の生き方に思いを巡らせていた刹那、タイミングの良いことに、書架の向こう側から何やら叫ぶ声が聞こえてきた。

「あああつ、もうっ辛抱ならんっ、キスがしたいっ!!」

ゼロ・レクイエムから既に五年。

出会いの日から数えて、既に十年近い歳月が経過しているが、男女の関係になつてからは、言うほど時間は経過していない。

にもかかわらず、日々の大半を四六時中顔を突き合わせながら生

活しているものだから、女という生物はあつという間に恥じらいの部分を見失ってしまうのだな　と今度は一転して呆れながら、仕方なく休憩ついでに少しだけ構ってやることにしたルルーシュは、ヤレヤレと肩をすくめながら仕事部屋から抜け出すと、リビングのソファに腰を下ろしているＣ・Ｃの背後から近づいて、何も言わずに突然口を塞いだ。

「……ッんんん？！　んんん……ッ！！！」

ルルーシュの気持ち的には、口ではあんまり言わない愛情を、たまには行動で精一杯に示してやったつもりだが、飛び上がるほどに驚いて眉間に皺を刻んだＣ・Ｃは、強引に頭を振って唇をもぎ離すと、脅しつけるような口調で言ってきた。

「今は仕事中的はずだろう？　何を突然サカつてる？」

本当にこの女は、何年経っても素直じゃない奴だなと心底呆れながら、ルルーシュはしみじみ文句を口にする。

「これ以上、仕事の邪魔をされては堪ったものではないからな。仕方なく、相手をしてやっているんだ」

「フン、たいした自惚^{うめほ}れだが、あいにく私は、今の今までおまえのことなど眼中になかったぞ？」

「しかし、今」

「バカモノ。おまえじゃない、コイツだコイツ」

クスクス笑いながらＣ・Ｃは、顎の先で自分の胸元を指し示した。

結婚後三年目にしてめでたく懐妊したＣ・Ｃは、目下男女の双子を抱えて育児に専念している最中だ。

不老不死のコードを抱えた身であるのを懸念して、妊娠中は母乳で育てるべきかずいぶん悩んでいた様子だが。そもそも３７週も身

体の中で育てて自然に分娩しているわけだから、余計な心配だろうとルルーシュは達観していた。

どうしても割り切れないようならば、母乳を採取して成分検査することも考えたが、実際産んでしまうと、母親の気持ちの切り替えは早かった。

今もワンピースの胸元をはだけて露出している乳房に、順番待ちをしていた口口が、ひたすら無心に吸い付いている最中だった。

「……いつも思っただがな」
「うん？」

両親の美貌を受け継いで、伏せると扇状に広がる長い睫毛をわずかに震わせながら、指先では、猫が甘えるときのように両手で掴んだ乳房を揉んでいる。

ルルーシュは、C・Cの肩の上に軽く顎の先を押し付けると、我が子の顔を至近距離から覗き込みながら、愛しげな指先でひたいに被さる黒髪を戯れに弄んだ。

「本当に美味しそうに飲むんだな」
「そうだろう？」

小さな唇が忙しくムニムニと動いている。

本当はそれを突きたくて仕方がないのだが、ナナリーに比べると食に対してあんまり貪欲でない口口は、すぐに集中力を乱されて飲むのを止めてしまうのだ。

過去に数度C・Cからこっぴどく叱られた経験のあるルルーシュは、どうにもワキワキして仕方がない指先の欲求を紛らわせるために、仕方なく嫁の肩でも揉んでやることにした。

察したC・Cは、「バカか、おまえは」と呆れたように笑ったが、日常的に10キロ近い双子を抱えて疲労している華奢な身体は、

軽く触れてみただけでも尋常でないほどに張っていた。

一極集中型のナナリーは、一度の授乳で満足するまでガツガツ飲んで、次に空腹を覚えるまで三時間たつぷり眠ってくれるのだが、いつだつて腹七分目程度にしか飲もうとしない口口は、下手をすると一時間おきに目覚めて空腹を訴えてくれるのだ。

「コイツの構ってちゃん体質は、いったい誰に似たのかな？」なんて口では愚痴を言いつつも、自分の存在を求められることに無上の喜びを感じているC・Cは、一度も癇癪を起こすことなく、口口の好きなようにペースを合わせてやっている。

母乳よりも粉ミルクのほうが消化吸収に時間がかかるので、そのぶん長く眠ってくれるのよ？ とは近所のベテラン主婦たちが教えてくれた裏技だったが、C・Cは「母乳で間に合わなくなったら考える」と頑として譲らない。

ルルーシュは、何も言わずにきびすを返すと、自家製のハーブで作っているマッサージオイルで温タオルを作って戻ってきて、C・Cの首筋から肩口をすっぽり覆って指圧を始めた。

C・Cは、くすぐったそうに笑い転げながら、「そんなに私に構って欲しかったのか？」と照れ隠しを言ってきた。

「だから、アレはおまえが」

「それはそれは悪いことをしてしまったな。私は口口とキスがしたかったんだ。あんまり美味しそうに乳を飲むのでな」

そう言つてククツと喉を鳴らしたC・Cは、ルルーシュの指圧に合わせて気持ち良さげに息を吐く。

「あ、そこ……もっと強く……」

何だかやたらに色っぽい言い方だ。

そんな場合でないとわかつているのに、どうしたつて羞恥を覚えてしまうのは仕方なく。

ルルーシュは、わざとぶっきらぼうに「これくらいか？」と訊ねた。

「うん。うんんっ…、あつ、そこ…っつ、くうっつ」

しばらく身悶えながら艶っぱい声を上げていたＣ・Ｃは、頃合を計ってルルーシュが指圧からマッサージに切り替えてやると、「はあああゝっ…」と気持ち良さそうに大きな息を吐き出した。

「ふふっ、本当におまえは、無駄な才能に満ちあふれているな？」

「黙れ魔女」

「まったく、おまえが裏庭の開墾を始めたときには、正直結婚するのを早まったかと焦ったものだが。結果的に、コイツらの食の助けに役立つているからな」

言っている最中にも、どうやら口口は満足した様子で。早くも半分舟をこぎながら、Ｃ・Ｃの乳房から唇をぱかりと外した。

それに合わせてルルーシュが一時的にマッサージを中断してやると、よいしょと肩の上まで口口を担ぎ上げ、優しくぽんぽんと背中を叩き始める。

気持ち良さげにあむあむ寝言を呟いている唇が、けぷつと息を吐いたところで、Ｃ・Ｃは辛抱たまらん様子で、口口のほっぺたにチューツと吸い付いた。

「ん　ッ！　ああ、やっとスツキリした。いつそのこと、おまえが授乳可能なら、私はいつだって好きな時にキスできるのになア」
そんなセリフを、心底残念そうに言ってくれるなとルルーシュは思う。

ソファの傍らには、双子がゆったり並んで眠れるサイズのベビーベッドが置いてあり、先に満腹状態で眠りをむさぼっているナナリーの隣に口口を寝かせた。

そして、またソファに腰を下ろすと、ルルーシュの差し出した濡れタオルを受け取って、口口の唾液で濡れた乳房を綺麗に拭いながらＣ・Ｃは軽い調子で訊ねる。

「ためしに一度、おまえも飲んでみるか？」

「はアああ？」

「バカ、大きな声を出すな。チビたちが起きたらどうする？」

もっともらしく言ってくれるが、一瞬で激赤したルルーシュは、マトモに返事が出来なかった。

もちろん、今までさんざん子供が出来るような真似をしているわけだからして、C・Cの乳房に吸い付いた経験が無いわけではない。

だがしかし、愛撫の意味でそうするのと、C・Cが今言っているのでは、激しく意味が違い過ぎるではないか。

顔を赤くしたまま固まっているルルーシュを横目でチラリと嫌そうに眺めると、C・Cはしみじみ呆れたような顔で言ってくる。

「本当におまえは、変なところで頭の固い男だな？ おまえの労働の成果を、わかりやすく教えてやると言っているんだ」

指先で裏庭に開墾している畑を指差しながら言う。

あくまで父の愛情にこだわったルルーシュは、野菜クズや鶏ガラなどで有機肥料まで自家製して、30種類以上にも及ぶハーブや野菜を精魂こめて育てている。

独学で栄養士の勉強も極めてしまったものだから、よっぽど仕事で手を離せないとき以外、三度の飯を作るのはルルーシュの役割分担だった。

「たまに、乳をやる前に自分で舐めてみるんだがな、結構そのとき食べたもの次第で、独特の味がしているぞ？」

「……………たとえば？」

ルルーシュは、目元を赤く染めながら訊ねたが、面白そうに眼を細めているC・Cは、「さアな」と思わせぶりに言葉を濁してしまふ。

そんなふうになされてしまうと、どうしたって羞恥は沸いてしまふが。

さりとて、四大家族のうち自分だけ「知らない」というのも何だか癪だったし、単純な話、興味はあった。

憮然と顔を顰めながら、ぎこちなくＣ・Ｃの隣に腰を下ろすと、なんとなく先に唇にキスをした。

軽く吹き出してしまったＣ・Ｃは、ニヤニヤ笑いながら「可愛い奴だなア」と露骨に冷やかした。

「うるさいな」

そっけなくやり返しながら、ぶっきらぼうにＣ・Ｃの乳房を鷲掴んだルルーシュは、三秒ほど躊躇ったところで仕方なく肚を決めると、ちゅぷりとＣ・Ｃの乳首に吸い付いた。

考えてみれば、こんなふうにＣ・Ｃの身体に触れるのも久しぶりの事だった。

安定期を迎えてからは、Ｃ・Ｃの身体に負担のかからない範囲内で身体を重ねる機会も少なくなかったが、出産後はとにかく育児にてんてこ舞いで、そんな余裕がなかったのである。

ごく自然に愛撫のやり方で、乳首に舌を絡めて舐め始めると、喉の奥で「んっ」と声を洩らしたＣ・Ｃが、さすがに顔を赤くしながら慌てたように言い返した。

「バカモノ、感じさせてどうする？」

「そんなことを言われてもな」

これ以外に、一体どうすればいいんだ？ と食ってかかると、Ｃ・

Ｃはしなやかな指先でルルーシュの口元に触れてきた。

「舌で包み込む所までは合ってる。そのまま強く吸ってみろ」

「こっか？」

事務的に淡々と言ってくれるので、ルルーシュも余分なことは気にせずに、言われたとおり従った。

だが、予想に反して変化はない。

既に双子がたっぷり飲んだ後なんだから、在庫が尽きているんじ

やないのか？ とルルーシュは思ったが、C・Cは極めて冷静に「もっと強くだ」と言ってくる。

「しかし、これ以上すると、おまえ痛がるだろう？」

「だいじょうぶだ」

妙な貫禄で言い返され、過去にさんざん痛い何のと文句を言われた経験のあるルルーシュは釈然としなかったが。さっさと開き直ると、口の中が軽く真空になるほど強く吸い上げた。

「　　うわっ」

「バカ、口を離すな！」

問答無用で顔を乳房に押し付けられ、ルルーシュは慌ててパクリと乳房に噛み付いた。

ポンプ式の井戸が、最初の数回は空振りで、後にポンプを押さなくても水圧でジャージャー水があふれ始めるのと同じ原理で、注射器の先から生ぬるい液体が迸り出るような感覚で、放っておいても次から次に母乳があふれ出してくる。

驚きの一瞬が過ぎてしまうと、次第にルルーシュも冷静に興味が湧いてきて、さっき口口がしていたのと同じやり方で、手のひらで包み込んだ乳房をやわやわ揉んでみた。

すると、やっぱり母乳のほうからごく自然に、口の中にあふれ出してくる。

誰が教えたわけでもないのに、生存本能とは逞しいものだと感じしながら口を離すと、まんざら悪くもない気分で濡れた唇を手のひらで拭った。

「なんか……本当に、独特の味だな？　もっと生臭いものかと思っ
ていたんだが」

母乳の元は血液だ。

それからイメージした感想だったが、C・Cは面映そうにフツと微笑みながら濡れたタオルで乳房を拭った。

「メインが魚料理だった日は、匂いからして生臭い感じもするけどな。基本的に、私の食生活に左右されるみたいだ」

「なら今の甘さは、今朝方おまえがパンケーキにたっぷりかけていた黒蜜が原因か？」

「さあな、どうなんだろう？ 詳しいことは知らないが、食い意地の張っているナナリーはともかく、口口の食いつきが結構良かった」ルルーシュは、そういうものかと感心しながら、本人は至って真面目に提案した。

「いつそ、毎食後にデータを集めてみたい気分だな。二人の飲みっぷりと比較して、ひよっとするとメニューを改善したほうがいいかもしれないだろう？」

すると、たちまちＣ・Ｃは、心底嫌そうな顔をしてげっそり息を吐き出した。

「おまえにまで、私は毎食のように乳を吸われるのか？ 今でも時々、自分が乳牛になった気分がしているんだ。冗談にしても止めてくれ」

「バカか、おまえは。俺は純粋に」

「はいはい、純粋に医学的な見地から、未知なる母乳に興味の道を拓いたわけだろう？」

「妙な言い方をするな」

クスクス笑い始めたＣ・Ｃは、慣れた仕草でルルーシュの首筋に腕を絡めてくると、ふくれっ面をしている唇の上に顔を重ねてきた。

そのまま唇の上をヌルリと舐められて、ほとんど条件反射で口を開くと、やわらかな舌先が遠慮なく忍び込んでくる。

考えてみれば、こんなふうなキスをするのも久しぶりだった。

自分の奥さんでありながら、この数ヶ月は完全に双子の独占物だったから、それを意識した途端にルルーシュは、Ｃ・Ｃの背中に抱きしめの腕を回すと、身体の上にＣ・Ｃの上半身を引き倒した。指先で互いの髪の毛をかき回しながら、飽きることなく舌を絡め

て舐りあう。

しばらく堪能した後で、困った顔をして呟いた。

「……しかしおまえは、疲れているのだろうか？」

唇で甘えるように伝えてきたリクエスト。

正直言えば、ルルーシュだって抱きたい。

けれども、今はやっぱり自分の奥さんである以前に、双子にとっては大事な母親なのだった。

我慢しろよ　と言外に言っただけ聞かせると、途端に可愛らしく唇の先を尖らせたC・C・が、「無粋な男だな」と人差し指でルルーシュの胸元に悪戯をした。

「だいじょうぶだと言っただろう？　あの飲みっぷりなら、口口もナナリーも三時間は起きない」

「だったら、おまえも少しは眠れ。寝つけないようなら、マッサージでも何でもしてやるから」

「マッサージよりも、私はコッチのほうが良いな」

言うなり唇にチュツと触れてきたC・C・は、顔を離すと、色っぽい上目遣いで誘いをかけてくる。

キスの快感で、軽く勃っていた乳首を指先で押し潰すように撫でられて、心地好い静電気がビリツと走ったルルーシュは、「うっ」と小さく呻き声を発しながら眉間に皺を量産する。

C・C・は、クスリと艶っぽく笑みながら、シャツの上から乳首を舐めてきた。

「開発したら、おまえなら根性で母乳くらい出せるようになるんじゃないのか？」

「出せるか、そんなもの……っ」

憤然と言い返している最中にも、軽く膨らみ始めている股間を、弾力のある太腿でグリグリ刺激され、思わず軽くビクリと仰け反りながら息を詰めたルルーシュは、ハアとあきらめの息を吐き出した。

すばやく身体の上下を入れ替えると、C・C・の着ているワンピースを脱がせながら、一転して思わせぶりに物騒に微笑む。

「なら、よく眠れるようにしてやるから、あんまり声を出すなよ？ ナナリーたちが起きたら大変だ」

完全に無防備でルルーシュの好きに身を任せているC・C・は、

「聞かせてやれよ」と全く悪びれる様子もない。

「産まれてくるまで、腹の中でさんざん聞かされているんだ。かえって懐かしがって、よく眠れるんじゃないのか？」

「おまえという女は……」

羞恥心に問題があるのは今に始まった話でなかったが、仮にも母親なんだから、もう少しくらいは自重しろ　とルルーシュが言い聞かせると、あっという間に全裸にされてしまったC・C・は、「この状況で、それを言うのか？」と最もなセリフを言い返してきて逆に首筋まで一気に赤くなってしまったルルーシュは、憎まれ口を叩く女の唇を容赦なく塞いだ。

・
・
・
・
・
・
・

数ヶ月ぶりということで、ともすると暴走しがちになる興奮状態を抑え込むのが大変だったが、ゆっくり時間をかけて丁寧に互いの身体を愛撫して、既に知悉している互いの性感帯を煽り立てることはせず、繋がっている感触をじっくり確かめ合うようにして一度だけ抱き合った。

達するのと同時に、猛烈な睡魔に襲われてしまったC・C・は、マッサージのついでに全身を温タオルで拭われても、パジャマを着せられ寝室まで抱いて運ばれても、その最中に一度も眼を覚まそう

としなかった。

まさに泥のように眠りをむさぼって。

やがて深い海の底からゆるりと浮上するようにしてC・C・に目覚めを促がしたのは、いつものように腹を空かせた双子の泣き声ではなく、身体の中にじんわり響き渡る歌声だった。

考えてみれば、ルルーシュが歌っているのを聴くのは初めてだった。

眠気にかすれる視線を動かして姿を探すと、いつの間にか夫婦のベッドのすぐ隣に双子のベッドも移動していて。転落防止用の四方の柵を下した状態で、添い寝をしながらルルーシュが甘い低音で子守唄を歌っていた。

一般的に流通しているような歌ではない。

以前に一度だけ、C・C・がうっかり聞かせてしまったことのある恋の歌。

コード保持者であるC・C・と契約を交わして、「絶対に私が、きみの願いを叶えてあげるからね」と身も心も焼き尽くすような恋をして、後にこの世界に送られると、C・C・の望みの先に幸福が待っていないのに絶望して、自ら命を絶ってしまった詩人。

その男が捧げてくれた詩句を、C・C・が口ずさむよりも正確なラテン語で歌い上げながら、ルルーシュは双子の胸元にゆったりしたスプードで、ぼんぼんと優しく鼓動のリズムを刻んでいる。

君の命が終わりを迎えるまで、世界中が君の命に祝福を捧げているよ　と詩人が一番気に入っていたフレーズを二回だけ余分に繰り返して、最後はハミングして歌い終えたルルーシュは、ややあつて溜息まじりに振り向いた。

「どうして泣く？」

「……おまえが……っ……どうして、そんな歌ッ……」

Cの世界で記憶を全部覗いて知っているわけだから、今のルルー

シュは詩人との関係も承知しているはずだった。

きみの願いを叶えてあげるから、きみの全てを私に与えて欲しいと求められ、気持ちに応じることの出来なかったC・C・は、なかば裏切ったも同然のやり方で、詩人をCの世界に送り込んだのだ。

どれだけマトモな人間のフリをしていても、過去に培ってきた自分の本性は魔女なのだ。

「だが、相手の気持ちにも偽りはなかったはずだろう？　せつかく想いをこめて捧げてくれた歌なんだ、詩人の魂だけでも受け継いでやれよ？」

「フン…っ…わかったようなことを。私に惚れた男が捧げた恋の歌だぞ？　よくも平気で、そんなものを歌えるな」

「当然だろう？　俺は連中に、妬かれる覚えならあるが、妬くような覚えは一切ないからな」

しゃあしゃあと。

俺だけが、おまえを手に入れられたのだとルルーシュは言っている。

あまりに戯けた自信過剰っぷりに、C・C・はグスツと涙をすすり上げると、皮肉を言う。

「生意気を言つて……おまえの歌声では、九人ミューズの女神たちが耳を塞いで逃げ出すぞ？」

「うるさい」

あいにく天は二物を与えなかったようだが、憎まれ口でも、耳に心地いいルルーシュの低音がC・C・の耳元で囁いた。

生きることに絶望しか感じてなかった人生だが、それでも、生きている最中に出会った数多の出来事が今現在のC・C・を構成している。

死ぬことしか考えてなかったはずの自分が、今はこうして自分の遺伝子を引き継ぐ子供たちに恵まれて、勿体無いほどの幸福を感じながら、生き続けることに必死になっている。

いずれは、ロロもナナリーも集合無意識に吸収されてしまう日がやってくる。

けれども、そこには行けない自分たちの住む地上では、自分たちの遺伝子を引き継ぐ『人間』たちが、永続的に時の歩みを刻み続けるのだ。

本当にこの男は、どこまで私の願いを叶えてしまったら気が済むのだろうな？ と完全に位負けている事実泣き笑いを誘われながら、C・C・はルルーシュの胸元に顔を押し付けると、世界中で一番安心できる場所で眼を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2252m/>

コードギアス 永遠の祝祭

2010年10月8日13時26分発行